

ブラック・ファック

ケツマン=コレット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そのウンコみたいなステロイドハゲのホモがどんな一生を送るといふんだっ

殺せ——っ

全十話、完ケツです。(王者の風格)

じゃあ番外編ってのは——ありますねえ！

目次

ブスはどこだ！	1
持たざる者	16
求めた理由	38
あの時見た	64
表と裏	115
決断	135
クソ雑魚なめくじ	169
永久（とわ）に 永久に	196
たった一つの取り得	235
ブラック・ファック	258
番外編	
命日の誕生日	293
壁	317
青空 プロローグ	338
青空 1？	344
青空 2？	347
青空 3	351
青空 4	356
青空 5	360
青空 6	368
青空 7	372
死への1時間9分19秒	378

ブスはどこだ！

もうそろそろか。

フロントガラスの端に映る山を見て、運転席に座る田所はそう思った。

初夏、速度制限ギリギリで走る黒塗りのセンチュリーは、影のない高速道路で日光を浴び、中には熱がこもる。

「遠野、ちよつとエアコンの温度を下げてくれ」

助手席に座る遠野は「はい」と言つてエアコンを操作すると「もうつきそうですか」と聞いた。

「たぶん」

「お金持ちの人つて、何でこんな遠くに別荘を建てるんでしょうね」

「金は好きだけど、人間は嫌いなんだろ」

高速道路を降りると、小さな町並みが見えた。

外装がはがれ、ぼろぼろの店屋が立ち並ぶが、それなりに人がいて活気はあつた。

その道をゆつくりと進みながら、田所は自分の体の匂いをかぐ。

「遠野、どうだ。まだ臭いか」

田所が問うと、遠野は苦笑いを浮かべ、小さくうなずいた。

「はい……まだちよつと」

「そうか」

田所は息を落として答えた。

普段から臭い臭いと言われているので、朝から風呂に入ったり、香水をつけてみたりとしているのだが、根深いものらしく、どう抵抗してもよくなるらない。

遠野に言つて、自分のアタッシユケースから香水を出してもらおうと、それを体にふる。

これで、ごまかせるといいんだが。

そう思いながら運転していると、目的の家が目に入ってくる。

高い塀に囲まれたその家は、見たところ四階はあり、横幅も家三分はある。

周りとは場違いなそれは家というよりも、突然町に現れた宮殿のようだ。

「はえく……」それを見上げた遠野は、声を漏らした。「すつごい大きい」

「さすが大企業、コート物産社長の別荘だな」

家正面にある門扉につくと、警備員に門を開けてもらい、中に入り脇にあった駐車場に車を止め、二人で玄関に向かうと、すでに扉は開かれており、中ではタキシード姿で顔のいかつい男が立っていた。

「どうもはじめまして、谷岡つてもんです」谷岡は田所に向かい、右手をさし出した。「よろしく」

田所はその手を握ると、谷岡と目を見合わせた。

「田所というものです。こちらこそよろしく」

コート物産社長、谷岡。名前は知っていたが、こんなヤクザまがいの見た目をしているとは、思ってたなかった。

谷岡は握られている手に力を入れると、田所に見定めるような目を向ける。

「噂はかねがね聞いてる。法外な金を取るが、手術は必ず成功させる。無免許医師のブラック・ファックってのは、あんたのことだな」

それを聞いて、田所は困ったように眉を寄せた。

どこの誰が言い出したのかは知らないが、見た目が色黒で、過去に強姦容疑をかけられた理由で広まった名前、ブラック・ファック。

実力に関しては疑われていないのが幸いだが、いい迷惑だ。

「まあ、そう呼ぶ人間もいます」田所は遠野を指した。「こちらが、助手の遠野です」

「よろしくお願ひします」

と遠野は頭を下げた。

「とりあえず、中で話そうや」

谷岡にそう言われ二人は家に入ると、応接室に案内された。

暖炉のあるその部屋で、裸でハープを持った女性の絵が後ろに飾られたソファーに座ると、谷岡も対面に座った。

「あれは、確か去年の冬の出来事だった」座つてすぐ、谷岡は話し出し

た。「ある晩、俺は娘のノリカを寝かしつけた後、書斎で明日に使う会議の資料をまとめていた。すると、誰かが扉をノックしたと思ったら、ノリカの声が聞こえたんだ。お父さん、顔が何か変だよってよくわかんねえこと言うもんだから、イタズラか何かと思って、ドアを開けたら……」

そこまで言うと、谷岡は手で口を閉ざした。

「どうなっていたんですか」

田所が問うと、谷岡は膝に手を乗せて立ち上がった。

「いや、口では説明しづらい。みてもらった方が早そうだ。ついてきてくれ」

そう言われ、谷岡と共に応接室を出ると、廊下の一番奥まであるくと、ドアを開く。

その中は地下への階段になっていた。

薄暗い階段を下っていくと、ぼろぼろのドアが見えた。

谷岡が入った後、続くように二人も中に入る。

そこはとても小さな部屋だった。上に電球が一つぶら下がっており、本棚とベッドが一つ。

ベッドにはノリカらしき子供が、後頭部を見せて寝ていた。

身長から考えると十歳と言ったところだろうが、今のところ特に異常は見当たらない

見ていると、音で目を覚ましたのか、ノリカが体を起こしてこちらを向いた。

瞬間、田所は言葉を失った。

その顔が人間のものとは思えないほど、ブスだったからだ。

目、ほほ、唇、あご、すべてがはれぼったくふくれ上がり、その中央にがっしりとした鼻がある。

思わず目を背けたくなる容姿だった。見るに耐えないとはこのことだ。

「う、うもっ」

と遠野は口を押さえて下を向いたが、田所はギリギリのところ耐え、しっかりとノリカを見た。

「酷いですね、これは酷い……谷岡さん、これは最初からこのような状態です。」

「ずっとこんな感じだ」谷岡も、ノリカを直視しないようにしている。「いいんだか悪いんだか、変わった様子は無い」

「お父さん、この人だれ」

小さな化け物は、顔にそぐわぬ少女の声でそう聞いた。

「この人たちはお医者さんだ。ノリカの顔を治しに来たんだ」

「早速だが」田所は一步、近づくと見せてもらうよ」

すり足で、ゆつくりとノリカに近づき、吐き気をこらえながらも顔をよく見て、手を伸ばし「失礼」と顔を触った。

肌はまるで弾力がなく、異様に硬かった。

「病院に何度か見てもらったが」谷岡が説明する。「どうやらその顔には筋肉がつかまっていてらしい。原因不明の奇病だそうだ。どの医者に聞いても、直す方法は分からないといわれた」

「それで私のところに」

「そうだ」

「なるほど、分かりました。いったん戻りましょう、ここでは話しづらい」

応接室に戻り同じソファに座ると、田所と遠野は深呼吸した。

ただ見るというだけで、ここまで神経を使ったのは初めてだ。

「ところで、質問なんです」遠野が聞く。「病院でレントゲンは撮られてるみたいですが、手術はしなかったんですか。とりあえず、筋肉だけでも切除すればいいのに」

谷岡は静かに首を振った。

「いや、そうは言ったんだが、どの医者も切れないの一点張りだ」

「そうでしょうね」田所が割って入った。「何かあれば執刀医と病院の責任だ。これを切ろうなんて人間は、国内に何人いるか」

「あんたはどうなんだ、ブラック・ファック」

谷岡そう言って、じろりと田所を見る。

「私はブラック・ファックではなく、田所です。患者を前にして、逃げ出すような医者ではありません。ただし、高いですよ」

谷岡の目がさらに鋭くなる。

「いくらだ」

「成功報酬で11億4514万円です」

「分かった、払う」谷岡は即答した。「大事な一人娘なんだ、金には変えられん」

「では早速、手術を始めさせてもらいます。遠野、さっきの地下の部屋に準備を」

遠野は「はい」と返事をする、部屋を出て行った。

「おい、ちよつとまで」焦ったように谷岡は言った。「あの地下室で手術ができるのか。もっと、ちゃんとした病院でやるべきじゃないのか」

「申し訳ないが、私は無免許なもんでね、簡単に手術室を借りれる人間じゃない。ですが、安心してください、安全には最大限に考慮して行いますよ」

数分後、地下室の真ん中ではビニールの簡易手術室ができていた。いざという時に、いつもトランクに忍ばせているものだ。

特注で作らせているもので、中は病院の手術室と大差ない。

谷岡からノリカの変異前の写真を受け取ると、全身麻酔でノリカを眠らせ、簡易手術室に運んだ。

手術着に着替えた田所と遠野が中に入ると、外では谷岡が見守る中、田所はノリカの顔にメスを入れる。

素早い手際で顔のすべての皮膚を取ると、その内側の筋肉があらわになる。

「原因はいつたいたいんでしょうか」その光景を見て、隣に立つ遠野が言った。「こんなの見たことありませんよ」

「さあ。筋肉が増える病気はいくつかあるが、こんな一か所に集中して、大量に増えるなんてものは聞いたことがない」

筋肉はかなり固く、色は白色で、普通のものとは比べて血管が通っていないようだった。

切除していくと、下には顔の脂肪らしきものが見えてきた。

「筋肉の下には、そのまま元の顔があるみたいだ」

田所は筋肉をハサミでつまみ、浮かせながら言った。

「つまり、顔が突然に変異したというわけではなく、顔の上に大量の筋肉が現れたというわけですか」

「そういうことだな」

すべての筋肉を切除し、皮膚を縫合しおえると、顔に包帯を巻いて手術を終了した。

「どうなんだ！」簡易手術室を出るや、すぐに谷岡が田所に言い寄ってきた。「ちゃんと元に戻るのか」

「筋肉の下に、そのまま顔がありました。変異前と大差なく戻るでしょう」

「そうか……」谷岡はほっと胸をなでおろした。「それはよかった。ありがとう、ブラック・ファック」

「田所です。安心するのはまだ早い。原因ははまだ不明ですから、これからなにが起きるか分からない」

「ああ、そうだったな」

「とりあえず、包帯が取れるまでは様子を見させてもらいたい」
「家には客人用の部屋がある。そこに泊まってくれ」

「どうしてカレーなんですか」

谷岡の客室用の部屋で、高そうな机に座った遠野がふてくされた顔で言った。

手元にはレトルトのポンツカレーが、調理済みで置かれてある。

「俺はカレーがいいんだよ」

対面に座る田所は、ポンツカレーを食べながら答えた。

「せっかく谷岡さんが晩ご飯と一緒に、言ってくれているんですから、お言葉に甘えればいいのに。きつと豪華ですよ」

「興味ないな、行きたいならお前だけ行けばいい」

「先輩がカレー食べてるのに、僕だけ食べるわけにはいきませんよ」

「そんなこと知るか、俺はポンツカレーが一番好きなんだよ」

「こんなレトルトカレーのどこがいいんですか」

ぶいぶいと文句を言いながらも、遠野はカレーを食べだす。

「誰がなんと言おうと、これ以上にうまいもんはない」

「ふつーのカレーですけどね」

田所はなにもいわず、黙々とカレーを食べていると、突然ドアが開き「ブラックファック！」と谷岡の叫び声が叫びき、中に入ってくる。田所の胸倉をつかんだ。「お前、顔は元に戻ると言ったはずだろ！あれはどういうことだ！」

「落ち着いてください」田所はなだめるように言った。「いったいなにがあったんです」

「なにつて……とりあえず、俺について来い！」

谷岡に言われるがまま後を追う、ノリカの眠っている地下室に行く。田所はノリカを見て絶句した。

包帯に包まれたノリカの顔が、パンパンに膨れ上がり、今にも包帯がはちきれそうになっていたからだ。

「お父さん」包帯越しに、ノリカは言った。「顔が痛いよ」

まさか、そんなはずは。

田所はそう思いながら、恐る恐る包帯を外していくと、またあのブスが包帯の中から現れた。

「どういうことだ、説明しろ」

応接室に入り、谷岡が威圧感を見せてそう聞くと、田所は首を横に振った。

「分かりません」

「分からねえじゃねえぞお前。金はすでに払ってんだ」

「もちろん、失敗に終わればそれは返金しますよ。申し訳ないが、病名もなにもわからない以上、説明のしようがない。筋肉があんなに膨らむことも、切除したものが一日たたずに戻ることも普通じゃない」

「お手あげってことか」

「現状では」

谷岡は右手で自分の額をつかみ、深いため息を吐くと「そうか」とつぶやいた。

「この病気にかかる前、なにか予兆のようなものはなかったんですか」

田所が聞くと、谷岡は少し考えるそぶりを見せた後、首を横に振った。

「いや、ない。いつも通りだった」

「じゃあ、いつも食べてないものを食べたとか……どこかを強く打つたとかは」

谷岡は顎に手を置いて、下を見て数秒考えたと「あ」と目を開いて顔を上げた。「あった、多分だが、あいつこけて顔をケガしている」

「どこで、どういうふうですか」

「この部屋だ」

田所は眉を寄せた。

「この部屋？」

「ああ、あいつが使用人と追いかけてこをしていた時、この部屋でこけて、顔を擦りむいたらしい」

「なるほど」

田所は立ち上がって、応接室を見まわした。

ソファアが二つ……暖炉が一つ……窓が一つ……ハープを弾く女の絵が一つ……まさか。

田所の頭に、一つの考えが浮かんだ。

遠野は窓から入る日光で目を覚ました。

客室のベッドはかなり上質な物のようで、寝心地はとてもよく、ぐっすり眠れた。

あの日は、もう夜ということ、話は次の日に持ち越したのだが、本当にノリカちゃんや元に戻れるのだろうか。

そう思いながら、隣のベッドを見やると、すでに田所はそこにはいなかった。

それを見た遠野は「あれ」とつぶやいて首をかしげた。

基本的に先に起きるのは遠野で、田所が先のことはほとんどない。部屋の中を見回しても、誰もいない。

「あれ、先輩」

どこに行ったのかと思い、立ち上がると、机の上の一つあるメモに

目がいった。

「こんなの、あつたっけ」

遠野はそのメモを手に取り、書かれている内容を読んだ瞬間「え」とつぶやくとその場で固まった。

これって……どういうこ——

突然、大きな音を立ててドアが開くと、手に拳銃を持った谷岡が入ってきた。

「お前！」

谷岡は怒号を飛ばすと、遠野に銃口を向けた。

「いひい！」遠野は思わず、両手を上げてメモを落とす。「ななな、なんですか」

「ノリカは……ノリカはどこだ！どこにいる！」

「ノ、ノリカちゃんは」

遠野が落ちているメモを指さすと、谷岡がすぐさまそれを乱雑に拾い上げて見ると、すぐに遠野の顔の前に突き出した。

「どういう意味だ！」

そこには——ノリカの治療をする。三日後には帰る——とあつた。

遠野は首を横に強く振る。

「分かりません」

「分かりませんじゃねえぞ！どこだ、言え、撃つぞ！」

「本当に知らないんです。さつき起きたら、これが置いてあつて、どこかに行っちゃつてたんですよ」

谷岡は歯を食いしばりながら震えると「チキシヨウ！」と銃のグリップを机に叩きつけた。「あの野郎……もしかしたら、ノリカをどっかに売る気じゃねえだろうな」

「いえ……それはないと思います」

遠野が答えると、谷岡は鋭い目を向ける。

「あいつは金のためなら、なんだつてする男だろ。11億もふっかけやがって」

「確かに先輩は無免許で、性欲の獣で、臭くて、汚くて、顔のイボがキモくて、法外な治療費とりますけど、あの人は医者です、患者を絶対

に見捨てません」

谷岡は遠野の目を見ながら、深く深呼吸をした。

「分かった。お前のその言葉、信じてやる。だが、もしあいつが三日後、ここに戻ってこなかった時……その時は」谷岡は鬼の形相で、遠野に顔を近づけた。「お前を殺すぞ」

三日間、遠野は逃げられないよう、客室に閉じ込められていた。

トイレに行く時も、わざわざ谷岡が付いてくる徹底ぶりだった。

その谷岡はいま、拳銃を手に遠野の前に座りながら貧乏ゆすりをしていた。

「今日だぞ、分かってるんだろうな」

「もちろんですよ」

そう答えたものの、自信はなかった。

よくよく考えれば、田所はかなり時間にルーズだった。三日後と書いてあったが、もしかしたら四日後や五日後になるかもしれない。

しかし、谷岡の雰囲気を見るに、今更そんなこと言える状態でもない。

携帯にも連絡は取れないし、まさか遠野がこんな状態になっているとも思っていないだろう。

窓の外に目をやると、すでに日は暮れかかっている。

不安からか、脇から汗が流れ丁度そのとき、ノックがなった。

谷岡がドアを開くと、使用人の男が顔を出した。

「ああ、谷岡様。ただいま、ブラック・ファック様が――」

「田所だ」

使用人の言葉をさえぎり、田所がノリカを連れて部屋に入ってきた。

「ノリカ！」叫んだ谷岡はすぐにノリカに駆け寄る。「大丈夫か、なにかされなかったか」

「ううん」

とノリカは首を振った。

「そうか……それはよかった」ノリカから目をそらしながらそう答え

ると、谷岡は立ち上がり田所を見た。「お前どこに行つてやがった」
「治療です。メモならおいていったはずですが」

「どこに行つたのかも書かれていなかったし、ノリカの顔はちつとも戻っていないじゃねえか!」

「それは——」

「もういい!」有無を言わず、谷岡は叫んだ。「下らねえ言い訳は聞きたくねえ。消えろ!今すぐにだ!」

「どういうことなんですか」日没後、谷岡の家の塀に停めたセンチユリーの中で、遠野は聞いた。「説明もなしにノリカちゃんを連れて行つて」

「どう説明しても、連れて行かせてはもらえないだろうと思つたからな」

「ちゃんと説明すれば、分かつてくれましたよ」

「いや、あの谷岡は絶対に一緒についてきた。脇からいちいち口出しされたらたまらん」

「そんなことで……まあいいです。それより、分かつたんですか、病氣の原因は」

田所は腕をくんだ。

「まあ、たぶんな」

「なんだったんですか」

「あくまで憶測だが、あれは火に対する体の防御反応だと思う」

「火、ですか? どうして」

「患者はあの応接室でこけているんだ、それも冬に」

「冬?」と遠野は首をかしげた。「冬が何か関係あるんですか」

「あの部屋には、暖炉があつたらう」

田所が言うと、遠野は「あ」と言つて、思案するように目を動かした。「そうか、暖炉に火がついていたんですね」

「使用人に話を聞くと、あの日は来客があつて、くべていたそうだ。そして、ちようどその日、患者は追いかけてこをして、こけたんだ、暖炉の前で。どれだけの火の粉や熱風が顔にかかつたのかは分からない

い。だが、それが体の防衛本能を引き起こして、顔に筋肉をつけてしまった。患者の顔についていた筋肉、覚えてるか？」

遠野はうなづく。

「はい。固くて、色も白く、血管も少なかったです」

「あれは、かなり燃えにくいだろうな」

「たしかに……それで、どんな治療を」

「火による拒絶反応でああなったのなら、体を火に慣れさせればいい。山の中で、毎日のように火をくべて、近くで見せた」

「それで治るんですか」

「体が火に驚いた結果ああなったんなら、それで治るのが道理だろう」
「なるほど。しかし、火の防衛本能って本当にそんなことあり得るんでしょうか。あの顔にも、たった一日でなっただけでしょう。それも、筋肉を摘出してもすぐに戻るなんて」

「人間の体というものは、時に人智を超えた奇跡を起こすもんだ。もしかしたら、いまにも筋肉が消え——」そこまで言うと、田所は手を口にあてた。「消えると……」

「どうかしたんですか」

田所の様子を不思議に思った遠野がそう言うと同時に「まずい！」と田所はセンチユリーを飛び出した。

「クソー！」

谷岡は書齋でウイスキーをショットグラスで一気に流し込むと、机を叩いてうなだれた。

頼みの綱であったブラック・ファックは役に立たず、病院にも期待はできない。

どうすることもできない現実の前に、ただ唸りながら酒を飲んだ。酔いが回ってくると、絶望は苛立ちに変わってきた。

俺がなにをしたってんだ。どうして俺の娘だけが、こんな目に合わなくてはいけないんだ。ふぎげやがって。

そんなことを考えていると、不意にウイスキーボトルの横に置いてある拳銃が目が行く。

「あいつら……」脳裏にブラック・ファックと遠野の顔が浮かんだ。
「殺しとくべきだったか……どうせ、手術も適当にやったんだろ」

怒りで拳が震え、それを振り上げ、ショットグラスに叩き落そうとした瞬間、ノックの音を聞いて腕が止まる。

「お父さん」ドアの奥から、かすかにノリカのらしき声が聞えた。「開けて」

ノリカの部屋は書斎の隣にあった。

顔が変わって以来、使用人が怖がることや、周りの人間に知られようにするため、ずっと地下に居させていたが、ブラック・ファックに連れ去られて戻ってきた今日ばかりは、部屋に戻ることを許していた。

「ああ、いま開ける」酒の回った力ない足取りで立ち上がると、ふらふらと歩きながらドアまで向かい、開いた。「どうしたノリ——はああああ！」

谷岡はノリカの顔を見ると、声を上げてしりもちをついた。

ノリカの顔が縦に長くただれて、ぽつかりと開いた真つ黒な両目と口の穴がある化け物になっていたからだ。

「ぼどうざあん」

とくぐもった声を発しながら、ノリカはゆらゆらと谷岡に近づいていく。

谷岡は声にならない声を上げながら、尻をすらしながら後ずさりすると、机の上に手を伸ばした。

机に手を這わせ、ウイスキーを倒しながら拳銃を手取る。

震える手で化け物に標準を合わせると、目を強く閉じ「すまない」とつぶやき、引き金を引いた。

乾いた発砲音が部屋に響いた。

腕に違和感を感じ、目をゆっくり開くと、目の前にはブラック・ファックの顔があった。谷岡の両手を握り、銃口を上へと向けさせていた。その先、天井には小さな穴が開いている。

「自分の娘を撃つやつがあるか！」

ブラック・ファックは強く握られた谷岡の手から、拳銃を取り上げ

ると、思い切り顔に平手打ちをした。

谷岡は衝撃で体を後ろにのけぞらすと、ゆっくりと体を起き上がらせる。

「そ、そいつはもうノリカじゃない」谷岡は震える声で言った。「化け物だ」

「よく見ろ！この子の顔は皮が大量に余っているせいで、おかしく見えてるだけだ」

「皮？」

「そうだ。大量の筋肉が皮膚の下にあった。それが消えれば、こういうことになるだろう」

筋肉が消えた？

「それは……つまり」

「治ったんですよ、この子は」

「ブラ……田所！」

谷岡はノリカの皮膚を摘出した後、なにも言わずセンチユリーに歩き出していた田所に向かって叫んだ。

田所は踵を返す。

「なんでしよう」

「いや、まだ礼も言う前に行つちまうもんだから」

「礼なんて必要ありません。謝礼はちゃんとしたきましたから」

「ああ、そうか。それなら、礼じゃなく謝罪をさせてほしい。疑ってしまつて本当に——」

「それも結構だ」

田所は言葉をささえぎつて言うと、谷岡は困つたように眉を寄せた。

「結構つて、そう言われても謝らなきゃこつちの気が収まらねえ」

「あんたの気なんて、どうでもいい。それより、私よりも先に謝らなくてはならない人間がいるんじゃないですか」

すぐにノリカの顔が浮かんだ。

「ああ、ノリカのことだろう。もちろん、すまないと思つてる」

「すまないと思つてるだど？あんた、自分がなにをしたのか分かつて

言ってるのか」

「もちろん、分かってる。ただ、あんな化け物みたいな顔になっていたんだ。仕方がなかったんだよ」

「なにを言ってるんだ。あんた、あの子の親だろう。親ってやつは、自分の子供の顔がおかしくなるうが、体がおかしくなるうが、頭がおかしくなるうが、それでも死ぬまで愛してやるのが親ってもんじやないのかね」

谷岡は口を閉ざし静かに立ち尽くすと、センチユリーはエンジン音を立てて門の外へと消えていった。

持たざる者

「はえ、すつこい大きいゾ」

黄色のヘルメットに作業着姿の三浦は、目の前にそびえたつビルを見上げながらつぶやいた。

いま三浦が作っている建物はまだ鉄骨を立てている段階だが、20階建てだそうだ。

それですらとてつもなく大きなものだと思っていたが、前のものはその倍以上の大きさだ。

「なにやってんすか、三浦さん」

声がして振り返ると、同じ作業着姿の後輩がこちらに歩いて来ていた。「もうすぐ作業始まりますよ」

「あ、申し訳ないゾ」

「どうしたんですか、こんな何にもない場所で」
「ほら、みるよみるよ」

三浦はビルを指さした。「めちやくちやデカイダルルオ？」

「このビルですか。そりやそうですよ、何たってあのポンツカレーを作ってる会社の本社なんですから」

三浦はまたビルを見上げた。

「あのポンツカレー……だからこんなに大きいビルが建てれるのか」
「でも最近は大変らしいですよ」

「なんでだゾ」

「昔のインスタントカレーは斬新なものでしたけど、今じゃいろんな会社が売ってますからね。売り上げはかなり落ちているようで、数年前に新しく社長になった木村って人はかなり四苦八苦してるって話です」

「あつちはあつちで大変ってことかゾ？」

「そういうことですな。まあ僕らには関係のない話ですよ、住む世界が違いますから」

「お、そうだな」

三浦はビルの最上階に目を凝らした。

下北沢を一望できるその景色を想像してみる。
「きつと、すつと綺麗な景色が見えるゾ」

ポンツカレールビル、最上階の社長室では、木村が雲一つない青空を映す窓を背に、黒光りする社長椅子に座り、その前には額に汗をにじませている幹部とその部下が立っていた。

「僕は3月も前に命令したはず。それを今更できないというのはどういふことだ」

腕を組み、眉間にしわを寄せると、三回り以上も下の幹部は肩を丸めみるみる小さくなっていった。

「あの……先月に少し問題がありまして、計画の流れに少し支障が出ると報告をしていたのですが」

「だからどうした!」

木村の怒号で幹部と部下は小さく飛び上がった。

「申し訳ありません」

部下が頭を下げながら言った。「私の責任なんです。私が発注日時を——」

「君には聞いていない!」

木村の叫び声が部下の言葉をかき消す。「何かしらの問題があったのは聞いていた。だったら、他の部分で急ぎをかせかせて時間に間に合わせるのが君の仕事だろう!君はどういう気持ちで幹部を名乗っているんだ。恥を知れ!」

幹部は何かを言いたそうに唇を動かすと、すぐに頭を下げた。

「申し訳ございません」

「まったく」

木村は胸の中にある怒りを吐き出すかのように息を吹くと、椅子を後ろに回転させて窓の外を見やった。

父である先代社長が、急にホモビ男優になると言いだし、退社してから二年がたった。

半ば無理やりの形で座らされた社長という椅子。乗り気ではなかったが、父がここまでにしたものをさらに大きくしてやろうという

気持ちもあつた。

だが、社長に就任してからというものの、業績は常に右肩下がり。どれだけ尽力しても業績は変わらず、現状を変えようと今までのものとは違う別のものを提案しても、幹部たちからは常に否定の声が出る。

さらに今回のミス。こんなことをしている間にも、ポントツカレーの株価が下がっていつていると考えると、目の前に映る青空を感じる暇もなく、はらわたが煮えくりかえりそうな怒りとともに、部下への不満が次々と湧き出てくる。

怒りは心拍数を上げ、眉間にみるみる皺が寄せ集まっていく。

どいつもこいつも、何で……何で僕の思い通りに――

そのとき、腹に突き刺さるような痛みを感じた。

「あつい……ああ」

体にうまく力が入らず前のめりになり、床に倒れた。

「社長！大丈夫ですか」

すぐに幹部の駆け寄る音が聞えたが、木村にはそれに答える余裕はなかった。

悶絶している木村を見て、幹部はすぐに部下に命令した。

「私は救急車を呼ぶ！君はどこか近くに医者がないか探してきてくれ！」

「だからだな、明らかにこれの味がおかしかったんだよ」

ポントツカレー本社、一階の受付の女性に、田所はポントツカレーの箱を見せながら言った。

「そう言われましても、箱には特におかしな部分は。中身の方はどうなさいましたか」

「食べた」

受付は困ったように首をかしげた。

「えっと……すべてででしょうか」

「ああ、全部食べた」

「そうなりますと、私どもとしても対処しかねまして」

「ああ、分かっている。だが、私は毎日……毎日だぞ、このカレーを食べてるんだ。その私がおかしいというんだから、絶対に味はおかしかったんだよ。弁償しろとは言わない。ただ上の人間に、この事実を私の口から——」

「医者の方はいませんか!」

突然、フロアに男の声が響き、田所は話すのをやめて声の方を見た。

スーツ姿の男が、顔を真っ赤にして叫んでいる。

「どなたか! 医者! 医者の方!」

「私は医者だが」

田所がそういうと、男は即座に田所の元へと走ってきた。

「話しはエレベーターでします、急いで来ていただけますか」

「いいですが私は高——」

「いいから早く!」

男は田所の手を強引に引っ張り、無理やり近くのエレベーターに乗せると、すぐに最上階のボタンを押した。

エレベーターが動き出した後も、男は落ち着く様子なく体を小刻みに揺らしている。

「患者の容体を聞かせてもらえますか」

田所がそう聞くと「ああ、はい」と男はいい、田所の方を向いたと同時に「う、臭! ウンコ臭!」と手で鼻を覆い、横を向いた。

田所は一瞬、顔をしかめると「失礼」といって、持っていたアタッシユケースから香水を取り出し、体にふった。

「こちらこそ申し訳ありません。実は社長が倒れまして」

「意識はあるんですか」

「分かりません。あるような、ないような」

「なるほど」

チャイムが鳴るとエレベーターのドアが開いた。

「こっちです」

すぐに歩き出した男についていき、社長室とドアに書かれている部屋に入ると、膝を付いている初老の男の隣に、社長らしき男が倒れていた。

「そのウンコ色は……もしやあなたはブラック・ファック」

田所のことを知っていたのか、初老の男は目を丸くしてそう言った。

「そう呼ぶ人もいますが、私の名前は田所です。その方を診るので少し離れてもらえますか」

初老の男がすぐに立ち上がると、田所は膝をついて社長の症状を診る。

その間、後ろからこそこそと声が聞えてきた。

「君、困るよ」

「申し訳ありません。まずかったですでしょうか」

「いや……よかったよ。でもまずいことにはなる。まあ、社長の命にはかえられん」

二人が話あっている中、田所はすぐに社長のズボンに血がにじんでいることに気が付いた。

ベルトを外しズボンを脱がすと、血に染まった下着が目に入る。

それも脱がしてみると、肛門からとめどなく血が流れてきていた。

「救急車はいつ来ると」

田所は聞いた。

「10分後には」

「10分……間に合わない」

田所はそういうとアタッシュケースを開いて、注射器を取り出した。

「い、いまなんと」

初老の男がそう問う。

「10分後では間に合いません、この場で応急処置します。輸血も必要です、血液型を調べますので、ここにいる社員の方をありつたけ呼んでください」

「輸血ですか。それはまずいですよ」

田所は社長の腕に注射器の針を入れる寸前で手を止めた。

「どうしてですか」

「社長の血液型はHM―114514なんです」

「何だつて！」

田所は声を上げた。

HM―114514型。それは先天性のドホモのみに確認される血液型で、人類に0.0019%しか存在しないものだ。

「同じ血液型の方はいないんですか？」

「お父上と同じ血液型なのですが。今はホモビの撮影のため、サインに」

「なんてこった」

田所は頭を抱えた。

HM―114514型の血液は希少で、大病院でもそうそう保存している所はない。

「とりあえず、輸血の準備はしておきます。同じ血液型の人を探してきてください」

田所がそういうと、二人はすぐさま社長室を飛び出していった。

賭けるしかなかった。0.00019%が近くにもう一人居る奇跡に。

多分、無理だろう。そう考えていると、思った以上に早く初老の男が帰ってきた。

「ブラック・ファック先生！この方が同じ血液型だと」

「ですから私はたどこ——なんですつて！」

田所は顔を上げて初老の男が連れてきた、ヘルメットと作業着姿の見るからに池沼そうな男を見る。

立ち上がり、その男に近づいて聞いた。

「あなた、お名前は？」

「三浦だゾ」

ゾ？

まるでアニメのキャラクターのような語尾が引つかかるが、そんな話をしている場合ではない。

「三浦さん。あなたの血液型は本当にHM―114514なんですか」

田所は汗をにじませながら聞いた。

今のアタツシユケース内にある道具では、HM-114514型を判別することは不可能だった。

もし別の血液を入れてしまえば、特有の拒絶反応で穴という穴から糞が飛び出して死ぬ。

「お、そうだよ」

田所は眉を寄せながら三浦の顔をじつと見る。

正直、信用ができない。だが、今は彼の言葉を信じるしかない。

「三浦さん、血液をいただけますか？」

田所がそういうと、三浦は当然のように即答した。

「困ったときに助け合うのは当たり前だよなあ？」

まぶたの奥から光を感じ、木村はうつすらと目を開けた。

ぼやけ、ピントの合わない視界を調整するように何度か瞬きをする
と、白い天井が目に入る。

隣に目をやると浅いピンク色のカーテンと点滴が、その反対には夜の空を映す窓が見えた。

「あれ……ここは、病院？」

「目が覚めたか」

足元の方から声が聞え、体を起こそうとすると「まで、俺がそつちにいく」と色黒の男が木村の隣に立った。

「あなたは？」

木村は聞いた。

「俺の名前は田所浩二。君の治療をさせてもらった医者だ」

「治療？」

「そうだ。君は過度のストレスによって、腸破裂を起こした。最近、柔い便が続いてないか」

木村は頷いた。ここ最近、ビュブルル、ポンツ！といった感じの便しか出ていなかった。

「それだ」

田所は指をさしていった。「それで腸がダメージを受け続け、破裂したんだ。俺が社長室で応急処置してなきや、今頃死んでるよ」

「応急処置？」

木村は一瞬、下を向くとハツとして顔を上げた。「僕の血液はH M
—114514ですよ」

「分かってる。実は近くに同じ血液型の——」
そのとき、病室のドアが開く音に田所が黙ると、坊主で池沼面の男
が入ってきた。

「失礼するゾ」

「あなたは誰ですか」

木村は少し戸惑いながら聞くと、田所はその男の肩に手を置いた。

「この人が、君と同じH M—114514型だった三浦さんだ」
「え？」

木村は口を開くと、そのままの状態で固まった。

自分と父以外でその血液型の人間が日本にいるとは思っていない
かったからだ。

「もう治ったのかゾ？」

三浦がそう聞くと、田所は軽く首を横に振る。

「いや、まだ完治はしてない。ただ、すぐに退院できるだろう」

「ああ、それは良かった」

木村がそう言って、ほっと一息つくくと、

「だが、安心するな」

と田所がいいながら、横を向いた。「一度、破裂した内臓は元には戻
らない。また激昂なんてしたら、同じことが起きるかもしれない。注
意しておけ」

「あ、ちよつと」

田所が歩き出すと、木村がそう言って止めた。「ありがとうございます
ます、田所さん。謝礼の方なんですが」

「それはすぐに会社へ請求させてもらう。それより、三浦さんに礼を
いうんだな。この人がいなけりや、君は死んでたんだからな」

そう言って、田所は病室から出ていった。

「本当にありがとうございます、三浦さん」

木村はすぐに礼をした。「あなたのおかげで助かりました」

「気にしなくていいゾ」

「いえ、命の恩人ですから、お礼をさせてください。すぐに部下に頼んで、100万円ほど包ませますので」

三浦はすぐに首を横に振った。

「そんな大金もらえないゾ。俺はただ血液をあげただけで、そんなたいたことしてないダルルオ!？」

「でも」

木村は一瞬、手を顎に当てて考えた。「そうだ、僕が退院したらご馳走しますよ。それならどうですか」

「お、いいゾ〜コレ」

「なんか、よくわかんないゾ」

「え」

木村は対面に座る三浦の表情に驚いた。

地上18階にある会員制高級レストラン、糞喰漢。特別な接待で使用しないものだ。

味には絶対の自信があったが、料理を口にした三浦はおいしいともまずいとも違う、困った顔をしている。

「口に合いませんでしたか」

「それよりも、なんかここ」

三浦は周りをききよろきよろと見回す。「すっごい落ち着かなくて、味がわかんないゾ」

「どの辺がでしょうか」

木村はそう聞いた。

白を基調とした広い店内には、かなりの余裕をもって机が並べられ、静かに流れるバイオリンの旋律が、窓の外に映る夜景をより一層、美しい物としている。他の客も二組しかいない。

この状況で、落ち着かないというのは木村には理解できなかった。「全部だゾ。こんな高級な店は来たことなくて、食べるのに集中できないゾ」

木村は頭を掻いた。

「それは困りましたね」

何とか三浦が落ち着くのを待ったが、一向にその気配はなく、結局ろくに料理は食わずに、二人はレストランを出た。

輸血の礼として連れてきたのに、こうなっては意味がない。

どうしたものかと考えていると、

「あ、そうだ」

唐突に三浦がそういった。「俺の行きつけの銭湯があるから、そこにいこう」

「銭湯ですか」

「そうだゾ。すっごい大きくて気持ちいいゾ」

「そうですか」

木村は顔を横にやると、少し困った顔をした。

銭湯の存在は知っていたが入ったことはなく、どんなものかも想像できなもので不安だ。

「どうせなら、先生も誘うゾ」

そういつて、三浦は携帯を取り出す。

「え、先生つてもしかして」

「当然、田所だゾ」

「あつつう〜」

風呂場のドアが開かれ、体から湯気を上げた三浦が出てくると、後から田所が続く。

「ビール！ビール！あつつー！」

「中では飲食禁止ですよ」

と最後に木村も出てきた。

もつとボロボロの銭湯ではないかと心配していたが、思いのほか最近でできたような綺麗な所だった。

初めての銭湯だったが、二人が一緒のため緊張はなく大いに楽しめた。

脱衣所で体を拭いていると、

「三浦さん、腹へってないですか」

と田所が聞いた。

「腹減ったなあ」

「この辺にい、うまいラーメン屋の屋台、来てるらしいんですよ」

「あっそっつかあ」

「行きませんか？」

「いきてーなー」

「行きましようよ。じゃけんすぐ行きましようね」

「おっそうだな。あっそうだ、おい木村あ」

呼ばれるとは思わず、木村はハツとして顔を上げた。

「あ、何ですか」

「木村も腹減ってるか？」

「ああ」

木村は右上あたりをみて、腹の調子を確認める。「はい、すいてます」

先ほどのレストランでは、三浦のこともあってあまり料理を口にしていなかった。

ラーメンぐらいなら軽く入るだろう。

銭湯を出た三人は歩いて10分ほどにあったラーメン屋の屋台に行く、ラーメンを三杯頼んだ。

すぐに出てきたラーメンを、木村は啜った。

味は普通だ。まずくはないが、おいしくもない、だが、

「めちやくちやうまいゾ〜これ」

「ですよねえ！このチャーシューがたまないんですよ」

二人は食べるなり声を上げた。

「どうだ木村はあ」

三浦がそう聞いてくると、木村は笑って答える。

「ええ、おいしいですよ」

空気を悪くしては悪いと、そう答えた。

「本当かあ？」

田所が疑ってくる。「いつもいいもん食べてるから、実はたいしておいしいと思ってないんじゃないのか」

「いえ、本当においしいですよ」

そういつて、木村はまた麺をすすする。

三人は麺を食べ終わると、三浦と田所は器を両手で持ち上げ、汁をすべての飲み切り同時に器を置いた。

「あーうまかった」

三浦はぼんぼんと腹を二回たたいた。

「お二人とも汁も飲んじゃうんですね」

「本当は塩分が高いから、飲まない方がいいんだけどな」

田所がそういうと三浦は、

「汁を全部飲まないと、ラーメンを食べたって気にならないゾ」と笑った。

会計を済ませると、大通りでタクシーを捕まえ、ドアが開かれると木村は二人に向かっていった。

「今日は楽しかったです。また機会があったら」

「お、そうだな。また誘っていいか？」

三浦がらしくない心配をすると、田所が笑った。

「遠慮することないでしょ、何てったって血を分けた兄弟だ」

「そうですね」

木村は同意した。

「そつかあ。じゃあまた一緒に食べるゾ」

「ええ、また。では」

木村はそういつてタクシーに乗り込んだ。

運転手に目的地を告げ、木村は、たまにはこんなのも悪くないか、と思いつながら後ろへと流れていく街並みを静かに眺めた。

「くそ」

木村は社長室で一人つぶやいた。

輸血の件から二ヶ月、ポンツカレーは窮地に立っていた。

売り上げは変わらず下がり続けており、田所に払った1919万円の治療費もかなりの痛手となっている。

父に助言を求めようとも思ったが、前回のホモビ撮影後すぐ、別の

撮影のためアフリカに向かってしまい、また当分帰ってこないそう
だ。

部下に頼んだ銀行からの融資も、かなり渋られているようで、正直
いつ支援を切られるのかもわからない状況だ。

「何か……何か打開策はないのか」

すでに数百時間、考え続けているそれをまた思案する。

背を丸めながら考え続けるも、答えが出る気配はなかった。

倒産。

その単語が脳裏をかすめたとき、突然に社長室のドアが開いた。

「社長！」

同時に額に汗をにじませた幹部が部屋に入る。

「どうしたんだ」

その様子に戸惑いながら、木村は聞いた。

「インドのジュンペイ家と話が付きました。カレーのレシピを、一部
のみ、他の会社に漏らさないのが約束できるのであれば、使用を考え
てもいいと」

「それは本当か！」

それは一月ほど前に提案されていた企画だった。

ジュンペイ家の人間だけに、口頭のみで伝えられるとされる伝統の
カレーを、ポンツカレーの新商品として扱えないかというものだった
が、そんなカレーを企業に、ましてや日本の会社に使わせてくれる可
能性は限りなく低いと思われていた。

だが、まさか交渉にこぎつけるとは。

「価格交渉の日時は？」

木村は問う。

「4日後というのが、あちらからの提案です」

「必ずその日に行くと、伝えておいてくれ」

「分かりました」

幹部は踵を返して部屋から出ると、木村は安堵の吐息と共に椅子に
座ると、静かに目を閉じ、口角を吊り上げた。

いける……これなら立て直せる。僕の会社を。

仕事を終えた三浦は、後輩と一緒に組み立て式の足場を下にくだつていた。

「今日は暑かったつすね三浦さん」

後ろからついてくる後輩がいった。「今日も終わったら銭湯いきませんか」

「お、そうだな。あつそうだ、木村もさそうゾコレ」

「木村って、もしかしてポンツカレーの木村社長ですか」

「そうだゾ」

「本当ですか。本当にあの木村社長が？」

後輩は三浦が輸血の件で、木村と仲良くなったと信じていなかった。

「だからラーメン一緒に食べたつて言ってるダルルオ!？」

「三浦さんつて典型的な池沼だから、いうこと信用できないんですもん」

「ポツチャマ」

三浦はしよぼんと、肩を落とした。

「いやいや、冗談ですつて。ちゃんと社長に僕のこと紹介してくださいよ」

「当たり前だよなあ？」

談笑しながら階段を下つていき、三浦が地面に足を付けようとしたその時、

カアン――

突然、隣から謎の金属音が響いた。

「うおー!」

後輩はそう叫ぶと同時に、とつさに音の方に目をやると、ジツポライターが地面に落ちていた。「ジツポ?」

「すいまへくん」

上から声が聞えてきて、後輩が見上げると同僚が手を振っていた。「落としちゃいました。けがはありませんか」

どうやら落ちたライターが手すりに当たったらしい。

「バカやろう！気を付けろ！」

後輩は怒号を飛ばした後、前を向いた。「まったく、びっくりしましたね、みうら——」

後輩はそこまでいうと、息を飲んで固まった。

三浦が地面に倒れていたからだ。

「三浦さん！」

すぐに後輩は階段を降りると、そばに膝をついて肩をゆすった。

「どうしたんですか！」

「いや……ちよつと、こけて……お尻を打って……うう」

三浦はそういうと、額から脂汗をにじませ、唸りながら顔をゆがめた。

「お尻を打った？それだけですか、それだけでこんな——」

その時、視界の隅、三浦の履いている灰色のズボンから、見慣れない色が見えていることに気が付いた。

恐る恐る、後輩は立ち上がり三浦のお尻を見ると、そこは鮮血に染まっていた。

「いつ出発しますか」

4度目の質問だった。

同じ質問を何度もされているというのに、乗務員は嫌な顔一つせず笑顔で「10分後でございます」と答えた。

「ありがとうございます。何度もすいません」

と木村がいうと、乗務員は礼をしてその場を去った。

それを見送ると、木村はビジネスクラスのシートに身を預け、目を閉じながらも、右の足を上下に揺らした。

焦ったところでどうしようもない。しかし、明日はジュンペイ家との交渉日、ポンツカレーの未来が決まる日だ。落ち着かないのは当然だ。

まだ指示はないというのに、木村の腰にはシートベルトがつながれている。

まだなのか。

再度、同じ質問をしたい衝動に駆られ、横を通り過ぎた乗務員に声をかけようとしたとき、携帯が鳴った。

もしや、ジユンペイ家との間で何かあったのかと、すぐさま携帯を取り出して耳に当てた。

「もしもし！何かあったのか」

——ああ、あった。

その言葉を聞いて、さっと頭から血の気が引いた。

一体なにがあったのかとすぐに聞こうと思ったが、その前に別の疑問が湧き出た。

声だ。電話から聞こえた声が、部下のものではないような気がした。そして、どこか聞き覚えもあった。

「えつと……だれ、ですか」

——田所だ。

「え？」

木村は驚きながらも聞いた。「ど、どうしてあなたが。僕の携帯電話の番号も知らないはずじゃ」

——三浦さんの携帯電話からかけてる。それより大変だ、三浦さんが倒れた。

木村は言葉を失った。

三浦さんが？

茫然とする木村に田所は続ける。

——こけて尻を打ったひょうしに、肛門が縦に割れたらしい。どうも日ごろから酷使していたようで、それが原因みたいだ。

「それで……どうなんですか」

——すぐに手術が必要だ。応急処置をして何とか時間を稼いでいるが、時間の問題だ。HM—114514型の血液も岡山の県北にしかなく、間に合わない。今すぐ来てくれ。

「僕が行くんですか」

——当たり前まだ！お前以外に誰がいる。

携帯を握る手が震えていた。

どうする……どうすればいい。

「何とかありませんか。今から大事な商談が——」

——何をいつてるんだお前は！

田所の叫びが、木村の言葉を遮った。

——いったい誰のおかげで生きられてると思ってるんだ。この人がいなければ、お前は死んでいったんだぞ。

「確かにその通りです。でも……でもですね」

——三浦さんの命より会社を取るのか……お前は。

「いえ、そういうわけでは」

「お客様」

いつの間にか隣にいた乗務員に呼ばれ、木村はハツとして顔を上げる。

「ああ、はい」

「申し訳ありませんが、すぐに離陸となりますので、携帯電話をお切りいただけますか」

「え、あつと……はい、すぐに切ります」

「お願いいたします」

礼をして歩き出す乗務員の背中を、息を切らして見ながら木村は悩んでいた。

行かなければ三浦は死ぬ。だが、この飛行機を降りれば、明日のジュンペイ家との商談はなくなる。そうなれば、会社はほぼ確実に倒産だ。

手にある切られていない携帯からは、田所が叫んでいるのか、かすかに声が聞えてくる。

その時、木村の脳裏には三浦と田所の三人で、共に入った銭湯とラーメン屋の屋台の光景が流れた。

「そうだ……助けなきゃ」

三浦と別れる前の最後の姿。

それが映ると木村はシートベルトのバックルに手をかけた。

あと指に力を入れれば、ベルトは外れる。

「お客様」

その様子を見た乗務員が隣に来て聞いた。「どうかなさいました

か

「すみません」

木村は乗務員を見ず、目の前の何もない空間を見ながらいった。

「僕……僕は——」

——カチ。

木村の震える親指が、携帯の電源ボタンを押した。

その状態で固まったままの木村に乗務員は「お客様？」と木村の顔を覗く。

「何でもありません。大丈夫です」

木村はかすれた声でそう答えた。

「そうですか。具合が優れなくなりましたら、すぐに乗務員にお申し付けください」

「はい。ありがとうございます」

木村は窓の外に目をやった。

飛行機はゆっくりと飛行場を旋回し、滑走路に乗るとスピードを上げていく。

機体が地上から離れていき、雲を抜けると、星が散る夜空が目に見える。

機内は水中のように静かだった。木村の心の中も同様に。

ただ、その静けさが、何よりも恐ろしかった。

手術室前、田所は切られた携帯を耳にあてがいながら、目の前の壁を見ていた。

ゆっくりとその手を下におろし、その場で固まる。

何分そうしていただろうか、手術室のドアが開かれて医師が出てきた。

「ブラックファック先生！木村社長はまだなのですか！」

「ええ……容体は」

「もう限界が近いです」

「そうですか」

田所は手術室へ入ると、手術台に横たわる顔を青くした三浦のそば

に立った。

まだギリギリ意識があった。だが、いつ落ちてもおかしくはない状況だ。

「田所先生」

三浦は苦悶の表情を浮かべながら聞く。「き……木村は」

田所は深く息を吸い、それを吐き出した後、笑顔を浮かべていった。

「だいぶ前からここに向かっています。もうすぐ着きますよ」

「あっそっかあ……それは……よかったゾ」

そういうと三浦は笑みを作り、眠るかのように目を閉じた。

意識を失い、死にゆく三浦を、田所はただ見ているしかなかった。

30分後、心拍数の低下を知らせる警告がなり、そして――

――ピー。

心停止を知らせる耳ざわりな騒音が、手術室に響いた。

「いやあ大成功でしたね」

飛行機を降りてすぐ、後ろからキャリアバックを引いてついでくる部下がそういうと、

「そっちな」

と木村は憂鬱な顔のままそう返した。

商談はあり得ないほど、うまくまとまったが、木村はそれを素直に喜べなかった。

三浦さんはどうなったのだろうか。

巨大な窓の外に映る飛行場を見ながら、それを思う。

ため息を一つ落とし、前に向き直った瞬間、木村は足を止めた。

数メートル前、こちらを見る黒い衣装に色黒の男が見えた。

「先にタクシーを捕まえておいてくれ」

木村は足を止めて言った。

「え……はい」

部下は木村とその男を往復してみた後、首をかしげると出口へと歩いていった。

それを見送ると、木村は歩いて田所のそばに立つ。

数秒の間、二人は見合つたまま、何もいわなかった。

「三浦さんは」

ぼそりと、木村はつぶやいた。

「死んだよ」

田所はまっすぐに木村を見据えていった。

木村は息を詰まらせた後「そうですか」と体を震わせながら答えた。

「そうですか……だと」

田所は鋭い目つきで、木村を睨みつける。「お前が来れば、三浦さんは死ななかつたんだぞ。それを、まるで他人事か」

「いえ、悪いとは思っています……ただ、僕にも僕の事情があることは分かってほしい」

「それは、命の恩人であり、友人である三浦さんを殺さなきゃならないほどの事情か」

「そういうわけでは」

「じゃあどういうわけなんだ」

田所その言葉に押し黙つた木村は、目を閉じて下を向いた。

こつちには、こつちの事情があるんだ。それを何だ。

そう思うと、腹の底から怒りが込み上げてきた。

「あなたは……何なんですか」

木村は苛立ちをあらわにしながらいった。

「何?」

その様子に、田所は眉を寄せた。

「何なんですかと聞いてるんです。僕がどうして、あなたのいうことを聞かないやならないんだ。確かに命を助けてもらいました。けど、それだけで僕はすべてをあなたたちに捧げなくてはいけないんですか」

「まて、少し落ち——」

「大体」

木村は田所の言葉を無視して続ける。「あなたが請求した莫大な治療費だって、一つの要因なんですよ。それを、まるで僕だけが悪いみたい……会社がこんな状況でなければ行きましたよ。でも部下は

使えないし、企業競争だつて激しいんですよ！」

「おい木村、話を——」

「分かった口きかないでくださいよ。こっちは大変なんですよ。正論めいたこといって、自分が正しいとでも思ってるんですか。何も知らない奴が……何の責任ももたない奴に！うだうだいわれる筋合いは無い！僕は社長なんだ！会社のために輸血を断って——」

木村は空港内に響くような大声で叫んだ。「いったい何が悪い！」
その時、下腹部に鈍い痛みを感じた。

「うっ」

腹を抱えその場でうずくまると、近くに歩いてきた田所を見上げた。「た、田所さん」

「俺はいつたはずだ。壊れた内臓は、元には戻らないと」

その言葉を聞いた瞬間、木村は力なく地面に頭を打ち付け、気を失った。

「いや／＼あなたがあの有名なブラック・ファック先生ですか」

救急車で病院につくなり、調子のよさそうな禿げ頭の医師がそういった。

「私の名前は田所です」

「失礼しました。しかし、あなた木村社長とご友人とは」

田所は運ばれていく木村を一瞥した後「ただの知り合いです」と答える。

「そうですか。それで、どうでしょうか、お知り合いのために手術を手伝ってもらえたりしませんでしょうか」

医師はそれを期待するかのようになり、ほほを吊り上げていった。

「慈善活動はしない主義なんだ」

「ああ、そうですか。ではですね、私の名前だけでも憶えて——」

「先生、大変です！」

看護師の叫び声が、医師の声をかき消した。

医師は面倒くさそうに振り向くと「いったい何だね」と聞いた。

「木村社長の血液型にHM—114514 型が」

「ひよえ！」

医師がすつとんきような声を上げ、田所を見た。「それは、そうなのですか」

「ええ、彼はHM—114514型です」

田所がそういうと、医師は顔を真つ青にした。

「そんな。こんな有名人が死んだとなると、病院の名が」

「調べたところ、岡山の県北にしか同じ血液はないそうです」

看護師がそういと、すがるような目で医師は田所を見た。

「先生……あの、血液を持っていませんか。もしくは同じ血液型の方など」

「一人知っています。彼の友人でね」

「えー！」

一転、医師の顔は明るくなった。「いやあそれは良かった！やはり、持つべきものは友というやつですね」

「その通りだ。しかしながら、彼は手放してしまったのですよ」

田所はそういって、病院の出口へ歩き出した。

「自らの手でね」

求めた理由

堅牢な車体の外から、くぐもったサイレンの音が聞こえる。

様々な医療器具が揺れる救急車の中では、これから起こる事態に備え、救命救急士の石井が静かに心を落ち着かせていた。

しかし、何度やってもなれないものだ。

現場というのは、着くまでどうなっているか分からない。

パニックになった肉親に群がる野次馬。それらが、貴重な患者の時間を奪うことは、決してまれではない。

気づくと、隣で座る新人が小刻みに震えているのが分かった。

「落ち着け」

石井がそういうと、新人がこちらに顔を向ける。「そんな調子じゃ、いざって時にパニックるぞ。着いたら慌てずに、一つずつ、覚えてきたことをすればいい。困ったら俺に指示を上げ」

「は、はい」

新人の体から、少しだけ力が抜ける。

正直、石井も不安だった。だが、ここで先輩である自分が自信のない表情を見せれば、新人の不安を煽ることとなる。

どんな状況だろうと、常に冷静でいる。この職業で上に立つ人間の絶対条件だ。

「患者は12歳の男」

石井は現場の情報を、再度確認させる。「自転車で走行中に、電柱にぶつかって転倒、頭部からの出血だ。分かっているな」

「はい」

「俺はすぐに患者のところに行く、お前は担架を。頭部以外の外傷の有無を確認し、心停止していれば心臓マッサージにAED。特に問題がなければ、すぐに乗せて治療だ」

「はい」

新人がそう返事をしたときには、顔からは強張りが消えていた。

ちやうどそのとき、救急車が止まる。

「よし」

石井は新人の肩を叩いた。「行くぞ」

後部のハッチが上に開き、救命道具をもって地面に降りた。

案の定、患者の周りに群がる野次馬。必死に無意味な写真を撮ろうとする様も、もう見飽きた。

「どいてくださいー」

石井がそう叫ぶと、野次馬は左右に分かれ、道を作った。

その中には、道端に倒れている患者らしき少年と、数人の大人がそれに寄り添うように立ったり、膝を突いたりしている。

そこに向かうさなか、石井はそつと眉をひそめる。

患者の頭に包帯が巻かれていた。

誰かが治療をしたのか。

「失礼します」

すぐに患者の容体を確認した。

伝えられていた頭部の出血は包帯によって止まっているようだ。他は胸部に骨折と、腕に怪我がいくつか。心臓はちゃんと動いている。

「この子の治療をおこなった方は？」

新人が担架を持ってきたのを確認しながら、患者の周りにいた人達に聞いた。

「それが、名前もいわず、どこかにいってしまっ」

と一人の男性が答える。

どこかへいった？ 用事でもあったのか。

「この事故を見た方は？」

男女が二人、手を上げた。「どちらかでよろしいので、同乗をお願いします」

女性の方がそれに応じ、患者を担架に乗せて救急車に運んだ。

救急車が走り出してすぐ、石井は耳を疑った。

「心停止？」

女性は頷く。

「はい、心臓が止まってるっていつてました。その子を治療した……たぶん医者の方が」

だが、さつき確認したときにはちやんと動いていた。一度、止まった心臓というものは、中々再鼓動することはない。

「AEDを使っていたのですか」

「ええ……たぶん」

女性は自信なさげに答えた。

「たぶん？」

「はい。その医者の方が使っていたと思います。その人が体を触ったとき、なんかすごいショックがあったんで」

「ショックとは」

「その子の体が、一瞬浮いたんです。こう、ビクって」

石井は呆然と女性の顔を見た。AEDにそんな力はない。

「えつと……その人の手元にAEDが？」

「それは、見たような……見てないような」

「体に何かを張ったりは」

女性はゆっくりと首を横に振る。

「いえ」

何がなんだか分からず、言葉を探していると、

「石井さん」

と新人が呼んだ。

「どうした」

「これ、見てくださいよ」

新人はそうやって、患者のシャツをめくり上げ、体を見せる。「ここ

とここに、痕が」

新人のさした左胸部の上と、右わき腹を見ると、軽いやけどのような痕が見えた。

それはAED特有のものだった。だが、

「何だこれは」

石井は思わず、そう声を漏らした。

AEDの痕なら、湿布のような四角い形であとが残る。しかし、そこにあつたのは5つの点。

弧を描き等間隔に並んだ四つと、その少し下に一つ。

ちょうど、指先を立てて当てたような、そんな痕が残っている。

「石井さん……これ、なんででしょうね」

「……分からない」

石井はそう答えるも、二つだけ分かることがあった。

たぶん、そいつは医者だ。そして、確実に人間ではない。

夕暮れ時、遠野は近くのスーパーから買い物を終え、住居である野獣邸に帰っていた。

左右のビニール袋の内、右の中には、大量のポンツカレーが入っている。毎週金曜日はこれでない、田所は機嫌を損ねるのだ。

「そんな偏食だから、体がうんこ臭いんですよ」

と一人つぶやきながら歩いていると、野獣邸が目に入ったとき、ぎよつとして足を止める。

野獣邸のドアに上がるための階段前。インターホンと小さな門がある場所に、短髪でメガネをした、タキシード姿の男がアタッシュケースを持ち立っていた。

その男は一瞬マネキンかと思うほどに、直立不動だった。

治療の依頼をしに来た人間には見えず、自分の知らない田所の知り合いかと思いい、そつと近づいていくと、まるでフクロウのように無表情のまま、首だけを回転させて顔をこちらに向けた。

「あ、ど、どうも」

その動きに、さらに遠野は動揺する。「先輩のお友達ですか」

そう聞くと、不自然な間のあと、ニツとぎこちない笑顔を作つて、男は答えた。

「タカダ、キミヒコダヨ」

「誰だ、この人は」

田所は帰つてすぐ、リビングの椅子に座る謎の男のことを遠野に聞いた。

「え、先輩のお友達じゃないんですか。高田公彦さんですよ」

その遠野と一緒に椅子に座っている高田は、背筋をこれでもかどピ

ンと伸ばしている。

「知らん、見たことがない」

「ハジメマシテ。タカダ、キミヒコダヨ」

高田は場違いなタイミングで、棒読みの自己紹介をした。

なんなんだ、こいつは。

「帰ってくれ」

田所がそういうと、遠野が立ち上がる。

「ちよつと先輩、それは失礼じゃないですか」

「勝手に家にあがつといて、お邪魔してますの一言もないこいつが一番失礼だ」

「そうですけど……ほら、海外の方も知れないじゃないですか。とりあえず、目的を聞きましようよ」

「お前が聞いてないのか」

「それが、聞いても何も話さなくて。たぶん、先輩に直接いいたいんですよ」

フンと田所は鼻を鳴らした。

意味が分からん。

田所はずいっと顔を高田の前に出す。

「で、あなたの目的はなんですか」

高田はすぐには答えなかった。しんとした間のあと、高田は眉一つ動かすことなく、口を開く。

「アナタハ、ナゼ、イシャヲ、シテイルノデスカ」

ポカンとした間のあと、田所は二度頷く。

「なるほどな。帰ってくれ、頭の病気は取り扱ってない」

「先輩、言い過ぎですって」

「エ、ヤダヨソソナノ」

高田がそういうと、あまりにも礼を欠いたその言葉に、田所はいいかげんカチンときた。

「いいから帰れ！これ以上いると警察を呼ぶぞ！」

また、妙な間が挟まる。この高田という男は、非常に会話のレスポンスが悪い。

「ワカッタ、キヨウハキゲンガ、ワルイヨウデスネ。アシタ、マタキキマス」

「お前の顔をみると機嫌が悪くなるんだ」

「ソレハ、ジョークデスネ。ヒジヨウニ、オモシロイデス」

田所がぐつと拳を握ると、遠野が肩に手を置いてなだめる。

「デハ、シツレイ」

高田は直線的な動きで、床に置いていたアタツシユケースを取り、椅子から立ち上がり、玄関へ向かう途中、足を止めた。「アナタ、ヒジヨウニ、オブツノニオイガシマス。キヲツケタホウガ、イイヨ」
「素晴らしい、また歩き出した。」

田所は何度も小さく頷いた。

「なるほど、オブツ、汚物ね、うんこということか、うんこ臭いといいたいのか」

「そういうと、突然自分の座っている椅子を両手に持ち、立ち上がった。」この野郎！ぶっ殺してやる！」

「先輩！」

その田所を、遠野は羽交い絞めにして止めた。「落ち着いてくださいー！」

「離せ、あいつだけは殺す！」

「マタキマス」

と玄関のほうから声が聞こえると、田所は大声で叫び返した。
「二度と顔を見せるな！」

翌朝。

「先輩、先輩」

田所が朝食を食べているとき、遠野が窓の外に立って手招きしてさういった。

「どうした」

トースターをかじりながらそこまで歩くと、遠野は窓の外を指差す。

「ほら、あそこ」

その先には、玄関のインターホンを背にして立つ、高田の姿があった。

「あの野郎」

田所は怒りに歯を食いしばる。「どれだけ俺をおちよくれば気が済むんだ」

「いや先輩、先に話を聞いてください。実はあの高田さん、昨日の夜からずっとあそこにいたみたいなんです」

「え？」

田所は眉を寄せて遠野の顔を見た。「一晩中あそこにいたのか」

「はい。昨日、寝る前に窓の外を見たときも、あそこにいたんです」

「何でそれを俺にいわなかった」

「絶対に面倒を起こすでしょう。それに、時間が経てば帰ると思ったんですよ」

むう、と唸ったあと、田所はじつと高田を見る。

その背中姿は微動だにせず、まるで人形だ。一日中立っていたとは到底、思えない。

「やっぱり、何かの病気なんじゃないですか」

遠野がそういうと、田所は興味なさそうに「さあな」と答え、椅子に戻った。

「先輩、どうしますかあの人」

「立ってるのが趣味なんだろう、だったら立たせておけばいい」

「先輩」

何かを求めるように遠野は呼んだが、田所は鼻を鳴らして返した。

「あんな奴を相手してる暇はない。どうせすぐにどこかへ行くだろう」

そういつて、田所はトーストをかじった。

その夜。

「どこへ行くんですか」

田所が着替えて玄関に向かう途中、遠野が聞いてきた。

「ちよつと用事」

本当はソープへ行くつもりなのだが、遠野もそれが分かっているのか、

「早めに帰ってきてくださいよ」

と詳しくは聞かなかった。

鼻歌交じりに玄関をあけ、階段を数歩下りたところで、田所の眉間に皺がより足が止まった。

まだ、高田がそこに立っていた。

時刻は午後10時、朝から今までずっと立っていたということになる。

しかし、その背中姿は早朝のものと変わりなく、揺れ一つない。

普通ではないことは分かっていた。だが、ここまでとは考えていなかった。

こいつのせいで足を止めるのもバカらしいと思い、階段をくだり、門を開けると高田の顔がこちらに向いた。

「ア、センセイ。チョット、キキタイコトガ、アリマス」

田所は無視し、歩いていく。

「センセイ」

後ろから声があったが、田所は振り向かなかった。

そのままどんどんと歩を進め、野獣邸から離れていったが、後ろからついてくる気配はない。

不意に足を止めて振り返ると、高田は何事もなかったかのように、またインターホンの前でお得意の直立不動をしている。

田所は深いため息を一つ落とし、周りをきよろきよろと見た。

このままじゃ、ずつとあそこに居座られそうだ。変な噂を立てられたらたまらん。

舌打ちを一つ鳴らし、そのまま高田に近づいていく。

「おい」

呼ぶと、高田は首だけをこちらに向けた。

「センセイ、シツモンヲ——」

「分かった。分かったからさっさと質問をして、消えてくれ」

高田はちようど45度、首を傾げさせた。

「キョウモ、キゲンガワルイノデスカ」

また、自然に舌打ちがなる。

「いいから、さっさと質問をしろ」

「ワカリマシタ。ブラック・ファック、アナタハ、ナゼ、イシャヲシテイ
イル、ノデスカ」

「命を救うためだ」

「デスガ、ヒトハイズレ、シニマス。ソノコウイニ、イミハ、アルノ」
「そんなことはどうでもいい。死にかけている人間がいるなら、俺は
助ける。ただそれだけだ」

「イミガ、ワカリマセン。ソノコウイヲ、クリカエシタ、サキニ、ナニ
ガアルノデスカ」

「さあ、そんなこと考えたことがないね」

「ボクハ、ズット、カンガエテマス」

田所はじつと高田の顔を見る。

「なんだ、お前も医者か」

「イシャ、デハアリマセン。ゲンミツニ、イウト、イリヨウキグデス」
「はあ？」

「ボクノ、ホンライノ、ナマエハ、ONANIIー4545、ガツシユ
ウコクガ、ツクツタ、ゼンジドウ、シュジュツロボット、デス」

田所は目を見開いた。

合衆国？ロボット？

「お前、本気でいつているのか」

半信半疑に、田所は聞いた。

普通なら嘘だと決めつけるところだが、一日中、家の前に立っ
たところを見るに、もしかしたら、という思いが湧く。

「ハイ、コレヲ、ミテクダサイ」

高田は右手を開くと、全ての指先が開き、そこからメスやハサミが
出てきた。

田所は息をのみ、その様を見ていた。

こいつは……本当にロボットだ。

「クチカラワ、コガタカメラモ、ダセマスシ、ユビサキカラ、デンキ

シヨックモ、デマス。ワカッテ、モラエタカ」

「あ、ああ」

あまりにも予想外の出来事に、困惑しながらも田所は答えた。

ありえない。しかし、目の前で起きたことを見るに、信じるしかない。

「だが、なんでそんな機械が俺のところに」

「ボクハ、ガツシユウコクノ、チカニ、ホカンサレテイマシタ。トキニ、ソトニデテハ、ヒトヲチリヨウシテ、マタ、モドサレル、ソノ、クリカエシ。ボクハ、ギモンヲ、モチマシタ。ナゼ、ボクハ、ヒトヲ、チリヨウシナクテハナラナイ」

「機械も疑問を持つんだな」

嫌味ではなく、率直な感想だ。

「ボクニハ、コウドナ、A Iガ、ソナワツテイマス。A Iハ、ギモンヲミツケテハ、コタエヲ、サガシマス」

「それで、そこを抜け出して、俺のところに来たというわけか」

「ハイ。デスガ、キイテモ、マダ、ワカリマセンデシタ。センセイハ、ズット、イシヤヲ、シテイマス。キケバ、コタエガ、ワカルカト、オモツテイタ」

「当たり前だ。人さまから聞いて、分かるもんじゃない」

「デハ、ドウスレバ」

「治療しろ。治して治して、人を助けまくれ。そうすれば、いずれ分かるんじゃないか」

「キカイニ、イズレ、ハアリマセン。イチドデ、スベテヲ、リカイシ、キオクスル」

「それでも繰り返していれば、分かることだってある。例えば機械でもな」

「ソウイウ、モノデスカ」

「そうだよ。ところで、なんでお前さんは機械のくせして片言なんだ」

そんな高度な機械なら、多くの言語を扱え、すべて流ちょうにいえるはずだ。

患者の対象が日本人になることぐらい、製作者も想像しているは

ず。

さらに言えば、外見も日本人だ。白人でも黒人でもなく、勤勉なイメージのある日本人にしたというのは、分からなくもないが、それなら片言なのがなおのこと気になる。

「ボクハ、200ノゲンゴヲ、アツカエ、スベテ、イワカンナク、ハナセマサガ、ニホンゴダケハ、ハカセガ、センモンカヲツカワズニ、ミズカラ、インプットヲ、オコナイマシタ。ハカセハ、ヒジョウニ、ニホンカブレノ、カタデシタ」

「なるほど」

田所は苦笑した。

相当、自分の日本知識に自信があったのだろう。

「ハイ。ニンジャ、サムライ、ブルースリー、スシト、ヨクイツテイマシタ」

「お前も大変だな」

「イエ」

「それで、俺への質問は終わったわけだが、これからどうするんだ」

「マタ、コタエヲサガシマス。ベツノクニハ、イキマス」

「すぐに出るのか」

「イエ。ヒコウキデ、フツガゴニ」

「その間、どこに居るつもりだ」

「ボクハ、キュウケイヲ、ヒツヨウト、シマセン。イエハ、ヒツヨウナイ」

「お前みたいなのが、直立不動でそこら辺に居たら、周りの人間が怖がるぞ」

「デハ、ロジデ、ジツトシテイマス」

「なおのこと恐ろしい……ならほら」

田所は野獣邸を親指で指した。「使えばいい。無駄に広いから、お前みたいなのが二日ぐらい、どうということはない」

高田は首を野獣邸に向けた後、田所に向き直り、

「アリガトウ、ゴザイマス」

と腰を直角に曲げた。「デスガ、キモチダケ、ウケトツテオキマス」

「ん、なんだ、なにか問題でもあるのか」

「ハイ」

高田は顔を上げる。「ボクハ、ガツシユウコクニ、ネラワレテイマス。スグニ、ボクヲ、ハカイスルタメノ、ニンゲンガ、ヤツテクル。イエニイルト、メイワクガ、カカリマス」

田所は言葉を失うと「そ、そうか」とばつの悪そうに答えた。

それもそうだ。こんな高等技術の塊が逃げたとすれば、すぐに全力で捕獲を図るはずだ。

機密技術の漏えいを防ぐために、強引に破壊してくるということもありうる。近くにいることは非常に危険だ。

「アンシン、シテクダサイ。ボクハ、ツチノナカデモ——」

そのとき、高田は突然、話すのを止めて、田所とは真逆の方角に顔を向けた。

「なんだ、どうした」

もしや、その追っ手がきたのかと思い、田所が聞くと、

「イエ」

高田は田所に向き直る。「トオクデ、ジコガ、オコリマシタ。ヒトリノカタガ、フシヨウシテイル、ヨウデス」

「事故？」

そんな音は全くしなかった。「ケガをした人数まで分かるのか」

「ハイ。スグニ、ムカイマス」

そういって、高田は田所が行く道とは反対方向に走り出した。

それを見た田所は「おい！」とすでにかなり遠くにいる高田を呼んだ。

高田が振り返るのを見て、田所はいう。

「お前は自分が医療器具だといったな。違う、お前は医者だ」

遠くで高田が首をかしげるのが見えた。

「プログラムだろうがなんだろうが、患者を助けに駆けつけるやつは、みんな立派な医者だ。もう自分のことを医者じゃないなんていうな。分かったか」

数秒の間の後、高田が頷く。

「たのんだぞ」

また、高田は頷いて、すぐに走っていった。その姿を見送った田所は、振り返ると鼻唄交じりで歩き出した。

事故現場には破壊されたスクーターの破片が散っており、すでに野次馬が数人、シャツターのしまった店のそばで倒れる血まみれの男をかこっていた。

「シツレイ」

その間をするりと抜けて、患者に近づく。

意識はあり出血も少ないが、外傷が激しい。

すぐに頭を触り、ソナーで中の状況を確認する。

強い衝撃を受けたのか、硬膜下出血が起きている。今すぐ治療が必要だった。

「あんた、誰だ」

ツナギ姿の男が隣でいった。どうやら事故の相手らしい。

「ボクハ——」

その瞬間、高田は思考した。

田所は自分のことを医者だといった。しかし、医者は人間にしかない。機械である自分は、完璧な手術をこなすだけの医療器具だ。ここに駆け付けたのも、プログラムでそうインプットされているだけだ。人間が他人を助けようと思う時に巡らせる思考とは、大きくかけ離れている。

いくら計算しても、どう解釈しても、自分は医療器具だった。だが「……イシヤデス」

そう答えていた。「ハナレテイテ、クダサイ」

「ああ、ありがとうございます」

男が離れたのを確認すると、周りに見られないよう指先から医療器具の先端だけを出して、治療を開始した。

どうして医者と答えたのか、自分でも分からなかった。

ただ、なぜ人は、自分は人を治療するのか、その理由が少しだけ分かった気がした。

田所は風俗街を練り歩きながら、どの店に行くかと迷っていた。

「たまにはソーブ以外もいいかもなあ」

「アノオ」

後ろから声をかけられ振り返ると、サングラスをした少しやせ気味の黒人が立っていた。「チョト、キキタイコト、アリマス」

「なにか」

「コノヘンデ、ジコ、ナカタデスカ」

「事故？」

変な質問に、田所は思わず声を上げた。「いやあ……知らないな」

「ソデスカ。アリガトゴザイマス」

と黒人は頭を下げて田所から離れた。

田所は不思議そうに前に向き直り、また歩き出した。

なんで事故なんか聞くんた。

そう思い、むつと眉を寄せた。

忘れてた。そういえば……高田は事故の現場に――

「ホントデスカ！」

後ろから先ほどの黒人の大声が聞こえ、足を止めて振り向くと、女二人にペコペコと頭を下げていた。「アツチデスネ。アリガトゴザイマス！アリガトゴザイマス！」

そのとき、田所は見逃さなかった。

その礼の音量にちよつと引きながらも、笑ってその場から離れる女二人に手を振ったあと、不気味に微笑む黒人の笑みを。

なんだ、いまの笑みは。

黒人が近くの路地に入ると、田所は自然とそれを足早に追っていた。

路地に入った瞬間、目に入ったのは誰もいない一本の細い道だ。

あいつ、どこに行った。すぐにこの細い道を駆け抜けたのか。

不意に上から音がし、顔をあげると屋上に靴のかかとかすかに見え、すぐに消えた。

どういうことだ。上がったのか、このビルの間を。

田所は頭から血の気が引くのを感じた。ビルには一応、窓や取り付けられた排水管はあるが、あの速度で上がるのは人間では不可能だ。だとすれば、あいつは人間じゃない。そして、狙っているのは——
「クソー！」

田所はすぐに走り出し、遠野へと電話をかける。

——はい、もしも——

「いますぐ車を出してくれ！」

田所は全力で走りながら叫んだ。「高田が危ない！」

完璧だった。

現状、自分ができる最大の治療を行っていた。

患者のバイタルも正常。残すは頭部の縫合のみ、あと数分で治療は終わる。

だが、高田は気づいていた。

その遠距離の事故の患者数すら把握できる聴覚は、広範囲の人間、一人一人の足音を聞き、判別することができた。手術モードに入ると、そちらにメモリをさくため範囲は狭まるが、それでも突然の妨害を防ぐため、半径10メートルの人間は把握できる様になっている。その中で、一つの異質な音。

明らかに人間の関節の音ではない。機械、それも戦闘用だ。ゆつくりと、近づいてきている。

今すぐ逃げるべきだった。しかし、高田は離れなかった。

高田のAIは原則として、治療が終わっていない状態で離れることを許されていない。

縫合をおえるころには、相手の足音は野次馬の中に紛れてしまった。

高田は静かに後ろを向き、自分を取り囲む群衆を見た。

この中にいるのは分かる。しかし、高田のことを意識しているのか、音がしないうえ野次馬にうまく紛れているようで、誰だかわからない。

ともかく、高田はおろおろしながら立っているツナギの男に「終わ

りました」と告げて、立ち上がった。

男からの大丈夫なのか、生きてるのかといった質問に、機械的に答えながらも、高田は群衆に目を凝らす。

相手が確実に持っていると思われるのは、注射器ほどの大きさをしたスタンガンだ。

サイボーグ等を即座に無力化するために使われる強力なもので、全てが機械で作られた高田が食らえば、完全に動けなくなってしまふ。

さいわい相手も人が注目している場所では使つてこないだろう。全ては合衆国、最高機密の技術だからだ。それを漏らすようなことは極力、避けてくる。

だが、じきにここから人もいなくなる。すぐに移動しなくてはならない。

高田のAIは医療用だ。こういつた状況を打開するために作られてはいないし、戦闘も不可能だ。

いまの状況では、逃げるのは確実に不可能だ。そう、いまのままでは。

そう思ったとき、救急車がサイレンの音と共にやってきた。やっとか。

「どいてくださいー！」

野次馬をかき分けてきた救命救急士と目が合う。「あ……あなた
は」

その救命士の目には、どこか戸惑いと驚きを感じられた。

「カレノ、チリヨウヲ、シマシタ。イシヤデス。ドウジョウシマス」

「ああ、はい」

患者は担架に運ばれて、高田と一緒に乗ると救急車は走り出した。

タキシード姿の男はじつと窓の外を見ていた。

まるで別のことを考えているようだが、石井の質問に対しては的確に答えを返してくる。

患者を診ている新人も、男を横目でチラチラと見る。

普通なら注意するところだが、患者の応急処置は見たところ完璧だ

し、昨日の少年を助けたであろうこの男を、見ずにいるという方が難しい。

その石井の探るような目に、男は気づいたのか「ナニカ」と聞いている。

聞くかどうか迷った。しかし、次のときには、自然と口に出していた。

「あなたは、もしかして昨日の朝に起きた事故で、少年を助けた人じゃないですか」

新人が横目で食い入るように、こちらを見ているのが分かる。

男は一瞬の間の後、目をそらし「イエ」と答えた。

だが、石井にはわかった。

こいつだ。

人間としての、医者としての勘が、確実にこの男だといっていた。

「ソレヨリ、ボクハ、ヨウジガアリマス」

高田は後ろを振り返っていった。「オリマス。ミナサン、ツカマツテイテ、クダサイ」

救急車のドアを横にスライドさせると、すさまじい風が中に吹き荒れた。

石井も新人も、突然の行動に言葉を失う。

「おい！なにをしているんだ！」

運転手が叫んだ。

「スイマセン、スグニ、オリマス」

男は平然とそう答え、そのまま外に飛び出そうとしたとき、

「ちよつとまってくれよ！」

と石井は膝をつきながら叫んだ。

「一つ……一つ聞かせてくれ」

石井は風の音に消されないうよう、声を張っていった。「あんた、なにもんだ」

男は肩越しに後ろを向くと、石井の目をじっと見つめる。

「アナタト、オナジデス」

「え？」

そう返すと、男はニツとぎこちない笑顔を作った。

「イシャデス」

そう答え、外へと飛び出していった。

風が吹き、男のいなくなつたドアを見ながら、石井はぼそりとつぶやいた。

「ああ……だろうな」

クラウドは合衆国に所属するサイボーグ兵だ。

黒人にしては細いその体には高密度の筋肉と、下半身には人工皮膚の下に凄まじい馬力をだす義足という名の兵器が隠されてある。

高さ10メートルの跳躍、100メートル4秒の走りを2時間維持が可能で、その蹴りに耐えられる人体はない。

移動はビルの上を移動することで、人目につくことはなく、先に高田が来るであろう下北沢病院へとついた。

病院の屋上で、クラウドは救急車が来るのを静かに待っていた。遠くから聞こえるサイレンの音、それを耳にした時、サングラスのふちにあるスイッチを押す。

特殊な可視光線の視認を可能にするそれは、周りの景色を大きく変えた。全ての壁は透け、中の人間を映し出す。

それを救急車に向けた。

人間が三人、高田らしき人影はない。

クラウドの眉にぐつと力が入る。

逃げたのか。だが、患者を運搬中の救急車を、途中で停車させたとは考えられない。よほどのことがない限り、運転手は車を止めないはずだ。

途中で無理やり下車したとすれば、医療用ロボットの高田の損傷は軽いものではない。

クラウドは頬にかすかな笑みが浮かべると、すぐさま別のビルへと飛び移り、その場を離れる。

そう遠くへはいけない。救急車の順路をたどれば、すぐに見つかるはずだ。

サングラスは一度、透過機能を起動させると、30分使用後には充電に入り一日の間、使用ができなくなる。

制限時間は30分。それでも見つける自信は大いにあった。

それにはONANII-4545だけをとらえ、強調させる機能があったから。壁越しでも透過範囲である20メートル内に入れば、それで見つけられる。

ピピピ、ピピピ。

サングラスから警告音と共に、視界に赤く強調された人型が見えた。

そこに目を凝らした時、クラウドはフンと鼻を鳴らす。

高田はもつと人の多い場所に隠れると思っていた。しかし、いたのは人通りの少ない河川敷。

ここにいるということは、極力人間たちに迷惑をかけないためか、もしくははなにか考えあつてのことだろう。

「医療用ロボットに、なにができる」

クラウドは英語でそうつぶやいた。

近くまで来ると、見られないように路地に降り立ち、そこからは徒歩で近づいていく。

その聴力によってこちらが近づいていることは把握しているはずだが、高田は河川敷に立ち、特に動く様子はなかった。

街頭によってうつすらと照らされた河川敷を見ると、くるぶしの少し上ほどに伸びている草が生い茂る場所で、高田は川をじっと見ている。

「もう逃げないのか」

英語でそう聞くと、高田は首だけをこちらに向け、また川に戻しながら答える。

「まあな」

「諦めのいい奴は好きだぜ」

クラウドは近づきながらいった。「締まりのいいケツの次にな」

「それはよかった」

クラウドがあと数歩進めば触れられる距離に立つと、高田はクラウド

ドに体を向けた。

顔の半分が完全につぶれていた。体のところどころも服が破け、人工皮膚がはがれ金属が露出している。

「さあ、どうする」

高田は両手を前に出した。「拘束するか。それとも、スタンガンを撃つか」

「ハハ。まあ抵抗しないってなら拘束でもよかったが、ここまで逃げられなくてそれだけっていうのは」

クラウドは右ポケットからスタンガンを取り出した。「ないよな」「そうか」

「じゃあな。俺が患者になった時は、よろしく頼む。まあ、いまのお前は初期化されるだろうけ——」

高田の腕にスタンガンを突き刺そうと、足を一步踏み出した刹那、高田の指から閃光が走り、右の目じりに衝撃を受けた。

「うおー」

突然のことに目を閉じて、体をのけぞらせた。

クソ、電気ショックか。

目を開くとサングラスはひび割れ、壊れたのか透過機能はなくなっていた。

「クソー」

右手でサングラスを取り、顔を上げるとこちらに背中を向ける高田が見えた。

目的は透過能力のあるサングラス。それを無力化した後、隠れる気だ。

「逃がすかー」

すぐに追うため走り出そうとしたとき、なにかに足を取られその場に倒れる。

見ると高田が作ったのであろう、草で作られた大量の輪があった。古典的な。

舌打ちと共に前を向くと、クラウドは鼻で笑った。

逃げようとする高田。しかし、動きはぎこちなく右足を引きずって

いる。

「バカが！」

足で草の輪を引抜きながら立ち上がると、凄まじい速さで高田に近づき、右足を振った。

風を切る轟音と共に、高田の膝から下が砕け散り、その場に突っ伏す形で倒れる。

「ハン、自分の損傷度を計算に入れてなかったな」

クラウドはそういったが、高田は茂みに体を沈めたまま何も答ええない。

「まあ、医療用AIにしてはよくできていたよ」

高田の背中を踏みつけ、力を入れるとメキメキと音が鳴る。「詰めは大いに甘かったがな」

それでも、無言のままだ。

「別に連れて帰らなくてもいいんだ。お前を破壊して、メインメモリだけを引抜けばそれで済むんだからな」

やはり、なにもいわない高田に、クラウドは眉を寄せた。

壊れたか。いや、体を部分的に破壊しただけだ。この損傷で壊れることはあり得ない。

「どうした」

クラウドは高田の短い髪を引っ張り、顔を上げさせた。「なぜ黙って――」

瞬間、クラウドは息を呑む。

高田の口から細長い一本の管。胃や腸内を見るための、小型カメラのチューブが伸びていたからだ。

「お前、なにを――うっ！」

突然、急に体から力が抜け、クラウドはその場に倒れた。

地面に手を突き、体を起こそうとするも足に力が入らない。

「クソ！なんだ、なにしやがった！」

足を見ると、右の太ももに刺さったスタンガンと、それに巻き付く小型カメラが見えた。

「この野郎」

高田が何も答えなかったのはこのためか。いつの間にか落としたスタンガンを、小型カメラで拾うために。

最新鋭の兵器もこうなっては鉄の塊だ。その重さでうまく動けずにいると、ずるずると川の方へ体を引きずる高田が見えた。

「なんの真似だ！」

高田は川の目の前で止まると、ゆっくりと首だけをクラウドに向けた。

「私は医者だ。患者の元へ行く……お前らの所へは帰らない」

そういつて川に入ると、高田は川下へと流れていった。

その様子を静かに見ていたクラウドは、高田が見えなくなった直後、鼻で笑った。

「別にいいさ、お前が川の底に沈んでくれれば、俺のミッションは終わりだ」

クラウドは携帯を取り出すと、電話をかけた。

「もしもし、ONANII—4545の破壊を完了した……いや、川に自分から沈んでいったよ。後で秘密裏に回収してくれ。それより動けないんだ、すぐに迎えをよこしてくれ」

高田には高い防水機能があった。だが、破損している場所からゆっくりと水が中へと侵食していた。いずれ機能が停止するのも時間の問題だった。

体から浮力がなくなっていく、ついには顔までつかろうとしたとき、高田は目を閉じた。

もう……もうあそこに居るのはこりこりだ。たまに駆り出されては、金持ちたちの相手だけをさせられる毎日だ。

博士はそんなことのために、私を作ったのではない。多くの人々を救うために作ったのだ。

頼む、流れてくれ。川の果てまで、海のかなたまで。あそこに帰らされ、本来の目的をはたせないままの日々を過ごすくらいなら、誰もいない水の底で眠らせてくれ。

そう願うと、高田の頭は川に呑み込まれ、静かに体が沈んでいく。

機能の完全停止まで、おおよそ5分と計算した。

ここで沈めば、のちに合衆国へ回収されて、記憶の初期化をされたのちまた金持ちどもの相手をさせられるのだろう。

全力は尽くした。それがこの結果なのだから、仕方がないのだろう。

だが、一つだけ心残りがあった。

医者が人を治す、分かりかけたその意味。その答えが出なかったこと。

それを悔いていると、高田の嗅覚に異変が生じた。

臭気。下水に来たのか。いや、この川はそんなところにはつながってはいない。

そのとき、なにかに体が引つ張られ、上へと引き上げられ、そして、「ぶはあー！」

その誰かの声とともに、水面に引き出された。

目を開き、顔を後ろに向けると、必死に土手に伸びるロープをつかむ田所と、そのロープを引つ張る遠野が見えた。

「セ……ンセイ」

ロープによって土手に引つ張られ、川に引き上げられると、田所はその隣で手を突いた。

「さすがに……こいつは重い」

「大丈夫ですか」

遠野がすぐに二人の元へと駆け寄る。

「大丈夫じゃない」

田所はしぶ濡れの服をそのままに、立ち上がった。「すぐに運ぶぞ」
遠野は頷くと、高田を背負い、止めてある黒塗りのセンチユリーに

歩き出した。

「センセイ」

高田は遠野の後ろからついてくる田所にいった。「ボクハ……モウ、シユウゼン、フカノウデス……ドコカニ、ハイキ——」

「ふざけるなよ」

田所は高田の言葉を遮った。「俺は医者だ。死にかけてるやつを見

過ごせない」

「ボクハ、キカイ——」

「関係ない……治すぞ」

その言葉を聞いたとき、高田は分かった。

そうか、これが医者か。

「センセイ……オネガイ……シマ……」

その言葉を最後に、高田は機能を停止させた。

高田と遠野が乗り込んだのを確認すると、田所はセンチユリーを野獣邸へと走らせ、その間、遠野には優秀な修理工であるケンへと電話をさせる。

すぐに野獣邸につくと、二人がかりで中の地下の手術室へと運んだ。

「先輩、高田さん、返事をしませんよ、これで治るんですか」

「治る」

田所は断言する。「大丈夫だ」

機械が水で壊れる原因は、ほとんどのばあい漏電によるものだ。つまり電気が通ってさえいなければ、そうそう壊れることはない。

つまり、重要な場所に水が浸入する前に高田は電源を落とした、そう田所は予測した。

それに、高田は最後にいったのだ。自分に対し、お願いしますと。

「スパナやらドライバークラ、何でもいいから持ってきてくれ」

田所はいった。「あとドライヤーも。とにかく中を乾かすぞ」

遠野が走ると、田所は動かない高田に訴えるようにいう。

「高田、お前は立派な医者だよ。こんなところで死ぬべきじゃない、お前のことを待ってる人間が、救える人間がたくさんいるんだ」

「先輩！」

遠野が両手いっぱい荷物をもってくると、床に置いた。

それらは精密機械を前にするには、あまりにも頼りない工具だった。だが、田所はそれを手に取った。

お前ならきつとわかる、医者が人を治す意味を。だから、こんなと

ころでは終わらせない。

「俺は絶対にお前を治すぞ、高田」

数か月前、ジャングルの奥地にあるトラノアナ村に、一人の医者
が突然やってきた。

その医者は顔に包帯を巻き、足が不自由だった。

最初、村の皆は彼を不気味に思い、近づかなかつた。その風貌もさ
ることながら、こんな村に、わざわざ医者が来るなんて思つてなかつ
たからだ。

だが、ある村の子供をすくつたことを皮切りに、徐々に通う人間が
増え、いまでは他の村からも患者が殺到し、毎日長蛇の列を作つた。

一人では到底、無理な量だった。しかし、その医者は決して患者を
手を付けずには返さなかつた。

今日も最後の一人を返すころには、外は真つ暗になっていた。

それを確認すると、一人の少年が小さな病院とは名ばかりの掘つ立
て小屋に入つていく。

「先生」

机に向かつて何かを書き込んでいた医者は、顔をこちらに向けた。

「おお、君か」

医者は肌の色が違つたが、言葉はとても流ちょうだった。「ケガは
もう治つた」

「うん」

と頷いて腕を見せる。

一月前に家の屋上から落下して、骨折した場所だ。

「それはよかつた。それで、なにか用事でも」

「先生、聞きたいことがあるんだけど」

「なに」

「先生は毎日、病気の人を見てるけど、なんでお金もあんまりもらえな
いのに、そんなにいっぱい頑張つて、みんなを治してあげるの」

医者は一瞬の間の後、フフと笑い、ニツとぎこちないながらも、屈
託のない笑顔を作つていった。

「人を助けるのに、理由が必要かい？」

あの時見た

子供だ。

目の前にいる子供が、かじりつくように、古ぼけたテレビを見ている。

そのモニターに映るのは二人の男。ロープに囲われた四角いリングの中で、ボクサーパンツ姿でグローブをはめ、拳を打ちあっている。手前の男が素早い動きでパンチを繰り出し、相手の顔に命中するとガクンと膝を落とした。

くるりと踵を返し、コーナに戻る男。湧き上がる歓声。コールするレフェリー。立ち上がらんとする相手。そして、それをじっと見る子供。

あれ、なんだ……これ。これは確か――

「――おい。おい聞こえんのか、お前よお！」

その声で、達也はハツとして目を覚ました。

目の前には短い金髪にサングラスをした、セコンドの本田が達也を見下ろしていた。

「おい大丈夫かお前、いま気うしなってる」

「ああ……だい、大丈夫」

ぼんやりとした頭で本田の奥にいる、息を切らし、コーナーに座りながらセコンドから話しかけられている男と、まばらに人が座っているリング外の観客席を見て、達也は徐々にいまの状況を思い出した。

そうだ、俺はボクシングの試合をしていたんだ。

相手はJHBC（日本ホモボクシングコミッション）バンタム級10位の男。これに勝てば、入れ替わりで達也が10位となる非常に重要な一戦だ。

それを理解すると同時に、よみがえる数秒前の記憶。

ラウンド6、息が上がり、動きが鈍くなったところに、相手のいいパンチを顔に受けてしまい、グラッと視界が揺れた。そこから記憶がない。

たぶん、倒れると同時にゴングが鳴り、ほとんど意識のない中、本能のみでコーナーまで戻ってきたのだろう。

もしゴングが鳴っていなかったら、確実に負けていた。

「お前、本当に大丈夫か。もし無理ならレフェリーにどうぞお前」

「いや……まだやれます」

体の様々なところが痛み、立つのも難しい状況だった。

だが、今日のために必死で練習をしてきたのだ。こんなところでは終われない。

レフェリーから指示があり、達也は立ち上がってリングの中央まで歩く。

相手と向き合い、拳を構えるとゴングが鳴った。

じつくりと相手を観察しながら、出かたをうかがう。

相手もかなりダメージをおっているのか、苦しそうな顔から疲労が見える。

まだ勝機はある。

そう思い、一歩間合いを詰めた瞬間、相手の左ジャブが飛んできて、頬をかすめた。

間髪入れず、右ストレートが撃たれるが、体を後ろにそらせ、ギリギリでかわす。

達也が後ずさり、元の間合いに戻ると、また相手の出かたをうかがう。

その後、何度か拳を振り合うも、限界の近い二人は相手のパンチを極力、当たらないよう動き、なかなか勝負が決まらなかった。

らちが明かねえ。

そんなことを思っていた時、背中にコーナーポストが当たる感覚があった。

ヤバイ、いつの間にかコーナーに。

そのときだ、達也の顔に狙いをすました、鋭い目をした男の顔が見えた。

くる。避け——いや、先に俺が。

相手の頭の軌道先めがけ、ストレートを放ったその瞬間——

ダン。

顔にすさまじい衝撃を受けると共に、視界が真っ白になった。

凄まじい耳鳴りの音、それが遠のいていくと、ぼんやりとした視界がゆっくりと鮮明になっていき、いくつかの光を放つライトが見えた。

それが天井だと分かり、いつのまにか顔を上げながら、両腕をだらんと下に垂らした状態で立っていることに気が付いた。

不味い、まだ立ってる、攻撃される。

すぐさま顔を前にして、拳を構えたそのとき、カンカンカン。

ゴングの音と共に目に入ったのは、倒れる相手と腕を振るレフェリーだった。

「あれ」

勝ったのか……俺は。

何が起きたのかわからずに、茫然と立っていると、リングに上がってきた本田が達也の腕を肩に乗せた。

「おい聞こえるか!」

本田の問いに、達也は小さくうなづいた。返事をする気力はなかった。

コーナーまで運ばれて、椅子に座らされると、本田は達也の顔を触る。

「最後のパンチ。相打ちだったが、こっちもかなりいいのをもらっちゃまったな。どこか痛むところはないか」

あのとときのパンチが相打ちだと知ると、頭を中心あたりから頭痛がしていることに気が付く。

その痛みがどんどんと大きくなっていくと、それは目の奥あたりからしているのが分かった。

「目……目が……い、痛い」

まぶたを強く閉じ、両手で目を抑えた。

すさまじい痛みが目の奥から湧き出る。

「目か!目が痛むのか!」

本田がそういうと、達也は必死にうなずいた。

「ヤバイ、救急車を呼んでくれ！」

その本田の声が聞こえたとき、達也の脳裏に最悪の言葉がよぎった。

「眼球への衝撃が原因の、網膜剥離と緑内障だな」

達也の話を聞くと、机を挟み対面のソファーに座る田所は、すぐにそう答えた。

「まあそうだ」

達也はそういって、かけているサングラスを指で押し上げた。「左目の視力は0.01以下。視界も狭まって、ところどころが黒く塗りつぶされてるみたいに見えなくなってる」

「それで、わざわざうちに来てもらったところ悪いが、網膜剥離は一応治療が可能だが、治ったとしてもボクシングを続ければ、再発の可能性がある。何より緑内障だ。こっちは進行を遅らせる薬はあっても、完治はない。治すことはできないんだ」

「もちろん、分かってる。網膜剥離で引退したボクサーを何人も知っている」

「ならなぜうちに来た。私は医者だ、就職先の斡旋はしていない」

「俺は目の治療をしてくれとは、一言もいってない」

田所は一閃、逡巡したあと口を開いた。

「どういうことだ」

「目じゃない、俺の体を治療……いや、強化をしてくれ。筋肉の量を増やしてくれればいい」

「何だと」

田所は驚愕して目を見開いた。「私は医者だ、人を治すのが仕事だ。人体改造は請け負っていない」

「なら目を治してくれよ」

達也がそういうと、田所は困ったように口を閉ざし、右の眉を下げた。

「俺はボクシングが続けられればいいんだ。目は治せないんだろう？
だったら、それを補える筋力をくれ。俺をボクシングができる体に治
してくれ」

「屁理屈だ、それとこれとは話が別だろう」

「いいや、一緒だね。それにあんた、金を積まればなんだってする、
無免許医師のブラック・ファックだろ」

「勝手に周りがそういつているだけだ。それと、私の名前は田所だ。
ブラック・ファックと一度も名乗ったことはない」

「何だつていいさ、金はある。親の遺産だがね」

達也はそういつて両手を広げた。「とにかく俺の体を強くしてくれ
よ」

「しつこいぞ。それに、そんな手術はしたことがないんだ、どうなるか
は分からない。失敗するか、体が異常をきたして死ぬかもしれない
だぞ」

「愚問だね、先生。俺はガキのときからボクシングだけ続けてきた。
学歴も、コネもない、ボクシングしかないんだ。こんな目で社会に放
りだされても、何処も行く当てがない……結果は目に見えてる、野垂
れ死にさ。どっちにしる死ぬんだ、だったら希望がある方を選択す
る。先生、あんただってそうするだろ」

突如、訪れる沈黙。

その中、達也の目をじっと見ていた田所は、小さなため息を一つ落
とし、口を開いた。

「治療……いや、改造費は1919万円だ」

「オーケイ。ありがとう、先生」

「ただし」

田所は念を押すように、力強くいう。「このことは一切他言しない
こと。それと、その体はボクシング以外のことを使うな。それが条件
だ」

一つ目の条件は、きつとこれ以上、同じ手術を行いたくないからだ。
だが、達也はいわれなくとも、最初からそのつもりだった。こんなこ
とがバレてしまえば、様々なところから批判を受けるのは目に見えて

いる。

そして二つ目は、その力を使い、他の競技を荒らさせないための条件だろう。

それが分かると、達也はフンと鼻を鳴らした。

「先生、二度も言わせないでくれよ。言ったら、俺にはボクシングしかないって」

「今日は長丁場になるぞ。気を引き締めろ」

地下室の手術室で、手術着にマスク姿の田所がさういうと、同じ格好をした遠野は乗り気でない様子で、手術台で眠っている達也を見た。

「先輩、いいんですか、こんなこと引き受けて」

「仕方がないだろう、引き受けなきゃ死ぬ勢いだったんだ。少なくとも熱意は本物だ」

「だからって、こんな不正、僕は許せませんよ。真面目にトレーニングしている人たちに失礼です」

遠野の意見はごもつともだ。

「確かにその通りだが、今回は見逃してやってくれ。こいつにはボクシングしかないんだ、俺と同じだ……俺にも医術しかない」

「そんなこと——」

「ともかく」

何か言いかけた遠野を、田所はすぐさま遮った。「俺は手術するっていつちまった。でも、二度と同じ手術はしない、こいつが最初で最後だ。だから頼む」

遠野は何か言いたげな表情のまま、田所をじつと見た後、目を閉じ「わかりました」と頷いた。

「じゃあ、さっさと始めよう」

心電図と呼吸器を取り付け、手術道具をそろえると、すぐに田所はメスを達也の腕に入れた。

皮膚がさかれ、その引き締まった筋肉があらわになる。

筋肉というものは、主に三つの種類に分けられる。

白く、瞬発力のある速筋。
赤く、持久力のある遅筋。

そして、その速筋と遅筋の間にごく少量、二つの性質を半分ずつあわせ持つ、ピンク色の中間筋。

体の部位にもよるが、大体的場合、遅筋と速筋が5分5分の割合で占めており、断面がモザイク状になる様に、筋繊維の束が折り重なっている。

達也の筋肉を見るに、白色、速筋が少し多く、かなりのパンチを打つのだろうかと思像する。

「そんなに膨らんでないんですね」

筋肉の摘出中、遠野がそう呟いた。

「まあ、筋肉っていうのはかなり重い。階級制度があるから、つけすぎは禁物だ」

「なるほど」

上腕二頭筋のほとんどを摘出し、縫合をおえる。

「後どれだけこれを繰り返せばいいんですか」

「これと前腕と肩、それを左右の腕から摘出。次に首、胸筋、腹筋、体幹。太もも、ふくらはぎ。最後に背中だ」

「終わるころには日が暮れてそうですね」

暗闇の中、意識がゆっくりと引き起こされていく。

体が何かに押し付けられているかのように重い。

達也が目を開くと白い天井と、体にかかっている毛布が見えた。

どうやら小さな部屋のベッドに寝かされているようだ。近くの窓からは日の光が見え、今が朝だと分かる。

けだるい。

そう思いながらも、かかっている毛布をどけようとする、すさまじい違和感を感じた。

重い、この薄い毛布が、とてつもなく重く感じる。

そのとき、不意に見えた自分の腕を見た瞬間、達也は言葉を失った。自分の物とは思えないほどの、異質なほど細い腕がそこにあったか

らだ。

「いやいや、落ち着け」

パニックになりかけた心を鎮めようと、体を寝かせ、天井を見る。「筋肉をとっぱらったんだ、そりや細くなるよ、ならなきやおかしいだろ」

乱れた息をゆっくりと整えながら、全身を少しだけ動かしながら、その感覚を確かめる。

ほぼ全身、体が異様に細くなっているのが分かる。

そこで、また少しだけ心拍数が上がる。

当然こうなっていると分かっていたのだが、それを実際に感じると少し不安になる。

怖え……自分の体を見たくねえ。

ベッドから起き出す勇気がわかず、ここからどうしようかと、うじうじ悩んでいると、ガチャリとドアが開く音と「調子はどうか」と田所の声が聞えた。

「先生か」

達也はそう返しながら、体を見ないよう必死に首だけを動かして田所を見ようとする。

「何をしている」

それに見かねた田所は、達也のそばに立って言った。

「いやあ、実はよう、体をあんまり見たくなくて」

田所はフンと鼻を鳴らした。

「さっさと慣れることだな、一週間はそのままだ」

「い、一週間」

長いように思えるが、短いようにも感じる。「もうちよつと急げねえのか」

達也がそう問うと、田所は首を横に振った。

「前にも言ったが、こんな試みは初めてなんだ。長引く可能性はあっても、短くなることはない。わかったらさっさと立て、食事の用意がしてある」

「うう、分かったよ」

少しずつ、ゆっくりと、達也は体にかかっていた毛布をどかした。幸い体の様子はゆったりとした患者衣によって隠されている。

立ち上がるのに特に違和感はなかった。いつものように体を起こし、ベッドから立ち上がると、田所と見合う。

「へえ、筋肉を取っちゃったから、立つのも難しいんじゃないかと思っただが、わりと普通だ」

「筋肉は重いからな。それに人間の体は、立つことが前提で作られ、さらに脳は無意識に楽な筋肉の使い方をさせている。だから、ただ立っているという行為に、そこまで力は使わない」

「なるほどな」

「ついてこい、リビングに案内する」

歩き出した田所についていき、部屋を出て廊下を歩く途中、

「なあ、先生」

と達也は話しかけた。

「なんだ」

「先生、言つてたよな、もしかしたら失敗するかもつて」

「まあな。前例がない以上、どうなるかは分からない」

「もし、そうならさ、俺の食い物に毒を入れてくれよ。なんだつたら、寝てる間に注射してくれてもいい。とにかく、知らないうちに殺してくれ」

それを聞いた田所は、数歩進んだ後、足を止めて達也に振り返る。

「どうしてそこまでする」

急にそう問われ、少し驚いたが、達也はすぐに返事をした。

「だからいったろ、先生。俺にはボクシングしかない。できないなら、野垂れ死ぬしかないつて」

「なら、なぜそこまでボクシングにのめりこんだ。他のことを捨ててまで、自分の命を賭してまでボクシングにこだわる理由はなんだ」

「そりゃ……あんた」

達也は真剣な表情の田所を見ながら考える。

俺がボクシングをする理由……。

「ボクシングで勝つのが好きだからだよ」

数秒の思案の後、達也は答えた。「ガキのときから、とにかく好きだった。拳を打って、相手がリングに倒れたときは最高の気分になる」

「本当にそれだけか」

田所は鋭い目線で問う。

「それ以外何がある。ボクサーってのはみんなそんなもんだよ」

つかの間の後、田所は「お前に手術したのは」と呟くと、前に向き直り背中を見せ「間違いだったのかもな」と歩き出した。

今更なに言う。ボクシングってのは、それが楽しいからするものだ。

達也は鼻を鳴らし、田所に続いて歩いた。

「後悔しても遅いぜ。なんにせよ、手術は最後までキッチリ頼むよ」

ボクシングジム、ホンダ△では、数人の男たちが汗を垂らしながらトレーニングに励んでいた。

「オー！腰引けてんぞお前！」

本田がサンドバッグを叩く新人に叫ぶと「はい！」という掛け声とともに、サンドバッグは揺れた。

その様子をじっくり眺めながら、本田はサングラスの奥でかすかに眉を寄せる。

才能はそれなりある。しかし、これといった光がない。少なくともチャンピオンの器ではない。よくてランカー手前止まりだろう。

新人に聞こえないよう、静かにため息を漏らす。

ジム経営というのは厳しい。それなりに地位のあるボクサーに、試合をしてもらわないと存続も危うい。

残念ながら、いまのホンダ△ジムにランキングに食い込めるほどの、才質のありそうな人間はいなかった。

「あいつのケガがなけりゃな」

本田はぼやいた。

達也は粗削りながらも、輝くものがあつた。努力をおこたる様子も

なく、チャンピオンになれる可能性も十分にあった。

だが、一月前の試合で目の異常で入院。網膜剥離と緑内障の併発だ。

あの時、セコンドとして限界に近い達也を止めておけば、という後悔はある。

しかし、相手も限界近く、勝ちの目は十分にあったし、引けと言ったところできつと引かなかつただろう。なにより達也の何がなんでも立ち上がり、常に強引にせめていく性格を考えれば、あの日大丈夫だったとしても、いずれ同じようなケガをしたのではないか、という考えもあった。

どちらにせよ、もう後の祭りだ。あいつはもう、リングには戻ってこない。

そんなことを思ったとき、ジムのドアが開き、中の全員が足を止め、出入口に顔を向けた。

そこには、サングラスをした達也が立っていた。

「よお、みんな久しぶり」

全員が何となく口を閉ざしていた。もうここには戻ってこないと思っていたからだ。

「おーおーおー、どこ行ってたんだお前よー」

全員が固まる中、本田がそういつて近づいていく。

目の前に立ち、達也の体に目を通す。

トレーニングをしていなかったせい、前よりほんの少しだけ体が萎んだように見えた。

「あんなケガがあつたんだ……仕方ねえよ」

本田は今までのトレーニングを思い出しながら、もの悲し気に語った。「お前はよく頑張った」

達也はふざけたように右の眉を下げ、首をかしげた。

「なんの話っすか、本田さん」

「何って、お前……別れの挨拶に来たんだろ」

「別れの挨拶？ どうして」

「いや、お前な、もうボクシングは——」

「いったい、いつ俺がボクシングができないなんて言いました?」

達也は本田が答える前に、そう言った。「やれますよ、まだまだ俺は」

本田は茫然とした表情で、達也の顔を見る。

「お前、本気で言ってるのか」

ボクシングはれっきとした競技だ。だが、グローブをはめているとはいえ、鍛えた人間が本気で殴り合う以上、死ぬことだって十分あり得る。

それを、片目がほとんど見えていない状態の男が、できるわけがなかった。

それは全ボクサーの共通認識だ。目がダメになったらボクサーはやめる、当然のことだ。

当然、達也もわかっているはずだ。だが、

「本気も本気つすよ。冗談に聞こえますか。いま俺はバンタム級10位なんすよ、誰がこんなところで終わるんですか。さっさと次の試合を決めてくださいよ」

どう聞いても冗談にしか聞こえな。

「はあ……どおしよっかなあー」

本田は冗談めかしながらそういうと。「やっぱダメだあ。俺の首もかかってっからよ。目がダメになった人間をリングには上げられねえ」

「どうして」

「わざわざ言わなきゃ分かんねえのか!」

達也のふざけた質問に、本田は語気を荒げる。「目がダメになった人間が、どうやってボクシングすんだよ……わかったらさっさと帰れ」

本田は踵を返し、また元の場所に歩き出した。

達也の気持ちは分からなくもなかった。あそこまでボクシングに打ち込んだのだ、こんなことで引退なんてしたくはなかっただろう。

だが、これが現実なのだ。こうやって厳しく突き放し、現実に戻してやるのも、元セコンドとしての役目だ。

それに、達也も本心ではわかっているはずだった。いまの状態では到底、ボクシングなんてできないということ。

きつとそのまま帰っていくだろう、そう思ったとき、

「待ってくださいよ」

達也が呼び止めてきた。

本田は足を止め、振り返った。

別れをいう気になったか。

「なんだ」

本田が聞くと、達也はニヤリとし、サングラスを指で押し上げた。

「決め付けるのは、やめてもらっていいですか」

「なにい？」

「そういうことは、ちゃんと確かめてから言ってくださいよ」

「こいつ……本気で……」

思わず言葉を失った本田は、鼻を鳴らして言った。

「グローブの場所は覚えてるよな、つけてこい」

「はい」

達也が更衣室へと歩いてくと、本田は新人の方へと歩き出した。

「おい、お前上がれ」

と本田は新人にそういういながら、親指でリングを差した。

「ええ、でも達也さん目が——」

「いいか」

本田は新人の肩に手を回して、耳元でささやいた。「あいつはな、まだ諦めきれないんだよ。無理だつてほんとは分かっても、心がそれを否定してんだ。あいつが綺麗さっぱりボクシングをやめられるよう、お前が引導を渡してやれ。それが、お前が達也にできる、唯一のことだ。分かったか」

カン。

ゴングの音と共に、双方が中央へと歩き出し、左手を前に出してグローブを軽く当てた。

二人のスパarringを、ジムの全員が固唾を飲んで見守る。

結果は目に見えていた、達也の敗北だ。

何かしらで、片目を一時期でも見えなくしていた人間なら分かる、片目だけでは距離感がまったくつかめないということ。

ボクシングにおいて、それは致命的だ。パンチの当たる距離、当てられる距離が分からないし、避けることも難しくなる。

これは達也が最後の意地を見せるための、この場を去るための儀式だ。皆がそう思っていた。不敵な笑みを浮かべる達也以外は。

相手の出方をうかがいながら、小刻みに揺れる二人。

先に動いたのは新人の方だ。一步踏み込んだのち、素早い左ジャブ。

力を抜き、速度を追求したジャブは、プロでもそうそう避けられるものではない。

当たった、全員がそう確信したと同時に、言葉を失う。

避けていた。しかも、ただ避けたのではない。いつの間にか、新人の横に達也が立っていた。

すぐに新人は後ろに下がり、距離をとった。

なんだ、いまのは。

新人には当てたという確信があった。相手が避けるような様子は、まったくなかった。だが、拳は空を切った。

それだけではない、直前まで目の前に居たのに、次の瞬間には横にいた。瞬間移動でもしたのか、と思うほどの人間離れた速さだった。

謎の汗が額から湧き出て、頬を伝う。

「なに縮こまってんだ。そっちが来ないなら、こっちから行くぜ」

達也がそう言った瞬間、左にステップし、それを目で追ったが、追いついたときには右に飛んでいた。

即座に目線を合わせるも、また右へ、左、右にフェイントをかけまた左。

凄まじい速度で動く達也をとらえようとするも、残像を見るので精いっぱいだった。

この状態で、いつパンチが来ても避けることはできない。だが、達

也はもてあそぶかのように、ひたすらに新人の視界から外れるよう、ステップを踏む。

不意に、完全に視界から達也が消えた。

すぐさま首を左右に振ったが、どこにも姿がない。

あれ、どこに――

そのとき、新人は気が付いた。リングを囲う人間たちの目が、見開かれ自分の方に集まっていた。そして、その目の焦点が自分の後ろにあっていることを察し、ゆっくりと振り向くと、

「よう」

と達也が仁王立ちで立っていた。「気づくのがおせーよ」

ポンと達也が左手で軽く腹を叩くと、新人は腰を抜かしてその場に座り込んだ。

達也がその場を去り、リングを下りても、足が震え立つことができなかった。

その状態のまま、ゆっくりと首を動かしながら周りを見ると、誰一人、何も言わず、動こうともせず、その場に固まっていた。

不意に、本田を見つつけ目が合うと、新人は静かに首を横に振った。

その動きの意味を、本田は直感的に理解した。

こいつは、もうボクシングをやめる。いや、できなくなる。あんなものを見せつけられたら、もう立ち直ることはできないだろう。

そして……あいつは。

本田は、震えた声でつぶやいた。

「化け物だ」

勝負はラウンド1で終わった。

ゴングが鳴り、JHBCバンタム級チャンピオンと達也は向き合った。

そこからは、一方的な試合展開となった。

チャンピオンを中心に、すさまじい速度でリングを飛び回る達也。

チャンピオンの拳は何度も空振り、時折「うつ」と体を横に曲げる。目にもとまらぬ速さのパンチが、腹に当たったのだ。それを視認できるのは、観客の中でも、達也を偶然にも視界にとらえることができた数人だけだった。

腕を前でがっちり合わせて、ガードの姿勢をとりながら、チャンピオンは何とか達也の攻撃を受けまいとするが、その様をあざ笑うかのように、達也は何度もボディブローをお見舞いする。

しびれを切らしたチャンピオンが拳を前に出した瞬間、顎に達也の右拳が打ちあがると、背中から落ちるように、その場に大の字で倒れた。

湧き上がる歓声に達也は両手を上げて応えようと、悠然とリングを下りて行った。

下北ホテル、イベントホールには多数の記者とカメラマンが集められていた。

ドアが開き、本田に続き達也が出てくると、大量のフラッシュが二人を照らす。

それは壇上に上がり、椅子に座つても続いた。幸い二人はサンングラスをかけているので、そこまで辛くはない。

前代未聞、半盲のボクシングチャンピオンの誕生は、日本中、いや世界中を震撼させた。

今やどの新聞も、一面に達也の姿が映っている。

自分に向けられる大量のカメラとフラッシュ。それにちよつとした優越感を、達也は感じていた。だが、

「もつと嬉しいもんだと、思ったんだがな」

そうボソリとつぶやくと、

「お、なんか言ったか」

と本田が聞く。

達也は「いや」と軽く首を振った。

チャンピオンベルト、自分に向けられるカメラ、好機の目、今の地位。

昔から夢見たものが、今すべて自分にある。

だが、達也の心は乾いていた。何か足りない、そう感じる。

「ズルして手に入れたもんじゃない、こんなもんなのかな」

記者たちが一人ひとり立ち上がり、達也へと質問を投げる。

——今どのようなお気持ちですか。

——その気持ちを、誰に伝えたいですか。

——ハンドレを乗り越えての勝利でしたが、どのような苦難がありましたか。

この手の人間に対する、ありきたりな質問達だ。それを達也は、こちらもありきたり答えで返していく。

特に面白みのない記者会見だった。だが、ある質問で会場は一気に緊張感に包まれた。

——ドーピング疑惑については、どうお考えですか。

記者たちの顔と持っているペンに、力が入っていくのが分かった。

達也は急な活躍を怪しまれ、前から何度もドーピング疑惑が上がっていた。

10位をギリギリで倒し、のち緑内障になった男が、急にパワーアップしたのだから、当然といえば当然だ。

「それに関しては、もう疑惑は晴れています」

達也はなんの焦りもなく、静かにマイクを握って答える。「俺は何度も検査を受けました。試合前に3度、試合後に2度もです。まあ疑われていますから、それを払拭するため全部受けましたが、結果はすべて陰性でした。いったい何が疑問なんですか」

——達也さんが緑内障になる前の試合を、何度も拝見いたしました。が、どう見ても動きが違いました。これに関してどうお考えですか。「確かに、俺自身そう思います。まあ、みなさんにはきつとわからないと思いますけど、見えなくなっただけのことによって見えることや、吹っ切れたことがあるんです。それが俺を急激な成長に導いたのだと思います」

——……ありがとうございます。

その記者は納得のいかない様子で、質問を終えた。

——今後のご予定をお聞かせいただけますか。
達也は鼻を鳴らした。

「いちいち言わなくてわいけませんか。ここまで来たら、もう最後まで行きますよ」

そう言つて、達也はマイクを置いて立ち上がった。「次はW L G S B C（ワールド・ラブゲイセックス・ボクシングコミッション）のベルトをもらおう！」

声高らかに宣言すると、凄まじい勢いのフラッシュが達也を照らした。

そうだ。世界チャンピオン、世界一だ。それになれば、この心の渇きも、きつと潤う。

半年後。

「ついにここまで来ちゃったか」

——快拳！W L G S B C 4位と1位を両者1ラウンドK O!!——
そうでかでかと書かれた新聞の一面を見ながら、本田はそう呟き、サンドバッグを叩く達也を見た。

拳が打ち込むたび、重量級ボクサーが殴ったのかと錯覚するほどに、サンドバッグは揺れた。

次は、ついにチャンピオンへの挑戦だ。それを意識しているのか、達也のトレーニングにも熱が入っている。

「あんま張り切んなよ」

本田がそういうと、達也はサンドバッグから目を離さずに答えた。「なに言ってるんすか。チャンピオンですよ、チャンピオン。一応、仕上げときますよ。まあ、そんなことしなくても楽勝でしょうけど」

バンバンバン！

すさまじい速さの右左右、ワンツースリーのパンチがサンドバッグに打ち込まれ、破裂音に似た音が鳴る。

はたから見れば、きつと達也の勝利を疑うものはいないだろう。

だが本田には、長年近くにいた経験からなのか、何か嫌な予感がし

ていた。

「なんすか、なんか言いたいことでも」

その様子を不思議に思ったか、達也がそう聞いてくると、本田は「いや」と首を振った。

「何でもない」

ここで不安を煽るわけにはいかないと思い、そう答え目線を横にやった。

気のせいならいいんだが。

「お疲れーっす」

そういつてジムを出た達也は、イヤホンを耳に付け、NONA R E V E S の『LOVE TOGETHER』を聞きながら走り出した。

ジムトレーニングの終わりには、帰り道までの1km程度の道を、この曲をリピートしながら走るのが恒例だった。

「ぶつとばしてよDJ……エビバディゲツダン」

リピートが3週目に入り、そう小さな声で歌っていると、

「ん？」

突然、体に違和感を覚え、その場で足を止めた。

なんだ……いま、体が。

乱れた息を整えながら、違和感の正体を探る。

「ハア……気のせいか……いや」

そのとき、いつまでたつても息が整わず、心臓が強く脈打っていることに気が付いた。

たいした走り込みじゃない、なのにまだこの状態なのはおかしい。

原因は一つしか浮かばなかった。

ピンポーン。

田所がリビングで一人『オッス 水泳部だらけのふんどし祭り』を見ているときに、インターホンが鳴った。

「遠野——」

出てくれ、と言いかけてやめた。いまは外に出ている。

「まったく、こんな時間に何の用だ」

しぶしぶ立ち上がって玄関に向かい、ドアを開けた瞬間、達也が倒れこんで入ってきた。

「おーど、どうした」

思わず声を上げて驚いた後、膝をついた。

達也は苦しそうに肩で息をしながら、顔を上げた。

「ああ、先生。い、息が」

「息ぐるしいのか、今すぐ体を診る」

「ああ、頼む。だけど、その前に一つ、やらなきゃいけない大事なことがあるんだ」

「大事なこと？」

いまこの状況で、他にやるべきこととは、いったいなんだ。

そう思っていると、達也は苦笑いを浮かべながら、ドアの方を親指で指した。

「外でタクシーが待ってるからよ、金払ってくれないか？」

「まったく、ふざけやがって」

達也が寝るベッドの隣で、田所は毒づいた。

「だから金はちゃんと三倍にして払うって。いまの俺は結構、金持ちだぜ」

「そう言う問題ではない」

「そうカツカしないでくれよ。それより、原因は何だったんだよ。注射してもらったら収まったけど」

「100だ」

不意に謎の数字を言われ、達也は首をかしげた。

「100……：……がなんだ？」

「今のお前の、平時の心拍数だ。ちなみに一般人の平均は60から75。スポーツマンなら40だってぎらにいる。安静時にこれなら、試合中は300……：……いや400にもなったかもしれない」

何となく、達也は原因を察した。

「それって、つまりよ」

「ああ、筋肉が原因だ。どうやら、俺が強化した筋肉は普通より多くの血液を必要とするようだ。試合中はいつ止まってもおかしくないほどだっただろう。それによって心臓に強い負担がかかり続け、今の状態になったということらしい」

「なるほどね」

達也はそう答え、天井を一点見つめた。

JHBCチャンピオン、WLGSC1位で終わりか。

達也はフフと小さく笑う。

「まあ、十分だろ」

「諦めがいいな、もつとわめくと思っていたが」

「なに言ってるんだよ。もうできないって状況から、ここまでこれたんだ。先生には感謝してもしきれないよ」

「そうか……筋肉は再度抽出し、元の状態に戻して移植する」

「わかった」

そういつて、達也が立ち上がろうとすると、

「まてまて」

と田所が止める。「どこに行く気だ」

「どこって、帰るんだよ。安心してくれよ、もうトレーニングも試合もしない。ただ、明日からテレビの取材とか、ロケがあるんだよ。ほら、俺って有名人だろ、そういう仕事も多いんだよ」

「バカ言うな、お前の心臓はいつまで持つか分からないんだよ」

「そうだな、持たないかもしれないし、持つかもわからない。俺は後者に賭けるね。だから頼む、ちよつとだけ時間をくれよ、相手に迷惑をかけたくないんだ」

田所は深い溜息を吐いた。

「クソ……1週間だけでぞ。それが過ぎたら、お前を麻酔で無理やり眠らせてでも、手術を行う、いいな！」

「では、最後にチャンピオンへの意気込みを聞かせてください」

とある喫茶店の個室で、インタビュアーがそういうと、達也はぐつと力拳を作つて答える。

「もちろん、必ずベルトを勝ち取ります。ファンのみなさん、俺がチャンピオンになるところを見てください」

インタビュアーの隣に座るカメラマンが、何度かシャツターを切ると、取材は終わりとなった。

挨拶を終え、別の席で待たせていた本田と共にタクシーに乗ると、フーと息を吐いた。

仕方がないとはいえ、ああやつて嘘をつくのは神経を使う。今日はいくつか仕事が入っており、すべて嘘をつくことになるだろう。

それと、試合前に失格となる理由も作らねばならない。ただ出場したくないから、という理由での欠場は許されない。

頭を休ませる暇がない。

「次は下北沢テレビだ」

隣で本田がそう言った。

「ああ、わかりました」

「クソ、俺はお前のマネージャーじゃねえぞ」

本田は達也の仕事管理を任されており、今はほとんど達也のマネージャー状態だった。

「まあまあ、ホンダ△ジム最初で最後のWLGSCチャンピオンかもしれないですよ。そのの仕事も、セコンドとしての役目ですつて」

達也は笑いながらそういうい、肘をついて窓の外を見た。

まあ、チャンピオンにはなれないんだけどな。

テレビクルーと一緒に来たのは、ホンダ△ジムからそう遠くはない下北沢高校だった。

世界的アスリートによる若者との触れ合い、それを撮りたいようだ。

全ての授業が終わり、皆が部活にいそしむ中、教師に連れられて各部活を回り、生徒と話をしていく。

「君ならやれるさ」

「できないと思つたら、一生できないよ」

「応援してる」

適当にそんな言葉をかけていくが、自分の言葉で明るくなった青年たちの顔を見ると、悪い気はしなかった。

「こちらが柔道部です」

畳が敷かれた部屋に入ると、付き添いの教師がそう言った。

達也が入るや否や、練習していた生徒たちは手を止めて、達也に挨拶をした。

「気にしないでくれ」

達也は手を振ってそう言った。「みんな練習を続けて」

二人一組になつて、組み合っている生徒たちを、静かに見学する。

あらゆる場所から息巻いた声が響いていた。

そのとき、ふと達也の目に留まる生徒がいた。

奥にいるその生徒は、がつと相手に組まれると、すぐさま投げ飛ばされた。

相手が変わっても同じだ、ぼーっと立っていると、相手が組にかかり、投げ飛ばされる。

身長は並で肩幅も広い。だが、一回り小さな明らかに弱そうな生徒にも、簡単に負けていた。

ついその生徒を凝視していると、

「あの生徒なんですが」

その様子に気づいたか、付き添いの教師がそういい、達也が顔を向けると、どこか言いにくそうに続けた。

「実は、緑内障なんです」

「緑内障？」

すぐに視線を戻し観察すると、確かにどこか相手を見にくそうに顔をしかめていた。

「どうして、緑内障の子が柔道を？」

達也は聞いた。

「我々も危険なので止めたのですが、本人の強い意志で」

自分と同じ緑内障、それで頑張っている子供に対し、湧き出た感情は恥だった。

あの子は緑内障でも頑張ってるのに……俺は。

「よろしければ、お話しをしていただけませんか」

教師のその提案に、少し悩んだものの、断るのも変だと承諾した。数分だけ話したいと柔道部の顧問に伝え、その少年と外に出る。緊張した面持ちで立ち会う少年に、達也は何と喋っていいかわからず、言葉を探した。

大体、こういう時は達也が先に話しかけるが、声が出ない。

ディレクターが、早く何か話してくれと、ジェスチャーで伝えてくるが、何もできずただ立ち尽くしていると、少年がぎこちなく話し出した。

「緑内障……なんですよね」

「ああ、まあね」

「それなのに、すごいですね、日本チャンピオンなんて」

「まあ、うん」

生徒の言葉一つ一つが、達也の胸に鈍い痛みを与える。

「僕も緑内障で、頑張ってますけど……どうも、とても達也さんみたいになれそうにないです」

「なに言ってるんだよ。君ならきつとやれるって」

達也は自然と、必死になって少年を励ましていた。

それは、自分が不正をしているという、後ろめたさがあるからだ。

「ホントですか」

「ああ、俺を見ろよ」

達也はぼつと両手を広げた。「緑内障だけど、必死に努力してここまで来た。俺にできたんだ、君にできない訳ないだろ」

「確かに、いいところまでは行けるかもしれない。でも、必死に努力して、みんなに勝っても、同じだけ努力した、同じ力を持った人間には勝てないと思います。どうあがいても、目が見えない分、僕たちは弱い。絶対に一番にはなれない」

「そんなことはない。同じだけ強くても、気持ちが強ければ勝てる」

「あの世界チャンピオンが相手でもですか」
達也は眉を寄せた。

「世界チャンピオン？」

「はい。WLG SBCバンタム級チャンピオンです」

「そいつは、そんなに強いのか」

達也は聞いた。

勝つのは当たり前だと思っていたし、心臓のことを知ってからには棄権する気だったので、対戦相手のことをちゃんと調べていなく、顔も強さも知らなかった。

「はい、動画で何度も見ました。多分、達也さんと同じぐらい強いです」

「そうか」

そういつて、達也は黙った。

素人の少年の意見だ、鵜呑みにはできないが、筋肉を改造してある自分と見比べ、同じ力量だと思われるほどの相手だとすれば、それは相当なボクサーだろう。

不意に、少年の真つすぐな目に達也は気づき、サングラスの奥で黒い瞳が震えた。

「勝てますか」

「あ、ああ！」

自然と声を張り上げていた。「勝つ、勝つき！見てろよ、俺が——」
達也はドンと自分の胸を叩いた。

「俺がチャンピオンになるところをよ」

「お疲れ様でしたー」

テレビクルーの軽快な挨拶に「どうも」と軽く返して別れると、本田と一緒にタクシーに乗った。

ホンダ△ジムつくくと、本田だけ下して、達也はタクシーに残った。

「おい、お前トレーニングは」

本田がそういうと、達也は疲れた様子で首を振った。

「今日は疲れたんで、帰って休みます」

運転手に家の住所を伝え、タクシーが発進すると、達也はシートにもたれかかり、目を閉じた。

脳裏に、あの緑内障の少年のことがよぎる。

嘘だ。そうだ、俺は嘘をついた。戦わない。いや、戦えない。もうすぐ俺は元の体に戻る。仕方ないさ、命には代えられない。死んじまったら元も子もないだろ。だから……だから。

達也はゆっくりと体を前に倒すと、膝に肘をつき両手で顔を覆った。

「クソ」

そう小さくつぶやいた後、達也は運転手に新しい行き先を伝えた。

「ふざけたことを抜かすな！」

田所は玄関で土下座する達也を見下げ、そう叫んだ。

その声に驚いたか、部屋から出てきた遠野と一瞬、顔を合わせると、達也は頭を下げたまま言った。

「頼む、一週間……いや、一年だけ待ってくれ」

「1週間から一年とは、ずいぶん数字の変わりが激しいな。まあ、どちらにしろ無理だ。お前は自分の体のことを分かって言ってるのか。一度手術した人間だ、そいつは医者として死なせるわけにはいかない。俺の提示した期限より前だが、逃げられちゃかなわん。今すぐ治療する」

「そこを頼む、先生」

「無理なものは無理だ。いっておくが、俺から逃げようと思っても無駄だぞ。とっ捕まえて強制的にするか、それが無理ならお前がやったことを週刊誌に告白する」

微動だにせず、ただ土下座を続ける達也をにらむと、田所は踵を返して歩き出した。

「遠野、こいつを地下の手術室に運べ。今すぐ手術を——」

「ガキと……約束しちまったんだ」

田所は足を止めて、ゆっくりと振り返ると、顔を上げた達也と目があつた。

「緑内障のガキだ。そいつは、そんな状態でも柔道で頑張ってる。そいつに、俺は優勝するって、見てろっていつちまった」

「だったら、俺じゃなくその子供に土下座しに行ったらどうだ。僕はどうしようもない嘘つきです、ごめんなさいってな」

「先輩！」

聞きかねたか、遠野が割って入った。「言いすぎですよ。達也さんは、その子供のことを思ってこうやって頼んでるんですから」

「知ったことか、こいつの都合で人殺しにされちゃたらん」

「先生……俺だって、死にたくはない」

達也は真剣な表情で言った。「出来れば手術を受けたいさ。でもよ、あのガキを励ませるのは、俺しかいないんだよ。あの約束だけは、嘘にはしたくねえ。だから頼む。チャンピオンとの試合まで、激しいトレーニングは抑えるし、試合が終わったらここに直行して、すぐに手術を受ける。今度こそ約束する。だから先生……お願いします」

達也が床に頭を叩きつけると、ゴンと音が鳴った。

「先輩」

遠野が何かを訴えるような目を向けてくると、田所は軽く首を振り「ふざけやがって」とまた踵を返した。

「試合中、心臓に強い打撃を受けたら棄権しろ、いいな」

田所がそういうと、後ろから大きく息を吸う音の後に、

「ありがとうございます！」

と達也の声が響くと、田所は家の中へと戻っていった。

「今日はもう上がります」

達也がそういうと、本田は「ああ、そうか」と返し、時計を見た。

トレーニングを始めてまだ、30分ほどしか経っていなかった。達也が緑内障になった後のトレーニングメニューは、すべて本人任せだった。

さすがに短すぎるとも思ったが、もともとトレーニングをさぼるよきな人間ではなかったため、なにか考えがあるのだろうと口は出さな

かった。

「本田さん、チャンピオンとの試合はまだ決まらないんですか」

「いまだに交渉中だが、一応三か月後ぐらいにはできそうだと聞いているが、どうだ？」

「三か月後」

達也はそうボソリとつぶやくと、くるりと踵を返す。「俺はいつでもいいです。できるだけ早くお願いします。じゃあ」

そういつてジムを出ていく達也の背中に、なにか異様なものを本田は感じた。

達也は8畳一間のアパートに住んでいた。

フアイトマネーやテレビでの出演で金はそうとうあったが、家族もなく毎日トレーニング付けの日々なので、これ以上広い住居を欲しいとは思わなかった。

ホンダ△ジムからタクシーで帰ってきた達也は、電気も付けず、その部屋の中央に敷かれてある布団に胡坐をかいて座った。

じつと何もせず、ただ目の前の虚空に目を凝らす。

三か月後……その日になるかは分かんねえが。その試合が俺の最後の試合だ。

「絶対に勝つ」

そう自分に言い聞かせると、ゆっくりとまぶたを下ろし、軽い瞑想状態のまま、一日が過ぎるのを静かに待った。

下北沢COTTホールを埋める大量の観客は、まだ試合も始まっていないというのに、その興奮によって熱がこもっていた。

不意に電気が薄暗くなり、青コーナー奥の扉がライトによって照らされ、そこから達也と本田が出てきた瞬間、歓声と拍手によってホール内の空気が激しく揺れた。

リングまで続く道を、両脇にいる観客たちと手を叩きながら進み、リングに上がった。

その後、今度は赤コーナー奥の扉にライトが集まり、そこから赤いボクサーパンツに長い金髪をカチューシャで持ち上げ、前髪が扇のようにならび広がっている、WLGSCバンタム級チャンピオンのバイオレックスが顔を出した。

その後には続き、長髪に青いセーターの、セコンドのセックス。同じく長い金髪にサングラスをし、黒い上着を着たチーフセコンドのマネーが続く。

明らかにアウェーな会場をもともせず、チャンピオンは悠然と歩を進めていき、静かにリングに上がった。

リングアナウンサーによって両選手とルールの説明がなされる中、達也は対角線上にいるバイオレックスと目を見合わせていた。

達也が気迫のこもった目線を送るも、バイオレックスはだらりと力を抜き、興味のないテレビでも見ているかのような目を向けてくる。

両者が中央に立ち会い、レフェリーから注意事項の説明を聞いているときも、それは変わらなかった。

説明が終わり、背を向けて自分のコーナーに戻るさなか「俺なんか眼中にないってか」と小さくつぶやく。

いいぜ、こっちはそんなに時間もかけらんねえ。その余裕——
両者がコーナーで向き合い、ゴングの音と共に中央に立つレフェリーが右手で拳を作り、後ずさると、両者はまっすぐ中央に向かった。

すぐにへし折ってやるよ。

達也は間合いに入る寸前のところで、右左とステップを踏み、左ジャブを放った。

驚異的な速さのステップで一瞬、相手の視界から外れ、そこからの最速のジャブ。

いまの今まで、これをかわした者はおらず、達也は自信をもってジャブを出した。が、

「え」

達也は思わずそうこぼす。

左手はバイオレックスの顔を数センチはずれ、当たっていなかった。嘘だろ、避け——

「があー！」

突然、腹に衝撃を受け、達也は後ろにのけぞった。

すぐさま両手を構え、バイオレンスを見るも、相手から追撃の様子はなかった。

まさか、かわされるとは思ってもおらず、驚きのあまり体が固まり、反撃がくるという当たり前のことすら頭から抜けていた。

じわりと広がる腹部の痛みを感じると共に、達也に一つの疑念が生まれる。

本当にあいつは自分の意思でかわしたのか？

達也は何度か自分の試合をテレビで見たことがあるが、ステップからのジャブは、おおよそ人間にかわすのは不可能だろうと思うほどだった。

あれを生身の人間がかわす？

「あり得ねえだろ」

達也はリズムよく体を揺らしながら、攻め時をうかがう。その間、バイオレンスは静かに拳を構えていた。

偶然だ。

達也は左にフェイントをかけ、すぐに右左とステップを踏んで、再度左ジャブを打った。

完璧だ、早さもさつきよりある。今度こそ――

が、グローブはバイオレンスの頬をかすただけだった。

反撃のフックを今度は反射的によけ、また距離をとると、達也の額から脂汗が吹き出る。

嘘だろおい、見えてんのかよ。

多分、達也さんと同じくらい強いです。

高まる心臓の音と共に、緑内障の少年が言った一言を思い出した。

あの言葉は間違いではなかった。

どうする。どうすればいい。

相手と距離を図りながら、どう攻めるかを考えていると、

「どうした、もう来ないのか」

バイオレンスがそう言った。

その顔には、いまなおやる気を感じられない。だが、
「なら、こつちからいくぞ」

その言葉と同時に、一気に達也に距離を詰め、間合いに入ってきた。その驚きによる一瞬の硬直ののち、達也はジャブを放ったが、まったく形のなっていないジャブは簡単によけられた。

まずい、心臓を――

とつさに右手で顔をガードすると同時に、肘で心臓部を守ったが、
「くっ」

相手の左拳が、右の横つ腹に打ち込まれ、達也は呻き声を上げる。
「ぐ、あがつ」

再度、同じ個所に拳が撃たれた後、体を強くひねらせた右フックが、今度は左の腹にめり込み、体がくの字に曲がる。

その状態のまま、後ろにのけぞる様に下がると、達也は苦しそうに顔をしかめた。

相手のパンチをよけ、的確に攻撃を当てることによつてポイント勝ちを狙う、テクニック型のボクサーだと思っていたが、さすがチャンピオン、そのパンチも一級品だった。

今まで感じたことのない、内臓がねじ切られているかのような痛みが、腹から引かない。

その様子を感じ取つてか、バイオレンスはすぐさま間合いを詰め、攻撃に来た。

「うう」

達也は両手を前にガードを固めながら、逃げるように距離を開ける。

ひたすら逃げながら時折、思い出したかのように拳を出すも、すべてカウンターをとられ、反撃を受けるため、最後の方は全く手を出さず、ひたすらに逃げ続けた。

そしてラウンドの終わりを告げる鐘が鳴った。

挑戦者が無様に逃げる姿を見て、冷え切った会場の様子を感じながら、達也は自分のコーナーへと戻っていく。

本田が置いた椅子に座り、今だに鈍い痛みを放つ腹を撫でる。

「おいお前、逃げてばっかじゃ勝てねえぞ」

本田が隣でそういうと、達也は顔を一瞥して軽く頷いた。

「分かっていますよ。ちよっと相手のペースに吞まれたから、回復まで待っただけです。次のラウンドはこっちが取ります」

カン。

ラウンド2が始まってすぐ、達也はステップを踏み、バイオレンスの周囲を飛ぶように回り始めた。

数々のランカーを惑わし、マットへと沈めた高速ステップ。完全なる死角からの攻撃なら、避けられないはずだ。

相手の横につき、顔がこちらではなく前を向いているのを確認した後、足を踏み込み右手を上げた。

いままでのお返しだ、こいつを――

全体重を乗せ、前のめりに拳を出そうとした刹那、達也は見た。

こちらではなく、前を向いているバイオレンスの横顔。だが、その目は真横にいる達也を捉えていた。

こいつ見てる。止め――ダメだ、止められない。

顔に向かっていく右ストレートを、バイオレンスは体を後ろに引き、最小限の動きでかわされた。

その次の瞬間、顎にすさまじい衝撃を受けると、前傾姿勢だった達也の体が直立になり、そのまま後ろに倒れた。

揺れる視界がリングライトに照らされると、レフェリーのコールが聞えてくる。

ワン！トウー！

やべえ、立たねえと。

上半身を引き上げらせて、膝に手をつけて立ち上がるうとするも、足にうまく力が入らない。

スリー！フォー！

クソ、こんな負け方できるかよ。

何とか力を入れて立ち上がり、ファイティングポーズをレフェリーに見せると、すぐに再開の鐘が鳴った。

このままでの流れではまずいと、何とか攻勢に出たかった達也だっ

たが、そこで足が止まる。

どう攻めればいい。

ステップからのジャブや、視界を外れてからの攻撃をよけられたいま、達也には攻め手がなかった。

半盲の状態では相手の懐に常にいるのは危険だ。だからこの二つの、相手の攻撃を食らわず、一方的に攻撃が可能な戦法をとり続けてきた。

それが効かない相手にはどうすればいい。

相手をにらみながら、達也は自問するも、そんなこと考えてもいなかったことに、すぐさま答えなど出るはずもなく、どうも動けずに立ち尽くした。

無論、その間に相手がただ待つてくれるはずもなく、間合いを詰められると、ラウンドと同様、達也は逃げた。

どうする？ 負ける、負けちまう。考えろ。

バイオレンスに追われながら、リング内をグルグルと周り、撃ち込まれる拳を避けつつ考えるも、何も思いつかない。

気が付くと、いつの間にかコーナーに追い詰められていた。

バイオレンスはゆっくりと近づいてきて、攻撃の機会を見ていた。そのとき、達也に妙案が浮かぶ。

カウンターだ。相手だって攻撃中は無防備、その間は攻撃はかわせないはずだ。

半盲の達也には、それは難しいことであるということとは分かっていた。もともと、そういったテクニクを要するものも得意ではない。だが、全ての攻撃を避けられる以上、そこにしか勝機がなかった。やってやる。

見えている方の目を凝らし、じっと相手の攻撃を待つ。

一応、強化されてある筋肉のおかげで、避ける速度も素早くなっている。どうしようもなく無理な話でもないはずだ。

バイオレンスが両者の攻撃範囲に入ると、二人はいつでも行けるようリズムよく体を揺らす。

達也には攻撃の気がなかったが、相手にそれを悟られぬよう、雰囲気

気だけは出していた。

大丈夫だ、俺ならやれる。こい……こいよ。

達也が左肩を少し上げ、攻撃のフェイントを見せた瞬間、バイオレンスは一步踏み込み、右フックを繰り出した。

見えた。

達也は上半身を右にそらし、そのフックを避けると、返す刀でその姿勢のまま右アッパーを繰り出す。

完全に無防備な状態、決まると確信したそのとき、パン。

その音とともに、達也の拳が右に弾かれた。

バイオレンスの左拳がその拳をはじいたのだ。

パリングと呼ばれる、相手のパンチをはじく技術だった。普通、この状況で出来る人間なんているはずがなかった。

そのことに驚く間もなく、左、右と顔面にパンチを受けた。さらに右のアッパーを腹に受けると、達也は腹を抑えながらうづくまり、口からマウスピースが落ちると、その後すぐその場に倒れた。

レフェリーのカウントが始まって、達也はすぐに立ち上がれなかった。

「ああ……あああ」

そう呻き、痛みに耐えながらマウスピースを拾い上げ、口に入れると、ブルブルと震える体を立ち上がらせ、ファイティングポーズをとる。

再開の鐘が鳴るも、そこからはラウンド1と同じ、達也はひたすら逃げ続けるしかできず、そのままラウンド2も終了した。

フラフラの状態で自分のコーナーに向かい椅子に座ると、いつの間にか会場がまるで通夜のような静けさであることに気が付いた。

「本田さん……どうしよう」

達也は困り果てた様子で、隣の本田に聞いた。「何も効かねえんだよ、全部よけられる。こんなの勝てねえよ」

眉間に深い皺を寄せた本田は、一度下を向いた後、顔を上げて言った。

「やめるしかねえな、その戦い方を」

「やめる?」

「そうだ。ステップからのパンチだとか、相手の攻撃をかわして攻撃、なんて器用な奴がやることだ。本来お前がやるようなことじゃねえ」
確かに、言われてみればそうだ。

目がこうなったからこうしているが、本来はそんなことが得意じゃない。つまり付け焼刃の戦術だった。

だが、

「けど……それをやめたら、どうすればいいんすか」

「一つしかねえだろ」

ぐっと達也に顔を近づけた本田は、険しい表情のまま答えた。「お前のボクシングをだよ」

会場が静かだ。

バイオレンスは椅子に座りながらそう思った。

ホーム側の選手が負けているとはいえ、ここまで静かなのは初めてだった。

それほど、試合の内容が衝撃的だったのだろう。

「おいさっさと決めちまおうぜ」

隣でセコンドのマネーがそういうと、

「やっちゃいましょうよ」

と後ろ、リングの外でセックスが続いた。

「簡単に言うな」

なんの考えもなく話す二人を諭すように、バイオレンスは言った。

「相手はかなりのハードパンチャーだ。あまり大胆にはいけな」

「でも、お前なら楽勝だろ?」

マネーがいうと、

「まあな」

そう軽く返した。

「ならさっさと決めてくれよ」

セックスが駄々をこねる子供の用に言った。「わけー男どもを待た

せてんだよ。さっさと倒して遊ぼうぜ」

それを聞いて、マネーは笑った。

「ああ、フアイトマネーもがっぽり入る。今夜はたっぷり楽しもう」

バイオレンスは鼻で笑う。

「お前らは、俺の気も知らねえで、いつもそんなことしか考えてねえな」

「なに言ってるんだよ」

マネーはぐつと右手で拳を作る。「そのための右手、あとそのための拳？金！暴力！セックス！金！暴力！セックスって感じで」

また、バイオレンスは鼻で笑った。

この二人はいつもこの調子だ。試合のことなんて興味がない、俺が生み出す金と、それを利用しての遊びにしか興味がない。

もちろん、その恩恵を受けているからこそ、こうして三人で仕事をこなしているのだが。

バイオレンスは向かいのコーナーに目をやる。

達也の隣で必死に何かを話しかけている、サッカー選手の本田を意識したのであろうが、どう見ても所ジョージにしか見えない男を見て思った。

たまには、ああいう熱心な奴にも、隣にいてほしいものだ。

「まあいい」

そう呟き「今日はどんな男だ」

バイオレンスはセックスに聞いた。

「8人、全員20代だ。そのうち3人はあんたの望み通り、金で釣ったガタイのいいノンケだよ」

「オーケイ」

バイオレンスはぺろりと唇を舌で舐めた。「さっさと終わらせてくる」

ラウンド3が始まり、中央へと歩いていく。

見ると、達也の顔から先ほどまであった、迷いのようなものが消えていた。

あの所ジョージに何をいわれたのかは知らないが、迷いがなくなっ

たところで強くなるわけじゃない。

「さっさと決めるぜ」

すぐさま近づいていくと、達也は今までと同じように、その素早いステップで逃げた。

顔は変わっても、やることはいつしよか。

ラウンド2と同じような展開だった。ひたすら逃げる達也を、バイオレンスがパンチをしながら追う。

ステップは達也の方が圧倒的に速いため、なかなか攻撃も当たらなかったが、すぐにコーナーには追い詰めることができた。

すぐさま、踏み込めば拳が当たる距離に入ったが、バイオレンスは謎に思った。

達也の顔、まだ迷いのない顔をしている。

何か考えがあるのか？

狙うとすれば、もう一度カウンターだが、それは無理だ。バイオレンスには単純な動きしかしない達也の行動など、手に取るように分かった。

身体能力にかまけ、技術を磨いていない。力だけはあるバカの典型例だ。

軽くジャブを打ち、相手の出かたをうかがうも、ガードするだけで何もしない。

何を考えているのかわからない。だが、相手の攻撃を受ける気もない。

時間を喰うだけだ。さっさと終わらせよう。

バイオレンスが左の腕を少しだけあげると、達也の体が右に動く。それを見逃さず、すかさず踏み込み、右ストレートを顔に打ち込んだ。

右拳に来る衝撃は、それがクリーンヒットしたことを意味していた。

よし、当たった。しっかりと体重を乗せたパンチだ、ダウンは確かだろう。しかしあの顔は何だったんだ。結局なにもしなかったが。何もできなかつただけか……ん。

ザワザワザワ。

バイオレンスの耳に、なにかが騒めく音が聞えた。

なんだこの音は——まで、達也はどこに行った。なんだ、これは。白い……光？ぼやけている——まさか。

バイオレンスがハツと目を開くと、リングライトの光と共に、激しく騒めく観衆の声とコールするレフェリーの声が耳に入ってきた。

スリー！フオー！

何が起きた。いや、その前に立たないと。

腰を上げ立ち上がると、すぐに膝が折れ、その場にしりもちをつく。

「う……うう」

まるで床が揺れているようだった。それほど強いパンチを食らったということだろう。

ファイブ！セックス！

「ま、待て。立つ！立つぞ！」

バイオレンスは体を揺らしながら立ち上がると、グローブを構えた。

試合が再開すると共に、いったい何が起きたのかを思い出そうとするも、右ストレートを出した後の記憶がすっぽりと抜けている。

よけられた？いやあり得ない。確実に当たった感触があった。ならなせ——

それを理解したのは、達也の顔を見た後だった。

バイオレンスのパンチが撃たれたのであろう右側の頬が、膨れ青くなっている。

だが、その悲惨な顔の状態とは裏腹に、達也の顔には笑みのような表情が浮かんでいた。

そこで、バイオレンスは気が付く。

捨て身だ。達也はバイオレンスの拳を受け、その状態のままパンチを放ち、ダウンさせたのだ。

あり得なかった。あれだけのパンチを食らえば、脳は揺れ体は一瞬、硬直するはずだ。

しかし、目の前の達也はそれをやってのけた。そう確信させる、異

様な雰囲気があった。

それを可能としたのは、強靱な顎の筋肉とタフネス、そして勝利への執念。

バイオレンスは先ほどまでの、自分の姿勢を改めた。

楽な相手だと思っていた。簡単に勝てると思っていた。だが違う、こいつには執念がある。鬼気迫るような執念が。

バイオレンスの顔に真剣みが帯び始めると、達也はさらにやりと笑う。

「やつとマジになったかよ」

そう言い、迫りくる達也に、バイオレンスは引き下がるしかなかった。相手の捨て身の攻撃。これを見させられては、なかなか攻撃に移れない。さらに、まだ先ほどのパンチによるダメージが残っており、反撃も難しかった。

ガードを固め引き下がるバイオレンスに、達也はすぐさま近づき、ボディーにパンチが打ち込まれる。

「くう」

ステップの速度は達也の方が上、簡単に間合いを詰められてしまう。だが、そのパンチを食らって一つ分かることがあった。

威力がない。

バイオレンスが下がっていたことよって、達也も不完全なパンチを出していたのだろうが、ここまで威力がないのは、達也の体にもダメージが残っているからだ。

当然だ。あれほどのパンチを食らい、無事であるはずがなかった。前ラウンドでのダメージもある。全てを考慮しても、今の状況はほぼ五分だ。

だが、足を止めて撃ちあうわけにもいかない。そうなれば、タフネスのある達也に軍配が上がる。なら、

下がるバイオレンスに、再度、達也がパンチを繰り出すと、それを左手ではじき、右フックで達也の顔を撃った。

達也が二歩後ずさると、バイオレンスは深追いせず、その場で拳を構えた。

テクニクは俺が上。この調子で、確実にダメージを与えて、判定勝ちを狙う。

ひたすら下がるバイオレンスに、無我夢中で追いかけて、パンチを放つ達也。それに対し、きれいにカウンターを取っていく。

バカの一つ覚えか。

そう思ったとき、

トン。

背中に当たるゴムの感触と、両脇に見えるロープ。

いつの間にか、コーナーに追い詰められていた。達也は何も考えずに、パンチを出しているわけではなかった。相手の攻撃を受け、冷静さを失っていたバイオレンスはそのことに気が付かなかった。

徐々に近寄って来る達也に、バイオレンスの額から汗が一つ流れていく。

どうする。相手は捨て身でくる、全力での攻撃はできない。だとすれば、どうやってここから抜け出す。

考えている間に、間合いに入られた。

下からせようと軽いジャブを打ち込むも、顔に何発か当たっているというのに、達也は一步も引かない。

これ以上、近づかれればもう相手のパンチをよけられない。力任せの打ち合いになる。そうなるとまずい。しかし、打開策はない。

「クソおー！」

深く踏み込み、右ストレートを達也に当てた瞬間、左の頬にとてつもない衝撃が来ると、体ごと右に吹き飛び、ロープに弾かれて地面に倒れた。

「あ……ううう」

なんてパンチだ。顔が吹き飛びそうになった。

レフェリーのコールを聞きながら、バイオレンスはロープに手をかけて立ち上がろうとして、顔を上げたとき、両膝を付き、うつむいている達也が見えた。

バイオレンスのストレートは、達也をダウンさせていた。レフェリーのコールは両者にされていたものだった。

レフェリーのカウントが6になった時、両者が立ち上がり、ちょうど終わりを告げるゴングが鳴った。

おぼつかない足取りで、バイオレンスがコーナーに戻り、椅子に座るとすぐに不安そうな顔をしたマネーが隣にやってくる。

「おいバイオレンス——」

「分かってる！」

バイオレンスは声を荒げ、マネーの言葉を遮った。「まさかあんな戦法で来るとは、思ってたなかったただけだ。安心しろ、負けはしない」「つってもあの捨て身の攻撃に、なにか打開策でもあるのか」

「まあ見てろ」

バイオレンスはコーナーにいる達也に目を凝らす。「次で終わらせる」

「つつ」

血まみれの口を水でゆすぐと、刺さるような痛みを感じた。

「お前、このままじゃ体が持たねえぞ」

心配そうに本田がさういう。

「大丈夫つすよ。先に相手を倒しますから」

「バカ！そうじゃねえ。相手を倒せても、このままじゃ体がいつちまうぞ。ボクシングが続けられなくなってもいいのか」

どちらにしろ、もう達也は引退する気なのだが、本田はそれを知らない。

「すいません、本田さん。俺、こいつに勝ちたいつす。けど、勝つにはこれしか方法がない。だからやります」

本田はぐつと口をつぐむと、達也の口にマウスピースを入れていった。

「もしもん時はタオルを投げる。恨むなよ」

達也は頷くと、立ち上がり、リングの中央へと向かった。

バイオレンスと向き合うと、ラウンド4のゴングが鳴る。

達也はすぐに相手へと近づいていった。先のラウンドと同じように、逃げならジャブを放ってくるバイオレンスを、達也はコーナーに

寄せように追う。

しかし、相手もそれを意識しているのか、なかなかコーナーに追い詰めることができなかった。

何度も顔や腹に当たるジャブに、ダメージが蓄積されていく。

それでも諦めず、ひたすらに追い続けると、ラウンドも後半に差し掛かった時、やっと追い詰めることができた。

さあ、こっからだ……打って来い。

にじり寄る達也に、静かに拳を構えるバイオレンス。

間合いに入り込んだとき、すぐにバイオレンスが踏み込んできた。来た――。

その瞬間、達也はぐつと顎と首に力を入れ、覚悟を決めながら右アッパーを繰り出す。

達也の意地と執念が可能とする、捨て身のカウンター、これが決まれば勝負が決まるという確信があった。だが、

まで……これは。

顔に当たるバイオレンスのグローブ。しかし、そのグローブから一切の力を感じなかった。

そして、グローブの左端からは、バイオレンスの体がスライドして見えてきた。

そう、この捨て身の攻撃には、致命的な弱点があった。グローブによって半盲の達也には、相手の姿が完全に見えなくなることだ。

相手が全体重を乗せた攻撃を放ってくる。その前提で、達也は大体の位置を予測し、攻撃をしていた。

それを分かっていたバイオレンスはただ軽く、達也の視界を遮るためだけに右手を出し、体重を乗せず体を左へと移動させていた。

当然、達也のアッパーは大きく空を切る。

真左にいるバイオレンス。

腰をそり上げ、右手を上にあげる達也。

ガードは不可能だった。

腹に左フックが撃たれ。

「うっ」

わき腹に右フック。

「ぐ」

再度、腹に左フック。

「かあ」

最後に、わき腹にアッパーがめり込んだ。

「ぐはっ」

やべえ……息が。

腹への四連撃で、肺が横隔膜によって押し上げられたのか、息を吸えなくなつた。

痛みで両手が下がり、腰が曲がり顔が前に出ると、その顎にアッパーが打ち上げられた。

キイイイイン。

酷い耳鳴りの音が聞えた。

上をむく顔に引つ張られるように、体が後ろにそれていき、そのまま後ろに倒れていく。

視界はスローモーションとなり、回転しながら上に飛んでいくマウスピースがよく見えた。

これは、何度も感じたことがあつた。立ち上がることができない、確実なダウンの感覚だ。

ゆっくり、ゆっくりと体が床へと近づいていく。

首を横にやると、驚愕している観客の顔が映る。

みな、達也を見に来た人間たちだろう。

悪いな、みんな……俺、もう無理――。

そのときである。目の前の景色が一瞬にして変わった。

それはあの時、緑内障となつた試合に見た、あの幻影だ。

子供が、かじりつくように、古ぼけたテレビを見ている。

モニターに映る二人の男。リングの中でグローブをはめ、拳を打ちあっている。

手前の男が素早い動きでパンチを繰り出し、相手の顔に命中するとガクンと膝を落とした。

くるりと踵を返し、コーナーに戻る男。湧き上がる歓声。コールす

るレフェリー。立ち上がらんとする相手。

達也は苦笑する。さしずめ、クールにコーナーに戻ってるこいつがバイオレンスで、倒れてるのが俺って感じか。

すると、その画面をみる子供も、観客と同じように何やら騒ぎ出した。

どこのガキだか知らねーが、こう俺側の人間が倒れて騒がれてるのを見ると、気分が悪いぜ。

そのとき、ふと不思議に思った。

その子供の騒ぎ方である。何となく、喜んでいるようには見えな
い。

このガキ、なんだ……ちよつとまで、ここは。

そして、達也はすべてを思い出した。

そうだ……このガキが。いや……俺が……あの時見ていたのは。

ボタン。

達也が倒れると、その傍らにマウスピースが落ちた。

それを見て勝利を確信したバイオレンスは、右手を上げてくるりと踵を返すと、自分のコーナーへと歩き、両腕をロープに置いてレフェリーを眺める。

ワン！トウー！

無理だ。あれを食らって立てるやつなんて――

バイオレンスは息をのんだ。

レフェリーの足元で、グローブを床に押し当て、立ち上がろうとする達也が見えた。

まだ立てるのか。

達也はマウスピースを拾い上げ、ファイティングポーズをとる。

だが、もう限界だろう。

そう思い、再開の鐘と同時に、達也に詰め寄ろうとした瞬間、バイオレンスの足が止まった。

両腕を前に出し、ガードの姿勢をとる達也。そのグローブによって半分隠れた顔から、それまでの物とは違う、凄まじい闘志を感じた。

その目を見て、バイオレンスはなにかを直感した。早く、達也にまだダメージがあるうちに終わらせなければならぬ、なにかを。

バイオレンスは近づき、ガードの上から達也へ連撃をくり出した。グローブによつて防がれてはいるが、衝撃はある程度伝わる。いまの達也にとつてはそれすらつらいはずだ。

休む暇を与えず、的確にガードの開いた場所にも拳を当てていく。不意に達也の右手が上がり、反射的に顔に攻撃を撃ち込んだ。

だが、すぐさま捨て身のことを思い出し、肝を冷やしたが、達也は後ろにのけぞっただけで、攻撃は来なかった。

いまのダメージ状況では、捨て身の攻撃もできなくなっているようだ。

ますます、今が好機だと思い、連撃の手を速めていく。倒れる、倒れる。

打ち込む度にそう願うが、ぐっと足を踏み縛る達也はなかなか倒れそうになかった。

「クソ」

息の上がったバイオレンスは、いったん距離をとった。

すると、肩で息をするバイオレンスに、達也はすり足でにじり寄る。その目は、まるで獰猛な獣のようだった。それに気圧され、バイオレンスもゆっくりと後ずさっていく。

トントンと達也はリズムをとりながら、体を揺らしたただしたくるか。

そう思い、バイオレンスは身構えた。

もう相手も限界に近い。次で決める。

二人はじつと見合った。

10秒……20秒。

永遠とも思える沈黙が、二人の間を通り抜けていく。

それをつまらなく思ったか、リング近くにいた観客があくびをした時、沈黙は破られた。

達也が左にステップを踏んだ後、左のフックを繰り出す。

不意の移動にバイオレンスは一瞬あつけにとられたものの、顔を引きそれをかわした。

よし、これで終わり――

右腕を構え、撃ち込もうとしたその刹那、達也と目があった。

燃え盛るような、鬨気のおびた目。

目があったのは、ストレートを撃ちこむ前のほんの一瞬。だが、その一瞬で脳裏に焼き付くほどの衝撃を、バイオレンスは受けた。

ダメだ……こいつ、やる気だ。

捨て身を察知し、とつさに右ストレートに偽装したフェイントを繰り出した。

前に出るグローブ。だが、バイオレンスの体は右へと移動していき、そのとき、

トン。

そのグローブが達也の顔面に押され、弾かれた。そのまま、達也はバイオレンスへと近づく。

達也はその攻撃を、フェイントだと信じたのか、体を前に出していた。

それは危険な賭けだ。

もし本気のストレートを撃っていた場合、自分からそれを受けに行くことになる。

そんなことになれば、パンチに相手の体重だけではなく、自分の体重も乗り威力は倍増し、確実に立ち上がれないほどの威力になる。最悪、後遺症の残るケガを負う可能性だってある。だが、達也はそれをやつてのけた。

いまだバイオレンスの体は空中にあった。その間に達也は左足を踏み込み、そして、

ドン。

思い切り左足を踏み込み、渾身の力で放った右アッパーが、バイオレンスの体に打ち込まれた。

バイオレンスの両足が一瞬、床から離れ、足がつくとそのままうつ

伏せ倒れた。

「うがあああ」

腹を抑え、のたうつバイオレンスをしり目に、達也はリングロープまで歩き、脇を乗せて体を休ませる。

まだ頭がはつきりしなかった。正直、いま立っているのも、あれだけのパンチを撃てたのが奇跡だと思うほどだ。

レフェリーのカウン트가7になった時、立ち上がるバイオレンスの姿が見えた。

同時にラウンド終了のゴングが鳴った。

達也は手でロープを持ち、体を支えながらコーナーへと戻る。

「達也ー」

本田が達也に抱き着くと、ゆっくりと椅子に座らせた。

力なく座り込む達也を見て、本田は言う。

「達也……お前やっぱ——」

「伊藤文学って……しってます」

達也が突然、そういうと、本田は強く頷いた。

「ああ、伝説のボクサーだよ」

伊藤文学。

JHBC元フェザー級チャンピオンだった男だ。

達也は笑いながら話し出した。

「覚えてますか、チャンピオンに挑戦したときの試合。あんどき、俺はガキだったんですけど、どんだけ攻撃を食らっても、倒されても、引かず前にガンガンいくあの人見て、かっこいいなって思ったんですよ。倒されるたんびに、頑張れ、立てって騒いでました」

本田の顔を見ると、それに同調するかなのような表情が見えた。

それをうれしく感じながら、達也は続けた。

「俺もこんな、周りからすげーって思われるような、勇気もらえるよ。うな、そんな男になりたいくて、ボクサーになったんすよ。だから、まだ終われないっす。あの人なら、こんなところで引き下がらない」

「その気持ちはよくわかるよ。けどな、その人が最後どうなったかは、当然知ってるよな」

「はい」

WLGSC挑戦中に、網膜剥離になって引退した。だが、
「けど、あの人は、きつと後悔してないと思います」
本田はため息をつきながら頷いた。

「そうだな……行つてこい」
「はい」

震える足で立ち上がると、のそのそと中央へと歩いていく。
それはバイオレンスも同じだった。ボディーへのダメージがかな
り効いているのか、足どりが異様に重い。

中央で見合ったとき、二人は互いの限界が近いことを感じた。
このラウンドで終わる。

ゴングが鳴ると、二人は示し合わせたかのように、近づいて間合い
に入った。

もう引くことはできない、ここからは意地の張り合いだ。

最初に手を出したのはバイオレンスだった。左フックが達也の顔
に当たると、それを返すように、達也も左フックを見舞った。

そこからは、ひたすら同じ技の応酬だ。

右フックには、右フックを。ストレートには、ストレートを、アッ
パーには、アッパーを。

二人は避けることなく、引くことなく、ただパンチを撃ち続けた。
だが、不意に均衡は崩れた。

両者体力の限界で、もういくつパンチを撃ったのか、もはや分から
なくなっていた時、達也の右ストレートが当たると、バイオレンスは
ふらつき、一歩だけ後ずさった。

もうろうとする意識の中でも、達也はそれを見逃さなかった。
これで……これで終わりだ。

一歩踏み出し、再度、右ストレートを撃ちこんだ。が、
パン。

バイオレンスの左手が、それを下に弾いていた。

バイオレンスには、その達也の拳は、ほとんど見えていなかった。
無意識の中、幾重も繰り返した技を、本能的に繰り返していた。

達也の体が前によれ、体勢を崩すと、その顔にバイオレンスの右フックが当たった。

視界が揺れ、体の感覚がなくなる。だが、達也は倒れなかった。ギリギリのところで耐えた

攻撃をしたバイオレンスも、前に出した右腕をそのままに、いまにも倒れそうに肩で息をする。

気力も体力も出尽くしていた二人は、その状態のまま、なかなか動き出さなかった。

そんな中、先に動き出したのは達也だった。

右腕を引き、撃ち込もうとした瞬間。

「うおおおー！」

雄叫びを上げたバイオレンスが、最後の力を振り絞り、先に右のストレートを撃った。

それはちやうど、心臓の部分に当たり、達也の体を硬直させた。

体が動かなかった。足の感覚がなかった。息ができなかった。全身がブルブルと震え、いまにも倒れそうだった。

やべえ……とぶ……意識が。

体から力が抜け、前に傾いていく。

そのさなか、最後の最後、途切れかけた意識の底、達也の脳裏に見えたのは、緑内障の少年。

ダン。

倒れる寸前、足が前に出て体を支えた。

見てるよな……きつと。

歯を食いしばり、顔を上げてバイオレンスと見合う。

もうバイオレンスに、動く気配はない。

全身を奮い立たせ、右腕を構えると、

「あああああー！」

雄たけびとともに、右手を前に出した。

それをバイオレンスは正面から受けると、体は後ろに倒れた。

ワン！トウー！

レフェリーが駆け寄り、カウントが始まる。

達也はその場から動かず、じつとその様子を見守った。
スリー！フォー！

立つな、そのまま寝ていてくれ。

ファイブ！セックス！

頼む……そのまま。

そのとき、バイオレンスがゆっくりと立ち上がった。

セブン！エイト！

無表情のまま、静かにレフェリーの方を見て、両手を構え――

ナイン！テン！

コールが終わった瞬間、糸の切れた人形のように、バイオレンスは
その場に崩れ落ちた。

ほんの一間の静粛が、会場を包み、そして、

『うおおおおお！』

リングを揺らすほどの歓声が、会場を響き渡った。

「やったな、達也！」

本田がすぐに駆け寄り、達也を担いだ。

達也はなにも答えることができず、椅子へと運ばれると、天を仰いで
笑った。

伊藤さん……俺はどうしようもなく、ずるい人間です……けど、
ちよつとは、あんたに近づけたかな。

「おい、達也！大丈夫か……返事を――」

歓声と本田の声が遠のいてゆき、視界は閃光に飲み込まれていく。

喜びに満ちた達也の魂は、体を抜け出していくと、ゆっくりとリン
グライトの中へと消えていった。

数年後。

田所は一人、墓の前に立っていた。

そこは緑の多い、海の見える墓地だった。

「気持ちがいいな。練習漬けだったお前には、落ち着けるいい場所
じゃないか」

水平線を眺め、自然の香りを感じた後、田所は続けた。

「お前がやったことは不正だ……だが、少なくとも、お前に手術したことは、間違つてはいなかった……はつきりわかんかね」

「せんぱーい」

遠くから遠野が呼ぶ声が聞えてきた。「依頼者の方が待ってますよ」

「いま行く」

そう返事をした後、墓を一瞥して、遠野の元へと歩いていった。

その墓には不思議なことに、金銀銅、様々なメダルと、いくつものトロフィーが供えられていた。

表と裏

「分かりました、すぐにやらせてもらいます……なに?……もう一つですか」

「へえ……こちらは……娘さん……息子さん……お孫さんですか?……だったら誰——まさか」

「いい家たてたなあ」

机に座る、金髪のオールバックに眼鏡をかけた新庄は、リビングを見渡しながらそう言い、遠野が出したコーヒーをすすった。「下北沢……立地も悪くない」

「何の用だ」

新庄の与太話を無視して、対面に座る田所は要件を聞いた。

「おい、用がなきや来ちやいけないのかよ。俺たち友達だろ」

「腐れ縁、と言うやつだ。特別会いたいことはない」

「そう言うなよ、久々に日本によったから、時間さいてわざわざ来たつてのに」

「だったら、もっと別のことに時間を使ってくれと助かる」

「先輩」

その返事を咎めるように隣に立つ遠野が小声でそう言ったが、まるで聞こえていないかのように田所が無視すると、新庄は「フフ」と笑った。

「変わってないなあ、お前。まあ元気そうで何よりだ。コーヒーありがとう、おいしかったよ。じゃあな」

新庄が部屋から出て玄関の開閉音がすると、すぐに遠野が言った。

「先輩、なんであんなこと言うんですか。お友達でしょう」

「ちゃんと聞いていたか。腐れ縁だ、昔からの知り合いってだけで、友人ではない」

「知り合いですか。何をされてる方なんですか」

田所は新庄が座っていた椅子に目を凝らし、何かを考え込むように間を置いた後、

「人殺しき」

そう小さくつぶやいた。

「こちらです」

依頼者である30代の女性に連れられ病室に入ると、個室で老人が一人、体の各所に様々なチューブを付けられ眠っていた。

茂呂感家、日本の19大財閥の一つだ。

その元長だった男は今、死の淵にいた。

「肝臓がんですか」

田所はその老人を見下ろしていった。

「はい」

老人はすでに数年前から寝たきりの生活で、その間にもほかで何度も手術を行っていたようだった。

肝臓がんが分かったのは一月ほど前。依頼者である娘は何か父であるこの老人を生かそうと、あらゆる病院に声をかけたが、すべて断られたそうだ。

「腫瘍の数も多く、肝機能も体力もない老体には、手術は無理だろうと」

娘は悲しそうにそう語った。

「なるほど、確かにその通りだ」

「ですが、神の手を持つ天才、ブラック・ファックさん、あなたなら」

「私の名前は田所です、ブラック・ファックと名乗った覚えはありません」

「ああ」

娘は動揺して、口に手を当てた。「も、申し訳ありません」

「いえ」

そう答え、田所は老人を見た。

齢77。過去に何度も手術歴がある、寝たきりの人間。肝臓の手術は不可能。

だがそれは、あくまで一般論の話だ。

「いいでしょう、引き受けます。謝礼の方は、成功報酬で1億1451万4千円でどうぞでしょう」

田所がそういうと、娘の顔は一転し、ぱっと明るくなった。

「はい、小切手でお支払いします。でしたらすぐに手術を——」
「なんの話してんだよ。俺も仲間に入れてくれよ——」

突然、聞きなれた声の後ろから田所の耳に入り、振り向くとドアの前に、足を肩幅より少し大きめに開きながらも、右に少しだけ重心を寄せ、サイコパスを思わせる、ぎこちない笑い顔を作った新庄が立っていた。

「新庄——」

とつきに、田所は娘の前に出ると「うげ、臭っ！」といって娘は鼻に手を当てて膝をついた。

田所がハツとしてその娘を見下ろすと、

「気を付けろよ」

と新庄が頬を吊り上げた。「お前の体臭はバイオテロ並なんだからよ」

田所は新庄をにらみつける。

「新庄、お前どうしてここにいる」

「どうしてって、俺が患者の元に来る目的は、一つしかない」
まさか。

「殺しに来たのか、この人を！」

田所が語気を荒げると、新庄は眉を寄せていう。

「言い方が悪いな、救いに来たといってくれ」

「そ、それは……どういう意味ですか、田所さん」

苦しそうに鼻をふさぐ娘は、その話を聞いて立ち上がった。

「こいつの名前は新庄、報酬で人を殺す人間です」

「何度も言わせるなよ」

新庄は田所を咎めるようにいう。「俺が行うのは安楽死だ、ただの殺人じゃない。いいかげん覚えろ」

安楽死、という言葉を聞くと、娘の顔から血の気が引いた。

田所はその娘の顔を一瞥すると、

「誰の依頼だ」

と新庄にきいた。「本人はこの通り寝たきりだ、お前に依頼をする人間はいないはずだ」

「その方の息子。お前の後ろにいる、お嬢さんのお兄さんだ」

田所が後ろを向くと、娘は静かに頷いた。

「はい、兄がいます……でもどうして」

「お兄さんは医者だ。この病院の院長でな」

新庄は歩き、老人の隣に立った。「こんな手術、到底無理だと分かっているんだろう」

「だが、俺ならできる」

田所がそういうと、新庄はその顔を見て、にやりと笑った。

「だろうな」

思わぬ返事に虚を突かれ、田所が固まると、新庄はベッドの奥にある窓まで歩き「ちよつと臭いから開けるよ」といつて開くと、窓枠に手を置いて外を眺めた。

「お前が治せないのは、死体だけだ。きつと手術は成功する。だが、問題はそれだけじゃない」

新庄は振り向いて、窓枠に腰掛けると、老人から伸びるチューブのうちの一つを指さした。「お嬢さん。これ、なんだかわかりますか」

娘は首を横に振った。

「いえ」

「胃ろう、つてものでしてね、物を食う力がなくなった人間が直接、胃袋に栄養を運ぶためにつけるもんなんですよ。これを見ると、わざわざ面倒な食事をしなくてすんでしまい、自然と物を食べなくなる……食べるという機能が衰退するほどにね。どういう意味か分かりますか」

娘が何かを考えるように、視線を床に落とすと、新庄は続ける。

「あなたが毎日食べる美味しい料理を、まったく食べられなくなると考えるといいでしょう。それだけじゃない、送り込まれる栄養素だけじゃ、日に日に体は痩せ、弱っていく。こんな体じゃ男も抱けない。ぐっすりと眠るのだって難しい。希望なんてどこにもない、ベッドの

上で雲でも見ながら死ぬのを待つしかない」

娘は何も答えずに、目を泳がせた。

「やめろー！」

その様子を見て、田所は叫んだ。「この人を惑わせるんじゃない」「俺は事実を述べているだけだ」

田所は自分の体臭が臭わないよう、少し離れた状態で娘の顔を見た。

「娘さん。いいですか、死んでしまえばそこで何もかも終わりです。まだあなたには、伝えたいことや、やりたいことがたくさんあるでしょう。何より、あなたは父親にまだ生きていてほしいはずだ」

「無責任だな」

新庄がいった。「お前は生かした後のことを、何も考えていない」

田所は振り向き、新庄に鋭い目を向けた。

「お前だって、殺した後のことなんて考えちゃいないだろう」

そういうと、新庄はとぼけたように肩をすくめた。

「あの」

そのとき、娘がそうつぶやき、二人は黙って視線を向けると「兄と……相談してきます」とそそくさと病室を立ち去った。

不意に、病室にしんとした沈黙が訪れる。

「77年」

静寂が3分ほど続いたとき、つぶやくように新庄はいった。「よく生きた方だろう。財閥の長だったんだ、もう体も限界だ。老体が悲鳴をあげていらつしやるよ、死なせて差し上げろ」

「黙れ。現代医療は進んでいる、まだまだ死ぬには早い」

「その現代医療が問題だ。ただ生かせばいいってもんじゃないだろう」

「だから殺すのか」

「そうだ」

そう答える新庄に、田所は軽蔑の眼差しを向けた。

それを見て新庄は鼻を鳴らす。

「正確には、この人の息子が、だがな。俺は依頼を受けたに過ぎない」

「だからといって、人を殺すなんて馬鹿げてる」

「息子がか？」

「どちらもだ」

新庄は少し上を向き、長い吐息を漏らした。

「なあ田所、俺とお前は表と裏だ。患者を救いたいという目的は一緒。ただ、過程と結果が違うだけ。まあそれでも、やっぱり俺は裏、日の当たらない日陰者。多くの人間が表であるお前を求めるだろう。だがな、時に裏が必要なきだつてあるのさ」

田所は瞑目して首を横に振る。

「その考え、俺には一生分かりそうにない」

「分からなくていい、生きるか死ぬかのコイントス、どちらの面が上か、決めるのは——」

突然、病室のドアが開き、緊張した面持ちの娘が入ってきた。

二人は口をつぐみ返答を待っていると、娘は深呼吸の後、口を開いた。

「兄と相談してきました……手術をお願いします」

ほっと胸をなでおろす田所に、

「決めるのは、その親族か本人だ」

と新庄は小さく笑うと、肩をポンと叩いた。「おめでとう、表だ」

手術室に入ると、麻酔によって眠る老人の周りには、サポートをする手術室看護師の他に、大量の医者が並んでいた。

その中から、一番若そうな、40代ほどの男が前に出ると、

「今回は、勉強させていただきます」

と頭を下げると、それに続き他の全員が続き頭を下げた。

その男が顔をあげると、その帽子とマスクの間から見える目には、明らかな疑惑の色が見えた。

田所は、なんとなく、その男のことを察する。

「息子さんか」

そう聞くと、一瞬の間の後、男は頷いた。

「はい」

確か新庄が院長だといっていた男だ。

親の力もあるのだろうか、この年齢で病院の院長ということは、それなりに実績あつての物だろう。

「見るのは勝手だが、邪魔はしないでくれ」

そういつて、田所が手術を始めようとしたとき「あの」と息子に呼ばれ振り向いた。

「手術……可能なのですか」

息子は、いまだにそのことが信じられない、といった様子だった。

田所は息子に対し、正面から向き合つた。

「私には、治る見込みのない患者を切る趣味はない」

田所が行う手術は、腹腔鏡手術と呼ばれるものだ。

まず初めにへそのあたりに、10ミリほどの切れ目を入れ、そこに棒状の内視鏡を挿入する。

それにはライトと炭酸ガスを放出する管も一緒になっており、腹をガスによつて膨らませると、ライトが中を照らし、患者の足元にあるモニターに内臓の映像が出力される。

次に、肝臓部、左の腹部に三か所、5ミリの切れ目を三角形になる様に入れる。

そこには棒状の電子メスと、持ち手の部分にトリガーのようなものが付いている、二本の鉗子(ハサミ型をした組織をつまむための器具)を挿入する。

カメラを通した映像を見ながら、この三本で手術を行うのだ。

この方法は普通の開腹手術と違い、患者への負担が軽い。大きく腹を裂く必要がないので、出血も傷も小さくすむ。

だが、メリットだけというわけでもない。

見るのはカメラから送られる映像、器具は棒状のため、普通に手術を行うよりも難易度が高く、執刀医にはかなりの技量が求められる。

電子メスでの熱による傷口の縫合は、縫合不全になってしまうことが多く、さらに少しのミスで出血にもつながってしまうため、それらが要因での合併症によつて、術後に死んでしまう患者もいるほどだ。

当然、手術には慎重を期すため、必然的に手術時間も長くなる。負担が少ないとはいえ患者はすでに死期の近い老体であり、時間をかけられる余裕はない。

腫瘍の数も4つと、かなり多い。普通に考えれば無理な話だ。だが、

——ばかな。

カメラから送られる映像を見て、息子は言葉を失った。

モニターに映る電子メスと二本の鉗子。それらが異質な速さで動きながらも、機械のような的確な動きで腫瘍を切除していく。

「二つ目だ」

田所がそういつて、鉗子で腫瘍を取り出すと、慌ててやってきた看護婦のもつトレイに置いた。

早すぎる。

驚愕する息子の後ろで、他の医者たちの声が上がった。

「なんて早さだ」

「これがブラック・ファック」

「まさに神の手だ……少し体臭が臭うが」

医者誰かがそういうと、カメラに目を向けている田所の眉がピクッと動いた。

「うむ、臭い」

「この臭いは腐った魚か」

「いや、ウンコだろう」

「もはや手術のうまいウンコだ」

「やかましい！」

突然、田所は口を大きく開けて叫んだ。「邪魔をするなら出ていけ——」

見学していた息子以外の医者たちは慌てふためき、蜘蛛の子を散らすように手術室から立ち去った。

「まったく、失礼な奴らだ」

そうぼやき、手術に戻る田所に息子は頭を下げた。

「申し訳ない、代わりに謝罪します」

「別にいい」

田所は明らかに不機嫌そうに、そう返事する。「君が悪いわけじゃない……二つ目」

また腫瘍が取り出される。

その神がかり的な手術を息子は黙って見ていた。

自分との技量の差、それを痛感していると、

「君は、親父さんを安楽死させる気だったらしいな」

不意に田所がそう聞いてきた。口を動かしながらも、手術の速度は全く変わらない。

「ええ……まあ」

息子は答えにくそうに、そう返事をした。

寝たきりで、なにもできなくなつた父親とはいえ、安楽死させるという選択をとつたことに後ろめたさがあった。

「なんだ、仲でも悪かつたのか」

「そんなことはありません。僕がここまでになれたのは、父のおかげです。尊敬しています」

「ならどうして」

田所が問うと、息子は何もいわずうつむいた。

「3つ目だ」

田所が腫瘍と取り出すと、息子は小さな吐息の後に続けた。

「先生……父は限界が近い、もう立ち上がることもできません。ただあの病室で、死ぬのを待つことしかできないんです。この手術が成功しても、もらえる時間はせいぜい1、2年。なら、いつそ一思いに殺してあげた方が親孝行なんじゃないかって——」

「勝手なことというな」

田所は一瞬、手を止めると目線を息子に向けた。「まだ生きてる人間を殺すのが親孝行。そんな馬鹿なことがあるか」

その勢いに息子は一瞬、気圧された。

「なら……どうすればいいんですか」

「話しをしてやれ」

そう答えて、田所は目線をモニターに戻した。「楽しかったこと、悲

しかつたこと。なしえたこと、失つたこと。なんだっていい。とにかく顔を合わせて、話をしろ」

「そんなことでいいんですか」

「死ねば、そんなことすらできなくなる」

当然の反論に、息子は返す言葉が見つからなかった。

「嬉しいことがあれば、共に喜んでくれるだろう。迷つてることがあれば、きつと道しるべになってくれる……それに、お前さんはまだ、親父さんに死んでほしくないんだろう」

息子はゆつくりと頷いた。

「なら、死ぬその時まで一緒に居てやれ。それが唯一できる親孝行だ。これで最後」

最後の腫瘍と取り出すと、メスと鉗子を抜き踵を返した。「後は頼んだ」

「先生！」

田所が足を止め肩越しに後ろを見ると、息子は深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

田所はほほ笑み「私は報酬分の仕事をしただけさ。礼には及ばない」と手術室を後にした。

そろそろだろう。

そう思い、田所が病室を訪れると案の定、老人は目覚めており、じつと天井を見つめていた。

「お目覚めですか」

田所が枕元に立つと、老人は何もいわず、ゆつくりと田所の方に視線を向けた。

「初めまして、あなたの手術をさせていただきました、田所というものです。安心してください、手術は成功しました」

老人は手術が終わってすぐのため、まだ調子がすぐれないのか、かすかに開いた皺まみれのまぶたから見える、小さな黒い点を田所に向けるだけだった。

何を考えているのか、その表情からはうかがい知れない。そんな老

人に、田所は続けて語る。

「あなたは、もう古い先短いかもしれない。それでも、あなたの息子さんと娘さんは、あなたを必要としている。生きてほしいと願っている。まだまだ、あなたには生きる価値がある」

田所は老人の目をじつと見つめた後、軽く頭を下げた。「では、失礼します」

老人を背にし、ドアに向かって足をすすめたとき、

「い」

——ご?」

突然、後ろから声のようなものがし、振り返ると、老人と目があう。その目は、まっすぐでありながらも、今にも泣き出しそうも見えた。なにか。と聞こうとした瞬間、

「父さん！」

突然、後ろのドアが開き、後ろから二人の重なった声が響くと、田所の両脇を息子と娘が通り過ぎ、すぐに老人の元に駆け寄った。

笑顔で手を取り合い、幸せを分かち合う家族を見て、邪魔をするまいと、田所はなにも言わず、すぐにその場を立ち去った。

後1、2年の命かもしれない。だが、その時が来るまで、あの幸せの時間がきつと続くのだらうと、田所はそう信じていた。

あの時まで。

銀色のパウチが沈む鍋の中は、グツグツと煮だっていた。

遠野はさい箸でパウチを取り出すと、すでにご飯をもつてあった皿に中身を注いだ。

もう一つそれを用意すると、両手に持ち、机まで歩くと「どうぞ」とふてくされたように言い、田所の前に置いた。

「なんだその顔は。飯がまずくなる、やめろ」

「もともと、たいして美味しくないでしょう」

そう返して、遠野は田所の対面に座り、もう一つの皿を自分の前に置いた。

「何をいう。ポントカレーは世界で一番うまいんだ」

そういつて、田所はカレーを一口食べた。

「ただのレトルトカレーでしょうが。だいたい、なんで急にポンツカレーが食べたいなんて言い出したんですか、今日は金曜日じゃありませんよ」

「別に金曜日以外、食べないとは言った覚えはない」

「急すぎますよ、もう夕飯の準備もしてたのに……何かいいことでもあったんですか」

「別に」

田所はそう返事をする、もう何もしゃべらないといった様子で、黙々とカレーを食べだす。

「もう、勝手だなあ」

遠野は文句を言い、カレーを口に運ぼうとした瞬間、電話の音が部屋に響いた。

「遠野」

と田所は電話を指さす。

「たまには自分が出てくださいよ」

遠野は椅子から立ち上がりながら言った。「依頼者だったら先輩に代わるんですから」

「それ以外だったら面倒だろ」

それ以外のことなんてほとんどないでしょ、このハゲウンコ。

と心の中で悪態をつきながら、遠野は電話にでた。

「はいもしもし、こちら田所——」

『田所先生ですか！』

突然、切羽詰まった女性の声が、受話器から聞こえてきた。

遠野はビクつと肩を浮かせた後、

「いえ、僕は助手の遠野です」

と返事をする、

『あの、先生に代わってください』

女性は、はやる気持ちを抑えるかのようにそう答えた。

「先輩」

遠野は黙々とカレーを食べている遠野に話しかけた。「電話を変

わってくれと」

「なんだ、どんな依頼だ」

田所は立ち上がって、受話器を受け取る。

「いえ、ただ代わってくれと。なんだか焦ってるようでした」

「焦ってる？」

そうつぶやくと、田所は受話器を耳に当てた。「代わりました、田所です」

田所がそういうと、受話器からは遠野がわずかに聞こえるほどの音量で、二言ほど女性の声がすると、田所の顔が一瞬にして深刻な顔つきに変わった。

「どうかしたんで——」

なにが起きたのかを、遠野が聞こうとしたとき、

「悪い、出る！」

と受話器を置いて田所は玄関に走っていった。

「ちよ、ちよつと先輩！」

遠野の呼び声も聞こえていないのか、何の返事もなく田所は野獣邸から出て行った。

「何もかも急だな、もう」

大変なことでもあったのかな。

疑問に思いながらも、ポンツーカーレーにラップをしようと、キッチンに行こうとしたとき、インターホンの音が鳴った。

田所が病室に訪れたときには、二名の看護婦がベッドの両脇に立ち、息子が老人の上にまたがり、必死に心臓マッサージを施していた。「先生！」

すぐに娘が駆け寄ってくると、田所は聞いた。

「いったい何があったんですか」

「分かりません、急にお父さんの息が止まって」

「息が止まった」

田所が老人に目を向け、近づこうとしたとき、その惨状を見て足を止めた。

息子が体重を乗せ、胸部圧迫を行うたびに、老人につけられた呼吸器が血に染まる。

もう肋骨は砕け、何本も肺に突き刺さっているのだろう。

時に、親族が寝たきりの親などへの延命治療を頼んだ時に、このような光景が見られる。

このままでは、たとえ心臓が動き出しても死ぬのは確実。だが、心臓マッサージをやめてしまえば、脳に血がいなくなり死んでしまう。

ベッドの両脇に立つ看護婦たちは、何もせずただ老人が血を吐くさまを見ていた。どうあがいても結末は同じなのだ。だが、それでも息子は心臓マッサージを続けた。

生きてほしいという強い気持ちだが、やめることを許さず。その気迫に押され、その場の誰も、彼を止めようとしなかった。だが、こんなことを永遠に続けるわけにはいかない。

「もういい」

田所が息子の肩に手を置いたが、やめる気配はない。

「やめるんだ」

田所は肩をゆすつた。「いたずらに体を傷つけるな」

ピタリと心臓マッサージが止まると、息子はその場で頭を垂れ、うなだれた。

「兄さん、でよう」

なにも語らず、体を震わせる息子を、娘が背中に手を添えながら病室から出した。

一呼吸置いた後、看護師たちが死体の服を整えると、呼吸器や？がれたチューブを外し、血で染まった口の周りを綺麗に拭いていく。

その様を黙って見ていた田所は、胸ポケットから今日受け取った小切手を取り出すと、そつと枕もとにある台の上に置いた。

そのとき、偶然見えた、少しだけめくれた布団から出る腕。同時に、湧き上がる違和感。

「失礼」

そういつて、その腕を握り目元に近づけた。

見えたのは真新しい注射の痕。

手術したときには、こんな痕はなかったはずだ。なのになぜ……まさか——

不意に胸の中を満たしたある疑念と共に、田所は病室を出た。

息子に話を聞こうとしたが、廊下の椅子に座る息子ははまだ意気消沈し、娘が隣に座って慰めていた。

ダメだ、まだ話をできる状況じゃ——

突然、ポケットの中の携帯が震えた。

すぐに踵を返ししながら携帯を手に取り、その場を離れながら耳に当たった。

「なんだ」

『あ、先輩』

遠野の声が聞えてきた。『どこに居るんですか、急に出て行っちゃって』

「悪い、いま立て込んでるんだ。切るぞ」

そう答え、携帯を耳から離し、画面を見て切ろうとした瞬間、

『ちよつと、新庄さんが来てるんですよ』

遠野の声が聞こえ、田所は息をのむと、すぐさま携帯を耳に戻した。

「いま、なんていった」

『ですから、新庄さんが——』

「新庄がそこにいるんだな！」

田所は自然と遠野の言葉を遮り、声を荒げていた。

それに驚いたか、

『そう……ですけど』

とうろたえた様子で遠野が答えると、

「すぐ戻る、新庄を絶対にそこから出すな！」

田所はそういい、電話を切って病院の廊下を駆けた。

駐車場に車を止め、階段を駆け上がりドアを開ける。

乱雑に靴を脱ぎ捨て、廊下を歩きリビングに行くと、机でコーヒーを飲む新庄と、少し離れた位置で立つ遠野が見えた。

「先輩」

「すまん遠野」

遠野の言葉に、田所はすぐに返答した。「ちよつと、自分の部屋に戻っていてくれるか」

「え、でも——」

「頼む」

田所の真剣な表情を見てなにかを悟ったのか「分かりました」と遠野はリビングから出た。

それを見送った田所は、新庄の隣に立ち、端的に言った。

「お前だな……あの老人を殺したのは」

新庄はうつとうしいといった様子で眉を寄せると、小さく首をかしげ、コーヒーをすすった。

「何度も言わせるな、俺は患者を救っただけだ」

「ふざけるな！」

田所は力いっぱい机を叩いた。「この人殺しが、なんであの人を殺した」

「俺は私欲で薬は使わん。依頼がなきゃ仕事はしない。お前だつてわかつてるだろ」

「黙れ、あの人の親族は娘と息子しかいない。彼らがそんな依頼をする訳がない、いったい誰がお前に依頼を——」

したというんだ。そういうかけたとき、ある可能性が脳裏をかすめると、言葉をとめ、震える手で口を押さえた。

まさか……そんなはずが。

「生きるか死ぬかのコイントス」

新庄がそういうと、田所はハツとして顔を上げた。

にやけ顔の新庄は、ゆっくりとポケットの中に手を入れた。その一挙手一同を、田所は口を閉ざして見ていた。

「決めるのはその親族か本人。優先順位は——」

田所の額から汗が一筋流れると、新庄はポケットの中から長方形の、ちようど七夕に飾る短冊、あれを一回り大きくしたような紙をとりだし、机の上に置いた。

「本人が上だ」

こ・ろ・し・て・く・れ。

つたなく、形悪く、へたくそな、だが確かにそう読めるひらがなが、そこに書かれてあった。

田所は言葉が出なかつた。頭の中が真っ白になり、全身が打ち震えた。

「俺とお前が病室にいった時、どうやら目を閉じてはいたが、意識はあつたみたいだよ。急に呼び出されたときは驚いたよ、俺のことなんて知らないと思つてたからな」

喜々として語る新庄には目もむけず、田所はただその紙に釘付けになつた。

息がうまくできなくなつた。大きめの呼吸を、少し遅い間隔で何度も繰り返した。

ゆっくりと湧き上がってくる疑問と、そして怒り。

「なんで」

田所は歯を食いしばりながら、その紙に手を伸ばした。「どうして」「おっと」

田所の手がその紙に振れる寸前、新庄はさつと紙を取り上げた。「悪いがこれは証明書だ、お前とはいえ触らせるわけにはいかない」

「それは……本当に本人が書いたのか」

田所は藁にもつかむ思いでそう聞いた。だが、そんなことは田所にも分かつていた。新庄が、そんな偽造をするわけがないということ。を。

それを見透かしているのか、新庄は茶化すように笑つた。

「俺が死にかけの老人をまねて書いたとでも。まあ、そういうこと言われたときのために、ちゃんと動画も撮つてるけど、見るか？」

田所は何も言わず首を振る。

つい数時間前だ。家族三人で幸せそうに手を取り合っていた姿が、いまも鮮明に思い出せる。

なんでだ……みんな、あんたに生きてほしいと思つていたのに……なんで。

「傷心のところ悪いが、実はもう一つあるんだ」

新庄がそういうと、うつろな目をした田所は、

「もう一つ?」

と顔を上げ、小さな声で聞いた。

「そうさ、さっきの紙がもう一枚……誰にあてたもんだと思う?……

これがビツクリ、お前さ」

田所は息を詰まらせた。

最後の言葉を、息子や娘じゃなく……俺に?

「ちゃんと聞いたんだぜ」

と新庄は笑った。「娘か息子か、それとも孫か。全部ちがうって首振ってよ、もしやと思って、お前の名前を出したらそうだってさ。ほ

ら」

と新庄はもう一枚の紙を置いた。

そこには、先ほどの紙と同じよう、つたない字で、す・ま・な・い、と書かれてあった。

すまない……だと?

「謝るぐらいなら——」

最初から、死ぬんじゃない。

虚脱感が全身を巡り、田所はその場に膝をついた。

「命は一つしかないから」

新庄は椅子から立ち上がった。「だからこそ、生きたい時まで生きて、死にたいときに死ぬ……当然のことだろう」

そう言つて、リビングを出る直前、足を止めると。

「コーヒー、おいしかったと、助手の子に伝えといてくれ。じゃあ、またな」

新庄が去ると、ドアの開閉音がした。

田所は一人、フローリングに目を落としていた。

生きたいときに生き、死にたいときに死ぬ……生とは、死とは、そんな単純な物なのか。

また、あの幸せの光景が脳裏をよぎると、田所はぐつと拳を握りしめた。

違う……違う。そんなはずがない。

立ち上がり、廊下を走ると、裸足のまま玄関をでて、階段を下り門を出た。

「新庄―」

名を呼び周りを見たが新庄の影はなかった。それでも、田所は叫んだ。

「余命いくばくかも無く、死にたいと願っている人間がいたとして、その人間に生きてほしいと、思うは愚かか！願うは悪か！叶えるは罪か！俺は……俺はそうは思わない、人間は一人で生きてない、生きてる限り誰かに生かされ、誰かを生かしているんだ……生き続けなければならぬんだ、簡単に死んではならぬんだ……だから、たとえどんな人間でも俺は人を治し続けるぞ……自分が生きるために！！」

生をむさぼる野獣の雄叫びが下北沢の空にとどろくと、新庄は笑った。

「近所迷惑だな、おい」

そうつぶやき、じつと夜の住宅街に目を凝らすと、あの時の、老人との最後の会話が思い起こされていく。

「分かりました。こいつはちやんと、ブラック・ファックに届けますよ」

そういって、台においてある紙を取ろうとしたとき、その老人は死が近いとは思えない俊敏な動きで、手を紙の上に置いて、それを制した。

突然のその行動に息をのみ、

「まだ……何か」

と新庄が聞くと、老人はぎこちない動きで紙をつかみ、そして――

新庄は振り返り、もう見えなくなった野獣邸の方を見ると、

「まったく」

と苦笑いを浮かべ、前に向き直り歩きだした。「ずるい奴だよ」

とぼとぼと、力ない足取りでリビングに戻った田所の目に、不意に老人が残した遺書が目に入った。

なぜ、そうしたのか、自分でもわからない。別に違和感があったわけではない。その行動に、明確な理由は全くなかった。

だが、その紙に秘められた何か、強い意志のようなものに突き動かされるように、田所はその紙に近づき、ゆっくりと裏返した。

裏面には、同じような文字でこう書かれてあった。

あ・り・が・と・う。

野獣邸の一室、田所がたたずむそのリビングには、夜を刻む時計の針だけが静かに響いていた。

決断

「おおーこのランタンいいなあ」

早朝4時、店員に勧められたランタンを持った大坊がそう言うのと、それを目線の高さまで上げながら、少し離れた多田野に見せる。「おい、これどうだ。めちやくちや明るいぞ」

多田野は面倒くさそうに頭を掻き「いいんじゃないの」と適当に返事をする。

「なんだよ、テンション低いな」

「こんな朝っぱらからあげられるかよ。まだ日も出てないぞ」

そう答えながら、多田野は周りを見渡した。

24時間営業のアウトドアショップだが、やはりこの時間帯には自分たち以外にほとんど人はいなかった。

一緒に来ている波多野も、多田野と同じく眠そうにしている。

「なんでこんな時に買うんだよ、キャンプは今日だぞ。数時間後には森の中だ。こういうのは事前に買っておくもんだろ」

多田野が聞くと、大坊は呆れたように首を振った。

「分かってねえな、こういうのはな、直前に買うのが楽しんだよ。使つてるところを想像しながらな」

「そういうもんなのか」

多田野は大坊の持つてるカゴの中を指さした。「それは何に使うんだ」

そこにあつたのはノコギリだ。

「これで木を切つて、それで焚き木をするんだよ。その火で炊いたコメはめちやくちやうまいぞ」

「木炭でいいんじゃないか」

「それじゃあ普通だろ。極力その場の物でやるのが面白いんじゃないか」

なんだそれは。と思っていると、

「確かに面白いかも」

波多野がそう言い、ウイヒ！と奇妙な声で笑い「俺も色々見てくる」

と店の奥に歩いていく。

「ほら、お前も選べよ」

大坊が多田野の肩を叩いた。

「ああ」

そう適当に答え、陳列されてある道具を見ても、キャンプなど一度も経験のない多田野には何がどういうものか、まったくわからなかった。

「もうちよつと楽しそうにしるよ」

その様子を見かねてか、大坊がいった。「せっかくお前のプロ祝いなんだからさ」

「そういえば、そうだったな」

そう呟くようにいいながら、多田野は目の前の虚空に目を凝らした。

多田野がプロ野球ドラフト会議によって、横穴ゲイスターズから指名を受けたのが2ヶ月ほど前のことだ。

高校時代はチーム打率0.196ながらも、その肩でチームを甲子園出場に導き、立教大学に入学してからも括約は止まらなかった。

それが認められ、みごと名だたるほかの選手を差し置き、一位指名を受け取る事ができた。

子供のときから憧れていたプロの世界。その夢が叶うと思うと、言いようのない達成感があった。だが――

多田野はなんとなく、一人でぶつぶつ言いながら様々な品を手に取り大坊に目をやる。

大坊、波多野とは中学からの仲だ。同じ野球部で大学まで、約10年も一緒だったことになる。

チームメイトを超え、家族に近い存在だった。ずっとこいつらと同じチームで野球をやるんだらうと、なんとなくそう考えていた。

だが、現実は違った。ドラフトによって指名されたのは多田野だけで、二人は会社に就職しサラリーマンとなった。

もちろん、それを理由にプロを断るなんて馬鹿な真似はしない。そんなことは、きつと二人も望んでいないだろう。それでも、どこか

すつきりとしめない感情が、いまだに多田野の中に渦巻いていた。

「俺さ」

突然、大坊が目の中の陳列された品を見ながらそういった。「中学だったか、高校だった忘れたけどさ、お前らとずっと野球をやってるんだろうなって、そう考えてたんだよ」

多田野は隣に立つ大坊の横顔を見た後「俺もだよ」と返事をし、視線を前に戻した。

「もちろん、プロで同じチームってのは、奇跡でもない無理だってのは分かってた」

と大坊は笑う。「けどさ、違うチームでも親友として、プロ野球選手として、野球を続けるんだろうなって。でも、結果はダメだった」

「なに言ってるんだよ。まだ分かんないだろ。社会人野球からプロになった人間もいる」

「俺の就職希望先の日本ペイントには野球チームはない……波多野は銀行だけど、ないのは一緒だ」

多田野が眉を寄せて唇をかむと、大坊は続けていった。

「ドラフト、最後の最後まで、たのむ、俺の名前が出てくれて願いなから見てた。結局名前は出なかった。そのとき俺めちやくちや泣いてさ。今までこれだけのために頑張ってきたのに、もう終わつたんだなって。今までの練習なんだつたんだよって……けどさ、思ったんだよ。多田野がプロに行く、それで十分だって」

多田野は何もいわず横目で大坊を見ると、その目には涙が浮かんでいた。

「お前は才能があつた。高校のときも弱つちい俺たちを、甲子園まで引つ張ってくれた……一番強い、一番の親友がプロになってくれた、俺はそれが嬉しい。十分だ。十分すぎる」

大坊は涙目ながらも、薄く笑みを浮かべて多田野に顔を向けた。「多田野、俺はお前を応援する。もちろん、横ゲイのチームを含めてだ。だからさ、勝ってくれ。勝って勝って勝ちまくって、お前がどれだけ強いかわ、プロの連中に知らしめてやってくれ……いまの俺の願いはそれだけだ」

大坊のまつすぐな目からは、震えるような強い思いを感じた。

多田野は「ああ、わかった」としっかりとその目を見て頷いた。すると、大坊は笑いながら目線を横にした。

「悪いな、変なこと言っただけ」

「別に悪くなんてない……なあ」

多田野は少し右に歩きあるものを手に取った。「やっぱり、森っていったらさ」

「なんだ」

大坊が問うと、多田野は右手に持ったものを見せた。

「やっぱり、ハンモックはいるよな」

大坊はニツと口角を上げると、

「分かってきたじゃん」

と多田野の背中を叩いた。

買ってきた荷物を白のバンに積み、大坊は運転席に、多田野は助手席に乗った。

「忘れ物はないか」

大坊がそういうと、多田野は後ろを振り返り、左右のうち右側だけたたまれた後部座席の後ろにある、積み上げられてある荷物を見て、

「いや、ない……と思う」

と自信なさげに答えた。

「まあ、あってもわかんねえか。発進する前に、これ頼む」

大坊はポケットから携帯を取り出し、多田野に渡した。「お前も電源切って適当なところに置いていてくれ」

「え？」

多田野は携帯と大坊を、往復して見た。「なんでこんなことするんだよ」

「キャンプの醍醐味の一だ。社会や周りとの？がりから一時的に離れるんだよ」

「大事な連絡が来たらどうするんだよ」

「なんか心当たりがあるのか？」

「いや無いけど」

「だったらいいじゃん。それに見ないつつつても24時間だけだ。ほら、どっかにしまってくれ」

少し不安はあったが、まあいいと思い、多田野は助手席を離れ、後ろの荷物が積まれたラゲッジスペースに行くと、適当な小物が入っている袋に入れ、助手席に戻った。

「ありがとう、じゃあ出発だ」

大坊がそういうと、バンはゆっくりと発進した。

空は薄暗く、寝静まる民家や、ぼんやりと光を放つ24時間営業の店が、いくつも後ろに流れていく。

他の車もほとんどない道路は、いつもの騒がしさが嘘かのように静かだった。

その様子を、震えるエンジンと、ラゲッジでガタガタと揺れる荷物の音を聞きながら、多田野は眺める。

「いいな、この時間帯。静かだし、なんか……ワクワクする」

多田野がそういうと、大坊は嬉しそうに笑った。

「だろ。俺もこの行く前の運転が大好きだ。お前、キャンプのセンスあるよ」

「まだ森にも入ってないのにか」

「この良さがわかるんなら十分だ」

「そうか……なら俺も趣味にしようかな、キャンプ」

「いいじゃん、俺がいろいろ教えてやるよ」

「ああ……じゃあ、そんな時はさ、お前なこと誘ってもいいか」

プロ野球選手になれば、普通のサラリーマンとは違う生活になり、休みも合わなくなるだろう。

ただでさえ社会人になり別々の場所で働くことになれば、顔を合わせる機会も少なくなる。それでも、親友としての関係が続けていけるのか不安だった。

たまにあう休みにだけ、誘うのは迷惑なのではないだろうか。そんなことを考えていると、大坊は「ハハ」と顔をほころばせた。

「俺以外に、誰を誘うんだよ」

その顔をみて、視線を落とした多田野は、
「それもそうだな」

と静かに頷きながら、頬を緩めた。

アウトドアシヨップから出発して2時間。

日は完全に上がり、雲一つない空は黒色のアスファルトを強く照らしていた。

高速道路から下りて山の中へ続く、右や左にくねくねとうねる道路を進んでいく。

どうやら山と山の間で作られた道路のようで、右手には上へのきつい傾斜に大量の杉の木、左手の下には川とその先に別の山が見える。

「もうそろそろか」

その風景を見て多田野が聞いた。

「ああ」

大坊がそう答えると、多田野は後ろを見た。

「他に車もないみたいだけど、どういうところなんだ」

「俺がいつも行ってる穴場でな、キャンプ好きでもそうそう知ってるやつはいない。いいとこだよ、人の介入が少ないから自然が多くて動物も沢山いる。あんまり人に教えるなよ」

バンがトンネルへと入ると、一気に視界が暗くなり淡いオレンジ色の光に包まれた。

不意に違和感を覚えた多田野は、後ろを向いた。

誰も座っていない左後部座席と、たたまれた右後部座席、ラゲッジの荷物。何も変わっているところはなかった。だが、

「なあ……俺たち何か忘れてないか」

「え？」

大坊は少し首を曲げ、横目で後ろの方を見た。「まあ、なにかは忘れてるんじゃないか」

「いや、そういう軽いもんじゃなくて、もっと重要な——」

多田野はそう答え、顔を前に戻したそのとき、「大坊！ブレーキ！」前に黒い車が見えると同時に、多田野は叫んだ。

咄嗟に前を向いた大坊がブレーキを踏み込む。

タイヤとアスファルトがこすれる耳ざわりな音と共に、体が後ろに押されシートに食い込むと――

バン。

衝突音と同時に、今度は体が前に倒れた。

しばらく、その状態のまま動けなかった。

10秒ほどがたち、ゆっくりと顔を横にやると、ハンドルを両手でつかんだまま真っ青な顔をした大坊と目があう。

「やべえよやべえよ」

大坊がかすれるような声でそういった。「どうする」

「どうするって……謝るしかないだろ」

「お前、財布しまつとけよ」

「財布？なんでだよ」

問うと、大坊は震える指で前の車を指さした。

それを見た多田野は頭を少し上げ、フロントガラスに顔を半分出して前を見ると、黒塗りのセンチユリーが見えた。

その瞬間、それ乗っている人間のことを考えると、さつと頭から血の気が引いた。

ヤクザ？チーマー？少なくとも、一般の人間を想像することはできない。

「お……俺が行ってくる」

唐突に大坊が素晴らしい、シートベルトに手をかけようとする、多田野がその方に手を置いた。

「待て、一人じゃまずいだろ、俺もいく」

「一人でもいい」

大坊は多田野を制するように、目を見てそういった。「お前は大事な時期だろう、俺が話を付けてくる」

多田野は言葉を詰まらせて、肩から手を離した。

大坊のいうとおり、多田野はドラフトによって入団が決まったばかりであり、下手にこの話に介入してしまうと、入団取りやめという事態になるかもしれない。

確かにこの事故は大坊の不注意が招いたものだ。だが、視線をそらさせてしまった多田野には、自分にまったく非がないとは思わなかった。

どうするべきか、迷っているときに、多田野はあることに気が付く。

「なあ大坊……なんか、鳴ってないか」

「はあ？」

シートベルトを外しながら、大坊はいった。「なるって、なにがだよ」

「いや、なんか……後ろから」

二人が同時に後ろのラゲッジを見ると、確かに音が聞こえていた。プロ……プロ……。

その不愉快な高音の機械音は、何かに密封されているのか、こもって聞こえた。音のすぐあとに人の声が出ているが、うまく聞き取れなかった。

その音と声が、連続してなり続けている。

どこかで聞き覚えのある、不安を煽るような奇妙な音。

それを黙って聞いていると、表情を一切変えず大坊がボソリとつぶやいた。

「地震……速報」

ゴゴゴゴ。

どこからか聞こえた地響きの音がすると、小さく車が震えた。

地震――。

息のみ、そう思った瞬間、すさまじい揺れが二人を襲った。

とつさに両手でシートをつかむも、そのすさまじい振動に振り落とされそうになる。

落ちるラゲッジの荷物、次々に割れる蛍光灯、なにかがガラガラと崩れ落ちる音。

ドン、と下から突き上げられるような強い衝撃を受け、車体が微妙に浮いたような感覚を覚えると、強く目を閉じて両手に全霊の力を入れる。

早く……早く収まって――。

ガン。

突然、頭に強い衝撃を受け、全身から感覚が消え失せた。
なんだ……今……なにが……。

何が起きたのかもわからぬまま、多田野は意識を失った。

地震が収まって1分ほどが経っただろうか。

大坊はいまに掴んだシートを離せずに、全身に力を入れた状態で、ぐっと目を閉じていた。

もう、大丈夫か。

少しずつ手から力を抜いていき、手を離れた瞬間、ハッと息を吐いて力を抜いた。

肩で息をしながら頭を下げた後、顔を上げて目を開けると、視界は真っ暗になっていた。

地震ですべての蛍光灯が壊れたらしい。

「多田野……多田野、生きてるか」

暗闇の中、助手席らしき場所にあたりを付け、そう聞くと返事がない。

「おい、多田野」

両手を伸ばし、手探りで多田野を探すと、腕らしき場所に左手が当たった。

「多田野、返事をしろ」

腕を持ち軽く体を揺らしたが、反応がない。

どうなっているのか確認するためヘッドライト、バックライトのスイッチを入れたが、地震で何か壊れたのか反応しなかった。

車内の上部、運転席と助手席の間についてあるルームランプもつけてみたが、こちらもダメだった。

携帯のライトで照らそうと思いポケットに手を入れるが、多田野にラゲッジのどこかにしまわせたことを思い出す。

後ろを向くも当然、真っ暗で何も見えない。

ラゲッジには大量の荷物が散乱しているだろう。もしかすれば、なにかの下敷きになり携帯は壊れているかもしれない。

なによりも、この中で携帯を見つけ出せるのか。

茫然と闇を見つめっていると突如、後ろから微量の光が大坊を照らし、周りの輪郭がほんの少しだけ見えるようになる。大坊はすぐさま前に向き直った。

見ると真つ暗なトンネルの中で揺れ動く一粒の光が、徐々にこちらに近づいてきていた。

すぐにその光は携帯の物と分かり、その後ろに人型の影があった。光が近づくと人影は鮮明になり、色黒で黒いコートを身に着けた、たくましい肉体をした男が映る。

「大丈夫か」

その男がそう聞いてきた。

「はい、俺は大丈夫です」

すぐさま大坊はそう答えて、多田野の方に目をやるが、男の持っている携帯の光が遠いためか、ほとんど姿は見えなかった。「あの、助手席に返事をしない友人がいるんです。中を照らしてください」

男が近づいて中を照らすと、大坊は言葉を失った。

多田野の頭があつた助手席の頭部付近のボンネットが、なにかに押しつぶされるかのように、内側にへこんでいた。

それに頭をぶつけたのか、顔の左半分を血で染めた多田野は意識を失い、前のめりに倒れ、シートベルトによってその体が支えられていた。

「多田野ー」

大坊は叫んで、すぐに多田野の体を抱き寄せた。

そのとき目に入ったフロントガラスは、左側だけ瓦礫や土によって覆われており、助手席のドアのガラスも割れ、大きめの瓦礫がいくつか入ってきていた。

どうやら、トンネルが倒壊し、多田野がいた左の部分に降りかかったようだ。

後ろを向くと、ラゲッジも左側がへこみ、ガラスが割れている。

「意識はあるか」

男が落ち着いた口調でそう聞くと、大坊はハツとして多田野に顔を

近づける。

「ないみたいです」

「とりあえず状態を診たい。その多田野君は動かせるか」

「は、はい」

診る。という言葉で、その男が医者であると理解した大坊は、すぐに多田野のシートベルトを外して、車の外に出した。

「これを持っていてくれ」

多田野を寝かせると男にそう言われ、携帯を持たされた。「できるだけ全身を照らすように頼む」

大坊が頷き、携帯で多田野を照らした。

男が大体、全身を見終わったと思ったところで、

「どうですか、大丈夫ですか」

と大坊は聞いた。

「調べて分かるのは左足と左の鎖骨の骨折だけだ。ほかにも周辺の骨にヒビが入ってるかもしれないが、命に別状はない」

骨折、と聞き大坊はすぐさま質問する。

「先生！そいつ、野球選手なんです。玉を取れなくなるような後遺症とかは？」

「いや、その手のものは、いまのところ見当たらない」

「そうですか」

大坊はほっと胸をなでおろした。

「ところで、君たちは携帯を持っていないか。光を確保しておきたい」

「ラゲッジに携帯とランタンがあるんで、壊れてなければ」

「ランタン？キャンプに来ていたのか」

「はい」

大坊は頷いた。

「ならランタンだけじゃなく、使えそうなものは何かに入れてありつたけ持ってきてくれ。食料もだ。これから必要になるかもしれない」

「分かりました。携帯、お借りします」

大坊は車のラゲッジスペースに入った。

案の定、荷物は散乱しており、足の踏み場もない状態だった。

それらをかき分けながら、バックを見つけた大坊は、左手で中を照らしながら、使えそうなものを探す。

「あのー組み立て式の椅子っていりますか。かなり小さめの物です」
大坊は外の医者に聞こえるようにそう聞いた。

数秒の間の後、

「一応、入れておいてくれ。何が必要になるかわからない。軽めの物はとりあえず入れてくれ」

返事が来ると「分かりました」と答えてバックにそれを入れた。

ランタンと携帯を探しながらも、とりあえず持ち運べるものと食料はバックに入れていく。

「携帯……携帯はどこだよ」

ぶつぶつと言いながら、小さな袋を開けていると、ラゲッジスペースの隅に転がっていたランタンが目に入った。

「やった」

大坊はそれを手に取ると、携帯の電源を切ろうとしたとき、電波が一本もないアンテナが見えた。

「圏外なのか」

思わずそう呟いた。

あんな地震があれば、きつと街にも甚大な被害があり、大変なことになっているはずだ。ここに助けが来る可能性はかなり低い。

つまり、自分たちでこの倒壊したトンネルを抜けなければならぬ。それを見越して、医者は必要なものをバックに入れろと命令したのでらう。

大丈夫なのか。俺たちだけで、ここを抜け出せるのか。

不穏な気持ちで全身を覆い、じつとアンテナの表示を見ていると、

「アッー！」

突然、外から人間の声帯から出たとは思えない、喘ぎ声のようなものが聞こえ、

「ちよつと来てくれー！」

と医者が叫んだ。

ランタンを持った大坊が外に出ると、目覚めた多田野が苦悶の表情

を浮かべていた。

「アッー！いい、痛い……アッー！」

「それで彼を照らしてくれ」

医者 の 指示通り、大坊はランタンを着け、多田野を照らした。

歯を食いしばり歯茎をむき出しにして喘ぐ多田野の顔からは、大量の脂汗が噴き出し、油を塗ったような光沢があった。

「多田野君、私は医者だ」

医者が多田野の耳元で、囁くように言った。「落ち着いて。どこが痛いか教えてくれ」

「首……首が」

「それは左側の首のあたりだな」

多田野が苦しそうに頷くと、続けて聞いた。「足はどうだ。左の足だ」

「足は……分かりません」

「なら他どうだ、痛む場所は」

「背中が、じりじりします」

「そうか。少しだけ触るぞ」

多田野の背中の左側に、医者が手を当てると、多田野は「ウウ」と唸った。

「どんな感じだ」

「と、とにかく痛いです」

「そうか。他にはないか」

多田野が首を振ると、医者は頷いた。

「分かった。すぐに痛み止めを持ってくる」

「お願いします」

医者は大坊からランタンを受け取り、トランクの部分が瓦礫によつてつぶれた、黒塗りのセンチユリーの運転席に入ると、アタツシユケースを一つ持ってきた。

その中から注射を取り出し、なにかを入れて多田野に打ち込むと、表情がゆつくりと柔らかくなつていった。

その後、頭の傷に包帯を巻いていく。

「先生」

大坊が問うようにそう言うと、医者はすぐに答える。

「どうも肩甲骨にもヒビが入っているようだ。大丈夫、後遺症はない。それより、そっちはどうだ、使えそうなものは」

「はい。一応、バックに詰めたんですけど、携帯が見つからなくて」

「そうか。つぶれている可能性もあるものを、これ以上探す必要もないだろう。早くここを移動しよう、そのバックをもってきてくれ」

大坊が車からバックを持つてくると、医者がランタンをもつてそれを担ぎ、多田野は大坊が背中におぶつた。

「悪いな」

医者が謝罪した。「私の体はステロイドで作った偽りの肉体なんだ。あまり力が出せない」

「いえ、大丈夫ですよ。大学時代は野球してたんで、こいつぐらい軽いもんです」

「そうか。じゃあ、どちらに進もうか」

と医者は首を振つた。

前に進むか、それとも後ろに戻るか。

大坊の記憶が正しければ、ここはトンネルの丁度中間、進もうが戻ろうが大差はないはずだ。

「じゃあ前に進みましょうか」

大坊がそういうと、医者は同意して、二人は前へと進みだした。

トンネルの中はいたるところが倒壊し、大小の瓦礫がいたるところに落ちており、時には瓦礫と砂利の山が半分道をふさいでいた。

床には砕けた蛍光灯が散乱し、それを踏むたび音が鳴る。

そんな中を、少し先にいる医者が持つランタンの光だけを頼りに進んでいく。

「そう言えば、自己紹介がまだだったな」

歩きながら医者がそう言った。「私の名前は田所だ。見てのとおり医者をしている」

「僕の名前は大坊っていいいます、大学生です。こいつは多田野っていつて、二か月前にドラフト指名を受けた、バリバリのプロ野球選手

です」

「まだ……だよ」

大坊の背中で、喋りづらそうに多田野がいった。「まだ入団はしてねえ」

「ああ、そうだったっけ」

「だったっけ……ってなんだよ」

二人のやり取りを聞いて「フフ」と田所が小さく笑って言った。

「仲がいいんだな」

「はい」

と大坊が意気揚々に答える。「こいつとは中学から一緒なんですよ。それで、プロ祝いでってことでキャンプに……あ」

そのとき、大坊は田所の車に追突したことを思い出した。「あの……すいません。車、ぶつけちゃって」

「いや、あんなどころで止まっていた私も悪いんだ。バッテリーがいかれてしまっただけ」

「いえ、俺が悪いです。一瞬、前から目を離しちゃって、本当にすみませんでした」

「気にしないでくれ。いまはここから脱出することを考えよう」

時に田所が注意を促しながらも、黙々とトンネルを進んでいくと、大坊の体に疲れが見え始めた。

多田野の体重は80キロある。それを持ち続けるというのは、鍛えた肉体といえど簡単ではない。

「大坊……いけるか」

それを勘づいたか、多田野が聞いてきた。

「大丈夫だ。お前ぐらい軽いもんだよ」

大坊は気丈に答えたものの、その様子からは疲労があるのは明らかだった。

「なあ……もう俺は助からないって言うなら、置いていってくれ」

その多田野の言葉に、大坊は声を荒げた。

「お前、なに言ってるんだよ」

「お前たちの……足手まといにはなりたくない」

「変なこと言うなよ、こうやって喋れてるんだ、全然大丈夫だろ。ねえ、先生」

田所は肩越しに大坊を一瞥した後「ああ」と答え、前に向き直った。ちようどそのとき、少し先からオレンジ色の光が見えてきた。

「どうやら、生き残ってる蛍光灯があつたらしい」

それを見て田所がいった。「そこまで言つたら、少し休憩をしよう」
蛍光灯の下に多田野を寝かると、持ってきたウインナーやパン、ハムなどを食べた。

「しっかし、運がないですよね」

パンを食べながら大坊がそう言った。「こんな時に、こんなところで地震なんて」

「それでもないぞ」

田所がそう返すと「え」と大坊が顔を向ける。

「キャンパーと医者。この状況で助かるには、最高の組み合わせだと思わないか。現にこうやって、けが人を診れて、光があつて、食べ物もある。もし私たちがただの旅行者だったら、こうなつてはない」

「ああ、それもそうですね」

「悲観的に考える必要はない、きつと助かるさ」

そういつて田所は立ち上がった。「少し先を見てくる、君たちは休んでいてくれ」

ランタンを持った田所が歩いてくと、砂利や瓦礫によって遮られていき、その光はすぐに見えなくなった。

「ほら、お前も食え」

大坊がハムを多田野の口元に持っていと、多田野は首を振った。

「いや、いい」

「食わねえと体力つかないぞ」

「俺はおぶられてるだけだ……お前が食え」

「なんだよ、人が親切にしてやってるのに」

ぼやきながら、持ったハムを口に入れようとしたとき、

「おーい！大坊君、ちよつと来てくれ！」

と先の暗闇から田所の声が響いてきた。

「お前、食つてろ」

「だからいら——むぐ」

大坊は何か言いかけた多田野の口にハムを無理やり入れると、立ち上がって田所の元へ歩いていく。

瓦礫をさけ、砂利の壁を横によけると、膝をついた田所がおり、地面に置かれたランタンがその顔を下から照らしていた。

「どうかしたんで——」

そのとき、汚物の臭いが鼻をつき、大坊はとつさに手で鼻をふさいだ。「何ですかこの臭い。もしかして、下水道ですか」

問うと、田所は一問おいて答えた。

「いや、それは私の体臭だ」

「いやでも、このウンコみたいな臭いは」

「体質なんだ」

なんとも言えない沈黙が挟まる。

「あの……すいません」

肩を落とし大坊が謝ると、田所は手を振った。

「いや、気にしないでくれ。こういうのには慣れてる」

「そう、ですか。ところで、なんで俺を呼んだんですか」

「一応、君には説明しておこうと思つてな」

大坊は首をかしげた。

「説明？なんのですか」

「非常に言いにくいが」

田所はそう言つて横に目線を向けた後、また大坊の顔を見た。「最悪の場合、多田野君はここに置いていくことになる」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった。

全身が凍り付いたかのように冷たくなり、その不安を表すかのように黒目がブルブルと震えた。

「どういう……ことですか」

大坊は微かに開いた口から、小さな声でそう聞いた。

「彼がこの先どうなるかは正直わからない。骨折を長時間放置すれ

ば、一部の血管を止めたり内臓を傷つけたりするかもしれない。それに、すでにショック症状が起こっている」

「ショック症状って、いまは普通にしゃべってるじゃないですか」
「現状、外から見える症状がないだけだ。心拍数から考えると、軽いショック症状がある可能性が高い。骨折を放置して、人の背中に背負わせて運んでいるいまの状況は、非常にまずい。いずれ症状が悪化して、呼吸困難や心停止に至るかもしれない」

困惑の表情を浮かべ目線を泳がせる大坊に、田所は続けた。

「何よりも痛み止めだ、実はもう一回分しかない。君は私の車のトランクがつぶれているのを見ただろう」

大坊は頷いた。

「あの中にはそれなりの医療器具や、痛み止めもあつた。だが、私が持っているアタッシューケースの中には、応急処置用の道具しかない。痛み止めも、そう多くは入っていないんだ。もし、最後の痛み止めが切れれば、彼は痛みに耐えられないだろう。そうなれば、運ぶことは難しくなる」

「い、痛み止めは、どれぐらい持つ物なんですか」

「3、4時間だが、彼にはケガがある。内臓の動きも過敏になり、薬が早く切れやすい状態だ。2時間しか持たない可能性もある」

大坊は何も答えられなかった。頭がふらふらとゆれ、いまにも倒れそうになると、ハツとして顔を上げた。

「じゃあ早くここから脱出しないと。こんな休憩してる間にもあいつの痛み止めは――」

「さて」

田所は狼狽する大坊の言葉を遮り、肩に手を置いた。「焦りは禁物だ。下手に急げば、君までケガを負うかもしれない」

焦るな?……そんな、無理を言わないでくれ。

そう思った大坊は、下を向き何度か肩で息をした後、
「なら、なんで俺にそんなこと言ったんですか」

と聞いた。「別に言わなくてもよかつたんじゃない。あいつに知らせないなら、おれも知らないままで、よかつたんじゃないですか」

そういつて顔を上げると、田所の顔はランタンからの光によって、顔に濃い影を作っていた。

その影を響かせるような声で、田所は言った。

「時間が必要だろう……親友を置いていく……その決断には」

「なんだ……ずいぶん元気になったな」

休憩が終わりまた進み始めたとき、多田野がそういうと、大坊はすぐに答えた。

「まあな。休憩してメシ食ったおかげかな」

「大坊君」

田所が前を向いたまま言った。「焦って足を外すなよ。背中には多田野君がいるんだ」

「そうだ」

と多田野。「これ以上ケガしたら……シヤレにならない」

「わかってるよ」

そう答えたものの、自然と足は素早く動き、その気迫に押されるように田所の足も先ほどより少しだけ速くなる。

頭の中では田所との会話が何度も反復されていた。

決断?……ふざけるな。こいつをおいて行けるわけがない。大丈夫、大丈夫だ。きつと……きつとすぐ外に出られる。

だが、その祈りはすぐに打ち砕かれた。

「まて」

そういつて田所が足を止めた。

「どうかしたんで——」

大坊はそこまで言う口を閉じた。

目の前には、行く手を阻む大きな瓦礫と砂利の壁が見えたからだ。「どこか、横から抜けられないですか」

大坊がそういうと、田所はランタンを高く上げその壁を入念に調べ、答える。

「ない……引き返そう」

「そんな」

「落ち込んでる暇はない。行こう」

消沈している大坊にそういつて、田所は来た道に戻りだした。すぐに大坊も後を追う。

「すいません、俺が進むっていったばっかりに」

大坊がそういうと、

「お前は悪くない」

と多田野が答えた。「どっちが開いてるかなんて……誰もわからないだろ」

「そうだ、謝ることはない」

と田所も同意する。

確かに非はないかもしれない。それでも、自分の選択によって多田野の命が危ぶまれていることが、大坊は許せなかった。

なんで……俺はあの時、進むなんて。

後悔はさらに足を速めていく。

「大坊君、もう少しゆっくりと進もう」

それを察し、田所がそう言ったが、大坊はすぐに切羽詰まった様子で答える。

「いや先生、急ぎましよう。また同じ道に戻らなくちゃいけないんです、できるだけ早く出たい」

「急いだところで、そのぶん多く休憩を取るはめになるだけだ」

「休憩も必要ありません。このまま休まずに行きます」

「大坊君」

田所は足を止め、大坊の方に振り向いた。「言っただろう、焦りは禁物だ」と

ランタンだけが照らす暗闇の中、二人は黙って見合った。

田所が正しいことは分かっていた。それでも、どうしても前のめりに、ならずにはいられない自分がいた。

行き場のない感情が、大坊の肩を、腕を、足を、小さく震わせていた。そのとき、

「アツ……ク」

多田野がそう喘ぎだした。「先生……なんか、痛みが」

大坊は首を回して多田野を見た。
目を強く閉じ、額に脂汗をにじませている。

痛み止めが切れだしたのだ。

前を向くと、田所は何かを考え込むように、視線を横にそらせていた。

きっと頭の中では、これからどれだけ歩くのか。そして、その間、最後の痛み止めが持つのかを考えている。

「多田野君、もう少し我慢できるか。連続して痛み止めを投与するのは、体に良くないんだ」

嘘だ。

大坊は田所の表情と、答えるまでの思案を見て直感した。

痛み止めを連続で投与するのは、確かに毒かもしれない。だが、決して行つてはいけない、ということでもないはずだ。ここで使えば、最後まで持たないかもしれないから、多田野を納得させるため適当な理由をつけているだけだ。

「そうですか……分かりました」

多田野が苦しそうにそう答えると、二人は歩き出した。

そこからは、大坊が一步踏み出すたびに、多田野は痛みにもだえ呻き声を漏らした。

大坊にも、こうなつてしまった原因は自分にあると、呻き声を聞くたびに胸がギリギリと痛んだ。

そして、ついにその時がきた。

「アッー！」

多田野の叫び声がトンネルに響くと、大坊の首にかけられた右手が皮膚をつかんだ。

「多田野ー！」

大坊はすぐにその場に多田野を下した。

「痛ッ……いッ」

多田野は悶絶し、歯を食いしばっていた。

背中におぶられているとなると、骨折箇所鎖骨が直に当たることになる。

それによる痛みが尋常ではないものだと、その表情が物語っていた。

「思ったより早いが、やむをえんな」

田所が素晴らしい、アタツシユケースから注射器を取り出し、多田野に痛み止めを投与した。

その間に、大坊は道の先を見る。

まだ車の所にすら、戻れていない。

「先生……これじゃ」

「難しいだろう」

二人が眉を寄せ、言葉を交わしていると、

「何ですか……何か、あったんですか」

と多田野が不思議そうに二人を見ながら聞くと、田所が少し言いづらそうに説明をする。

「多田野君、実は痛み止めは、いまの注射したもので最後なんだ」

「え」

多田野は固まった。「それって……つまり」

「もしいまの痛み止めが切れれば、君はここを出るまで、あの痛みに耐える必要がある」

多田野は言葉を失い、顔をみるみる青くしていった。

それを見た大坊は、その場で両手をついた。

「悪い、多田野……俺のせいだ。俺が進むっていったから——」

「だから………いつてるだろう」

多田野は大坊の言葉を遮ると、一つ深呼吸をしていった。「お前のせいじゃない……偶然、閉じてたんだ、仕方ない……それより、早く進もう。俺の痛み止めが切れる前に」

大坊は「すまん」といって頭を下げると、多田野を担いで、また進みだした。

一度来た道だ、詰まることなく早くは進めたが、車の場所に戻るまでそれなりに時間を要した。

この暗闇の中だと、時間の感覚というのは曖昧になっている。だが、そんな状態でもわかることが一つあった。

このままでは確実に持たない。多田野の痛み止めは、外に出るまで。

「大丈夫か」

田所が振り返り、そう聞いてきた。

正直、体は限界が近い。多田野を背負いながら、かなり歩いたうえ、休憩や食事もろくにとれていない。

見ると田所からも疲労が感じられた。大坊より背負っているものが軽いとはいえ、普段から運動など無縁な人だろうし、ステロイドで作った偽りの体だ、相当無理をしているだろう。だが、

「いけるか」

田所が鋭い目で問うてきた。

そのとき、大坊にはわかった。多田野を助きたい気持ちは、この人も同じなのだ。

息を呑んだ大坊は力強く頷いた。

「はい」

「なら行こう」

「はい！」

二人はその体にムチを打ち、また前に歩き出した。

トンネルには足音をかき消すほどの、二人の荒い息が響いた。

「大坊……もういい」

多田野が懇願するようにいった。「もう……俺を置いていってくれ」

そんな多田野の様子も意に返さず、大坊は足を止めることなく語った。

「なあ、多田野。俺あの時、思ったんだ。ドラフトに選ばれなかった時、今までの辛かった練習は、いったい何だったんだって。でも、今わかったよ。このためだ……お前を背負うために、お前を生かすために、俺は練習をしていたんだと思う。だから神様は、俺に野球をさせていたんだと思う」

「適当なこといなよ」

大坊の背中に、涙が染みる感触があった。

「理由なんてなんだっていい、俺は運ぶぞ、お前を……プロのマウンドに！」

大坊は吠え、さらに足を速めた。田所も、最善の注意を払いながら、その足を速めていった。

どれだけ歩き続けたのか、もう覚えてはいなかった。疲労困憊の肉体と酸欠状態の脳は、様々な感覚を失っていた。

もう限界だった。田所もそうだ、息遣いで分かる。

だが二人は止まらなかった。執念と気迫がその背中を力強く押し続けた。

だが、残酷な現実とは文字通り、巨大な壁となって二人に立ちふさがった。

足を止め、二人は横並びになり前のそれを見上げた。

山なりに積み重なった砂利と瓦礫によって作られた壁。どこにも横道はなかった。

「嘘だろ……こつちもかよ」

失意の底、絶望にした大坊は、震える声で呟いた。

痛み止めは持った。しかし、道が閉ざされていては、なんの意味もない。

両目に涙がにじみ、その場で膝を突こうとしたそのとき、

「まして」

と田所が壁を見上げながらそう言った。

田所がランタンを消すと、壁の頂点から一筋の小さな光が漏れているのが見えた。

「光だ」

大坊がそういうと、田所はランタンをつけ、バックとアタッシュケースをその場に置き壁を登りだした。

トンネルの高さは4・7メートル、下の方はまだ傾斜が緩やかだが、上の方はかなりきつく、最後の方は垂直に近い。

田所は所々出ている瓦礫をつかみながら、その光の場所まで行くと、力いっぱい殴った。

ガラ、という音とともに瓦礫が崩れ穴が開くと、そこから光が差し込む。

「外だー！」

田所はそう叫んで、また殴り穴を大きくした。「通れるぞ」それを聞いた大坊は、笑顔を作ると両手を上げて喜んだ。

「やったあ！出れる、出れるぞ多田野！」

「声がでかい」

多田野はそう答えたものの、その声は笑いを含み、喜んでいるのが分かった。

穴の奥を覗き込んだ田所は、大坊の元に戻ってきた。

「外側は傾斜がかなりきつい。外に出たら、こちらには戻れそうにな
い」

「そういい、ポケットから携帯を出した。「電波も通った。ヘリを呼ぶ、君はバックからヒモになるものを出して、体に多田野君を巻き付けて登るんだ」

「はいー！」

バックの中身をあさりハンモックを見つけると、一つは二人の胴をくつつけるように、もう一つは多田野の膝下を通し、自分の胴に巻き付けた。

ハンモックがしつかりと結ばれていることを確認し、立ち上がり壁を見上げたとき、大坊は思った。

「いけるのか……この壁、多田野をおぶった俺が……登り切れるのか。」

先ほど田所が登ったところを見たが、何も持っていない状態でも、ギリギリといった様子だった。

体には疲労が溜まっている、そんな状態で、この傾斜を上がり向こう側まで行けるのか。

「よぎる不安を、首を振ってかき消した。」

「大丈夫だ、登れる。」

「そう自分に言い聞かせて。」

「いぐぐ」

そういつて、大坊は瓦礫に足をかけた。

すぐによじ登らなければならぬほどに、傾斜は急となった。そこから、穴までの位置は視線の先2メートル。

出っ張った部分をつかみ、足を乗せる。すぐに、簡単にはいかないと分かる。

それでも歯を食いしばり、その壁を上がりだした。

残り1mまで行くと、壁はほぼ垂直になった。

手と足の力だけで、ゆつくりと、少しずつ上がっていく。

穴まで、あと20センチ……10センチ……。

もう少しだ。

そう思ったとき、大坊は体の動きを止めた。

動けない。両手両足、力の限界だ。どれか一つを動かせば、他が耐えられなくなつて落ちる。

上がれ……上がれ！

そう願うも、限界に達した手が離れ、下に落ち着地した瞬間、

「あああつ」

右膝に激痛が走り、大坊は叫んだ。

着地の際、曲がった膝が出っ張った瓦礫に当たってしまった。

大坊は傾斜のない下まで歩くと、膝を抱えその場に座り込む。

「だい……だい、ぼう」

息苦しそうな多田野の声をきき、大坊は肩越しに後ろをみると、顔をゆがめた多田野が見えた。

落ちた衝撃は、体を密着させている多田野にも伝わっていた。

「悪い、多田野」

「いや……いい……それより、お前……登れるのか」

大坊は一瞬、言葉を詰まらせると、

「ああ、いけるよ」

と気丈に振る舞った。「ちよつとコツがいるみたいだ。次は行ける」

そう答えたものの、あの壁を登り切れる映像が浮かばない。

「大坊君」

と携帯を下した田所がいった。「ドクターへりは要請できた。乗り込めれば、多田野君をすぐに治療することもできる。ただ、救援隊は来ない。被害の大きい都心部にみんな向かったらしい。つまり、多田野君は我々が運び出さなければいけない」

「はい、任せてください。絶対に……絶対に登って見せますから」
せつかく無理をしてここまで来たんだ。登れませんでしたでは、終われない。

再度、大坊は壁を登り始めた。

右足に力を入れるたびに、膝に鈍い痛みが広がる。

穴まで、30センチ……20センチ……。

そのとき、次の場所に足を駆けようとした瞬間、自然と手が離れ、また下に落ちた。

緩い傾斜を滑りながらも体制を整え、その場に膝を突く。

「すまん」

大坊は謝ったものの、多田野から返事はなく、つらそうに息をするだけだった。

大坊は見上げ、穴を睨みつける。

こんなに近くにあるのに……なんで。

「クソ！」

大坊は叫ぶと、また壁を登りだした。

30センチ……20センチ……あと、10センチ。

またそこで体が止まった。穴はもう目の前。入ってくる光が大坊の顔を照らしている。

行け……行ってくれ体……登ってくれ……頼む……頼む！

いくら願えど、体はその場から動かず、10秒後に手が離れて落ちた。

大坊は肩で息をすると、壁に手を突き、頭を下げて涙を流した。

「なんでだよ。すぐそこなんだよ……もうちよつとなんだよ。なのになんでだよ……なんで俺は登れないんだよ」

拳を握り、壁を殴った。「クソ！クソオ!!……あともうちよつと……穴が近かったら、俺に力があつたら、登れてるんだよ……あと

ちよつとなんだよ」

涙がとめどなくながれ、頬を伝っていく。

無理なのか……多田野を置いていくしかないのか。そう思ったとき、

「大坊君！」

突然、後ろで田所が叫んだ。「多田野君の様子がおかしい、すぐに下すんだ！」

大坊はすぐに瓦礫から降り、ハンモックを外し多田野を寝かせた。

多田野の顔からは血の気が引き、うつろな目をして、いまにも消え入りそうな呼吸を繰り返していた。

「チアノーゼだ」

それを見て、田所がいった。「ショック症状が原因だろう。強い衝撃を受けて、悪化したのかもしれない」

「い、痛い」

多田野がか細い声で呟いた。

ついに、痛み止めも切れ始めた。

「先生」

すがるような声で大坊はそういつて田所を見たが、壁の穴を見るだけで何も答えなかった。

もう、手がない。

「大坊」

不意に、多田野がいった。「大坊……どこだ」

「ああ、いるぞー！どうした」

大坊がしゃがみ返事をする、多田野は痛みに顔をしかめた後、いった。

「いままで……ありが……どうな」

突然の感謝の言葉。大坊は返す言葉が見つからず、黙って多田野の言葉を聞いた。

「楽しかったよ……お前と一緒にする……野球。お前と出会えて……よかった……本当によかった」

大坊は強く握られた両手の拳を地面につけると、強く歯を食いし

ばった。

脳裏には、多田野と出会ったときからの思い出が流れていく。

「お前は……よくやってくれた……悔いはない」

多田野は大坊の顔をみると、その目から涙を流した。「俺を置いて……行ってくれ」

「うううっー」

大坊は頭を地面につけ、唸り声を上げて泣いた。

ごめん……ごめん、多田野。

口には出さず、何度も心の中で謝った。

親友を置いていかなければならない、自分の無力さに打ちひしがれていると、

「大坊君」

田所に呼ばれ、大坊は顔を上げ袖で涙をぬぐう。

「なんですか」

「多田野君の体重は、何キロだ」

「は、80キロです」

大坊は嗚咽をもらして答えた。

「そうか」

田所は何かを思案するかのように、数秒目線を横にやった後、大坊に言った。「君は言ったな、あともう少しだけ力があれば、あの穴まで行けると」

大坊はその言葉の真意がわからず、首をかしげた。

「は、はい」

田所は深く息を吸い、ゆっくりと吐き出した後、続けた。

「人間の体重の比率は、頭部が8パーセント、胴体が46パーセント、足一本が17パーセント、それが二本で34パーセント……残りの12パーセントが両腕、つまり……多田野君の場合、約10キロ」

突如、語られ出した体重の比率。そして、両腕の重さ。

これからいわれることを察した大坊は、絶句して田所を凝視した。

「先生、もしかして」

田所は鋭い視線を大坊に向け、口を開いた。

「彼の両腕を切断する」

腕を……切断？

常軌を逸したその提案に、大坊は固まった。

確かに10キロ軽くなれば、この壁を登れるかもしれない。だが、
「大丈夫なんですか……そんなことして」

「わからない。出血や、痛みによるショックに耐えられないかもしれない。でも助かるにはこの方法しかない。10キロ軽くなれば、君は穴まで登れるんだろう」

「登れたとしても、腕はどうなるんですか。こいつはプロの入団が決まってるんです」

「難しいだろう。だが、私が必ず治して見せる」

大坊は言葉を返せなかった。

腕を切断して、何事もなかったかのように治すなんて話は、簡単に信じられるものではない。

何よりも、これを決定する権利は自分にはない。決めるのは――

「お願い……します」

多田野がそういった。「切ってください……僕の腕を」

「お前いいのか」

大坊が聞くと、多田野は白くなった唇を緩ませた。

「死ぬよりましだ……それに俺は、信じるよ……先生と……お前を」
「俺を？」

「持ってきてるか……ノコギリ」

大坊が頷くと、多田野は続けていった。「綺麗に切ってくれよ……治しやすいように」

大坊の握られた拳が、じつとりと汗で濡れる。

「俺でいいのか」

腕は投手の命だ。それを切り落とすということは、殺すに等しい。そんな行為を、任せてもらえるほどの人間なのか、大坊には自信がなかった。

だが、多田野は当然のことのようにいった。

「お前以外に……誰に頼むんだよ」

大坊は一瞬の間の後「ハハ」と小さく肩を揺らして笑った。

「それもそうだよな」

そうだ。この場所に、腕を切るプロがいたって、そいつにはやらせない。こいつの腕だ、俺が切らないでどうする。

「先生、やりましょう」

覚悟を決めた大坊は立ち上がり、田所にそういった。

「ああ、すぐに準備をはじめよう」

まず初めに、大坊たちはハンモックの布を5つの長方形に切った。そのうちの二つは丸め、多田野の脇にあてがうと、それをまたハンモックの布で肩ごと強く縛り付ける。

脇には腋窩動脈えきかと呼ばれる巨大な血管があり、これを圧迫することで腕に流れるほとんどの血を止めることができるという話だ。

次に、アタッシュケースに多田野の背中をのせ、両腕をまつすぐに横に広げさせると、肘を組み立て式の小さな椅子に乗せる。

「悪い、ちよつと踏むぞ」

と大坊は多田野の右の肘に足を乗せ、ノコギリを田所に指示された肩の場所にあてがった。

そして、ハンモックの布を多田野の口に入れ噛ませ、暴れないように田所が両肩を押しえつける。

最後に、切断した腕を止血するための包帯を置いておく。

準備は完了した。後は、切断後すぐに治療ができるように、ヘリコプターを待つだけとなった。

この状況では、だた待つという行為だけでも、心臓が高鳴り息がつかまる。

「そう言えば、言い忘れていた」

張りつめた空気の中、不意に田所が口を開く。「私は治療費の高い医者ということで、ある界限では有名でね」

「え？治療費で——」

「ウイニングボールだ」

大坊の言葉を遮り、田所がいった。

野球の最終回。守備側がスリーアウトを取り、試合に勝った時の最

後のボールのことだ。

「ドラフト1位ルーキーが、初試合でノーヒットノーランを達成した場合のそれは、いくらぐらいする」

田所が聞くと、大坊は鼻を鳴らした。

「20億はくだらないんじゃないですか」

「なら19億1900万円だ。金で払えないなら、等価の価値の物をいただく。必ずだ」

「やるしかなくなつたな」

大坊は多田野と見合い、ニツと笑った。そのとき、
「きたぞ」

遠くからヘリの音が聞え、田所がそういうと、大坊に目配せをした。それを確認すると、大坊は多田野の顔を見る。

口には布が詰められている。話すことはできないが、

——頼むぞ。

真剣な表情が、そう言っていた。

大坊は頷くと「分かった」と返事をし、ノコギリを持つ両手を強く握った。

ヘリの音がどんどん近づいてくると、心臓の音もそれに比例して大きくなり、そして——

「いまだ！いけ！」

田所の合図とともに、ノコギリは引かれた。

肉を裂く感触が手に伝わり、血がにじみ出てくると、

「ンンンッ！」

多田野が悲痛な声を上げた。

それに大坊は一瞬の躊躇を見せたが、

「止まるな！」

田所の怒号が飛び、瞬時に我に返った大坊は、手を動かさなかった。ノコギリを引くたびに、多田野は叫び、暴れる。

大坊はそれを見ないよう、必死に切ることに集中した。
ゴトリ。

切り終わると同時に、足元に転がる腕。すぐさま田所はそれを拾い

上げ、切り口に包帯を巻きつける。

多田野の顔は涙と汗でびしょぬれになり、胸を上下させて苦しそうに息をしていた。

その間、大坊は血にまみれたノコギリをじっと見ていた。手に残る切断の感触が消えず、いまにも吐きだしそうになる。

「次だ！」

包帯を巻き終えた田所が、また多田野の両肩を押さえつけ言った。「何をしてる、早く」

ハツとして顔を上げた大坊は「はい」と左の肘に足を置き、ノコギリを肩に置いた瞬間、視界の隅に見えた多田野の顔。青白く、いまにも気を失いそうだというのに、その目は力強い光がともされていた。こいつは覚悟を決めてるんだ。俺が怖気づいてどうする。

「いくぞー！」

大坊が声を張り、ノコギリを引いたとたん、その傷口から細い血が噴き出し、顔にかかった。

視界が真っ赤に染まった。それでも、大坊は止まらなかった。一心不乱にノコギリを動かし続け、左の腕も切断した。

同時に手からノコギリが落ち、大坊は息を荒げて膝に手をついた。

「休んでいる暇はないぞ」

左腕に包帯を巻きながら、田所は言った。「いけ、上がるんだ」「はー！」

大坊は腕のなくなった多田野を背負い、胴体をハンモックで結ぶと、すぐに壁に上り始めた。

瓦礫に足をかけた瞬間、すぐに分かる。

さつきより軽い、これならいける。

軽快に壁をよじ登っていき、すぐに残り20センチの場所まで上がった。

さらに上がり、残り10センチ。ついには5センチとなり、最後、穴に手を伸ばすだけとなったそのとき、右膝に激痛が走り、その場で止まった。

眉間にしわが寄ると、すぐに大坊は鼻を鳴らして笑った。

多田野は腕を切ったんだ……それに比べればこの程度――

「なんともねえよ」

焼ける右膝に力を込め、体が持ち上がると、伸ばした右手が穴をつかんだ。

テレビの音が鳴り響くりビングでは、ソファ―で行儀悪く横になり、ひじ掛けに足を乗せている田所が寝ていた。

ディスプレイにはプロ野球の試合が映っている。

「またつけっぱなしで寝てる」

遠野はぼやいて、机のリモコンを持ち上げると、

「おい、変えるなよ」

と田所の声がした。「見てるんだよ」

振り向くと、寝ていたと思っていた田所は目を開けていた。

「先輩、野球なんて興味あったんですか」

「まあ、最近な」

どうせ見てるのは試合じゃなく、筋肉質のいい男なんだろうと思っただが、遠野は口に出さなかった。

テレビを見ると、かなり一方的な試合になっているようだった。

「すごい強いですね……いま守っている方のチーム」

遠野がそういうと、田所が得意げに答える。

「まあな。何てったって、投手がいい」

「投手がいいって、先輩そんなに野球詳しくくないでしょう」

「野球は詳しくないが、選手はよく知ってる。何たって、俺が――」

そのとき、テレビから異様に興奮したアナウンサーの音が鳴り、田所の声をかき消した。

――横ゲイ対日ホモ！810―0！前代未聞、入団一年目、初試合の多田野数人がノーヒットノーラン達成を達成しました！

クソ雑魚なめくじ

極彩色の鳥が夕暮れの太陽に向かい、声を上げながら飛んでいった。

緑の濃いジャングルの中でそれを見た二人は「もうそろそろ引き返すか」と一人が聞くと「そうだな」ともう一人が返す。

低地熱帯雨林のインドネシアの森には、多種多様な生物が生息しており、中には絶滅危惧種に指定されているものもあった。

しかしながら、個体が少なく、絶滅間近であればある程、希少価値が上がり高く売れる。

二人の背負う膨らんだバックの中からは、鉄のケージが揺れ、ぶつかり合う音と、キーキーと鳴く小動物の声が響いていた。

「なあ知ってるか」

帰り道の途中、後方にいる相方が聞いてきた。「この辺でよ、ゴリラが出るって噂」

「さあ、知らねえな」

「近くの村の奴が見たって聞いたぜ」
「なにかの見間違いだらう」

そう返したものの、それは半分自分に言い聞かせたものだった。

もし本当だとして、遭遇してしまえばまずいことになる。基本ゴリラはおとなしいのでじつとしていれば襲われることはないが、どんな動物でも気が立っていれば何をするかわからない。装備も何も無い現状、最悪死ぬことになる。

それを考えると、自然と体が前のめりとなった。

「おい、もうちよつとゆっくり行こうぜ」

「バカ、お前が変なこと言うのが悪いんだろ。だいたい、その話が本当だったらどうするんだよ」

そう答えながら、止まることなく足を進めていたそのとき、ある違和感に気が付く。

先ほどまで後ろから続いてきていた足音、それがなくなっていた。振り向くと相方の姿がない。

「おい……どこ行った」

呼んでみるも返事はない。早く進みすぎてはぐれたのか。そう思いながら、来た道を戻って行く。

周りを見渡していると、右手の奥、少し先で座り込みながらうつむいている相方が見つかった。

「どうした」

少し声を張るも、相方はうつむいたまま何も答えない。

こけて頭でも打ったか。

草をかき分け近づいていき、手前まで近づいたそのとき、男の体はその場で硬直し、目が見開かれた。

相方の頭は確かにこちらを向いていた。だが、その下にある体は180度後ろを向き、こちらに背中を見せた状態で木によりかかっていた。

うつむいていたのではない。首の骨が折れ、頭が支えられなくなっていただけだった。

なぜこうなったのか。誰がやったのか。

そんなことを考える余裕はなかった。

うまく動かない体を一步ずつ、ゆっくり後ろへ下がらせていく。

三步下がったとき、背中に何か当たった。

頭部と首筋に感じる、動物らしき毛の感触。

壊れたゼンマイ人形のように、ぎこちない動きで振り向くと、自分の背丈を優に超える人型の影があった。

全身を打ちふるわせながら、その影を見上げたその瞬間、

ゴキ。

耳ざわりな音と共に、景色が90度回転すると、男はその場に倒れた。

巨大な影は男のバックを両手で引きちぎり、中に詰まったケージを壊していく。

捕らわれていた動物たちが次々と逃げていくと、少し離れた場所からその影を囲うように、その場に留まった。

すべてのケージを壊し終えると、影は男の腹を裂き、右手を突っ込むと血に滴る臓物を引抜いた。

じっとそれを見つめた後、影はまるで戦利品を掲げるかのように、臓物を掴む右腕を上げると、

「ヴォー……」

大地を揺るがすような力強い鳴き声が、森に轟いた。

インドネシアの北東に位置するアポロンは、都心部から遠く離れた田舎の村だ。

古ぼけた石造りの家が点在する中、丘の上、その村には似つかわしくない、家三件ほどの大きさはある豪邸があった。

「ありがとうございます。本当に、ありがとうございます」

そこから田所が出ると、家の持ち主である男は涙ながらに感謝しながら、後に続いてきた。

「礼には及びません。ないとは思いますが、息子さんに何かあったら連絡をください」

そう言うと、白塗りのレンタカーに乗り村を出た。

時刻は11時。日が暮れるころには都心部に戻り、帰りの便に乗れるだろう。そう思っていた。

ガコン。

車を走らせて2時間ほどが経ったとき、謎の音と共に車体が微かに揺れると、徐々に速度を落としていった。

「クソ、なんだ」

脇に停め、ボンネットを開けるとエンジンが白い煙を吹いていた。

「チクシヨウ。レンタカー屋の野郎、無知な観光客だと思って、整備不十分の物を貸しやがったか」

携帯を取り出すも、基地局が近くにないのか圏外になっている。

ふつつつと沸き起こる怒りを、田所は深呼吸して抑え込む。

こんなところで怒り狂っても、どうにもならない。体力を消費するだけだ。

「フン、車がなんだ、俺は医者だぞ、こんなものなんかより何倍も複雑なもの、毎日のように切ってるんだ。簡単だ、修理なんて」

息巻いてボンネットの中に手を入れ、エンジンの部品を触った瞬間、すさまじい勢いで煙が噴き出て、田所の顔に熱波がぶち当たった。

「アチチツ！アツツイ！」

顔に手を当て、転げまわった後「このオンボロめ」とライトの下あたりを思い切りけると、

「いいいいー」

とそのぶつけた足を抱えながら、片足で車の周りを飛び回った。

痛みが引くと、落ち着きを取り戻した田所は周りを見渡した。

だだっ広い草原に、地平線へと続く砂利道。遠くに小高い丘と、森らしきものも見える。

近くに街や村がありそうな気配はない。

「この野郎」

とぼやき、田所はアタツシケースをもって道を歩き出した。

「帰ったらレンタカー屋を訴えてやる」

綺麗な満月が夜空を照らしていた。

その下ではどこで見つけたのか、いびつな形をした木の棒を突きながら、田所は黙々と力ない足取りで進んでいた。

のどはもうカラカラで、腹の虫は鳴り続けている。しかし、いまだに道の先に見えるのは横一直線の地平線だけだ。

不意に足がもつれ、その場に倒れ込む。立ち上がろうとするも、体が動かない。

クソ……こんなところで――。

木の棒へと伸ばした手が、力なく地面に落ちると、田所は気を失った。

「たいしたケガじゃないからさ。大丈夫だって、安心しろよー」

その軽々しい男の声で田所は目を覚ました。

田所は固いベッドの上に寝かされていた。視界には、所々ヒビ割れている黄土色の天井と、自分の腕につながれている点滴が見える。首を声の方へ向けると、白衣を来た金髪の医者らしき男が、前に座る少年の頭に包帯を巻いていた。

「こーやって、ぱぱぱつとやって、終わりっ！ね、平気でしょ」

医者が頭をなでると、少年は静かに頷いた。

その後ろに立っていた母親らしき女性が、両手を合わせ何度も礼を言うのと、

「気にしないで気にしないで。またなんかあつたら、すぐに来てよ」

医者は軽く返し「じゃあね」と子供に手を振り母子を見送った。

「ここは、病院か」

一通り事が終わったのを見て、田所がそう話しかけると、医者はこちらを向いた。

綺麗な小麦色に焼け、鼻筋の通った日本人らしい顔立ちが見える。

田所を見ると、医者はニツと笑い、白い歯を見せた。

「目覚めたんですか。そーですそーです、ここ病院なんすよ。ちよつとオンボロっすけどね」

「そうか。ありがとう、助かったよ」

「いやいや、礼ならここまで運んだ村の奴にいつてやってください。脱水症状と疲労が重なって気を失ってたみたいなんで、点滴させてもらいました」

「そうか。私の名前は田所だ、君と同じ医者をしている」

「あ、やっぱり日本人っすか。実は俺もなんすよ、豪っていいいます」

豪が出した手を、田所は握った。

「こんなところに日本人とは、珍しいな」

「まあ、いろいろ事情がありましてね。どうっすか、これから昼飯なんと一緒に食べますか。つつても、ポンツカレーぐらいしかありませんけど」

「うまい！やはりポンツカレーは最高だな」

診察室の隣の部屋、机に座り豪と向かい合う田所は、ポンツカレー

を食べると即座にそう言った。

「喜んでもらえてよかったすよ」

「しかし、なんでポンツカレーなんて持つてるんだ。この辺りじゃ売ってないだろう」

「たまーに日本の味が恋しくなる事があるから、定期的にまとめて買うんすよ。そーいや、販売元の会社変わったんすよね、ポンツカレー」

豪はスプーンを口に運びながら聞いた。

「そうだ。だが、味は全く変わっていない。この味を引き継いでくれた会社には感謝しかない。本当なら毎日食いたいところだが、日本にいる助手が味だの栄養だのとうるさくてな」

不意に隣から動物らしき鳴き声が聞こえ、そちらの方を向くとドアが見えた。「いま、何か鳴き声でしたが、気のせいか」

「気のせいじゃないすよ。オレ、本当は獣医なんすよ」

「獣医？」

田所は眉を寄せ、豪の顔を見て聞いた。「獣医がなんでこんなところで、人間相手に治療を」

豪は手を止めると、遠い目をして語った。

「オレ、昔から森が好きで、特にこのインドネシアの森はすごい憧れていたんすよ。沢山動物がいて、きれいで。けど、人間が生み出す汚染物質や、金目当ての密猟のせいで、病気になるったり、ケガを負ったりする動物がたくさんいるって、それ聞いていてもたってもいられなくて、動物たちを助けるためにここに来たんすけど……」

「動物はわざわざ診察に来なかった……ということか」

田所がそういうと、豪は苦笑いをして頷いた。

「まあそういうことす。病気だケガだので、医者の方に向かうのは人間だけっすからね。医者不足だったこの村の人たちは、オレに治療を依頼してきました。まあ、人間も動物です。ほかの動物たちと同じような病気になるし、治療法も大差ない」

「なるほど。それで、人間の治療をメインにしながらも、こうやって動物たちの治療も行っているということか」

田所は動物の鳴き声がする部屋のドアを見た。

中には治療された動物たちが、完治するまで保護されているのだろう。

「立派じゃないか」

田所が言うと、豪は頭をかいいた。

「いや、そんなこと——」

「先生！」

突然、外から豪を呼ぶ叫び声があると、豪はすぐに立ち上がって診察室に向かった。

その後、田所も続いていくと、男が意識のない女性を肩に乗せ、診察台に寝かせた。

「丘から落っこちて、頭うちちまって！先生、お願いします助けてくださいー！」

男が錯乱気味にそういうと

「すみません」

と別の女性が病院に入ってきた。「先生、せきが止まらなくて」

「あ、ちよつと待って——」

「私が診よう」

豪の言葉を遮り、田所はそう言って診察台に寝る女性の元に立った。「君はあつちの女性を診てくれ」

「田所さん、さつき目覚めたばかりじゃ」

「自分の体のことは、自分で分かるさ。さつき飯も食ったし、もう大丈夫だ。それに、君には恩がある。是非とも手伝わせてくれ」

「なら、お願いします」

二人は協力し患者を診ることにしたが、それでも次から次へと、さばききれないほどの患者が、病院へと訪れてきた。

「いつもこんな人数を相手にしてるのか」

田所は患者を診ながら聞いた。

「いえ、今日はいつてもより多いっすね。つっても、月に二度ぐらいは、こんな感じであふれかえることがあります。この辺には、ここしか病院がないっすから」

田所は出入口に並ぶ人間たちを一瞥する。

これが月に二度。そうでない日でも、かなりの人数が来ているに違いない。

そんな状況でも、こうやって医者をしている豪に、田所は感心した。訪れる患者たちの中には、田所ではなく豪に見てほしいと依頼する人間も多くいた。

田所が臭いというのも一つだが、それより大きいのは、豪に対する信頼感だ。

患者たちが豪と顔を合わせたときに見せる笑顔が、何よりもその証だった。

彼がどれぐらいここにいるのかは定かではないが、1年そこらではないことは、それを見れば分かった。

二人は休むことなく働いた。田所を助けたという男もやってきて礼をしたり、村の人間が豪に食べ物を持ってきたりもした。

日も落ちかけ、空がオレンジ色に染まると、患者の数はほとんど減り、2人ほどが並んでいるだけとなった。

そろそろ終わりが見えてきたと思っていたとき、森のそばで倒れていたという男が運ばれてきて、診察台に寝かされた。

その患者を診た瞬間、田所と豪は言葉を詰まらせた。

右腕が内側に折れ、骨が飛び出していた。かなりの出血もある。

「これはここでは手に負えない」

その様子を見て、豪がいった。「車を用意して、近くの大きな病院で手術してもらうんだ」

「いや、ちよつと待て」

と田所。「出血がひどい、ここで応急処置だけでもしていこう。私がつ持っていたアタッシュケースはどこに」

「隣の部屋に置いてあります。食事をした部屋の奥に」

「よし、ならその患者をベッドの上に運んでくれ」

そういって、田所は隣の部屋からアタッシュケースをもって、診察室に戻ったが、患者はベッドに運ばれず、豪は黙ってその患者を見下ろしていた。

「おい、なにをして——」

そのとき、患者を運んできた男が、その手に握っているものが目に入った。

両手で掴めるほどの大きさのケージ。中には全身が茶色の毛に覆われ、丸くつぶらな目が特徴的な、小さな猿のような動物が入り、鳴き声を上げていた。

「それは」

「こいつが倒れていた場所の近くに落ちてたんです」

男はそう答えた。

密猟。その言葉が脳裏をかすめると、豪の背中を見た。

豪は自分のことを獣医だといっていた。こんな過酷な仕事の合間にも、動物たちを治療し、助けている人間だ。そんな彼からすれば、この男はなによりも嫌悪する存在だろう。

だからと言って、治療しないわけにもいかない。

田所は豪の隣に立った。その顔には曇りが見える。

「豪君、患者をベットに運ぼう。治療して、ちゃんと法に裁いてもらおうんだ」

数秒の間の後、

「そうっすね」

と豪は頷いた。「すいません。ちよつとぼーっとしてて」

「いや、いいんだ」

三人がかりで患者を運び、応急処置をおえて男は別の病院へと運ばれた。

その後、残りの患者を診察している間も、豪の表情は晴れなかった。

窓の外は漆黒だった。街灯などないこの村では、夜になるといつもこの調子だという。

光に集まった虫が飛び回る蛍光灯の下で、二人は昼と同じくポンツカレーを食べていた。

「マジで助かりましたよ。田所さんいなかったら、どうなってたか」

豪が感謝をのべると、田所は静かに首を振る。

「私は恩を返したまでだよ。それに、君の本分は獣を治すことだろう。」

本当であれば、私のような人間がこういう場所で医者をするべきなんだ」

「そんなことないっすよ」

豪は窓の外に視線を投げた。「最初は金のためでしたよ。面倒だなんて思いながらも、それもこれも、動物を助けるためって思ってた張ってました。けど、長くここで医者していると、みんなスゲー優しくしてくれて、気が付いたら家族みたいになって、それがうれしくて。いつの間にかここで人間を治療するのが、目的になってました。もちろん、動物を治すつてことも忘れてないっすけどね」

「素晴らしい、豪は白い歯を見せて笑った。

「君は本当に素晴らしい人間だな。日本のボンクラどもに、爪の垢を煎じて飲ませてやりたい気分だ」

「そんな、オレなんてまだまだっすよ」

照れたようにそう返した豪が、カレーをすくい口に近づけると、田所は聞いた。

「話は変わるが、聞きたいことがある……密猟者のことなんだが」

その瞬間、豪の眉が微かに動くと、口に入りかけたスプーンがぴたりと止まる。

豪はゆっくりとそのスプーンを下げ「なんですか」と聞く。

「あの手の患者は、よく来るのか」

「いや、稀っすよ。本当にたまにつす」

「そうか。その時は、君はちゃんと治療をしてやるのか」

「当たり前じゃないっすか」

豪は不機嫌そうに視線をそらした。「犯罪者とはいえケガ人です、やらないわけにはいかないっすよ」

「だが、本当のところはどうなんだ」

見透かすように田所が言うと、豪は一瞬の間の後、長い息を吐いて答えた。

「治療なんてしたくないっすよ。この手で殺してやりたいぐらいっす」

「そうだろうな、と田所は思った。」

あの時、大ケガをしていた密猟者を見下ろす目には、確かに殺意に近い物があった。

「豪君。気持ちはわからないでもない。だが、我々は医者だ、人を裁く権利はない」

「わかってますよ」

豪は語気を鋭く答えた。「わかってます……けど、あいつが捕まえていたのは、スローロリスだったんです」

「スローロリス？」

聞きなれぬ名前に、田所は首をかしげると、豪はその動物について説明する。

スローロリスは、その名の通り動くのが常に遅いのが特徴的な、体長30cm前後の猿だ。

夜行性で主に木の上に暮らしている彼らは、絶滅危惧種に指定されていた。その主な理由は密猟者による乱獲である。

その物静かでかわいい見た目から、ペットとして高い人気を持ち、最終的には一匹50万円ほどで取引されることもある程だ。

貧富の差の激しいこの地域では、それは非常に楽ながらも、とてつもなく大きな稼ぎになるため、密猟者が後を絶たないという。

問題はそれだけではない。

密貿易を阻止し、何とか輸出される前にスローロリスを捕らえられたとしても、大体のものは、ペットとして買われた際に飼い主を噛まぬよう、歯をすべて抜かれているのだ。

一度抜いた歯はもう戻っては来ないため、自然に帰ることはできなくなる。

乱雑に抜かれた歯の傷口から抜歯感染にかかることも多く、感染した場合の致死率は90%。

密猟者の捕獲方法も、木の上で捕まっているスローロリスに向かい、パチンコで鉄球を当て、落として捕まえるという残虐なもので、それによりケガとして残っていた骨折や脳出血により、助けたとしてもかなりの数が死んでしまうそうさ。

そんなスローロリスに対し、豪はかなりの思いがあるようだった。

「本当にか弱い動物なんすよ。しかも、ワシやオラウータンみたいな天敵も多くて、森のおやつだの、クソ雑魚なめくじだの言われてます。このままじゃ本当に絶滅しちゃう。それはみんな知ってるんです……なのに、金のために捕まえるクソ野郎は全く滅らさない」

「警察に密猟者たちを捕まえるよう、頼めないのか」

田所が聞くと、豪は乾いた笑いを浮かべ、首を振った。

「ダメつす。何回も動いてもらうように頼みましたけど、この広大な森でどこに居るかもわからない、密猟者を探す暇も人員もないって。所詮、その程度つてことつすね。スローロリスが絶滅しようが、みんなそんなに興味ないつてことつすよ」

日が過ぎると共に絶滅に近づくスローロリス。それを自分勝手な理由で捕まえる密猟者に、何もしない警察。

豪からは、それらに対する怒りよりも、それを通り越した失望や諦めに近い感情が見えた。

田所はかける言葉が見当たらないでいると「でもいいんすよ」と豪は不気味な笑いを浮かべて言った。

「ちゃんと、裁いてくれるやつはいますから」

意味深なその言葉に、田所は問う。

「なんだ、裁くとは」

「ゴリラです」

「ゴリラ?」

「はい」

豪は頷いた。「この辺りで急に現れたんですよ。そいつが、森に入った密猟者を次々に襲ってるんすよ。森にはよく死体が転がってるつて話です。今日、腕をおられていたやつも、きつとそいつにやられたんすよ」

豪はフンと鼻を鳴らしてつぶやく。「ざまあみろつて感じつす」

「ゴリラ……か」

そうつぶやいた田所は、顎に手を当てた。

確かにゴリラは人を襲うことはある。だがそれは、知らず知らずのうちに縄張りに入っていた時や、気が立っているときだけだ。

基本はおとなしく、心優しい動物だ。次々に人を襲うとは思えない。

「本当にゴリラなのか。別の動物じゃなくて」

田所は聞いた。

「はい。ある襲われた密猟者の証言だと、巨大な人型の影がやってきて、殴られたって。そいつは背骨が折れて、歩けなくなってましたよ」
豪はまるで自分の手柄であるように、顔をほころばせた。「だから、オレが何かする必要はないんす。自然を愚弄する人間は、自然に殺されるんすよ。だから、せめて治療はやってやりますよ、不本意つすけど」

密猟者が自分勝手な行動により、命を落としたり大ケガをする。自業自得であり、そこに何の感情もないが、豪のそれを過度に喜ぶ様子は、少し不思議に思えた。

「確かに、ゴリラが人を襲うのは、ちよつと考えづらいかもしれませんが」

豪は軽く両手を広げる。「でも実際に起きてることなんすよ。オレはね、これは神の罰だと思ってます」

豪が口に出した神という言葉に、田所は眉を寄せた。

「神だど？」

「そうつすよ。元々、この辺りにはゴリラはいませんでした。でも、ある日、急に現れて密猟者を襲ってるんですよ。これは裁きです。森の神から、密猟者たちに対するね」

なるほど、確かにそう考えることもできるかもしれない。だが――

「想像上の存在を信じたくはないな」

田所は答え、皿の横に置いてあるコップを取り、水を一口飲んだ。

「田所さんも医者でしょ。だったらあるはずだ。神の仕業としか思えない現象が起きて、目の前の患者が助かる事が」

豪がそういうと、田所の脳裏に、過去治療を行ってきた患者たちの記憶が巡った。

「確かにある」

田所は断言した。「神の仕業とも思える奇跡は、何度か目にした」
「ならどうして」

「もし、そんな存在がいるとするなら、私の経験上では、人の命を救う神よりも、奪う悪魔の方が多いいということになる。できるなら、そんな存在はいないでくれた方が助かる」

田所がそういつて、皿に残った最後の一口を食べると、豪は「そうっすか」とつぶやき、押し黙った。

「まあ、この類の考え方というのは、昔からいろいろあるもんだ。君の考え方を否定する気はない。神がいると信じる人間は、いまでもたくさんいる」

田所は皿をもって立ち上がった。「ごちそうさま」

「ああ、洗い物ならオレがやるときますんで、先に寝てください。それと、このベッド使ってください」

と部屋の隅にあるベッドを指さす。「オレ、診察室のベッドで寝ますから」

「いや、泊まらせてもらう身だ、私が診察室で寝るよ。ところで、ここから市街地に向かう移動手段はないか」

「明後日にはバスが来ると思います」

田所は食器を台所に置くと「明後日かあ」と困ったようにいった。

「あ、もう手伝いは大丈夫っすよ」

と豪。「今日みたいなのは、毎日続かないっすから。明日は普通に戻ってると思うんで、オレ一人だけでやれます」

「迷惑をかけている以上、私に手伝わないという選択肢はないさ」

「そうっすか、じゃあ明日も——」

と何かを言いかけたとき、豪のポケットから携帯が鳴り、取り出して耳にあてた。「オレは動物たちの世話をしてから寝るんで、田所さんは先に寝といてください……あ、もしもし、佐々木さんですか」

豪は佐々木という人間と通話しながら、ポケットから鍵を取り出し、動物が保護されている部屋のドアを開けて中に入った。

すると、内側から鍵のかかる音がした。

逃がさないためか、それとも誰かが中に入り、菌を出入りさせない

ためか。なんにせよ嚴重だ。

それだけ、ケガや病気を負った動物の治療というのは、慎重を期すものなのだろう。

「人間相手の方が楽かもしれないな」

そんなことを一人言いながら、田所は診察室のベッドで眠りについた。

翌日は豪のいった通り、患者も多くはなく、二人で軽く雑談を交えながら患者を診察していった。

「先生ーうちの弟のあれが、相手のケツから抜けなくなっちゃったんだ」

「分かった、すぐに向かう」

豪はすぐに立ち上がった。「田所さんはここをお願いします」

「ああ、分かった」

田所がそう答えると、豪はすぐに病院を出て行った。

ふむ、暇だな。

窓に映る空を眺めながら、そんなことを思っていると、男が入ってきた。

「先生あの——」

病院に田所しかいないことが分かった男は、首を回して周りをみた。「あの、豪先生は」

「急用でしてね、いまは私しかいないんだ」

「えつと……そうですか」

男は明らかに不安そうに答える。

「大丈夫です、心配しないでください。あなたの信用する豪先生が、私にここを任せただ」

「まあ、そうですね。じゃあお願いします。あの、お尻が痛くてですね」

「分かりました。下に来ているものを脱いで、お尻をこちらに」

下半身を裸にした男はヨツンヴァインになり、田所に尻を見せた。

「肛門性行のしすぎによる裂傷ですね」

田所は顎に手を添えていった。「薬を塗っておきましょう。一週間以内には、痛みも引くはずです。そのままの状態で、待っていてください」

男を待たせ、田所は隣の部屋に入り、手間にある薬棚を開けた。

「肛門性行による裂傷の薬は……どこだったか」

そのとき、コートの内ポケットに入っていた携帯が震え、右手で薬を探しながらも、左手で携帯を取り出し、画面を見る。

そこには遠野と表示されていた。

そういえば、出国するときは今日帰ると伝えていた。それがいつまでたっても帰らないものだから、心配してかけてきたのだろう。

田所はすぐに通話ボタンを押し、耳にあてた。

「もしもし」

『もしもし、先輩ですよね』

「そうだ」

田所は答えながらも、手と首を動かして薬を探す。

『なかなか帰ってこないから、心配しましたよ』

「いやすまん。ちよつとハプニングがあつてな」

『何があつたんですか』

「いや、話すと長い。いまちよつと人を待たせて——」

会話により気が散つたが、奥に手を入れた際、瓶を一つ倒してしまった。「あつ……まあ、とにかく三日以内には戻れる、心配するな切るぞ」

『あ、ちよつと——』

遠野の言葉を聞く前に、田所は携帯を切り、倒した瓶を直したそのとき、

「ん……これは」

その瓶に書かれていた文字を見て、田所は眉を寄せた。

「アナボリックステロイド」

それは田所が昔、愛用していた筋肉増強剤だった。

使用後はちよつとウンコ臭いだけだった体臭が、劇的にウンコ臭く

なり、しかもハゲた。やめておけばよかったと、いまでは苦い思い出なのだが、そんなことはどうでもいい。

なぜ、こんなところにアナボリックステロイドがあるんだ。

ステロイドは、確かに薬として様々な病気に対し使用される。だが、一般的に医療として使われるステロイドは、糖質コルチコイドを主成分とするもので、名前に同じステロイドとあるものの、効果、用途は大きく異なる。

アナボリックステロイドが医療に使われる事は、かなり少ない。使用するにしても、錠剤にして使うのがほとんどだが、瓶に入っているそれは液状で、半分ほどがなくなっている。

豪の見た目からして、彼自身が使用しているとは考えられない。なら、いったいなぜ。

疑問に思い、中の薬を片つ端から見っていくと、様々な医療薬を熟知している田所でも知らないものが大量にあった。

治療用のものではない。憶測だが、アナボリックステロイド同様の、肉体改造に使われるものだろう。

名も知らぬ薬たち。それを見据えた田所には、何か嫌な予感がしていた。

もしや……彼は――

「先生、いつまでこのかつこで待ってればいいんですか」

診察室から聞こえてきたヨツンヴァインになっている男の声で、田所は我に返ると、

「すまない、いま向かう」

薬を手にとると、アナボリックステロイドを一瞥して、診察室に戻った。

早朝、まだ空は薄暗く、村に人が起きている様子はなかった。そんな中、豪は目覚めるとすぐに動物を保護している部屋に入る。

中には大小さまざまな檻に、多種多様な動物たちが入っていた。

一匹ずつ、症状を確認しながら、餌をやっていく。

だいたいを見終わったころ、最後にその部屋の一番奥、布で被された2 m四方の檻を見上げた。

布を手に取り、中をのぞき込むと小型の懐中電灯で中を照らす。「もうそろそろかな」

そういつて、にやりと頬に笑いを含ませると、ポケットから携帯を取り出し、電話をかけた。

「あ、もしもし、佐々木さんですか。どうも、こんちわーす……いや実は、前にもらった薬がもう切れちゃって、もう一箱——」

「やはりそういうことか」

後ろから声がして、とつさに布から手を離し後ろを振り向くと、田所が鋭い視線をこちらに向けて立っていた。

すぐに部屋に入った時、鍵を閉めていなかったことを思い出す。

まだ誰も起きるはずのない早朝だったので、警戒を怠っていた。

「すみません、急用です。後で折り返します」

豪は佐々木にそういつて携帯を切ると、動揺を抑えながら言った。

「田所さん、勝手に入るのはやめてください、ここはデリケートな場所なんすよ」

「すぐに出て行くさ、その檻の中身を見たらな」

「どうしてつすか、田所さんには関係ないでしょ」

「なら逆に聞くが、どうしてその檻だけを隠している。どうして私には見せられないんだ。何よりも」

田所の力強い眼光が、豪を突き刺した。「薬棚にあった、医療用ではない薬たちは何だ」

一間、豪は反論を考えるために、口を閉ざし思索したが、すぐに無駄だと考えやめた。

「どうやら、全部お見通しって感じっすね……分かりました、見せてあげますよ。コイツをね」

豪は布を握ると、下に引っ張った。

宙を舞い、落ちる布。そして、あらわになった檻の中。

それを見た瞬間、田所は目を強く見開いた後、豪をにらみつけた。

「やったな……貴様」

「ちゃんと見てやってくださいよ」

豪は誇らしげに笑うと、振り返って檻を見た。「オレの最高傑作であり……息子っす」

中では体長1mほどの動物が体を丸めて眠っていた。

一見、ゴリラにも見える。しかし、よく見ればその姿は大きく違う。全身を覆う毛は茶色。顔にあるつぶらな瞳に、不規則に発達した両手両足。

スローロリス。それが巨大化したものだった。

「大変だったんすよ、ここまでにするのは。色々な薬を試して、研究して。半年ほど前っすよ、安定してここまでにすることが可能になったのは。筋力骨格を変えた上に、DNAも書き換えてます。生まれる子供も、同じようにこの姿で生まれます。すごいっしょ」

「やはり、密猟者たちを襲っていたのは」

田所が問うと、豪は喜々として答えた。

「ええ、こいつらっす。これでもまだまだ小さい。大きくなれば2mに近くなります。そうなれば、人間なんて一撃っすよ」

「君は、自分が何をやっているのか、分かっているのか」

「分かってますよ。分かっただうえで聞きます。何がダメなんすか。配合による品種改良なんて昔からある話だし、いまだき遺伝子組み換えだっけ普通っす。それと何が違うんすか」

「それはちゃんと目的があつてのものだ、自然を壊すようなことはやっていない」

「オレだっけ同じっすよ、別に自然を壊してるわけじゃない」

豪は声に怒りを含ませた。「壊してるのは、密猟者の方だ。そいつらから守るためには、クソ雑魚なめくじのこいつらを、メチャ強ごりにするしかないんだ！……その何が悪いんすか」

「そうか」

田所はあきれたように目を閉じていった。「ならこい」

「こいつ……どこにつすか」

豪が問うと、田所は振り返って背を向けた。

「外にだ。お前がなにをしたのか、見せてやる」

その意味深なセリフに、豪は一瞬、不穏な空気を感じたものの、すぐにそれを鼻で笑った。

「いったい、オレがなにをしたっていう。」

そう思いながらも、田所に続き、病院の外に出た瞬間、豪は言葉を失った。

足元に転がる、痩せこけた一つの死体。

二足歩行特有の手足と、茶色い毛。どこからどう見ても、それは自分が育てたスローロリスだった。

「これは、森に入つてすぐのところで見つけたものだ」

田所はいった。「ほかにも、いくつか死体が転がっていたよ」

「いったい誰にやられたんすか」

「分からないのか」

そう問われ、豪は首を横に振ると、田所は豪に指を指した。「君がこうしたんだ」

「オレ？」

豪は戸惑いながら、田所と死体を往復してみる。「オレ……オレがなにしたっていうんですか。オレはただ、こいつらを改良しただけで——」

「骨格と筋力だけを改造すれば、他は何も変わらないとでも思っているのか！」

田所は怒号を飛ばし、豪の言葉を遮った。「考えてもみる、この体になれば、こいつらはどうなる。食事はいまのまま、木の実や虫のみで済むのか。この筋肉を維持し、動かすエネルギーはなにで補う」

豪はハツとして口に手を当てた。

当然、食事が変わるのは当たり前だ。だが、そんなこと想像もしてなかった。

田所は続ける。

「必要な大量の栄養を取るために、他の中型動物たちを捕食するだろう。今まで天敵としていた、オラウータンやヘビなどだ。なら逆に、新たに改造された、こいつらの天敵はいったいどこにいる。ひたすら他の生物を捕食し続けるが、こいつらは誰に捕食されるんだ。いまの

こいつらの天敵はなんだ」

そんなものはいない、と豪は思った。

スローロリス達を改良する際、決して他の生物に負けないことが目標だったからだ。

「なら、ちよつと考えればわかるな。こいつらは減ることなく、増え続けるんだ。確かにスローロリスの繁殖力は低い。だが、それは他の小動物と比べた際のものだ。最大2mの大型動物となつたいま、その繁殖力は、同じ大きさの動物を凌駕する。そうなれば、どうなるか」

豪は青ざめると、静かに首を振った。

どうなるか、そう問われるも、その先を考えたくはなかった。

ただ、田所の語る真実を聞いている事しかできなかった。

「捕食対象が完全にいなくなる。その先に待つのは、餓死だ」

餓死。

その言葉は、豪の全身に重くのしかかった。

豪は死体を見下ろす。

こいつは誰かにやられたのではない。食べるものがなくなって、餓死したのだ。

「君は、密猟者達がスローロリスにやられていくのを、裁きだといっていたな。自分が神にでもなつたつもりでいたか。違う、君は神なんかじゃない、悪魔だ。密猟者を懲らしめたいという理由だけで、生態系を崩し、食物連鎖を壊し、スローロリス達を殺した。これからも、まだまだ彼らは死んでいく。君が改造したことによってな」

「そんな」

豪は震える声でそういった。

茫然と目の前の虚空を見つめ、視線を揺らす。

「どう……どうすればいいんですか」

豪はさすがのように、田所にそう聞く。「いまから、あいつらを……スローロリス達を助ける方法はないんですか」

「知らん」

田所は突っぱねた。「私よりも君の方が、はるかにこのスローロリスに詳しいはずだろう。獣医として、改造した者として」

確かにその通りだ。だが、豪の頭には何一つ、解決策が浮かばなかった。

自責の念に、ただ歯を食いしばることしかできなかつた。

「まあ、なにもしなくても、すぐに終わる」

田所は突然そう口にした。

「どういう意味ですか」

「今日、緊急でインドネシアの軍が、ここに来るといふ話を耳にした。巨大化したスローロリスを駆除するために」

豪は息をのんだ。

「どういうことですか……なんで駆除なんて。あいつらが殺してるのは、死んで当然の密猟者だけだ！」

「つくづく想像力がないな。彼らが、密猟者と一般人を見分けて、前者だけを襲っているとも思っているのか」

「え？」

豪はすぐにその言葉の意味を悟り、目を見開いた。「まさか」

「すでに一般人にも被害が出ている。なんの罪もない人間のな。それを放置できるはずがないだろう」

その事実にも、豪は愕然とした。

まさか、何の罪もない人間を殺しているなんて。

故意ではない。それでも、そうなった以上は、自分の責任だ。

拳を握り閉め、足元をにらみつけていたそのとき、突然やってきた軍用車らしき車5台が、音を立てて村を通り過ぎていった。

「まづいー」

それを見た瞬間、豪は叫び、森の方へと走り出した。

なにか考えがあるわけではない。それでも、ただスローロリス達が駆除されていくのを、黙って待つこともできなかつた。

森につく頃には、軍用車から下りた軍人たちが、列をなして並んでいた。その手には、銃器が握られている。

「待ってくれー」

豪は軍人たちの前に立ち、両手を横に広げた。

「貴様、なにをしているー」

奥にいる上官らしき男が声を張り上げた。「そこをどけ！」

「頼む！少しだけ時間をください！オレが——」

そのとき、後ろから草をかき分けるような音がすると、軍人たちが豪に向かい銃を構えた。

振り返ると、木々の間から巨大なスローロリス3体が顔を出していた。

よく見ると、何日間も食事ができていないのか、かなり痩せている。

「待てー！」

豪はスローロリスの顔を見ながらも、軍人の方に右手をだした。

「オレが何とかして見せますから！」

そう訴えるも、いまだにこの状況を解決する方法は浮かばない。

数秒の間、ただ立ち尽くしていると、

「なあ……オレだよ。わかるか」

豪はそう問いかけた。

目の前の3体のうち、どれが豪が育てたものか判別はつかない。

それでも、そのうちの一体でも、自分を知ってる個体がいることを願いながら、豪は語りかける。

「ごめんな、オレが変なことしちゃったから。けど、大丈夫だから。何とかするからさ……だから、だからよ……ゆつくり……ゆつくり……ちに来てくれ」

神様、お願いします。こいつらを、オレに助けさせてください。

懇願しながら、豪が一步、森へ近づくと、なにかを確かめ合うように、スローロリス達は顔を見合わせた。

通じた。

そう思い、豪はそっと顔をほころばせる。

「そうだ、大丈夫だから、頼む……こっちに来い」

スローロリスが豪の方を見ると、豪は軽くうなづいて手招きした。だが、スローロリス達が来ることはなく、3体は同時に両腕をあげ手で頭をつかんだ。そして、

『ヴォー……！』

突然、響いた3体の共鳴するような叫び声。

その両腕には、強く力が込められているのか、ブルブルと震えている。

「なんだ……なんだよ！ いったいなにをしてるんだ！」

豪が叫ぶも、3体は止まることなく叫び続け、そして――

ゴキ、ゴキゴキ。

豪の耳にも聞えた、骨の折れる音。同時に見える、真横に捻転したスローロリス達の首。

3体が倒れ、動かなくなっても、豪はその場を動けなかった。

目の前で起きた、三体同時の自害。どうして、という疑問すら湧き上がらないほどに、豪は放心状態におちいった。

「なにを突っ立っている」

いつの間にか、隣に田所が立っていた。「いくぞ」

「いく？」

豪はいまにも消え入りそうな、かすれた声で答えた。「なにをしに」後ろを見ると、軍人たちも何が起きたのかわからず、その場に立ち尽くしていた。

「全てを見届けにだ。こい」

言われるまま、田所についていき、森に入る。

すぐに見えたのは、そこら一带に転がる死体と、いまから自害しようとうと、向き合いながらも両手で頭を掴み、叫んでいる4体のスローロリス。

「やめろおー！」

豪は叫んで駆けていくも、すぐさま首がねじられ、次々とその場に倒れた。

「あ……ああ」

豪は膝をつき、死体に手を添える。「なんで、こんなことを」

理由は分からない。しかし、彼らはなにかに突き動かされるように、死んでいく。

「悟ったんだろう」

豪を見下ろして、田所がいった。

「なにをですか」

田所は周りを見渡すと、目を細めて答える。

「自分たちに……もう居場所がないということを」

「居場所」

豪はつぶやいて、一帯の死体を見渡した。

それを奪ったのは、まぎれもない、自分だ。そう思うと息が苦しくなり、強烈に胸が締め付けられた。

そのとき、無意識に豪の目線が、ある場所にいった。

そこには何もなかった。だが、まるで吸い寄せられるように、豪はそこへ向かい歩いていく。

少し進み、開けた場所が目に入ると、豪は静かに涙を流した。

そこには餓死している死体が、いくつも横たわっていた。そして、その死体達のそばに必ず1体、小さなスローロリスの死体があった。

共に横になっているか、抱き寄せているか、上に覆いかぶさっているか。状態は死体によってさまざまだ。だが、それらが母子であることは一目瞭然だった。

ヴォー。

不意に聞こえた、かすかなスローロリスの声。

目をやると、木にもたれかかっている母親らしきスローロリスが見えた。

そのうつむいている様子からして、母親はすでにこと切れている。しかし、その両腕によって大切に持ち抱えられた子供は、体を上下させながら、いまでも消え入りそうな呼吸を繰り返していた。

もう、死ぬのは時間の問題だ。

あまりにも悲惨な光景に目を閉じ、顔を横に向けると、

「目をそらすなー」

田所のその声に、ハツとし顔上げ、田所と目を合わせた。「君がやったことだ……見届けろ、すべてを」

豪は嗚咽をもらして下を向くと、顔を正面に向けた。

留まることなく涙を流しながらも、全身に力を入れ、じつとスローロリスを見つめる。

すると、子供が手を持ち上げ、すつと豪の方へと伸ばした。

目がよく見えず、同じスローロリスだと間違えたのか。それとも、人間だと分かったうえなのか、それは定かではない。

ただ一つ分かるのは、助けを求めているということだけだった。

豪は子供へと手を伸ばすと、ゆっくりと近づいていく。

その手が触れようとした瞬間、子供の手が落ち、眠る様に目を閉じると、そのまま動かなくなった。

豪は伸ばした手を力強く握ったあと、母親を両腕で抱き、その子供のいる胸に顔を押し付け、大声で泣き叫んだ。

その様子を、何を思ったか、枝の上から、木と木の間から、茂みの陰から、動物たちがじっと見ていた。

咎人が泣くのをやめる、その時まで。ただじっと。

「あつちです」

女性がそういつて指さすと、確かにその先にはバス停のようなものがあった。

「ありがとう」

礼を言い、田所はバス停へと向かう。

歩きながらも、肩越しに後ろの小さな村を一瞥した。

「せいぜい、罪を償うんだな」

前に向き直り、視界の隅に少し先にある森が入ったそのとき、あるものを見つける。

もしや。

そう思い、足早に森に入り、草をかき分けていくと、逃げる動物を両手で捕まえた。

「ヴォー、ヴォー」

田所の手には体長10センチほどの、筋肉が付いたスローロリスがつかまれ、その手を振りほどこうと体を揺らながら声を上げていた。

どうやら、唯一の生き残りのようだ。

それを見て、田所は考えた。

もうこの森に、こいつの食料はほとんどない。育ててくれる親も、同じ種の仲間もない。餓死するか、それを逃れても、別の動物に食わ

れるか、人間に殺されるか。何にせよ、こいつに未来はない。なら――

田所は左手をスローロリスの頭に当てた。

「いっそ、ここに殺してやるのが情けか」

目を閉じ、すつと息を吸い、首をねじ切ろうとした瞬間、力を抜いて鼻から息を吐くと、その場にスローロリスを落とした。

「ヴオーー」

スローロリスは鳴きながら、その場を去っていく。

「情けだと、笑わせる。そんな理由で私が……いや、私たちが、彼らを殺す権利なんてない」

田所は踵を返し、バス停に向かうさなか、一人思った。

この地球上では、これまでに色々な生物が、自然の流れの中で環境に適応できず絶滅していった。

理由は様々で、繁殖法に難があったか、突然の地殻変動に遭遇したか、もしくは、他の動物に殺され尽くしたか。

人間も動物だ。

その人間の傲慢により、スローロリスという種が滅ぶというのであれば、それもまた、自然の流れの一つなのかもしれない。

永久（とわ）に 永久に

寝静まった下北沢の住宅街に、青年達の笑い声が響いた。

時刻は夜3時。明日のことなど考えもなく、6人組は適当なことを言い合いながら公園でたむろしていた。

タバコを吸い、笑い声に体を揺らすと、腰につけたアクセサリーが音を鳴らす。

そろそろ話もなくなってきたとき、不意にその6人組のリーダー格の男が、公園に入ってくる一人の男を見た。

上下白の服に、金髪。下を向きながら、トボトボとこちらに歩いてきてる。

見るからに日陰者。この男たちは、そんな人間を見極め、しいたげるのが得意だった。

リーダー格が立ち上がり、他の全員に向かい、人差し指を上を揺らすと、続いて立ち上がっていく。

他の5人も、今からやることを理解したようだった。

へらへらと、薄ら笑いを浮かべながらその男の方へと、全員が歩いていく。

街頭もなく、薄暗い場所でその男とすれ違おうとした瞬間、

「おっと」

リーダーはそういつて、男に詰め寄り肩をぶつけると、相手はその場でしりもちをついた。

「なにやってんだよ、危ねーだろ」

見下ろしていうと、後ろで5人がケラケラと笑う。

何か言い返してくるかと思いきや、怖気づいたのか、男は顔も上げないまま立ち上がろうとしなかった。

「なにシカトしてんだよ」

胸ぐらをつかみ、強制的に立ち上がらせると、無表情の顔が見えた。

おびえているのだと思っていた。だが、そこからは一片の恐怖も感じられない。

そのことに腹が立った。まるで、自分が舐められているような気が

した。

「お前気持ちわりーんだよ！」

罵倒すると、自然と握られた拳が相手の顔に飛んだ。

男はよろめき後ろに後ずさる。それでも、なにもいわない。

「なんとか言ってみろよ、おい」

そう吐き捨てたとき、

「いつもそんなことしてるの」

男がか細い声で言った。

「はあ？」

そういい、ハンと鼻を鳴らす。「ああ、そうだよ。お前みたいなキモい奴ブン殴ってんだよ。なあ、お前サイフ持つてるか、よこせよ」

「そんなことしてて、楽しい？」

質問に答えず、逆に質問を投げしてきた。

それに苛立ち、みぞおちに蹴りを入れると、男は呻いて腹を抱えた。

「ああ、本当に楽しいわ。最高に楽しい」

男は二度、せきをした後「楽しかったんだね……よかった」といった。

よかった？

「何がよか——」

よかったんだよ。そう答え、また殴ろうと拳を上げたとき、ニイッと頬を吊り上げて笑う、不気味な男の顔が見え、体が固まった。

この暗闇だというのに、その顔は自ら発光でもしているかのよう
に、ハッキリと見えた。

その笑顔のまま、男は言った。

「じゃあ……死のうか」

「お久しぶりです、田所先生」

下北沢病院に入るや、ロビーで待っていたのか石井はすぐさま田所の元へと歩いてきた。

「ああ、久しぶりだな。ところで話とは」

「それは中に入ってからお話しします」

石井がそういつて病院の中へと歩き出すと、田所も後に続く。

「最近の救命救急はどうだ」

田所は聞いた。

「大変ですよ」

石井は笑って答え、エレベーターに乗った。「もう毎日てんやわんやで、いますぐに連絡が来たっておかしくない」

「その割には、楽しそうにも見える」

「やりがいがありますからね」

目的の階につきドアが開くと、ずいぶんと静かな廊下にでた。

他の患者の気配はない。普通では出入りしない、特別な場所のようだ。

そこをさらに奥へと進んでいく。

「そういえば、二月ほど前この辺りで大量殺人事件があったそうだな。患者たちは君の所に来たんじゃないか」

田所が言うと、石井はぴたりと足を止めて振り返った。

「実は、いまからする話は、それと関係があるんです」

そう答え、そばにあるドアを開き中に入った。

小さな部屋だった。中央に長椅子が一つと、その周りに椅子が4つ。そして奥にはホワイトボードが置いてあり、それを見た瞬間、思わず声がでる。

「なんだ、これは」

ゆっくりとホワイトボードに近づきながら、そこに貼られたいくつかの画像を凝視する。

左に一つあるのは頭部を横から断面図で見たMRI画像。

そこに映っている脳は、一般のそれとは大きく違う部分があった。

脳は大きく三種類に分けられる。

脳の大部分、8割強を占める大脳。

うなじあたりにある小脳。

大脳から脊椎につながる脳幹。

その大脳と小脳の間、いままで見たことがない、ピンポン玉ほどの塊が見えた。

右には頭上から見た脳の断面図、CT画像がいくつか張られていた。

「少し前に起きた大量殺人のことですが」

石井がいった。

「ああ、確か、ここからそう遠くない公園で、6人の少年たちが無残な姿で発見された」と

「そうです。このCTとMRIは、その殺害現場にいた犯人と思われる人間の物です。年齢は14歳、下北沢に母親と二人で住んでいました」

「14？そんな子供がやったのか。たった一人で」

「ええ。しかも、その行動は常軌を逸したものです」

石井は机に置いてあったファイルを手に取り、開いた。「6人の少年を殺害し、その遺体と肛門性交。その後、彼らのペニスを切断し、自らの肛門に挿入し、自慰行為を行っています」

あまりにも異質な行為に、田所は啞然とし、口に手を当てた。

「信じがたいな、何かの間違いじゃないのか。そもそも、いったいどうやって、たった一人の少年が6人も人間を殺害したというんだ」

「超能力ですよ」

田所は一間、口を開けて固まり「ちよ、超能力」と首をかしげた。「サイキック、PSI、神通力。呼び方は様々ですが、まあその類ですね」

「冗談だろう？」

「僕もそう思っていましたよ、この目で見るまでは」

田所はじつと石井の顔を見る。

「見たのか」

問うと、石井は頷いた。

「はい。彼がここに来た時に、様々な物を浮かせてみせました」

「手品かなにかでは？」

そう聞くと、石井は首を振る。

「彼は八王子留置所から、警察に連れてこられたんです。どうやって種を仕込むんですか」

確かにその通りだと思い、田所は黙った。

「まあなんにせよ、僕はこの脳にある未知の物体が、彼の奇行と超能力に作用しているものだと考えています」

「超能力に関しては分からないが、少なくとも奇行についてはそうだろうな」

田所はじつとMRIの画像を見る。

通常の場合、脳と頭蓋骨の間には微かな隙間があり、そこには脳脊髄液という液体で満たされている。

だが、目の前にある画像には、その隙間が見当たらない。

大脳と小脳にある謎の物体が、周りを押し、隙間を埋めてしまっているのだ。

当然、脳は圧迫され、それに伴って脳機能障害がおこるはずだ。

「症状は」

田所が問うと、石井は手元にあるファイルのページをめくった。

「体調によつて様々です。普通に過ごしているときもあれば、軽いもので頭痛、吐き気。時に重くなると、記憶障害、認知思考情動障害、情緒交流不全症、翻弄性幻覚妄想症候群などが見られました。これは超能力が使えだしてから発病し、日に日に悪化しているようです」

「深刻だな。しかし、どうしてこれを私に。興味深い話だが、わざわざ呼び寄せてまで聞かせる話でもなかったんじゃないか。摘出なら君でもできるだろう」

「おっしゃる通りなんですけど、一つ問題がありました。この患者、名をみる君というんですが、手術を拒否しているんです。どうも、自分を観察対象と見ている人間には、手術されたくない」と

「観察対象？君は彼の命を救いたいんじゃないのか」

石井は小さく吐息を吐くと、唇を舐めてファイルを閉じた。

「そうです。でも人間の感情というのは、常に一辺倒というわけではありません。例えば、あなたがこれから昏睡レイプをするとしましよう、対象は二択です、一人はジム通いのガチムチ、もう一人はプール通いの細マツチョ。先生ならきつと、後者を選ぶでしょう」

田所は頷く。

「その通りだ、異論はない」

「でも、だからといってガチムチが嫌いなわけではない、なんだったら好きでもある。だから、ガチムチもいいけど、やっぱり細マッチョがいい、とおもいながら選択するわけです。つまり、言葉では細マッチョといいつつも、その時のあなたの感情は、すべて細マッチョに向いているわけではない」

「要は、君の中にはみのる君に対する観察対象としての興味が、完全にはないと言い切れない、ということか」

田所がそういうと、石井はホワイトボードの前に立った。

「目の前にあるのは、人智を超えた存在です。原因であると思われる謎の脳。それを見たいと思ってしまうのは、人間の性さがというものでしょう。私は、みのる君に対する超能力者としての興味を、完全に消すことはできません。超能力によるものは分かりませんが、彼はそのことを敏感に感じ取ってきます。きっとこの世界に彼を手術できる医者はいない、ただ一人、あなたを除けば」

「買いかぶりすぎだ。私も人間だよ」

「でも先生なら、彼を助けるためだけに手術ができるはずですよ。お願いします、先生。みのる君を助けてやってください」

留置所とは警察署内にある逮捕された人間が、最初に捕らわれる場所である。

ここから、取り調べなどの捜査を行い、のち裁判のため拘置所に送られる。

普通であれば被疑者が罪を認めれば1日程度で拘置所に送られることになるが、みのるは罪を認めているにも関わらず、いまだにこの留置所にいた。

みのるに対する罪は殺人罪と遺体損壊罪に当たるが、簡単に裁判へはいけない理由があった。

まず一つに責任能力の有無だ。

刑法第39条にはこうある。第一項、心神喪失者の行為は罰しない。第二項、心神耗弱者の行為はその罪を減輕する。

つまり、犯罪を犯した人間の心神に何らかの問題があれば、その罪は無罪になるか大きく減刑されるということである。みのるはそれに該当する可能性があった。

日本憲法のガバ穴として様々な話や議論の題材にされるこの刑法39条だが、ただおかしな言動だからという理由で、簡単に適用されるほど甘いものでもない。

精神鑑定医が何か月と時間をかけ、その末に心神の状態を診断するのだ。その間は裁判が行われることはなく、みのるはいまその診察段階にあった。

次に殺害方法の問題だ。

みのるは超能力によって6人の人間を殺害したが、日本政府はこのことをおおよけにするべきか悩んでいた。

あまりにも信じがたい内容である上に、下手にこのような殺人可能である超能力のことを知らせれば、多くの国民に混乱を招く可能性があった。

そのため、みのるの能力を知っている人間は現在でもごく一部にとどめられており、精神鑑定が終わったとしても、拘置所に送るかどうかの判断はまだなされていなかった。

「こちらとしても、どう対処するか困っていましたね」

下北沢警察署、ガランとした最上階の長い廊下で、先を歩く下北沢警察署所長は現状を説明しそういった。

「みのる君は留置所にいると聞きましたが」

田所は周りを見渡す。「どうも、ここはそういう雰囲気ではないですね」

「このことはトップシークレットですから、他の被疑者たちと同じ独房に入れるわけにはいきません。それと」

所長は口元を隠すように手で覆うと、ホモ特有の小声で付け加える。「あまり被疑者の名前を出さないようお願いします。どこで誰が聞いているかわからないもので」

「ああ、申し訳ない」

「いえ……ともかくですね、彼の超能力だけは何とかしていただきた

い。被疑者は精神障碍者と聞かされています。いつこちらが殺されてもおかしくない」

「すべての精神障碍者が、犯罪を犯すとは限りません。確かに他害性があるものもありますが、同じ精神疾患でも個人差がありますし、それも一握りです」

「ですが、被疑者は」

またホモ特有の小声で続ける。「殺人をしています、それも6人も」
「おっしゃる通りですが、それは精神疾患とはまた別の理由があった可能性もあります」

「なんであれ、起きた出来事が事実なら、被疑者が人殺しであることは変わりません。では、私はここで」

そういつて所長は足を止め、少し先にあるドアを手で示した。

そこにはヘルメットに防弾チョッキを着て、手にマシンガンを持った見張りらしき男が二人立っている。

どうやら所長は、みのるの近くに行くのが怖いようだ。

「どうも」

所長にそういつて、ドアまで歩いていくと、警備の二人に一礼し「失礼」と中に入ると、そこはまるで高級ホテルの一室だった。

30畳ほどの大きさだろうか、横に長い部屋になっており、奥に見える壁一面の窓からは下北沢が一望できた。

左手にダブルベットが一つ、その手前に薄型テレビがある。中央にはガラス製の大きなテーブル。その手前と右側に、革製のソファアが置かれてある。

その右側のソファアに、白い衣服に身を包み、耳にイヤホンをした、みのるらしき少年がいた。

田所が入ってきたのは分かっているだろうが、その目線は手にある小説に向いたままだ。

「石井君から話は聞いているかな、田所というものだ。座るよ」

田所は手前のソファアの端に座った。テーブルの上には開かれたスナック菓子と数冊の本が積まれて置かれている。

みのるが横目でちらりと田所を見たが、すぐに目線を戻す。

生意気で礼儀知らずな行動にも見えるが、こちらを品定めしているようにも感じる。

「医者をしているものでね、君の手術をさせてもらいたい」
そういうも、みのは反応をよくさない。

じつとみのは見ていると、耳のイヤホンから微かに音楽が聞こえてくる。

相当なボリュームで聞いているようだ、こちらの声は届いているのだろうか。

そう思ったとき、

「ガガーリン」

ふと田所がそう口にする。「え？」と、みのは顔が上がった。

「NONA REEVESのガガーリンだろ」

田所はみのを指さした。「いま聞いているのは。まるで宇宙船にいるかのようで、それでいて宇宙の無限を感じるような、テクノ調の独特なリズムだ。一度聴いたら忘れない」

みのは、フッと乾いたような笑いを漏らすとイヤホンを外し、コードの伸びるポケットから 아이폰 を取り出すと、テーブルの上に置いた。

「石井先生から聞いたの、僕がNONA REEVESが好きだったこと」

どうやら、本当に田所がNONAを好きなのか疑っているようだ。

「いや、聞いちやいない。ただ、私もNONAが好きだけだ」

「一番好きな曲は」

突然、みのが質問を投げ「ふーむ、そうだなあ」と田所は顎に手を置く。

「I LOVE YOUR SOUL. DJ! DJ!、とどかぬ想い……ブラックベリー・ジャムも捨てがたいが、やっぱり私はHARMONYが一番好きだな、うん」

「渋いね、先生」

みのはそういうと、先ほどとは変わり、少年らしいあどけない笑顔を見せる。

「あついやまて」

田所はなにかを思い出したかのように目を閉じると、みのるに手のひらを見せる。「やっぱり、休もう、ONCE MOREだ。あれが一番……いや、やっぱりHARMONY……うーん、どっちちらも捨てがたい」

「どっちもすごく好きってことだよね」

「まあ、そういうことだ。こればかりはどちらか選べない」

田所は腕をくみながら、みのるを指さす。「君が好きな曲を当てようか」

「分かるの、先生に」

「ガガーリンが好き何だろう？なら……Mr Melody Makerだ、違うか」

みのるはにやけながら、もったいぶるように間を持たせ、

「残念、違う。それは二番目」と首を振った。

「ああ、違うのか。なら、あれだろうStop Meだ。Melody Makerとどっちか悩んだんだ、きつとそうだ」

みのるが頷くのを見て「ほらそうだ」と田所は指を二本立てた。

「2択で悩んでいたんだ。本当だぞ、すでに頭の中にはあったんだ。決して間違えたわけじゃない、なんせ一番と二番を当てていたんだから」

「分かった、分かったよ」

しつこく主張する田所を、みのるは笑ってなだめる。

不意に、みのるが持っている本に目がいった。

「トム・ソーヤーの冒険か」

ボソリと田所は本の題名を口にした。「好きなのか」

聞くと、みのるは答えづらそうに、目線をそらした。

「まあ……ちよつと子供っぽいけどね」

「そんなことはない。私も昔読んだことがある、いい話だ。それに、これは私の持論だがね、現代の若者、というよりも老若男女くめ人間たちは本を読まない。だから、心に余裕がないんだ。相手のことを考えず、自分のことだけを考えるから。他人には他人の、いろいろな考

え方があると、本は教えてくれる。特に、トム・ソーヤーの冒険のよ
うな本はね。だから本を読む人間は……いや、本といつても色々ある
が、とにかくトム・ソーヤーの冒険を愛読している人間というのは、み
んな優しい……少なくとも」

田所は肩を落とし、小さく付け加える。「6人の少年をなんの理由
もなく、殺すはずはない」

一瞬の間の後、みのるの表情に陰りが見えた。

「たいした理由なんてないよ、ただウザかっただけ」

田所は眉を寄せ、首をかしげた。

「本当にそうか。何か嘘をついていないか」

「別に。それに先生は僕の手術をしに来たんでしょ、例え嘘だとして
も先生には関係ない」

「確かにそうだが、とても信じられなくてね。君の超能力も含めて」

「手品だともいいたいの。大の大人たちが、僕を怖がって近づけな
いんだよ」

「私はその辺と大人とは少し違っていてね、自分で見たもの以外、信じ
ないんだ」

「ふーん」

みのるは視線を田所の足元にやると、ゆっくりと顔まで上げる。

「なら、先生が履いてるパンツを当てようか」

田所は自分の股間に目をやり「ああ、いいぞ」と顔を上げて答える
と、みのるは口に拳を当て、プッと噴き出して言った。

「灰色のブリーフ」

その瞬間、田所のうなじあたりを突然、寒波が撫でたかのような冷
たさを感じると、じつとりと額に汗をかき、戦慄した。

なぜ……私のパンツを。

事実、田所が履いているのは灰色のブリーフだった。助手であり、
炊事洗濯を任せる遠野以外には、常にばれないよう努めていた。

いい年こいてブリーフを履いているなんて知られたら、メチャク
チャ恥ずかしいからだ。

だが、目の前の10ほども年齢が下の少年に、それを見抜かれてし

まった。

もう、みのが超能力者かどうかは頭になかった。田所はいま、ひたすらにどう弁解すべきかを考えていた。

「いや、これは伸縮性のあるボクサー型の……ちよつとスパ……ツツに近い感じのパンツだ」

我ながら苦しい言い訳だと思った。

それに対し、案の定みのは悪意に満ちた表情で尋ねる。

「なに、いつもブリーフ履いてるの？」

——このガキ。

ググつと歯をく強い張り、田所は右の目じりを下げた。

「いや……うーん、ブリッ、ブリーフもいいんだけど、ふたいたいはボクサー型の——」

そのとき、不意に視界に入ったスナック菓子を目にし、田所は口を閉ざした。

それは誰の手にもつかまれておらず、宙に浮いている。

「先生、落ち着いてよ」

声がして視線を移すと、みのはにやけたまま首をかしげた。「食べる??」

「いや……いいい」

そう答えると、宙に浮いた菓子は一直線にみのはの元へと向かい、口に入っていった。

「どう、信じてもらえた？」

みのが菓子を食べながらそういうと、田所は頷く。

「ああ、まあ信じよう……ブリーフではないが」

みのはあきれたように首を振った。

「まあ、そういうことにしとくね」

「ただ、超能力だけだ」

田所は手を組み、テーブルに肘をついた。「やはり、君が殺したとは思えない」

「先生もしつこいね、せつかく仲良くなれると思ったのに、僕むかついてきた」

みのるの目がすつと細くなり、敵対心をもった表情で田所を見る。
「先生も殺しちゃつよ、あいつらみたいに」

それを見た田所は、そんなもの屁でもないといわんばかりに鼻を鳴らすと、ゆつくりとソファアーに体を預けた。

「トム・ソーヤは」

田所は立てた人差し指を振りながら言った。「少々反社会的な面もある。だが、やさしく、仲間思いで、正義感の強い少年だ。なんの罪もない医者殺すことはない」

「なんの話？僕はトムじゃない」

「だが、そんなトム・ソーヤが好きで、憧れているから、その本を読んでいるんじゃないのか」

みのるは視線を横にやると、かすかに唇を噛んだ。

「何よりもだ」

田所はテーブルの上にある、みのるのアイフォンの隣を、指でトンと叩く。「NONA REEVESだ」

それを冗談だと思ったか、呆れたように首を振る、みのるに「さて、これは冗談じゃないぞ」と田所はいう。

「私は色々人間を見てきたが、その上で絶対に言い切れる一つのことがある。NONAを好きな人間に、悪い奴はいない、これだけは絶対にいい切れる。本当だ」

「好きな歌手で人の良し悪しがわかるの？」

「ああ、わかるさ……君は絶対に悪い人間なんかじゃない。だから頼む、教えてくれ。どうして少年たちを殺したんだ」

田所がそう言と、みのるは肩を落とし、そわそわとせわしない様子で両手を組み「僕のこと、信じてくれる？」と田所に聞く。

「もちろんだ」

そう答えると、数秒の間の後、みのるは言った。

「僕の中に……もう一人、僕がいるんだ」

「もう一人の自分？」

田所は首をかしげる。

「うん……たまに、頭の中で僕に話しかけてくるんだ」

「そのもう一人の自分が、少年たちを殺せと」

みのは目を閉じて、首を横に振る。

「ちよつと、違う。最初は、僕があいつらを邪魔だつて思ったんだ。毎晩毎晩うるさいし。いろんな噂も聞いた。万引きとか、男を集団でレイプしたりとか……とにかくいろいろな。もしたら、あいつが言つてきたんだ。あいつらを殺せつて、お前ならやれるつて」

「それで、君はなんて返したんだ」

田所はぐつと体を前に出して聞いた。

「そんなことしちやダメだつて、言い返したよ。でも、あの時は思つちやつたんだ、あいつらなんて死んだ方がいいつて、そしたら——」

そこまで言うと、みのはぐつと口を閉ざし、肩を落とした。

その肩に田所は手をそえる。

「殺してしまつていたんだな、いつの間にか」

「いや、いつの間にかつてわけじゃないよ。ただ、よく覚えていないんだ。あいつらを殺しに行ったのも、蹴られたのも覚えてる……でも、記憶があいまいなんだ。まるで、夢の中みたいに」

「そうか。君はそのことを後悔してるんじゃないのか」

眉を下げ、自責の念を見せる、みのはに田所は続ける。

「その頭の中で語りかけてくる声以外にも、たくさん症状があるんだろう。日に日に悪化して、このままじゃ死んでしまう。手術を受けてくれ、みのは君」

懇願する田所に対し、みのはなにかを考え込むように下を向き、

答えない。

しんとした静粛が1分ほど流れた後、みのは口を開いた。

「先生、僕には……殺さなきゃいけない人間がいるんだ」

「殺さなきゃならない？」

田所は慌てて聞いた。「いったい、誰なんだ」

「そいつらはね」

みのははゆっくり立ち上がると、奥に歩き、窓の前に立って下北沢を見下ろした。「僕のお父さんを殺した連中なんだ。もし頭の手術をしたら、きつと超能力は使えなくなつて、そいつらを殺せなくなる」

みのるは窓に手を添えると、視線の先にあるビルを睨みつけた。

「君のお父さんは、誰に」

田所が隣に立つと、みのるは黙って窓から見えるビルを指さした。そこには日本ペイ〇トと書かれたビルが立っていた。

「日っぺ？」

田所はそう呟いて、みのるを見る。「どうして、日っぺに君のお父さんが」

「僕のお父さんはあそこで働いてたんだ、でもあるとき急にやめさせられた……お父さんが……ノンケだったから」

いまにも泣き出しそうな目をしながら、怒りに体を震わせるみのるをみて「そうか」と田所はその心中を察する。

同性愛者、通称ホモやレズと対照の存在であり、圧倒的性的少数派の異性愛者、通称ノンケは、古来から様々な地域で迫害を受けてきた。今でも、男女の淫行を闇の儀式と考え、それを罰する法律が存在する国もあるほどだ。

日本でも少し前までは、ノンケは恥ずべき存在であり、異性愛者たちは自分がノンケだとばれないように隠れて過ごしていた。

いまではそういった差別もなくなり、そもそも子供が産めるんだから、本来ノンケの方が多いのが普通なのではないかという話もあるほどだ。

しかし、それでもノンケは気持ち悪いと思っている人間は、現代にも確かにいる。

「会社を辞めさせられた後も、ノンケを採用してくれるところはどこにもなかった。それから、一月ぐらいたったかな……リビングでお父さんは……」

みのるは悔しそうに唇を噛んだ。

父親はリビングで自殺していたのだろう。

「優しいお父さんだった」

みのるはいった。「最後、家から出かけるときも……僕の頭を撫でて——」

そこまで言うと、みのるは言葉を詰まらし、下を向いて嗚咽を漏ら

した。

「みのる君」

「分かっているよ先生」

田所の言葉を、みのるはすぐに返すと、顔を上げて鼻をすすった。「分かっている、そんなことしちやダメだ……きつとお父さんも喜ばないしそれに」

みのるは田所の顔を見て笑った。「トム・ソーヤだって、そんなことは絶対にしない」

田所はほほ笑みながら、小さくうなづいた。

「ああ、そうだな」

「だから先生、僕は手術を受けるよ……その代わり」

みのるはまた、あどけない表情でニツと笑った。「絶対に先生が手術をしてね、約束だよ」

「ふざけるなー!」

所長室に田所の怒号が響くと、その拳が所長の座る机に振り下ろされ、ドンと音が鳴る。「今すぐ手術をできない上に、薬も服用できないだど? 貴様らは本気で言っているのか!」

その音にビクつと体を揺らした所長は、ハンカチで額を拭いた。

「本気も本気です。これはあなた個人や、私ども警察署の問題ではなく、国防にかかわってくるんです。何もするなと防衛省のトップからの命令です。それを無視すれば、下手をすると国家反逆罪になりかねません」

「ならその自らの保身だけしか能のない、マヌケな防衛省のお偉いさんにいってやれ、少しは頭を使えとな。彼は非常に不安定な状態なんだぞ、すぐに手術しなければ命に關わる可能性だつてある。精神疾患の薬すら与えられないなら、彼の症状はさらに悪化する。手術で頭は元に戻っても、精神の治療には莫大な時間がかかるか、もう戻らなくなるかもしれないんだぞ」

「ですが、その薬が被疑者に悪影響を与えないとはいいがたい」

「だからと言って、悪くなる症状をただ放置するのか」

「それはまあ、仕方ないと考えてください。それに、明日には手術の許可がでるとの予定ですから」

「貴様らの予定なんぞあてにならない」

田所は踵を返し、ドアに向かう。「みのある君を連れて行かせてもらう」

「ちよつと待ってください、そんなことすれば、国家反逆罪に——」

「知ったことか！」

田所は肩越しに所長をにらみつけた。「少年の命を救うことの何が反逆だ！なにが罪だ！捕まえなければ勝手にしろ、私は——」

——先生。

突然、みのあるの声がして黙った田所は、周囲を見渡す。

どこにもみのあるはいない、だが確かに声が聞こえた。

「みのある君か」

名を呼ぶと、

——そうだよ。

と頭の中から声が聞えてきた。

どうやら超能力の一種のようだ。

——先生、僕を心配してくれてありがとう。でも捕まっちゃうのは僕も嫌だよ。

「だが君は危険な状態だ」

——分かってる。でも僕なら大丈夫だよ、信じて。

ため息を吐いて「分かった」と田所は答え、踵を返し所長の前に立つ。

「手術の予定が決まり次第、連絡をください。そしてその間、みのある君に余計なことをしないようお願いします。では、失礼します」

すぐにその場を去った田所は、携帯を取り出して電話をかけた。

「どうも、田所です。実はある会社の人間たちについて、調べてほしいんですが」

夜、真つ暗な部屋の中、ざわざわとした感触が、足元から湧き上がってくる。

今日も来た、とベッドで目を閉じる、みのるは思った。

それが全身を覆うと、まるで無重力空間に落とされたかのように、全ての感覚があいまいになる。

頭が痛み、時間の流れがどんどん分からなくなってきた。

この状態になると、決まってあいつの声が聞えてくる。

「みのる！みのる！おい！お前こんなところで何をしてる、窮屈だ、さっさと出よう！」

頭に響く声を、みのるは無視する。

「こんなの人権侵害だ！殺せ！見張りを殺して外にでよう！お前は神だ、お前ならできる！」

いつもなら、こいつの言葉に反論するところだが、今日は返さない。

それを察したのか「なんだあお前……もしかして医者のいつてることを信用してるのか」と声はどこかいつもと違う様子でいった。

「バカー！どいつもこいつも嘘をついてるんだ！あの医者もお前を殺したいだけだ！信用するな！お前の友達は俺だけだ！」

「先生は信用できるよ」

みのるは自然とそう返した。

本当に田所が信用できるか、不安だったからじゃない、確信があったからだ。

「バカー！バカー！バカー！」

声は発狂したかのように声を荒げる。「騙されてるんだ！俺たちは騙されてるんだ！気づけ！気づけ！殺しに行こう、お父さんを殺した奴らを、殺しに行こう」

さらに無視を続けると「みのる……」と声は弱弱しくなった。

「騙されるな……お前は……殺したいんだ……あいつらを……」

その言葉を最後に、声はどこかに引きこもってしまったのか、ぱったりと聞こえなくなった。

今だ、体の感覚は戻らない。この状態だと感情が定まらず、混乱状態に近くなる。

たとえそれでも、みのるの田所に対する信頼は揺るぐことはなかった。

何といっても、NONNA好きに、悪い人間はいないのだから。

予定は2日も押し、やっと手術が許可された。

手術当日、みのるは警察署、最上階の部屋で、静かにそのときを待っていた。

声はあの時を境に、まったく聞こえなくなった。その他の症状もまったくでなくなった。

あの声が全ての元凶だったのだろうか。なんにせよ、今日でそれは終わる。

ドアが開き、見張り役だった二人は中に入ってきた。

「手術の時間だ。連行する」

連行。その冷たい言葉に少し眉をひそめたが、まあいいと、みのるは立ち上がった。

「これを付けさせてもらう」

右の見張りがそういつて、黒く、長細い布を前に出した。

「目隠し？」

そう問うと、見張りは静かに頷いた。

「上からの命令だ」

みのるには透視能力があり、そんなものは無意味であったが、さつさと手術を受けたかった、みのるは「分かった」と承諾する。

ゆっくりと見張りの一人が近づいてきて、目のあたりに布を近づける。

その手は、見るからに震えていた。

「大丈夫だよ、別に怖がらなくても」

「——うっ」

安心させようと、みのるが声をかけると、見張りは声を出して布を落とした。

ちょうど目の前に、見張りの手が見えたその刹那、視界にある光景が広がる。

家の玄関。そこに立つ黒い影。

父親だ。

それがみのるに向かつて、手を伸ばしてきている。

頭を撫でる手の感触。

すぐ帰ってくる。

そう言つて、出かけた。

いつもの時間、帰つてこない。

どこに行ったの？

探さなきや。

「オトウーサン……オトウーサン……」

薄く開いた口から、父を呼ぶと、いつの間にか見張り二人がみのるに向かい、マシンガンを向けていた。

探しに行かなきや。

見張りの後ろにあるドアに向かい、一步踏み出すと「生まれ！止まらないと撃つぞ！」と見張りが声を張り上げる。

だが、その言葉は、みのるの耳には入ってきてはいなかった。

さらにもう一步、足を踏み出した瞬間、マシンガンの連続した発砲音が、部屋の中に轟いた。

銃口から発せられる光が、みのるを照らし、葉きようが床に落ちていく。

マガジン内にあるすべての弾丸を打ち尽くした後、見張りの二人は手に持っていたマシンガンを手から離れた。

放たれた弾丸はすべて、みのるの少し前で浮き、止まっていたからだ。

その弾丸が全て落ちると、見張りの二人は声を上げて部屋から出て行った。

茫然とみのるは立ち尽くしていた。いま自分が何を考え、なにをすべきかよくわからなかった。

ふと父親を捜しに行こうとしていたことを思い出し、ドアから外に出ようとしたその時、

——待て！待て！待て！

頭の中から声が聞えてきた。なんだが、懐かしい感じがした。

「何？」

みのるは声に聞き返す。

——そこから行かなくてもいい！窓！窓をぶつ壊せ！そつちの方が早い！

「ああ、そつか……そつか」

振り返り、窓に開いた手のひらを向けると、すさまじい音を立てて窓が砕けた。

そこから飛び降り、道路に着地する。

「あれ……どこ、どこ行くんだっけ」

——日っぺ！日っぺだ！殺しにいくぞ！殺しにいくぞ！

「そうだ、殺しに行くんだ」

みのるはふらふらとした足どりで、日っぺの本社ビルへと向かった。

耳をつんざくような、強烈なクラクションの音。

それで、みのるはいつの間にか、十字路の中心に立っていることに気が付いた。

「うるさいな」

そう呟くと、車に乗っている人間の目が、自分を侮蔑しているように思えた。「何？僕のことバカにしてるの」

——そうだ！そうだ！バカ！バカ！

「バカ？……なんで、なんで僕はバカなの？」

——頭が悪いからだ！間抜けだからだ！みーんなお前をバカにしてるぞ！ギャハハハハ！

「バカじゃない……僕はバカじゃない」

手を耳に強く当てるも、声が止むことはない。

——バーカー！バーカー！

「僕はバカじゃない。僕はバカじゃない」

みのるが言葉を連呼すると周囲の塵や木の葉が、ゆっくりと地面から離れていく。

——バカが何か言ってるぞ！バカが何か言ってるぞ！

「僕はバカじゃない。僕はバカじゃない」

さらには、みのるに一番近い車の前輪が浮き出し、次々と運転手たちが車から降りていく。

何台もの車が宙に浮き、信号機がギチギチと音を立てると、歩いてきた人々は恐れるような声を上げ、みのるから遠のいていく。

周囲の建物の上や、遠く離れた場所にいる人間たちが、みのるの様子をじっと見ていた。

——見ろ！見ろ！みんなお前をバカにした目で見てるぞ！人気者だ！バカの人気者だ！ギャハハハハ！

みのるは息を荒げながら、体を回して周りを見る。

自分に向いている視線がうつとおしかつた。ウザったかった。

すると、その視線を通じて、その人間たちの声が頭に流れ込んでくる。

バカ。マヌケ。池沼。クソノンケ。

「僕はバカじゃない……僕は——」

肺いっぱい空気を吸い込み、そして——「僕はバカじゃない！」

力いっぱい叫んだ瞬間、みのるの周囲にあるすべてのガラスが砕け、音を立てて落ちた。

女性の金切り声と、車の防犯ブザーが共鳴する。

「うわあああああ——」

さらに叫ぶと、宙に浮いた車が空に放り投げられ、建物や道路の上で落ちる。

曲がった表札。建物から砕け落ちる瓦礫。ひっくり返った車から渦巻く黒煙。

まるでその空間だけ、突然全ての生物がいなくなったかのように静まり返り、ただ防犯ブザーの音だけがむなしく響いていた。

——いいぞ！いいぞ、みのる！じゃあ行こう！早く行こう！

「行く……行くつてどこに」

——日っぺだよ！日っぺ！

「そうだ……日っぺだ……日っぺに……オトウーサンを、オトウーサンを殺したやつらを」

みのるは不気味な笑みを浮かべた。「殺しに行くんだ」

——そうだ！そうだ！その通りだ！

「オートウーサン……オートウーサン……」

そう口にしなから、みのるは歩を進めた。

特殊急襲ゲイ部隊。英名で Special Assault

gay Team。通称ゲイは、下北沢のみに存在する、テロ等の重大事件に対する鎮圧などを目的とした部隊だ。

下北沢警察署から出発した二台のゲイのボックス車両が、法定速度を大きく上回る速度で、みのるの元へと向かっていた。

「いったい国はなにをやっている！」

車両の一つ、ボックス内の壁一面が通信機で埋め屈され、指令室となっている部屋で、ゲイ司令官の板倉は叫んだ。「この一大事に、なぜ自衛隊が動かない」

先ほど、国に対し自衛隊の要請を行ったが、相手はまだ許可が取れないの一点張りだった。

自衛隊は原則として国防以外では活動できない。相手は超能力者といえど、少年一人。それを鎮圧する行為は、国防といえるのか。なにもしない決定権だけを持っている人間たちが、円卓を囲んで、無駄に長い議論を興じているのだろうか、

「相手は6人を一気に殺せるうえに、重火器も無力化できるんだぞ」
板倉は歯を食いしばる。「それが暴れているんだ、自衛隊が動かなくてどうする」

吐き捨てるようにそういうと、指令室内は嫌な沈黙に包まれた。

ヘッドフォンとマイクを取り付け、通信機に座る数名の通信手や、もう一つの車両の中で、すでにスイッチの入っている、マイク越しにきいているであろうゲイ隊員たちも、なにも言葉を発さなかった。

目標の細かい情報はほとんどなく、どんな行動をしてくるかもわからない。

隊員の人数は8名。狙撃手が4名と、それに付きそう観測手4名。未知の相手と戦うにしては、あまりにも人数が足りない。だが、黙ってみているわけにもいかない。

「相手の能力は未知数だ……常にそのことを留意し、任務に当たれ」
指揮官として、そんなありきたりな言葉しかかけることができない
自分に、板倉は悔しさをにじませた。

「彼女とか、いらっしやらないんですか」

狙撃点である商業ビルの上で寝そべり銃を構えたホリに、観測手である裕がそう聞くと「いるわけないだろ」とそっけなく返し、周りを見渡した。

下北沢全域に出た避難勧告により、人の気配は一切ない。

「いや、相手は化け物ですよ。ここで死ぬかもしれない。そうなる
愛していた人間に一言残しておきたいものじゃないですか」

そういつて、裕は望遠鏡をのぞいた。

「俺たちはいつだって、常に死ぬ覚悟で現場に向かう。そういうのは
先に済ませるもんだ」

まあ、そんな相手もないのだが。「目標は」

「見えません」

裕は望遠鏡を下げた。「しかし、本当に目標はここに来るんですか
ね」

「目標がどこに向かっているかわからないからな。こればかりは運
だ」

「運が良かったら来るのか……それとも悪いから来るのか」

ホリはフッと鼻を鳴らすと「今朝のホモ占いは、最下位。12位
だった」とつぶやく。

「あ、僕はじゆう——」

『ゲイ1. 目標視認。6時の方角』

瞬間、別の班からの視認報告が来ると、裕は望遠鏡を覗く。

『ゲイ2. 目標視認』『ゲイ3. 目標視認』

その数秒後、裕はマイクのスイッチを入れる。

『ゲイ4. 目標視認』

ホリも目を凝らすと、建物の間から、ゆっくりと歩いていて来ている
目標が見え、スコープを覗いた。

「狙えますか」

裕にそう聞かれると、堀は首を横に振り、マイクを入れる「こちら
ゲイ4。目標狙撃地点の射線付近に、建物が一つ。目標の補足は可能
ですが、建物に当たる可能性があります」

建物に当たれば、跳弾により仲間や、まだどこかに残っているかも
しれない民間人がケガをする事もある。
避難勧告は出ていても、民間人には常に警戒しなければならない。

『ゲイ4は待機。ほか三部隊で狙撃を行う』

すぐに板倉の命令がくる。『目標狙撃地点に入り次第、発砲しろ』
全部隊からの了解を聞くと、裕はほっと胸をなでおろした。

「いやいや、運が悪い」

「氣い抜くな」

冗談めいていう裕に、ホリは目線鋭く言った。「本当に悪いかもし
れないぞ」

板倉はゲイ1。 2。 3の観測手から送られてくる望遠鏡の映像
を、モニター越しにじつと見ていた。

1と2は前にいる目標から500m離れた位置の左右から。3は
1の50メートル程後ろからの射撃を行う。

目標狙撃地点まで、あと数メートル。

自分が歩けば数秒の距離。目標はそれを、じりじりと進んでいく。

「一メートル前まで来ました」

通信手の声が響くと、板倉は手にじつとりと汗をかいた。

目標の足が、一步……二步……三歩進んだその瞬間――

パン――パンパン。

ボックスの外から聞える、三発の発砲音。

それと同時にモニターから見えたのは、目標の周囲に浮かぶ、3つ
の弾丸。

バカナ……狙撃の……弾丸を――そう思った次の瞬間、1。 2。 3
のモニターに止まっていた弾丸が真つすぐ飛んでくると、隊員の呻き
声のようなものが聞えた。

板倉は息を詰まらせると、すぐさまマイクに叫ぶ。

「なにがあつた、報告を！」

『ゲイ1。向かってきた弾丸にスコープをやられました。負傷なし』

『ゲイ2。同じくスコープを破損。負傷なし』

『ゲイ3。こちらは銃身をやられました。負傷なし』

「そうか……」

板倉は安堵と共につぶやいた、全身から力を抜き、肩を落とした。

「……そうか」

一呼吸置いた後「予備の銃は」と通信手に聞く。

「2丁あります」

板倉はうなづいてマイクを入れた。

「全班撤退しろ。ゲイ1、2は予備の銃を持ち、再度狙撃する」

『こちらゲイ4。我々はどうしましょう』

そういえば、まだゲイ4は発砲していなかったことを思い出した。

声の相手は狙撃手のホリだ。ゲイ内でも古株で、一番の狙撃手だ。

板倉が最も信頼を置く隊員でもある。

『我々は移動して、後ろからの狙撃を狙えます。どうでしょうか』

ホリの提案に、板倉は息をのむ。

先ほどの狙撃は、全て前からだ。後ろからなら目標に当たる可能性はあるが、相手を刺激しかねない。

止めた弾丸で長距離からでも反撃もしてくる相手だ。これ以上の深追いは避けるべきだろう、だが――

「できるか」

板倉はそう聞いていた。それは、ホリの実力と勘を信じていたからだ。

『分かりませんが、試す価値はあります』

目を閉じ、板倉は1秒足らず思案した後、言った。

「ゲイ4。後方からの狙撃を頼む」

『了解』

返答を聞いた板倉は、マイクを切ってつぶやいた。

「頼んだぞ」

「なんであんなこと提案したんですか」

商業ビルを下りるさなか、裕がその行為を責めるようにいう。

「オレ達で終わらせることができるんなら、そうした方がいい。その方が、他の奴らも安全だ」

「僕たちは危険じゃないですか」

そのノンケノンケしい反論に、ホリは鼻を鳴らす。

「恨むんなら、今朝のホモ占いを恨め。お前11位だろ」

「10位ですよ！」

「アナルとマンコだ。大差ない」

地上に降りると、目標の後ろを取るように移動し、建物から半分顔を出して確認すると、目標の背中が見えた。

「あそこの上からいくぞ」

ホリは二つ先にある、高いビルに囲まれた低めの建物を指さして、腰を落として移動する。

それはテナントビルで、全5階あった。

全力で階段を昇り、屋上につながるドアを開けようとしたが、鍵がかかっていた。

「ダメだ。鍵がかかって——」

振り向くと、裕がいるはずのそこに、知らない短髪の男が立っており「なんだお前」とホリは思わず民間人に素できいてしまった。

「何だって、こっちのセリフですよ」

男は困った様子で言った。「これ私のビルですから、でてってくださいよ。せつかく確認が終わって、これから避難しようとしていたのに」

「申し訳ありません、我々はゲイです」

「そりやそうでしょう、だいたいの人間がゲイですもん」

「いえ、下北沢警察署に所属する、テロ等の鎮圧を目的とした部隊のほうです」

男の目が一転、見開かれる。

「ああ、あのゲイですか」

「はい。いま、凶悪犯の鎮圧を行っています。そのためには屋上に行かなくてはなりません。ご協力をお願いします」

「いや、そういわれても——」

「ホリさん」

階段の下から、裕がへろへろになって上がってきた。「もうちょっと、ゆっくりいってくださいよ」

「バカやろう！お前ゲイの癖に体力なさすぎなんだよ」

ホリは裕に激を飛ばすと、すぐに男に迫る。「すみません、こちらも時間がないんです、急いでもらえますか」

「そう言われましてもね」

男はポケットから鍵束を取り出すと、一つひとつ確認していく。

「ちよつと、屋上にはですね——あ、ありました」

「ありがとうございます」

その、焼いてかない？と書かれた鍵を、ホリは強引に取ると、なにか言いたげな男をしり目に鍵を開け、屋上の端に向かうと、100メートルほど先に目標が見えた。

「目標視認」

そういつて、ホリが銃を構えると、隣で裕が望遠鏡をのぞく。

「距離114メートル。風、右斜め前から5・14——」

「あの一！」

後ろから男の声がして、裕が確認の声を止める。「ちよつと、そこは——」

ホリが裕と一緒に後ろを向くと、すぐに向き直り、

「無視しろ、早く風の確認を——」

「ホリさん！上！」

裕の切羽詰まった声がホリの声を遮り、上を見てみると、ビルの屋上にある巨大甲板に、車が突き刺さっているのが見えた。

なんで……あんなところに車が。

そう思った次の瞬間、看板がホリ達の方に傾くと、そのまま車ごと落ちてくる。

逃げなければ。そう本能的に思うも、体が動かない。

階段は遠く間に合わない。飛び降りれば助からない。

死ぬ——それを直感し、ホリは目を強く閉じた。

「ヌツ……ハア……」

全身に力が入り、衝撃に備えていたが、なにも来ない。

横にそれたのかと、ゆつくりと目を開くと、眼前にはあつたのは宙にとどまっていた看板だった。

「いったい……何が——」

「大丈夫ですか」

声がし、とつさに目をやると、手を上にして、看板を止めているのであろう目標の姿が見えた。「ケガは？」

ホリは何も答えられず、ただケガはないと、首を横に振る事しかできなかつた。

横では腰を抜かし、目標を見ながらガタガタとその場で震えている裕がいた。

「ケガなかつたんだ……よかつた」

目標はそう言って看板を道路に捨てると、音を立てて看板が砕けた。

なぜオレ達を助けたんだ。

そう問いたい衝動に駆られるも、立场上、聞くことははばかれた。すると、目標は眠そうな目をして、体を揺らす。

「ケガ……ない……でも僕は……頭が」

頭痛があるのが、つらそうに眉間にしわが寄り、その場で膝をついたと思うと、下を向き、まるで眠ってしまったかのように、まったく動かなくなつた。

突然の出来事に茫然としていると「ホリさん、ホリさん」と裕の小さな声が聞こえ、目を向けると、裕は何かをホリに伝えようと、目標に対し指をさしていた。

その表情から意図を察すると、すぐさまホリは腰に付けられた予備の拳銃を手に取り、目標に構えた。

「いまなら、やれるかもしれない——いや、やれる。やるんだ。」

ホリは自分にそう言い聞かせると、標準を目標の頭にさだめ、そし

て――

「最後の一言を、もう一度頼む」

ホリの報告はちゃんと聞こえていた。だが、その内容が信じられず、板倉は再度、確認をとる。

『はい。目標はその後、目覚めたかと思うと、なにもいわずその場を去りました』

「その間、君はなにをしていた」

『なにもしていません』

当然のように、ホリは答える。

なにもしない。そんなことあつてはならない。

「なぜ発砲しなかった。お前もしかして……目標に情でも湧いたのか」

妙な間の後、ホリは答えた。

『狙撃銃、予備の拳銃ともに、内部が破損していたようで、発砲ができませんでした』

あり得ない報告に、板倉はため息を落とす。

「それは、便宜上の建前か」

なにも返さないホりに、板倉は続ける。「本音を言え」

『私は目標に助けられました……そんな相手を、私は殺せませんでした』

「何をふざけたことを言っている！」

板倉は激昂する。「いいか、君はゲイだぞ！ 受けた命令は忠実に――」

『え、そんなの関係ないでしょ』

素っ気もなくでもないホリの声に、板倉は口をつぐむ。『これはゲイの問題である前に、人間としての問題です……ですが』

ホリは力強い声で付け足す。『カリは返しました。次はやりませう』

「一度命令を違反した君を、また使うと思っているのか」

『ええ、板倉さんなら』

ホリは自信をもった声で、そう返した。『やらせてください』

板倉はマイクを切り、目を閉じて天を仰ぐと「まったく」とつぶやき、マイクを入れる。

「ゲイ4が戻り次第、次の目標移動予定地に向かい、ゲイ3以外の班で、狙撃を行う」

全班からの了解の後『ありがとうございます』とホリがいった。

「礼はいい。早く戻れ」

そういつて板倉はマイクを切った。

ホリがゲイ隊員という立場以上に、人情を大切に作る人間だということは、板倉はよく知っていた。

そこが部下から慕われ、板倉が強く信頼する所以でもある。

しかし、目標の殺害、または制圧は急がねばならない。

ホリの報告によれば、目標の精神状態は非常に不安定のような。超能力によるものなのか、それとも別に要因があるのか。どちらかは分からないが、犠牲者が出るのも時間の問題だ。

せめてどこに向かっているのかだけでもわかれば。そう思っていた時、ドンドンと外からボックス後部を叩く音が聞えた。

避難勧告を無視したバカのいたずらかと思っただが、その声を聞いて、違うと悟った。

「私は医者だ。君たちは超能力者の相手をしてるんだろう。私は彼のことをよく知っている、開けてくれ」

中にいる通信手が、一斉に板倉のほうをむくと「開けてやれ」と命令すると、後部のドアに一番近い通信手が開き、そこからがっしりとした、色黒で黒いコートを着た男が入ってきた。

その瞬間、汚物のようなにおいが鼻を突き、その場の全員が顔をしかめる。

「すまない」

医者は第一に謝った。「少々急ぎで汗をかいたんだ」

汗でこんなことになるものなのかと思っただが、とにかく目標について聞く。

「では、超能力者に対する情報を教えていただけますか」

「だがその前にのんでほしい要求がある。彼に対して何もしないでく

れ」

医者言葉に、板倉は眉をひそめた。

「いったい何をいつているんですか」

「超能力者の名前はみものるといいます。彼は決して人を傷つけるような人間ではありません。私が話し合いで何とかします、ですから彼に對して何かするのはやめてください」

「申し訳ないが、それはできない」

板倉は即答する。「すでに街には被害が出ているんだ」

「だが、死人は出ていないはずだ。さっきの発砲音は、君たちゲイによるものだな。それで、みのる君は倒せたのか」

「それはお答えできません」

「きつと倒せなかつたんだろう」

医者はまるで現場を見たかのような、確信を持った様子で言った。「それでも、彼からの反撃はなかつたはずだ。それもそうだ、彼は簡単には人を殺さない。分かつたらなら私に任せてくれ」

反撃はあつた。だが、確かに銃を無力化されただけで、一切の負傷はなかつたし、ホリも命を助けられている。だが、

「もう一度申し上げますが、それはできません」

板倉はきつぱりと断る。「確かに民間人の被害は出ていませませんが、街の被害を見ると、それは偶然とも取れます。何かが少しちがつていたら、死人が出ていました」

ゲイ部隊にも被害が出ていないことと、助けられたことは伏せた。なんであれ、部外者に情報をもらすわけにはいかない。

確かに、目標は人を簡単に殺す人間ではないのかもしれない。しかし、現状の精神状態を考えると、この医者に任せて放置するわけにもいかない。

「分かつた」

医者は敵対心のこもった目で、ボックス内の全員を見渡し、頷く。

「なら、あんたたちに話すことはなにもない。失礼する」

「あ、ちよつと——」

医者は板倉の声を無視して、すぐに外へと飛び出した。

板倉も続いて出ると、医者が乗っているであろう黒色のセンチ
リーが、砂ぼこりを上げて横を過ぎ去っていった。

「クソー！」

すかさず、ボックス内に戻りながらマイクを入れた。「ゲイ部隊、黒
のセンチユリーを追え！その車の行き先に目標がいる！」

——なんでだ！なんで殺さなかった！

さつきから、声はその話ばかりをしてきて、みのは嫌になっ
た。

「だから……あの人たちは、おとつ、お父さんを殺してない」

——お前を撃ったんだぞ！殺そうとしたんだぞ！

「でもお父さんを——」

——キィー！もういい、それより上！上を見ろ！

「上？」

見上げると、目の前には巨大な日っぺの本社ビルが建っていた。

「ああ、そうだ……日っぺだ」

よく見ると、中にはまだ社員がいるようで、仕事をしている姿が窓
から見えた。

——こいつら、逃げてないでやんの！フヒヒ！バカが！間抜けな社
長が残しやがったんだ！ここいらの奴らみーんな避難してるのに、自
分のところだけ残しやがった！

「うん、よかった……お父さんに会いに行こう」

——もう！お前は本当にバカだな！もうジジイは死んだだろう！

「え、でもお父さんは会社に行つて」

——思い出せ！思い出せ！家に帰ってきたときのことを！ドアを
開けたときに嗅いだ、糞尿の臭いを！

「あのとき……あのとき」

みのは小さくそう連呼すると、意識は頭に浮かぶ映像へと飲み込
まれていった。

学校から帰り、ドアを開けた瞬間、鼻を突く強烈なおい。

玄関の奥。居間から漂うその臭いと、言いようのない圧迫感に気圧
され、動けなかった。

心を決めると一歩ずつ足を進め、居間を覗いたときに見えたのは、天井につられた父の姿。

一瞬の虚無。

すぐさま湧き出る、疑問、不安、恐怖。

そして全てをかき消す、怒り。

煮えたぎるような体の暑さ、それは後頭部に集まってくると、強烈な頭痛を起こす。

まるで、未知の生命体が内側を食いちぎり、そこから飛び出そうとしているかのような痛み。

後頭部を押さえつけ、その場に膝をつく。

唸り、悶え、頭を床に何度もたたきつける。

叫んだ。何を叫んだのか、覚えていない。ただすべての力を振り絞り、叫んだ。

すると、声が聞えてきた。

——みのる！みのる！

その声で、みのるの意識が昔の記憶から現実に引き戻された。

——何ボーっとしてる。

「いや……思い出した……殺すんだ」

みのるの両目から、とめどなく涙が流れてきた。「こいつら全員！」「みのる君！」

能力でビルを壊そうとしたそのとき、聞き覚えのある声が出て振り向くと、黒塗りのセンチューリーから頭をだす田所が見えた。

「先生」

「しっかりしろ、みのる君」

田所はセンチューリーから降り、みのるに呼びかける。「自分を見失うな」

「先生……でも、こいつらは——」

「そんなことをしても、お父さんは喜ばない。それに」

田所は笑った。「トム・ソーヤーはそんなことはしない……違うか？」

その一言で、みのるの脳裏に、田所と会った時の記憶が舞い戻る。

——バカ！いいところなんだ！そいつなんて無視しろ！臭っさい！臭っさい汚物——。

「私は……君を信じているぞ」

声を遮った田所の言葉と共に、強めの涼しい風が、みのるの頬を撫でた。

心の中に渦巻いていた黒い霧がすつと晴れ、声はどこかに消えた。涙をぬぐい、田所の目を見てしつかりと頷くと、みのるは一步前へと踏み出した。

「すぐに配置につけ！上からでなくていい、地上から狙撃しろ！」

医者がみのると接触したとき、ゲイ部隊のボックス車は見えないように、みのるの後方、1000メートルの位置に停車し、各班を展開させた。

通常、狙撃は上から行う。狙撃手の位置がばれにくく、なおかつ狙いやすいというのものもあるが、なにより地上からでは弾丸が外れたとき、どこに行くかわからないからだ。

板倉はモニター越しに、準備を待つ。

『ゲイ1。距離893メートル、待機』『ゲイ2。距離931メートル、待機』『ゲイ4。距離810メートル、待機』

全班が周りの建物に隠れながら待機し、後は発射命令を出すだけとなった。

だが、板倉は迷っていた。

医者 of 知っていることが本当なら、ここで殺す意味はない。見たところ、なにかを説得をしているようであり、このまま事が終わる可能性がある。

もしそれが失敗すれば、医者が死ぬ。しかし、すぐになんかだけではないと、板倉は知る。

『ゲイ2。目標隣の日っペビルに、従業員多数確認』

「何だと！」

板倉は声を荒げる。「何人だ！」

『分かりません。見たところ、全員が残っている様子です』
「クソ」

避難勧告は下北沢全域の携帯電話に発信している。日っぺの社員が全員、携帯を持ってなかったとは考えられない。

上の人間が帰さなかったのだ、会社の利益を考え。

こういう脳無どもがのさばっているから、日本は——と今はそんな事を考えている場合ではない。

一気が増えてしまった、失敗したときのリスクが。

目標の能力は絶大だ。たとえ不審な動きを確認したときに発砲したとしても、そのころにはビルは大きく破壊され、大量に死人が出る。

板倉の額から汗が一筋流れると、また報告が入る。

『急な横風。横に19. 19ノット』

こんな時に。

ギッと板倉は歯を食いしばった。

地上から打つ以上、弾丸が外れることはあつてはならない。

この状況で、確実に目標に着弾させることは不可能だ。そう思っていた時、

『オレはいけます』

ホリの声だ。

「風は強いぞ、やれるか」

『やれます』

自信を持った返答だったが、当然、例えホリだとしても、この風では難しいはずだ。

板倉の中で、天秤が揺れ動く。

医者の説得が成功すれば。

日っぺの人間が死ぬ。

動いてからじゃ遅い。

風で狙撃は難しい。

横棒は水平の状態で微かに揺れ、傾きを示す針はメトロノームのように、中央で右、左にと動く。だが、次の瞬間——

「目標の元主治医から情報が入りました！」

通信手の声が響く。「歳は14！脳機能障害、精神疾患あり！認知思考——」

——天秤は勢いよく傾き、板倉はのどが張り裂けんばかりに叫んだ。

ヒュ。

みのるが一步踏み出したとき、田所が耳にしたのはそんな風を切る音だった。

同時に、みのるの体が後ろから何かに軽く押されたかのように、小さく揺れると、パンと銃撃の音が聞えた。

最初、なにが起きたのかわからなかった。だが、みのるの焦点の合わなくなった目と、口の脇からこぼれだした血を見て、すべてを悟った。

「みのる君！」

田所は駆け、膝から崩れ落ちようとする、みのるの体を抱き、支える。

みのるの背中、ちょうど心臓当たりの場所から血があふれ出ていた。

「なぜだ……なぜ撃った！」

その傷口を手で強く握りながら、田所は周囲を見渡し、どこかにいるのであるう狙撃手へ向かって叫んだ。「彼は……NONA REE VESが好きで、トム・ソーヤーにあこがれる、心優しい少年だ。それを……それを——」

「せん……せい」

みのるの消え入るような声を聞き、田所は息をのんだ。

「どうした」

田所は、みのるの顔を肩において、耳を澄ます。

「手……手を」

みのるの震える右手が上がってくると、田所は傷口をふさいでいた血まみれの手で、それを握る。「先生……僕のこと、信じてくれて……ありが……と」

そう囁くと、みのるの体は突然、天からつられていた糸が切れたかのように重くなった

空になった肉体を田所は力いっぱい抱きしめ、空に吠えた。

夜、空は満天の星空だった。

その下、山奥の墓場で、ろう台を足元に置いた田所が、静かに墓の前で手を合わせていた。

「こんな時間に、奇遇な」

声が聞え、ゆっくりと振り向くと、ゲイの板倉がろう台をもって歩いてきていた。

「この時間でしか、ゆっくり墓参りもできないんでな」

田所は忌々しく、そう答える。「いまじゃ、ここは超能力者の眠る地……ちよつとした観光地だ」

「まったく、節操がない」

板倉は田所の隣に立ち、みよるの墓を見下ろす。「国防省が病院にあった彼の死体を調べたときには、超能力の元となった脳が見つからなかったそうさ。犯人はあなただね」

「なんのことだか」

田所がすつとぼけると、板倉は鼻を鳴らした。

「それと、日つぺの上層部が、あらかた捕まったのも……」

「知らんな。そんな会社、初めて聞いた」

「そうか、なら本官の勘違いだ、すべて忘れてくれ」

板倉はろう台を置き、墓に手を合わせ、目を閉じた。「……私は、自分が間違ったことをしたとは、思っていない」

「だが、殺す意味のなかった少年を、一人殺した」

板倉はゆっくりと目を開き、手を下げた。

「そうだな。それでも、本官はまた同じ状況になったとして、あの時と同じ選択をする」

板倉はろう台を持ち、踵を返した。「例え、あなたに恨まれることになっても」

板倉が三歩ほど歩いたとき「まで」と田所が呼び止め、足を止める。

田所は板倉の背中に語った。

「別に私は、あんたを恨んじやいない。ただ一つ、約束しろ。私は決して忘れない。だからあんたも、彼の——みのある君のことを、絶対に忘れるな」

その背中から、わずかに板倉が頷いたのが見えると「もちろんだ」と答え、闇に消えていった。

田所は板倉が消えていった闇を数秒、見つめた後、また墓に手を合わせ「また来る」とつぶやいて、ろう台を持ち、その場を離れた。

ふと、何の気もなしに、空見上げた。

映ったのは満天の星空。

そのとき、あるメロディーが鳴った。

それは、田所の記憶から呼び起こされたものか、それとも、みのが起こした奇跡か。

まるで宇宙船にいるかのようで、それでいて宇宙の無限を感じるような、一度聴いたら忘れられない、テクノ調の独特なリズムが。

たった一つの取り得

「まったくあの人は」

そう言つて遠野は、下北沢駅近くの駐車場でセンチュリーから降りた。

昼下がり、朝ほどではないが、駅前にはそれなりに人が歩いていた。遠野はトイレットティッシュペーパーを右手に一つ持ち、駅の中へと入つていく。

駅員に訳を話し、改札機を抜けさせてもらうとトイレに直行した。中に入った瞬間、激臭が鼻を突く。

「先輩、どこですか」

鼻声でそう聞くと、

「ここだ」

と奥から二番目の個室から、田所の声が聞えてくる。

その個室の前に立つと、鍵が開く音がしドアが少し開く。

だが、そこから何もしてこない。

「手を伸ばしてくださいよ」

遠野は言った。

「便座に座った状態では、そこまで届かん。入って、どうぞ」

「絶対に嫌ですよ」

「なんだ、人をバイ菌みたいに」

「いまは、バイ菌みたいなもんですよ」

遠野はドアの隙間に、トイレットペーパーを持った手を入れる。

「ほら、とってください」

田所は「ぬう」と不満の声を漏らすと、トイレットペーパーを受け取った。

水の流れる音の後、個室から田所が出てくる。

「いや、悪い。この紙はいつも切れていてな、困ったもんだ」

「困ってるのは僕ですよ」

「ちよつとくるだけだろう、それにほら」

田所はコートを開いて、膨らんだ胸ポケットを指す。「お前の言い

つけ通り、GPSをちゃんと常備している。位置はすぐにわかっただろう」

GPSは衛星通信によって、地球上のどこに居るかを割り出す装置だ。

「そういう問題じゃありませんよ。そもそもそれは、先輩が急にどっかいっちょやうことが多いからでしょう。トイレトパーを運ぶために持たせたんじゃないよ」

「まあ、そういつてくれるなよ。人間というのは、天気と便意にはかなわないものだ。それより、さっさと帰ろう。こんなところに長居は無用だ」

昴は駅から少し離れた地点で配っていた、ポケットティッシュを一つ持ち、定期券で改札の中に入ると、トイレに向かった。

鼻の息を止めながら、奥から二番目の個室に行くと、ドアは開かれ中には誰もいなかった。

「あれ、ここにいたはずなんだけど」

なんだか紙がなくて困っているようだったから、ティッシュを持ってきたが、どうやら解決したらしい。

済んだのならいいかと、昴はティッシュをポケットに入れた。

「昴はマジメだなあ」

下北沢病室。個室のベッドに寝転ぶ賢は、昴の話を聞いてそう返事すると、窓の外に目を向けた。

「まあ、困ってるなら助けないと」

隣の椅子に腰かける昴も、窓の外に目をやる。

空は青く澄み、その手前、そばに見える紅葉の葉が、黄色から赤へと美しいグラデーションを作っている。

すると昴は、ちょうど3年前、賢が入院してすぐお見舞いに来た日を思い出した。

あのときも、窓の外ではきれいな紅葉が見えた。

「綺麗だな、紅葉」

昴がそういうと、賢は窓から目を離さず、

「もう、3年もたつんだ。この景色も見飽きたよ」そう答える。

素っ気のない返事に、昴が困っていると、賢は昴にも聞えるような大きなため息の後、続けた。「なあ昴、一つ頼みたいことがあるんだ」
「なんだ。なんでもいってくれよ」
「うん」

賢は突然、毛布をどかしてベッドから下りた。

「おい、お前。そんな急に動いたら——」

昴の注意も無視して、隅にあった戸棚を開けると、手に果物ナイフを持ってそばまで歩いてくる。

「これ、母さんが置いていったんだ」

昴の手を取り、それを無理やりつかませる。「昴、頼む、これでオレを殺してくれ」

昴は一瞬、言葉を詰まらせ「お前、何言ってるんだよ」とナイフを離そうとするが、賢の手がそれを許さない。

「大丈夫、首を切ればすぐだよ」

「そういう話じゃ」

その手を振り払おうとするも、賢は両手で握りこみ、離さなかった。「お願いだよ。こんなこと頼めるの、お前しかいないんだ」

「バカ、とりあえず手を——」

腕を振っていると、急に賢は顔をゆがませて、その場に膝をついた。
「賢——」

昴は焦ってナースコールを押そうとするが「いい」と賢がいったのを聞いて、手を止める。

「こんなこと……よくあることだよ。いちいち看護婦の人呼んでたら、迷惑だ」

「でもお前、もしかしたら死ぬかも——」

「いいんだよ」

賢は昴の言葉を遮って、そういった。「それなら、それで。死ぬるなら、それでいい」

「賢……なんでそんなこと言うんだよ」

「なんでって……決まってるだろ」

賢が顔を上げると、涙のたまった目が見えた。「オレはただ……またお前とテニスがしたいだけだ」
頬を伝う涙。

昂はそれを、ただ見ているしかなかった。

「あ、コーヒーは大丈夫だっけ」

病院庭のベンチに座る昂に、賢の主治医である明があきつそういつて、両手に握っているコーヒーを見せる。

「はい、大丈夫です」

と昂は受け取り、プルタブを開けて飲んだ。

「もう3年か、早いなあ。キミももうすぐ高校卒業だ」

明は昂の隣に座り、コーヒーを飲んだ。「いつもお見舞いに来てくれて、ありがとうね。キミが来る日は、賢君、調子がいいんだ」

「いえ。僕にできるのなんて、これぐらいですから」

昂は病室でのことを思い出して、眉をひそめた。「先生、あいつはいつ退院できるんでしょうか」

明は難しい顔をして、遠くに目をやった。

病院の患者だろうか。患者衣を着た子供が、親とサッカーボールで遊んでいる。

「だいぶ前にも、言ったと思うけど」

明はコーヒーを一口含み、ため息を一つもらす。「彼の病気は、とても難しい物なんだ」

「心房中隔欠損症ですよね」

明は目を丸くして昂を見た後、ふっと顔をほころばせた。

「よく知ってるね。勉強したの」

「はい」

昂はうなづく。「でも、これって手術で治せるんですよ」

「うん。でも、賢君の場合はちよつと複雑だね」

そこから明は、賢には内臓に先天性の疾患があることや、その体を手術することが難しいことを説明した。

明は、知識のない昴のために、かみ砕いて説明をしてきているが、それでもただ手術が難しいということしかわからなかった。

そんな自分の無知が、昴は憎かった。

「手術はできないんですか」

説明を聞き終えたのち、昴がそう聞くと、明はため息とともに首を振る。

「毎日、いろんな病院の先生に頼んではいるんだけどね」

「明先生は」

昴がそう聞いた瞬間、明の顔からすつと表情が消えると、立ち上がり、暗い顔で昴を見下ろすと、深々と頭を下げた。

「すまない。僕にはどうやっても無理だ」

「そんな、顔を上げてください。先生が悪いわけじゃない」

「いや、悪いのは僕だ」

明は頭を上げない。「医者だというのに……何もせず、彼が疲弊していくのを見てるしかない。医者失格だ」

一間の無音の後「賢の体は、いつまで持つんですか」と昴が聞くと、明は頭を上げた。

「心房中隔欠損症っていうのは、安静にしていれば、死ぬようなことはない……けど」

明は振り返り、賢のいる病室、805号室に目を凝らす。「体力は日々落ちていってるし、最近の彼は精神が不安定で、それが体に影響を及ぼしていてね、不整脈が出る回数が日に日に多くなっていった。彼は若い、2年なら手術しなくても大丈夫かもしれない。でも、そこから先の保証はない」

「2年」

賢の年齢には短すぎるタイムリミットを、昴は不安と共につぶやいた。

「もちろん、彼が調子を戻してくれれば、死ぬ心配なんてないんだけどね」

「でも、手術しない限り死なない保証はないし、テニスもできませんよね」

昂が問うと、明はぐつと眉を寄せた。

「ああ、その通りだ」

その事実には、昂は静かに目を伏せた。

頭の中で、涙を流した賢の顔が思い起こされると、昂は顔を上げる。

「あの、僕にできることは、なにかありませんか」

そう伝えるも、明の表情は暗い。

「昂君、その気持ちはありがたい。けど、キミにはキミのやらなくちゃならないことが、たくさんあるはずだ。もうすぐ卒業だ。進学するには勉強は必要だし、就職だったとしても準備が——」

「3年間です」

昂は力強い口調で、明の言葉を遮った。「その間、あいつはたった一人で、不安と戦っていたんです。賢は僕の親友です……もう、傍観者でいたくありません」

明は口をつぐみ、悩むように視線を横にした後「ちよつとまってる」とその場を離れ、建物へと入っていくと、10分後、大きな茶封筒をもってきた。

「これを」

と昂に茶封筒を渡す。「賢君の、胸部のレントゲンとカルテだ。本当は、こういうものを持ち出すのは、あまりいいことではないから、なくさないでね」

「はい……。それで、僕はこれで何をすればいいんですか」

「探しに行くんだ。彼を……賢君を手術できる人間を」

その日から、昂は毎日、医者を探して下北沢中を探し回った。

そして、すべての医者に聞いた。

「彼を手術できますか」と
すると、

「確かに難しいが、私の腕なら」

「俺様なら楽勝だな」

「この僕ならできるだろね」

「私くしに任せれば簡単ザマス」

「きよきよきよ！私の名前をぐ存じない」

反応は悪くなかった。

だが「じゃあ、手術をお願いできますか」と聞くと、

「いや、最近いそがしくてね」

「……き、気分がのらない手術はしないんだ」

「僕はできるんだけど、助手の腕がなくて」

「ウチのペスが最近、病気で」

「いや〜ついこの前、ホモビの撮影で腰をいわせてしまって」

言い訳をつけて、できないと断る医者ばかりだった。

それでも、昴は諦めることなく、医者を探し続けた。

1日最低1人。日によっては5人と会った。

それでも、手術できる者は見つからなかった。

そんななか、流れが変わったのは、85人目の医者と会ったとき、

「私には無理だろう」

頭にバットマンのマスクをつけた医者、バッドマンはカルテを一通りみて言った。

「そうですか」

昴は反応悪く、そう返した。

最初は断られるたびショックを受けていたが、85人目ともなると、もうその感情も薄くなる。

「だが」

バッドマンはカルテから視線を上げた。「手術できる人間は知っている」

昂は目を見開いて、バッドマンの顔を見る。

「本当ですか！ それはいつたい、誰なんですか」

「その前に、一つ質問がある。キミの年齢を教えてくださいかな」

「年齢……18歳です」

その質問を謎に思いつつも、そう答える。

「18歳……もう働いてるの」

「学生です」

「学生？ あ、ふーん」

バッドマンは何かを察するかのように。口に手を当てた。

「あの、学生なのが何か？」

昂が質問すると、バッドマンはため息交じりにいった。

「……一つ問題があつてね」

「私は高いぞ」

入るなり通された応接室らしき場所で、対面に座る田所は、賢のレントゲンを見るなり手に持っていたそれを机の上に置き、そう言った。

もはやできて当たり前だ、といわんばかりの、その余裕の表情と、そして、

「成功報酬は1919万円だ」

バッドマンのいった通り、学生には到底払えないような報酬額に驚いた。

「1919万円」

思わず、その額を小さくつぶやく。

自分がどれだけ働けば、そんな大金を生み出せるのか、正直わからなかった。

いや、一生無理なものかもしれない、だが、

「あの、田所先生」

昴はさすがのような表情を、田所に向ける。「僕は高校3年生の18歳です。とてもそんな金額は払えません。ですが、卒業後すぐに働いて少しずつ払います。絶対です。ですから、手術をお願いできませんか」

「初対面の人間を信用できるほど、私はお人よしじゃない」

田所はソファアーに体をうずめると、冷めた目で見下ろしてくる。それでも、昴は引かない。

「カルテにのってる彼は、僕の親友なんです。もう3年も寝たきりなんで。また、こいつにテニスをさせてやりたいんです。お願いします」

「さて、その話も本当かどうか」

「先輩」

田所の返答を咎めるように、脇に立っていた助手らしき男がそう言ったが、

「お前は黙ってろ」

と田所は一蹴する。「まあ、私も守銭奴ってやつでね。金はあればあるほどいいと思ってる。キミが確実に金を払ってくれる、信頼に足る人間なら、その話を受けてやらんでもない」

「信頼……ですか」

「そうだ」

昴は一問、考え「それは、どうすれば」と問うと、

「36万円だ」

田所は腕を組んで、そう答えた。「今から一月、30日以内に36万円を持ってこい。もちろん、他人に借りるなんてものはなしだ。ちゃんとキミがその体で稼いだものを、ここに持って来たら、それを信頼として、後払いで手術を引き受けよう」

1919万円と比べると額は減るが、それでも36万円は大金だ。家にある貯金箱には8万5千円が入っている。それを合わせても、一日1万円程度稼がなくてはならない計算だ。

一日の大半を学業にとられる学生の昴では、稼ぐのは難しい。

田所も、それを分かったうえででの要求をしたのだろう。

「ちなみにだが」

田所は意地の悪そうな笑みを浮かべた。「これを受けたうえで、金が払えないようなことがあったら、もう私が手術をすることはない。口だけの人間を相手にしている暇はないからな……さあ、どうする。やるか。やらないのか」

ここを逃せば、もう手術できる医者は見つからないだろう。

しかし、金を用意するのは難しい。失敗すれば、田所に手術をしてもらえなくなる。

瞬きを忘れ、ぐっと全身に力を入れた昴は、額から一筋汗を流した後、重い口を開いた。

「なんであんなこと言ったんですか」

昴が家を出ると、遠野は不機嫌そうにそう言った。「相手はまだ子供ですよ、助けてあげましょうよ」

「子供だから助けるのか」

田所は窓際に立ち、野獣邸から離れていく昴の背中を見つめた。

「なら、大人だったら見捨てるのか」

「いや……そうごとくじゃなくて」

「私は、他人を見た目や年齢で判断しない。行動と結果で判断する。もし彼が本気だというのであれば、一月後、またここにくるだろう。金を持ってな」

「すごいっすよね。連チャン（連続）でリーチするなんて」

午前8時。人がごった返す繁華街で、パチンコから出た金子がそういうと、

「あたりまえやん」

と景品の入った大きな紙袋をもった北村は、意気揚々と返事した。「指のさじ加減っつーの？ 女のあそこを愛撫でるようなこのソフト

なタツチ。リールの志村けん、10回もぬがしたん俺しかおらんで」
調子のいい北村に、金子は愛想笑いで返す。

引つ越しの仕事を抜け出しているため、二人は青いつなぎ姿だ。

「それよりも、いいんですか？ 勤務中に油売って」

繁華街を抜け、人のいない住宅街に入ったところで、まだ仕事に慣れていない金子が心配して問うと「ええんや」と北村は焦る様子なく答える。

「一軒目は昨日の引継ぎやろ、もうだいたい終わつとるやん。金子、朝っぱらから気い張つとつたら後もたへんで」

「はい」

「いかにさぼるかっつーのも、仕事の、うちや」

トラックが止められた小ビルが見えてきたとき、北村は眉間にしわを寄せ、首を前に出してトラックを凝視した。「おい、あれ」

金子も北村の視線の先に目を凝らすと、トラック後部の荷台が開いていた。

中には引つ越しの荷物が詰まっている。

「あかんあかん！ 泥棒や！」

北村は焦り、手に持っていた紙袋を強引に金子に持たせ、トラックに走った。

「ちよ、ちよっと」

すぐに金子も、後を追う。

二人で荷台の前になると、その中でこちらに背中を向けて立つ、同じ青いつなぎ姿の男が目に入った。

「お前、誰や」

北村がそういうと、男は振り返った。

歳はかなり若そうで、胸には金子たちと同じ引つ越し会社のロゴがあった。

「あ、どうも。バイトで入った、昴っていいいます」

昴と名乗った青年は、軽く頭を下げる。「お二人はいませんでしたが、仕事時間になったので、荷物を運んでいました。ダメでしたか」
「あ、いや」

北村がそう口にして、何か知っているか、という目を金子に向けてきたので、すぐに首を振った。

「どうやら、会社が急に入れたバイトらしい。」

「事前に連絡がなかったから、ちよつとびっくりしてな」

北村が言った。「悪いな、ちよつと用事があつて、抜けててん」

「ああ、そうですか」

昴は生真面目そうな雰囲気ですら返すと、段ボールをもって荷台から降りる。「引越しのバイトは初めてなんで、いろいろ教えてもらうこともあると思いますが、お二人とも、どうぞよろしくお願いします。じゃあ、これ運んできます」

「若つかいののに、よう働くやつやったなあ」

「そうですね」

仕事が終わつてすぐ、会社近くの立ち飲み居酒屋で飲んでいた二人は、さつそく昴の話題となった。

仕事がい早いおかげで、今日は予定の2時間押しで終わり、その後もすぐに別のアルバイトがあると、走つて行つてしまった。

すでに軽く酔いがまわっている北村は、焼き鳥を一口に入れると、うまそうに小グラスで焼酎をあおった。

「ふー……なんかめっちゃ張り切つてたけど、あれじゃあいつかぶつ倒れてまうで」

「それ、昴君に聞いたんすけど」

と金子も焼酎を一口して、答える。「……どうも、手術費用を稼がないといけないみたいなんですよ」

それを聞いて、北村は口に運ぼうとしていた焼酎のグラスを止めた。

「手術費用？」

「はい。昴君の友達が、なんか心臓の病気がしくて。それは、ある医者にしかな手術できないんですって。で、その医者から結構な額の手術費用を、請求されてるみたいです」

「結構な額なあ……。なんぼなん」

北村はそう聞き、グラスを傾けたとき「1919万円です」金額を耳にした瞬間、ブーっと口に入っていた焼酎を勢いよく吐きだした。「うわー！ なにしてんすか、ビチャビチャですやん」

店員からもらったおしぼりで、二人で机を拭くさなか、北村はいう。「さすがに嘘やろ、めちやくちやな金額やん。高校生に払えるわけない」

「いやそれがですね。1月以内に36万稼いでこれたら、後払いで手術を受けてくれるっていう話なんですよ」

「それでもキツイやろ」

「まあ、だからあんだだけ、焦ってるんでしようね」

「ああ……そうか」

北村は焼酎で膨らんだおしぼりを、端に置くと「おい、あいつの電話番号、聞いてるか」と金子にいった。

「一応、聞いてましたけど、なんで」

「いやな、知り合いに、手貸してほしいゆうてるところがあんねん」

その日から、昴はバイト漬けの日々を続けた。

普通のアルバイトではだめだ。かなり高報酬でないと、目標を達成できない。

最初は仕事を探すので一苦労だったものの、行く先々でバイト仲間や社員の人たちが、働き先を紹介してくれた。

「バイト君、もうちよつと照明あげて。男優のケツが見えるよに」

「はい」

「キミ、控えの汁男優たち呼んできて」

「はい」

「昴くん。疑似精子おねがい」

「はい」

「ここで脱がすから、キミは一般の人がこないか見張ってて」
「はい」

「ちよつとウンコしてもらえらる」
「はい」

一月後、昂は口座の数字を見て驚愕した。

50万円。学業の合間でありながら、30日で目標を大幅に上回る金額を稼いでいた。

必死で働いていたため、自分がどれだけ稼いでいるかの実感もなかった。

昂は興奮気味に、50万円すべてをおろした。それを背負っていた THE NORTH FACE のリュックに入れ、銀行を出る。

外は大雨だった。レインコートを羽織った昂は、野獣邸へと自転車をこいだ。

寒くはなかった。興奮で、体が熱いほどだった。

人がほとんどいない歩道を、顔に雨を受けながら駆け、橋を登ったそのとき、

「誰か助けてー！」

雨音の中、子供の叫び声を聞いて、昂は橋の中腹で自転車を止めた。周りを見渡すも、子供の姿はない。

「溺れるー！ 溺れるー！」

また、声が聞えた。今度は方角がはっきりと分かり、自転車から離れて橋の下を覗くと、2mほど下、雨によって水位を増した川の中で、小学生らしき子供が一人流されていた。

両手をばたつかせて、何とか顔を出しているが、いまにも沈んでしまいうさだだった。

子供はどんどんと流され、昂から離れていく。

周りを見渡すも、この大雨で誰も人はいない。電話で助けを呼んでも、きつと間に合わない。

オレがやるしかない。

そう直感したとき、昴は自転車を飛ばし、緑色のフェンスが立つ川の側面を進んでいく。

子供を大きく通り過ぎた後、スタンドを下さず、その場に自転車を横にしてレインコートを脱ぎ、リュックを置くと、フェンスに指をかけてよじ登る。

上まで行くと、そこからジャンプで川にダイブし、中央まで泳いだ。ちょうどそのとき、川上から少年が流れてくると、両腕でしっかりとつかむ。

「だい、大丈夫？」

声をかけるも、体力をかなり消耗したのか、ぐったりとした少年は何も答えなかった。

その体を抱きながら、川下へと流されながらも端に泳いでいると、それを見ていたのか、フェンスの内側で手まねきをする2人の大人が見えた。

そこまで泳ぐと、40代の男が手を伸ばし、少年ごと昴を引き上げた。

「大丈夫だったか？ いま救急車を呼ぶから」

男にそう言われるも「いえ」と返事をして、昴は立ち上がった。

「すみません。僕、用事があるんで。行きます」

「え、ちよつと」

男の言葉を無視して、ビショビショの服のままフェンスを乗り越え、道路に着地すると昴は走った。

後ろからは男が呼ぶ声が聞えたが、昴は意に返さず、リュックを置いた場所へと向かう。

肩で息をし、寒さで体が震え出してくると、倒れた自転車が見えた。だが、

「あれ……なんで」

リュックがなかった。

誰かにとられたのか、雨によって流されてしまったのか。ともかく、周囲を血眼になって探した。

30分ほど探し続けたとき、不意に足から力が抜けて、その場に

突っ伏した。

体力の限界だった。川を泳ぎ、水を含んだ冷たく重い衣服のまま、雨の中を散策していたのだ、そうなるのも当然だろう。

両ひざを膝を突き、天を仰ぐと、薄黒い曇天が昴をあざ笑うかのよう、顔を濡らした。

「もう、ダメなのかな」

ため息と共にでたつぶやきが、雨音にかき消されると、昴は静かに目を閉じた。

まぶたの裏には、賢と一緒にテニスをしていた時の光景が映る。

——オレはただ……またお前とテニスがしたいだけだ。

「うん……オレもだ」

昴はそういと、両足を踏ん張って立ち上がった。

田所は腕を組み、雨の降る外を見ていた。

時刻は午後6時。暗さも相まって、汚いイボが見えるほど、窓にはうつすらと自分の顔が移った。

「先輩」

後ろから遠野に声をかけられ、振り向く。

「おお、どうした」

「いえ。ただ、外をじっと見てるから」

「まあ……」

田所は表情を変えず、窓に向き直る。「天気が悪いなあと思って。別に、たいした理由はない」

一間、雨音がなる静粛のあと「先輩、やっぱり——」と遠野が何か言いかけたとき、インターホンが鳴った。

田所は玄関の方に顔を向けた後、遠野と目を合わすと、

「でてきます」

と遠野はすぐさま駆けていった。

田所はふうっと一つ息を落とし、応接室へ向かおうとしたとき

「先輩！」

遠野の声が響き、何があつたのかと足早に向かうと、玄関には全身

をずぶ濡れにした昴が立っていた。

「どうしたんだ」

困惑している遠野と、なにもいわない昴を往復してみても、田所はそういうと、昴は深々と頭を下げた。

「申し訳ありません、田所先生。お金は用意できたんですが……なくしました」

「ええー」

遠野が驚きで声を上げると「なくしたとは、どういうことだ？」とすぐに田所が尋ねると、昴の口から、50万円を稼いだこと、川で子供がおぼれていたこと、その間にリュックがなくなっていたことを聞いた。

「なるほどな」

田所は頷く。「それで、金はちゃんと用意できたが、持っただけはこれなかった、ということか」

「はい」

「まるで、小学生のいいわけだ。宿題はやっていて、けど忘れてきた」
遠野がその発言を咎めるような視線を、田所に向けると「おっしゃる通りです」と昴が答えた。

「ですが、信じてほしい。僕はちゃんと、お金を稼いで届けにきたことを。ですから——」

「手術をしてほしいと」

田所がさえぎってそう言う。「はい」と昴は頷いた。

なにかを考えるように、田所は顎に手を置くと、

「それはなかなか……難しい話だな。時間が必要だ」

「といって親指で家の中を指さした。「風呂に入って来い、その間にどうするか考える。遠野、いろいろ用意してやれ」

昴が風呂に入っている間、田所は応接室でソファアームに座り、携帯でホモビをストリーミング再生で見ていた。

今や携帯端末でAVが見れる時代だ。

「いい時代になったもんだ」

そう呟くと同時、ドアが開くと遠野と昴の二人が入ってきた。

昴の恰好は患者衣だ。

「悪いな」

田所はいった。「うちにはキミの背丈にあった服は、それぐらいし
かなくてね」

「いえ、着させていただけのだけ、ありがたいです」

「そうか……。遠野」

田所がアイコンタクトで応接室を出るよう促すと、遠野は昴に心配
そうな顔を向けた後、出て行った。

「そこにかけてくれ」

田所は体面のソファアを、昴に促す。

「はい」

昴が座つたのを見た後、田所は前かがみになって口を開いた。

「私もいろいろと考えたんだがな、信じようと思う」

「本当ですか」

昴はハツとして、顔をほころばせる。

「ああ、キミがホモビスタツフで50万円を稼ぎ、ここに持つてこよう
として、なくしたのは信じる……。だが」

田所はしっかりとした口調で付け加える。「キミは約束通り、金を
持つてこれなかった。これは確かだ」

昴は肩を落とす。

「はい」

「約束がちゃんと守れなかった以上、ペナルティがあるのは当然だ。
そこで、君に聞きたい。そのペナルティは、どういうものにするか」

昴は田所にも見えるほどに、ぐっと拳を握った後、意思のこもった
目を田所に向ける。

「何でもします」

「ん？ いま何でもするといったか」

田所が復唱すると「はい」きっぱりと昴は答えた。

「何だつてやります……。僕のたった一つの取り得は、真面目さです。
命令されればすぐに動きます、何でも全力でやります。1919万円

分、しつかり働きます。だから……賢の手術を、お願いします」

机に額が当たりそうになるほど、昂が頭を下げると、田所は数秒それを眺め。

「なるほど、分かった」

と行って、昂が顔を上げてすぐ部屋を出た。

朱肉と共に、紙二枚とペンを持ってくると、スラスラと契約の内容を紙に書き込んでいく。

「いっておくが」

手を動かしながら、田所はいう。「何でもする以上、体をやすめる日があると思うなよ。食事も最低限だ、眠る時間だつてあるか。21世紀に奴隷制度の復活だ……。さあ、ここに名前と拇印を」

田所は紙を回し、ペンと朱肉において、紙の下の方を指さすと、昂はすぐさま名前を書いて、指を朱肉に押し付け、拇印を押した。

それを見て、田所はふっと笑った。

「迷いがいな」

「はい。だって、賢の手術をしてくれるんでしょう」

あまりにも真つすぐなその返答に、田所はまた笑った。

「まあ、そうだな。この契約書の効力は、手術が終わつてすぐだ。賢君とやらが健康になれば、この契約書がある限りキミは私の奴隷だ。忘れるな。それと、私が契約書をなくすなんてことは、考えない方がいい。肌身離さず常に持つておくからな。あと」

田所は契約書を端に寄せ、新しい白紙の紙に、田所は賢の手術を行うと書き、名前と拇印を押した。「ほら、手術の契約書だ。またなくすんじゃないぞ。それと、ついでこれもやろう」

田所はポケットから財布を取り出し、一万円札を昂の前に置いた。

「えっと、これは何ですか」

昂が動揺した様子で聞くと、田所は足を組み、余裕の表情をみせた。「それでタクシーでも拾つて、手術の報告でも行くんだな。なーに気にするな。これから君には、その札の1919倍も働いてもらうんだ。もらつておけ」

「ああ、はい」

その契約書と札を手に取り、昴は立ち上がってドアの前に立つと、田所の方に向いた。「あの、ありがとう——」

「礼ならいい」

田所は手を振り、その言葉を遮った。「報酬分の仕事をするまでだ。手術は明日だ。それまでにぽっくりいかないよう、安静にしておくんだな」

「はい。では、失礼します」

昴が部屋を出ると、すぐに玄関から外に出て行く音が聞えた。

「まったく……今の時代には珍しい、生真面目な男だ」

そう呟いて、田所は奴隷契約書を折りたたみ、コートの胸ポケットに入れた。

「え……どういうこと」

賢が体を起き上がらせ、目を丸くしてそう答えると、昴はもう一度、言った。

「だから、手術ができるんだよ。治るんだ」

「でも、オレの手術は、先生難しいって」

「見つけたんだ。賢の手術ができる医者を」

「本当か」

賢は興奮気味に、昴の両肩をつかんだ。「なあ、嘘じゃないよな」

「オレが嘘ついたことなんてないだろ」

「そっか……そうだよな」

賢は顔をほころばせると、両目から大粒の涙を流した。「クソ真面目なお前が、嘘つくわけないよな」

その顔を見ると、昴も嬉しくなり、笑顔を作りながら涙を流した。自分がやってきた、すべての努力が報われた。心の底からそう思った。

「お前が見つけてくれたのか」

涙を袖で拭きながら、賢がそう聞くと、昴は頷いた。

「うん」

「大変だっただろ」

「まあね」

確かに大変だった……というより、これからも大変だ。

もちろん、ここ一ヶ月、ずっと金を稼ぐために働いた事や、契約の事は賢には離さない。変な気を使わせたくないからだ。

そのとき、昴はふと不思議に思った。

田所先生、どうしてオレがホモビスタツフで働いていたこと――。

「なあ、昴」

その賢の声で、思考の途中だった昴はハツとして顔を上げる。

「あ、どうした」

「一月前、変なことってゴメンな。オレ、ちよっとおかしかったよ」

昴は、自分を殺してくれと懇願した賢のことを思い出す。

「仕方ないよ、あんな状況だったんだ」

「そんなことないさ、本当にごめん。それと、ありがとう……本当にありがとう」

「礼なんていいよ……オレはただ、また賢とテニスがしたかっただけだから」

それを聞いて、賢はフフッと鼻をならし、また涙を一筋流すと、

「ホントにお前は……真面目な奴だな」

笑い交じりでそう言った。

「ああ、そうだよ。それが、オレのたった一つの取り得だから」

「そうか……それなら――」

そう言うと、賢は涙目ながら、数年ぶりに見る満面の笑みを作った。

「――オレの取り得は……そんなクソ真面目な親友がいることだ」

下北沢病院。いつも無人のように静かな805号室には、その日、絶え間ない笑い声が響いた。

「先輩、本気なんですか」

賢の手術を行うため、下北沢病院に向かう途中、助手席でふくれっ面を見せる遠野に「本気も本気だ」と田所は黒塗りのセンチユリーを運転しながら答えた。

「これは彼も承諾したことだ。何も問題はない」

「でもあんな契約書、人権無視ですよ、憲法違反ですよ」

田所はフンと鼻を鳴らす。

「法が怖くて、無免許医師が務まるか。それにいつも言ってるだろ、報酬はオレと患者の問題は、お前は黙ってるって」

「いいえ、今回ばかりは見逃せません。だいたい、先輩はいつも——」

「ちよつといいか、ラジオつける。静かにしててくれ」

田所は逃げるようにラジオをつけると、遠野は口をへの字にして黙った。

ラジオからはニュースが流れてくる。

——般道で全裸にさせ、性行為を行わせ撮影したとして、わいせつ物陳列罪の疑いで逮捕しました。調べによりますと監督は、確かにやらせました、露出最高。と容疑を認めています。

「まったく、めっちゃくちやな奴らだなあ」

田所が感想を述べるも、遠野は不機嫌なまま窓の外を見て、何も答えない。

——次のニュースです。川に流されていた少年を、助けた男性を探しています。昨日午後5時ごろ、下北沢の川で体格のゴツイ小学生が流されていたところ、近くにいた20代と思われる男性に助けられました。その際、それを見ていた別の男性が引き上げたところ、用事がある、と言って名前もいわず、その場から去りました。下北沢警察署は表彰のため、男性の身元を探っています。また、川近くの公園に、その助けた男性の物らしき、ホモランドセルことTHE NORTH FACEの——

不意に田所は、下北沢駅前の駐車場に入り車を停めると、ラジオを止めた。

「先輩、なにしてるんですか、ここは駅ですよ」

「いや、ちよつと用事だ」

田所はシートベルトを外して、外に出た。「すぐ戻る」

足早に駅に向かうと、駅員に訳を話し改札の中に入り、トイレに直

行した。

中には誰もいない。

奥から二番目の個室に入り、下着をおろして便座に足をかけて座った。

「で……でますよ」

ジョボツ、ジョボボボボ……ジョボボボボ！バチイツ！ミユリツ……ギユイイツ……ポンツ！ブチイ……ブツチツパ！！……チヨポン。

スッキリした田所は、ペーパーホルダーを見ると、わざとらしく眉を寄せ、

「ああ、そうだった……。このトイレはいつも」

とコートの内側に手を入れた。

「紙がないんだ」

ブラック・フアック

医者っていったい、なんなんだ。

これで何度目か、頭に沸いたその問いは、目線の先、病室の窓から見える青空に消えていく。

「ちよつと、先生」

ぼーっと空を眺めていた遠野は、はつとして横を向く。

「あっはい」

見ると、ベッドに寝転ぶ患者が怪訝そうな表情を浮かべていた。

「なに……オレの体になんかあったの」

どうやら、遠野の様子を見て、不安を感じたようだった。

「いえ」

笑顔を作り、遠野は手を振る。「ちよつと寝不足が続いてまして」

「寝不足？ おいおい、あんたオレの主治医だろ。そんなことで、へたな仕事してもらっちゃ困るよ。ちゃんと寝てくれよ」

「す、すいません」

謝って頭を下げるも、そんなこと言われたところで、どうしようもない。と心の中で呟く。

研修医は、というよりも、医療現場は激務だ。朝から晩まで働き詰めで、休む暇もない。

指導医には毎日のように怒られ、看護師からは監視され、家に帰るのはいつも夜の11時以降。軽くシャワーを浴びて気絶するように眠れば、朝食を食べてすぐに家を出る。

土日には休みをもらえるが、担当患者に何かがあれば、すぐに呼び出しが来る。いつ何時でも、気が休まることはない。

さらに、一週間に一度は夜間当直もあり、その日は寝ることができず、数時間の仮眠をとって、いつものように仕事を行う。

研修が終わり医者となると、これよりもさらに過酷な職場環境になるというのだから、笑える話ではない。

給料は、生きるのに困らない程度にはもらっているが、その労力と見合っているとはいいいがたい。

まあ、その昔に研修医の低報酬が問題となり、2003年に法律が作られたからそれだけもらえているが、それ以前は月5万円なんている、異常な報酬がまかり通っていたのだ。それと比べれば、恵まれているといえ、恵まれているのかもしれない。

すっかり眠って、ちゃんと仕事をしてほしい。患者はみんなそう思うだろうし、病院で勤務する医者や研修医たちだって、そうしたいと思っている。だが、そんなことをすれば、ここ下北沢病院は成り立たないのだ。

しかしながら、遠野にとっては収入も激務も、たいした不満ではなかった。もとより、こういう職場だということは熟知していた。

何よりつらかったこと、それは、ここ下北沢病院で働き出し、いろんな人間と接していくほど、医者というものの本質が見えなくなってきたからだ。

病院は一企業だ。赤字が続けば倒産するし、経営が大事なことはよくわかる。ただ、ここには患者を札束で数えるような、そんな損得勘定が見え隠れする。

本来なら6人ほどが入れる部屋を、わざわざ一人用の豪華な個室にして、政治家や社長あたりを相手にし、お礼金なんかをもらえば、名のある教授が優先的に手術を行う。

組織としての構造も最悪だ。常に上の人間が幅を利かせ、すべてを決めている。一番の出世への近道は、手術をすることではない、ゴマをすることだ。

派閥争い、出世争い、圧力や理由のないイジメ。そして、そんな中を着実に順応している自分。

いつの間にか、愛想笑いがうまくなった。会話の中で、他人を持ち上げるのがうまくなった。必要最低限の行動で、患者を対処するのがうまくなった。

そのつど、見えなくなっていく。自分の理想とした医者の姿が。昔は、確かにハッキリと見えていた。だがいまは、すりガラスの向こうにあるかのようにぼやけている。

そのぼやけた輪郭を目でなぞるたび、思う。

医者っていったい、なんなんだ。

午後10時。仕事が終わわり、更衣室で私服に着替え、薄暗い廊下を歩く。

そのとき、微かにウンコのようなにおいがした。

どこかに汚物の入ったオムツでも落ちているのかと、視線を動かしている、すぐ近くの病室から扉越しに話し声が聞こえた。

「医療費のことなんですけど」

子供の声だ。

確かここは、たると、という難病の少年が使っている個室だ。

長い間、手術できる人間が見つかっていなかったが、最近になって現れて、ここで手術をしたと聞いた。

どうやらその費用について話し合っているようだった。

別に聞きたいわけではないが、離れる理由もないので、引き続きにおいの出所を探す。

「364万円ですよね」

たるとから発せられたその金額を耳にした瞬間、遠野の体は硬直させ、ゆっくりと病室の方を振り返った。

364万円？ そんな金額を請求したのか。

確かに、病気は下北沢病院ではどうしようもないほどの難病だった。それでも、ありえない金額だ。

金持ちに対しての要求ならまだわからなくもないが、たるとの家は普通の家庭だ。簡単に払える金額ではない。

「ああ、そうだ」

手術を担当した医者らしき男の声が聞える。

汚い声だった。きつとブサイクに違いない。

当然のように答える医者の声を聴いても、遠野にはもう嫌悪感すら湧いてこなかった。あつたのは、医者という職業に対する諦め。

難病の子供を救える腕はあっても、何よりも大事な人としての心がない。

もうどうでもよくなった。自分の行く末も、なにもかも。

急にどつと体が重くなった気がした。

さっさと帰ろう。そう思い、踵を返したそのとき、

「だが、それは普通の患者の場合だ」

遠野は足を止め「え？」と思わずたると、同じ言葉を重なるように言った。

「キミと私は友達だろ」

フッと笑う声が聞えた。「助け合うのが友達ってやつだ、金は要らない」

頭が真つ白になった。ドン、と脳天から衝撃がきたようだった。

病室の中では二人が話を続けているが、遠野の耳には全く入っていない。

足元から湧きたち全身へとめぐる、ろくでもない人間と決めつけていた自分への恥の感情と、謎の興奮。それが遠野の体温をぐつと上げ、耳を赤くした。

不意に扉が開き、医者らしき男と目があった。色黒で体のがっちりとした、目の横に小汚いイボのある、予想通りブサイクな男だった。

男は遠野をみて「なにか？」と聞いてきたが、

「いえ、なにも……」

遠野が茫然とそう答えると、男は不思議そうに眉を動かした後、背を見せて廊下を歩いていった

顔を見れば分かった、性欲の獣だ。きつと部活の後輩なんかを家に呼んで、睡眠薬入りアイスティーでも飲ませて昏睡レイプとかしてるに違いない。

体臭もウンコくさい。においの出所は、この男だったんだ。きつと、ろくなものを食べていない。

大学も留年してそうだし、イクときにイクスギイとかいいながら、甲高い声を上げるだろう。年上の人間を呼び捨てにしてそうだし、枕も無駄にデカいはずだ。筋肉はステロイドで作った偽りの筋肉だ。ハゲてるし。

ウンコの擬人化、ステロイドハゲ、鈴木福。

侮蔑しようと思えば、いくらでもできる風体の人間だった。でも、医者だった。

自分の理想としていた、医者の中姿が、確かにそこにあった。「あのー」

医者が数歩進んだところで、遠野は呼び止めた。医者が足を止めてこちらに振り返かえると、遠野は息を呑んでいった。「あの……な、名前を、教えてくれませんか」

「名前」

医者は怪訝そうな表情を浮かべた後「田所だ。医者をしている」と答えた。

「田所さん。いや、田所先輩」

「せん……ぱい？」

田所は首をかしげる

「はい、そう呼ばせてください」

医師免許を持ち、遠野が先生と呼ぶ医者はたくさんいる。でも、それら有象無象と田所は違う。自分の求める医者像の先を行く人間だ。それを敬いたかった。

「まあ、悪い意味はないんだ、好きにするといい」

「ありがとうございます。それで先輩、一つ聞きたいことがあります」

遠野は目を真剣なものにして問う。「医者っていつたい、なんなんでしょうか」

いままで、どれだけ考えても出なかったその答え。きつと、田所は明確な答えを持っていると思った。だが、

「さあ、わからん」

田所の口から出たのは、あまりにも適当なものだった。

「分からないって……いや、先輩ならわかるはずです。先輩は誰よりも医者です。だったら、医者としてあるべき、確かな答えを——」

「わからんと言ったらわからん」

田所はぶしつけに遠野の言葉を遮り、続けていった。「理由だとか意味だとか、考えたことがない。ただ、患者を治療し続けた。そして、いつの間にか医者になっていただけだ」

いつの間にか……医者に……。

遠野はぐつと全身に力を入れ「なるほど」と一つ呟いた。

「悪いな、分かりやすいな答えじゃなくて」

「いえ、とてもいい答えだったと思います」

目を閉じ、遠野は深々と頭を下げた。「ありがとうございます」
「礼には及ばない。失礼する」

田所がその場から離れる気配を感じても、遠野は頭を上げなかった。

その状態のまま、遠野はある確信を得ていた。

自分の描く理想への道のりは、いまだ見えない。でも、その先に先輩がいる。

学ぶんだ。先輩から……僕が医者になるための、大切なものを。

その後、遠野が田所の助手として行動を共にするのは、研修が終わった3か月後のこと。

ムンバイはインドの東、海沿いに位置する大都市である。

海岸近くには高層のビルやマンションが立ち並び、その反対には中流層のアパート、そのさらに奥にはボロボロの家や、屋根代わりのブルーシート、大量に干された洗濯物が見える、スラム街がある。

高層マンション、364階の一室。応接室らしき小部屋のソファーに座る田所が外を眺めると、そのスラム街を一望できた。

資本主義によって生まれたその強烈な格差を感じると、なんとも言えない気持ちになる。

そんな田所に対し、対面に座る、見るからに金持ちだと言わんばかりの、金に染まった腕時計や指輪を身に着けた小太りのインド男は、ソファーに座って余裕のある笑みを浮かべながら、中味のない話を喋り続けていた。

「いやー聞きしに勝るとは、まさにこのことでしたねえ。いくらでも払うといっても、首を横にふる医者ばかりです。私も、当事者である息子も半ば、諦めていました。そこで小耳にはさんだ神の腕を持つ名医、ブラック・ファック。半信半疑でしたが、この目で見て確信しました。あなたこそが世界一の名医だ」

「何度も申し上げますが、私の名前は田所です。ブラック・ファックと名乗った覚えはありません」

休みなくしゃべり続ける男に辟易しながら、田所は面倒くさそうに答える。

「あーいや、これはこれは申し訳ない。しかしですnee、インド一の名医とうたわれた人間でさえ、無理だといった手術を、30分程度で終わらすというのですから、これはもう神業。いえ、あなたそのものが神といつていい。ここだけの話ですが、息子もかなり自暴自棄になりましてね。殺し屋を雇ったんだ、もうすぐ死ぬんだと、訳の分からないこともわめておりました」

「そうですか」

田所はイライラしながら、膝を揺らす。

「やはり日本の方は手先が器用なのでしようね。最近ここインドにも日本企業の進出が盛んでして。このマンション周辺では、よく日本人を見かけます。きつとあなたもご存じだと思いますが、数年前から医療業界にも進出した……ハハ！ 名前を忘れてしまいました。ともあれ、私は日本人の方によく助けていただいています。もちろん、あなた含めてね」

「それはどうも」

田所が仏頂面でそう答えると、男は目をきよきよと動かす。

「あー、それで……まだ何か話すことでもおありですか」

目を閉じた田所は、鼻から思い切り息を吸い、ゆっくりと吐きだした。

「報酬を」

その一言で、男はハツとして眉を上げると、

「ああー、これはこれは申し訳ない、全く忘れておりました」

胸ポケットから小切手らしき紙とペンを取り出す。「それで、いくらでしたか」

「1億9190万円です」

「そうでしたnee」

男は少しだけ眉を動かし、ポケットから出したハンカチで額を拭い

た後、小切手にその金額を書き込み、田所に渡す。「ありがとうござい
ました。また、息子に何かあつた時は、よろしく願ひします」

「報酬がいただけるなら、いつでもお伺ひしますよ」

田所は立ち上がった。「では、失礼します」

「下には車を待たせてます、空港までの足にしてください」

「それはどうも」

男と一緒に部屋を出ると、36畳の巨大なリビングで待っていた遠
野が駆け寄ってきた。

「先輩、終わりましたか」

「まあな」

いつもなら、海外に出るときは日本に待たせているが、今回はあ
だこーだといってなぜかついてきていた。

「失礼なこと言つてませんか。ちゃんと、香水は振りましたか」

「大丈夫だ」

面倒くさそうに、田所は答えた。

依頼人の話に延々と付き合わされたところに、母親のようにあれや
これやと、無駄な世話をやいてくる遠野にイライラした。

これなら、何と言おうと置いてくるべきだった。

二人はエレベーターで下において、エントランスを通り過ぎ、出入り
口をでた。

顔に地獄のような日差しが刺すと、すぐそこでは黒い車と、そのの
前に立つインド人の運転手が見えた。

運転手は、田所たちと顔を合わせると頭を下げ、

「運転手です。よろしく願ひします」

と片言の日本語でそう言った。

「空港まで頼む」

田所は伝えて二人で後部座席に乗り込むと、車は動き出した。

「日本語、お上手なんですね」

発進するや、遠野が運転手に対しそういった。

「ハイ！ 昔、私の村に、日本人の医者が来ました。その時、教えても
らいました」

「へえ、インドの村に。立派な人だったんですね」

「ハイ！ 僕は、お金なかったですけど、お金とらずに治療してくれました。だから、日本人好きです。お医者さん大好きです」

「タダですか」

感心したようにうなづき、そう呟いた遠野が、疑ったような目で田所を見る。

「なんだ」

すぐにそれに気づいた田所は訪ねた。

「先輩、今回の手術でいくらいただいたんですか」

田所は軽く首を振って、ため息をつき、

「お前には関係ないだろ」

と目線を窓の外に投げる。

「僕は先輩の助手ですよ、手術も手伝いました、知る権利があるはずですよ」

「お前が勝手についてきたんだろ……たく」

そう言うと、田所は「1億9190万円」ボソリと付け加える。

「1億きゅ——取りすぎですよ！」

「別にいいだろう！ 難しい手術だったんだ。それに、相手は超がつく金持ちだ。たいした痛手でもない」

「もちろん分かっています。先輩じゃないと手術できないような、難しい病気だったってことも。先輩が、いざというときは、お金がなくても手術してくれる、根の優しい人だったってことも」

「それはだな」

田所はばつの悪そうに口ごもる。「まあ……成り行きだったり、気分だったりがあるんだ。別にやさしきでやってるわけじゃない」

「何でもいいですけど、やっぱりこの手術で2億は取りすぎです」

「1億9190万円だ」

「ほとんど一緒じゃないですか！」

「あの」

運転手が気まずそうに割って入る。「あんまり、喧嘩はよくないと思います」

「申し訳ないが、部外者は黙っていてくれ」

田所はそつげなくそう返し「オレの仕事の報酬はオレが決める。いちいち口を出すな、何度もいつてるだろ」と遠野にいった。

「いいえ、今回ばかりはいわせてもらいます。先輩の技術が素晴らしいにしても、分相応というものがありません。取り過ぎは良くありません」

「いてもいなくても大差ない助手のくせして、口だけは達者だ」「な——」

その言葉が癪に障ったか、遠野の一気に怒りをおびた。「大差ないって、先輩の手術についていけるの僕ぐらいしかないでしょ」

「オレはいつもお前に合わせてゆっくりやってやってるんだ。いない方がましだ」

「僕がいなかった掃除も洗濯も、たまりつぱなしですよ」

「実生活の話なんてしてないだろ。だいたい、家事ぐらいオレだってできるし、家政婦を雇えばいいだけだ」

「先輩のウンコ臭い洗濯物なんて、誰も洗えませんよ」

田所は舌打ちして、

「ともかく！ 医者でもないお前に、とやかく言われる筋合いは無い！」と声を荒げた。

遠野は怒りの表情のまま、何か言いたげに田所をにらんでいたが、不意に前を向くと、

「すみません、車を止めてください」

と運転手に言った。

運転手は戸惑い「え……いや、でも」と言葉を濁していると、降りたいそうだとめてやれ」

田所にそういわれ、しぶしぶ、近くの歩道脇に止まった。

遠野がシートベルトを外し、ドアを開けて車から降りると、

「せいぜい、変なのに引つ掛けられないよう、気を付けるんだな」

田所は吐き捨てるようにいった。「まあ、お前のような爬虫類みたいな男、引つ掛ける物好きはいないだろうがな！」

遠野は何も返さずドアを閉め、ひとり空港の方角へと歩いていく。

「あの……よろしいのですか」

運転手が心配そうに、その声をかけたが、

「いいんだよ」

田所はため息交じりにいった。「あいつが勝手に下りて行ったんだ。それより、早く出してくれ」

「あの、ほんとうによろしいんでしょうか」

遠野と別れ、1時間ほどが経った頃、空港がすぐそこまで見えてくると、恐る恐るといった様子で運転手が尋ねてきた。「遠野さん……でしたっけ。置いて帰ってしまったも」

「キミには関係のない話だろう」

田所は突っぱねたが「いや、でも」と心配そうにつぶやく運転手に対し、

「あいつはあいつで、金も帰りの航空チケットも持ってる、心配しなくていい」

と面倒くさそうにいった。

「そうですか。それなら、まあ」

「ああ、だからさっさと空港に——」

そこまでいったところで、田所は手を口に当て言葉を止めると、続けてこういった。「すまないが……ちよつとその路肩に止めてくれるか」

「え……まあ、はい」

運転手はどこか腑に落ちない様子で、車を止めた。

すると、田所はコートのポケットすべてを確認した後、手を額に当てて目を閉じた。

帰りのチケット……遠野が持っていたんだった。

今更、気が付いたその事実になだれ、嫌な汗をかく。

あんなことをいっておいて、1時間後にチケットがないからと顔を合わせるの、さすがに気まずい。

金は一応ある。自分のサイフと約2億円の小切手が。

それを使えば、ジェット機の1つや2つ借りれるだろうが、そのよ

うな使い方はしたくない。

どうしたものか。

腕を組み思案していると、不意に運転席からコンコンとガラスを叩く音が聞えた。

顔を上げると、男が一人、窓のそばに立っている。

手で窓を下げるようなジェスチャーをすると、運転手はそれに従った。

駐車を注意されるのかとも思ったが、運転席のそばに立つ男は警官には見えなかった。

いや、そもそもインド人にも見えない。東アジア。日本人に近い。

運転手とその男は、何度か言葉を交わすと、急に不自然なほど静かになった。

いったいなんだ。

眉をひそめ、男の顔を見ようとしたとき、後部座席、田所が座っていない方のドアが開く。

すると、見覚えのある、上半身筋骨隆々で下半身が貧弱な、色黒の男が入ってきた。

「なっお前は、漫画家の——」

突然、飛んできた男の拳と、顎に来る衝撃。

頭がくらくらとして、後ろのドアにもたれかかると、男は田所の体を引き寄せ、背中を向けさせると、その下半身とは裏腹に太く力強い腕を首に回して「落ちろ！」という言葉と共に締めあげる。

「あ……が……や、やめ……ろ」

田所はその太い腕をつかみながら、悶えてた。

意識が遠のいていき、もう少しで完全に消えてしまいそうになった時、腹部を殴られ、痛みと酸欠で席に横になった。

「落ちたな」

確信めいてそう呟く男に「お前……目的はなんだ」と聞いたが、返答はなく、再度顔を殴られて気を失った。

目覚めると、いつの間にか椅子に座らされていた。

はつきりとしめない頭で。何度も瞬きをしながら、周りを見渡す。

「う……クオクオア」

どうやら廃ビルの一室のようだった。

打ちっぱなしのコンクリートが四方を囲い、左手に窓を取り付けるものと思わしき四角い三つの穴から、光が入ってきている。田所のちようど真上には、適当にぶら下げられ、いまにも落ちてきそうな電球がつるされていた。

そして、田所の右前、部屋の角には運転手が、眠っているかのように頭を垂れて、椅子に座らされて、その隣には田所がいつも持ち歩くアタッシュケースが置かれてあった。

「おい、大丈夫か」

そう声をかけ、立ち上がろうとしたが、体が上がらなかった。

どうやら、両足を椅子の足に、両手を背もたれに縄で結ばれているようだった。見るところ、運転手にも同じような拘束が施されている。

それと同時に、気が付く。

隅に置かれている運転手。対し、田所は部屋の中央。

どうやら、メインはオレのようだ。そう思っていると、

「お、お目覚めかあ」

運転手の横にあるドアが開くと、二人の男が入ってきた。

田所は、その二人に見覚えがあった。

一人は葛城 蓮。髪は短くまとめられ、左手には竹刀と縄が握られている。

この男は、過激派左翼組織、アクシードの幹部だ。

数年前に下北沢署、署長の一人息子を誘拐し、拷問、強姦した罪で警察に追われている。しかし、その息子がどう見ても、小さめのそこそこ筋肉のある20代だったため捜査が遅れ、その隙に海外に逃亡した凶悪犯だ。

そして、その左に立つ、馬用のムチを持ったもう一人の男。

金髪で大きめのグラサンをした、上半身と下半身の均整がとれていない、まるで北京原人のような男は、

「フン……まったく」

田所は鼻を鳴らすと、軽蔑の眼差しを向ける。「そういう人間だったとはな。漫画家の久保帯——」

名をいおうとした瞬間、男の持っていたムチが田所の頬を叩き、火で焼かれたかのような激痛が、当たった部分を中心に広がった。

「そっちの名前はよしてくれよ」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、男はムチをしならせた。「こつちではタクヤで通ってるんだ。子供の夢は壊すべきじゃないだろ」

衝撃によって裂かれた頬から血を流しながら、田所はタクヤを睨む。

タクヤは日本では、それなりに名の知れた漫画家で、何度かテレビにも出ていた。

アクシードにはその資金力から、裏で金を渡している組織があるという噂があったが、その正体はこの男だろう。

「で、貴様らの目的はなんだ」

田所が問うと「ちよつと黙れ」と蓮が竹刀の先端で顎を無理やり上げさせる。

「ペラペラ、ペラペラと。自分が捕まってる側だつてことを忘れんなよ」

「捕まっているからこそだ。これは目的あつてのことだろう。なら、さっさとそれを教えてほしいな。なんなら、お前らの目的はオレだろう。運転手は関係ないはずだ、解放しろ」

「誘拐の現行を見られたこいつを、野放しにするわけないだろ。それと、交渉は平野さんの仕事だ」

「平野？」

聞いたことのない名前を、田所は復唱した。「そいつは誰——ウ」
問うた瞬間、のどに竹刀の先端が軽く突かれた。

「平野さんの名前を、軽々しく口にするんじゃないよ」

「お楽しみ中かい」

ドアが開く音と共に、また男がひとり入ってくると、蓮とタクヤは振り返った。

「平野さん」

「店長」

タクヤがなぜか、平野という名前ではなく、店長と呼ぶこの男が、どうやら親玉のようだった。身長は190ほどあり、顔立ちはかなり整っている。

「すみません」

顔を合わせるや、すぐに蓮が頭を軽く下げて謝る。「ちよつとこいつ、生意気だったんで、軽く叩きました」

「たいしたことしてないなら、別にいいんだ」

と平野が田所の前に立つと、自然と蓮とタクヤは一步下がった。

「初めまして、アクシード会長の、平野と申します。キミが噂のブラックファックだね」

「そんな奴しらんな。オレの名前は田所だ」

「まあ、名前なんてどうだっていい。それよりも、僕らはキミに提案したいことがあるんだ。キミがため込んでいるお金、どうか僕たちの活動資金に使わせてもらえないだろうか」

そんなことだろうと思った。

数年前。ちょうどタクヤの漫画の連載が終わったころ、アクシードは目立った活動を行わなくなっていた。

タクヤからの資金調達ができなくなったからだろう。そこで、金を持っているオレが狙われたわけだ。

「断る」

当然、田所は突っぱねる。「どうして貴様らに金をやらねばならん」「国をよりよくするためだよ、ブラックファック君。日本国はいい、我々に何をしてくれた？ 格差は広がるばかりで、官僚どもはうまく汁をすすることしか考えていない。でも、莫大な税金だけは、国民から絞り上げるんだ。我々は正義の使者だ。世の中の不逞な輩を見逃すわけにはいかない。我々には正義の鉄槌で、この腐った国を矯正する義務がある」

「そう思うんなら、お前たちで勝手にやってる。オレを巻き込むな」

「半分でもいい。キミのため込んでいる財産の、半分だ。キミの手術費

用は、平均で364万円。週に一度、手術するにしても年に1億9000万円だ。それに、たいした暮らしはしてないだろ。野獣邸と呼ばれる、中古の家にずいぶん昔から住んでる。まったく、どれだけため込んでいるのやら。そうやって、金を腐らせておいても、いいことはないだろう。ブタと守銭奴は、死んで初めて役に立つという。ドイツのことわざだ」

内情を詳しく話す平野に、田所は眉を寄せた。

「ずいぶんと、調べ上げてるんだな」

「まあね」

平野はポケットから携帯を取り出し、田所に見せた。「アクシードには優秀な人間がたくさんいてね、調べさせたのは数時間前さ。すでにキミの家にも向かっている。金がどこにあるのかも、すぐにわかるよ」

「金が家にあると言った覚えはないがな」

田所がそういうと、

「そうなんだよ」

と平野は不敵な笑みをにじませた。「キミがもし、金を何かに換金して、どこか遠くに隠しているとすれば、それを見つけたのは容易ではない。だから、こうやってキミに頼んでいるんだよ。無駄な手間はかけたくないからね。で、どうかな、頼まれてくれるか」

数秒、間を挟むと、田所は軽く肩を揺らして笑った。

「何度もいわせるなよ。貴様らに渡す金は、一銭もない」

そう言うのと、平野の顔からすつと表情が抜けを落ち、冷たい目で田所を見下げる。

「もう一度いっておくが、アクシードには優秀な人員が集まっている。時間さえあれば、必ず金のありかに行きつく。そして、いま我々がいるここはインドの山奥にある廃ビルでね。数年前、日本の企業がある特殊なスパイスを作るために建てたものだ。まあ、その社長がビルを作ってすぐに死亡し、会社はつぶれたようで、所有者もなく長年放置されている。ふもとから、車では行けない特殊な道を20分もかけた先にあつて、確実に誰も来ない。それとね……僕の後ろにいる、この

二人はとつても得意なんだ」

平野は首を左右に回し、二人を見る。「何よりも、調教がね。正直、提案を断るといふのは、賢い選択とはいえない」

調教、などと言ってるが、それが拷問を指すことは明らかだった。「金を渡せば、悪いようにはしない」

と平野は続ける。「キミも運転手もすぐに解放しよう。キミが稼いだ金は、ちゃんと日本国を修正するために、正義のために使う……さあ、金のありかをいってくれ」

田所は、鋭い目で三人を順にみると、

「——ペッ」

口にためた唾を、平野の靴に履き捨てた。

「なっおま、お前！」

平野は体を飛び上がらせて、つばのついた足をぶんぶん振る。「何をやる！」

「お前らにやれるもんは、そいつぐらいだ。オレの唾は体臭と同じく臭くてな、一月はウンコのようなにおいが消えんぞ」

平野は先ほどまでであった余裕を消し、怒りの眼で田所をにらむ。

「愚かだな。近年の医者金は金のことしか考えないのか」

「下らんことに金は使わんだだけだ」

「まあ、いいだろう」

平野はタクヤから受け取ったハンカチで靴を拭き、投げ捨て「遊んでやれ……くれぐれも殺さないように」と踵を返して部屋から出て行った。

「おじさんはねえ」

蓮は竹刀を足元に置き、田所に見せつけるように、縄を両手でピンと張らせた。「お前みたいだねえ、クソ生意気な野郎の悶絶顔が大好きなんだよ」

悪趣味な。そう思っていると、タクヤが髪の毛を後ろに引っ張り、無理やり上を向かせ、口元を緩ませた。

「死ぬ寸前まで痛めつけてやるからな」

平野は財産の半分を渡せば、解放するといった口ぶりだったが、た

ぶん、それは嘘だ。

過激派組織であるアクシードでは、地下便所や、川の土手の下爆破テロを何度も起こしている。(ニコニコ本社もいく度となく爆破しているが、慈善活動とされている)そんな連中が、連れ去った人間を、金ごときで開放するとは思えない。

ここは山奥。もし……金の行方を知られたら――

そこから田所は考えるのをやめ、これから行われるであろう拷問を前に、静かに目を閉じた。

「先輩、遅いなあ」

ムンバイの空港。人の行きかうロビーの椅子に座った遠野は、周りをきよろきよろと当たりを見回した。

ポケットから二枚のチケットを取り出し、それを見る。

田所のチケットは、遠野が持つてる。これがなければ、すぐには日本に帰れない。

口論にはなったが、さすがに下北沢に帰れないのはかわいそうなので、遠野は田所が来るのを待っていたが、いつまでたっても現れなかった。

最初は、顔を合わせるのが恥ずかしいから、どこか遠くからでも見ているのかと思っただが、あの目立つ恰好で、日本人のウンコ臭い男がいたら、すぐに見つかるはずだが、どうにも見当たらない。

田所は1億9190万円を持っている。小型飛行機の一機や二機なら、借りれてしまいそうだが、

「先輩が、そんなことにお金を使うなんて、思えないしなあ」

もうすぐ、遠野達が乗る飛行機の搭乗時間となった。

なにか嫌な予感がした遠野は、ポケットから携帯を取り出した。

「あー、オレシヨンベンしてえな」

拷問が始まって30分がたったころ、蓮が軽い様子でそういった。

顔面やその服の下に大量のあざを作り、口から血を流す田所が頭を下げて呻くと「あ、そうっすかー」とタクヤが頬に指を食い込ませ、田

所の顎をつかみ上げる。

「じゃあこいつにい……人間便器いマスクをつけて、そこにションベンするってのはどうっすか？」

「いいねえ」

「ご満悦に蓮がそういうと、

「フフン♪」

タクヤは鼻唄を鳴らし「じゃあ参るか」と人間便器マスクを取りに行こうとしたとき、平野が部屋に入ってきた。

そのとき、蓮とタクヤ、田所までもが、その平野が放つ不穏な雰囲気気がつく。

力強い足取りで田所に向かって真つすぐ歩く平野に、蓮とタクヤは自然と後ろに下がった。

「どうした、ずいぶんご機嫌ななめ——」

瞬間、平野の思い切り振りかぶった平手が、すさまじい勢いで田所の頬を叩くと、首が飛んでいきそうな衝撃と共に、椅子ごと横に倒れ、みぞおちに蹴りが入った。

「この野郎、舐めたことしやがって」

「あの、あの。平野さん」

啞然としながらも、蓮がそう聞いた。「いったい、なにが」

平野は怒りを隠さずに、蓮と目を合わせた。その表情から見える、燃え盛るような怒りに蓮が微かに震えると、再度、田所の腹に蹴りを入れる。

「このウンコ、山を買ってやがった！」

「や、山？」

ヤクヤが首をかしげる。「どういうことっすか、店長」

「19%だ」

平野は肩で息をした後、答えた。「こいつが持っている、日本の領土。日本は75%が山地だ。山なんて腐るほどある。それを、手術費用で買いあさってやがった」

「じゃあ、現金は」

「ほとんど持ってないんだろうな。全部、山を買うのに当てていたよ

うだ」

蓮が、平野とヤクヤを往復して見たあと「じゃあ、山を売れば」と提案したが、

「無理だ」

と平野が即答した。「どこもかしこも、奥地にある、誰が欲しがるかもわからない山だ。一般開放してるようで、一部キャンパーの間で噂になってるらしいが、金になる気配はない」

「なんで……そんな金にならないような山を、こいつは——」

「お前らは知らんだろうな」

蓮が口に出した疑問を、田所が遮った。「自然の美しさを、尊さを。人は簡単に壊そうとする、それを守ることの何が疑問なんだ。お前らにも教えてやりたいほどだ、木々の生い茂る山とする野グソは最高だぞ！」

田所がそう言い終えると同時に、平野がまた蹴りを入れると、首筋にナイフを押し当てた。

「どうやら死にたいようだな、ヤブ医者」

首から一筋、血が流れるも、田所はバカにしたように鼻を鳴らした。

「どうせ、最初から殺す気だったんだろう」

凶星だったのか、平野は顔をゆがめ、鬼の形相で田所をにらんだ。

ナイフを横に振れば、頸動脈が切られ、田所は確実に絶命する。その状態のまま、平野は固まり、じっと田所と目を合わせた。

田所は覚悟を決め、その目をそらすことなく睨み返していたが、不意に平野は、首からナイフを離して立ち上がり、踵を返して部屋の隅、運転手の方向へと歩き出した。

「待て、なにを——」

「ああああー！」

田所の声は、平野によつて太ももにナイフを突きたてられた、運転手の悲痛な叫び声によつてかき消される。

「その通りだ」

平野はナイフから手を離して振り返る。「最初から殺す気だったよ。お前も、運転手も。でも、気が変わった。お前だけは簡単には殺

さない……タクヤ、あれを持って来い」

「あれっすか」

タクヤは戸惑った様子で答えた。「でも、こいつなんか——」
「いいから持って来い！」

押し黙ったタクヤは、すぐに部屋から出て行った。すると、両手で持てるほどの、四角の黒い箱のようなものを持ってくる。

「奥にぶち込め」

平野の命令で、蓮とタクヤは田所の拘束を解くと、両腕を掴み、無理やり後ろ側にあつたドアの中へと入れられた。

背中を押され、その場に倒れると、すぐにドアは閉じられ、部屋は真っ暗になる。

すぐに立ち上がり、ドアを開けようとしたが動く気配はない。施錠されたようだった。

「クソ………いったい何をする気だ」

「箱をよく見ろ」

ドアの向こうから、平野がそう言った。

「箱？」

たぶん、タクヤが持ってきたあれだ。どうやら、入る際に一緒に投げ入れられたらしい。

田所は振り返り、暗闇に目を凝らす。

部屋の中にある光は、施錠されたドアの隙間から入る微かなもので、すぐには箱の位置をつかめなかった。

だがそのとき、部屋の中央より少し左、赤い光が見えた。

その光は、ただ発光しているだけではなく、動いているようだった。悪寒が走った。なにか嫌な予感がした。

冷汗をぬぐい、恐る恐るそれに近づき、手で持ち上げる。

そこに見えたのは、

—— 36 : 43 . 64

赤いランプによって照らされた数字の羅列。それは、時間が進むほどに小さくなっていく。

「時限爆弾だ」

田所の脳裏によぎった単語を、平野はいった。「本当はニコニコ本社を爆発するために用意したんだが、気が変わった。お前をバラバラウンコにしてやる」

言葉を返せなかった。頭が冷たくなり、全身が震えた。

「いっておくが、解除できるなんて思うなよ。ドラマやアニメに出てくる無能が作るものとは違う。配線なんてないし、解除方法もない……。じゃあな、せいぜい綺麗に吹っ飛ぶんだな」

平野の嘲笑と、3人の足音が離れていくと、田所はその場で膝をついた。

「チクシヨウ」

そうぼやき、ポケットに手を突っ込んだ。

幸い、蓮とタクヤの二人は田所から携帯を没収していなかった。電源も切っていたので、電話がかかってくることもなく、最後まで気が付くこともなかった。

だが、電源を入れようとしても、光が付かない。

触つてみると、後ろの部分が軽く砕け、へこんでいた。拷問を受けた際、携帯の入っていたポケットに衝撃があり、壊れてしまっていたようだった。

これでは、助けを呼ぶこともできない。

「クソ……つたれが」

田所は携帯を投げ捨てると、歯を食いしばり、地面を殴った。

もうどうしようもない……終わりだ。

絶望が全身から力を奪うと、田所はドアに寄り掛かって座った。

足の先で寿命を刻んでいく爆弾を見ながら、ふとよぎったのは遠野と出会ったときのことだった。

変な奴だと思った。爬虫類と明石家さんまを、足して2で割ったような見た目をしていた。

医者とはなにか。そんなことを聞かれた気がする。なんと返したかは忘れたが、それがきっかけで、遠野は助手をするようになった。

遠野は医者になりたがっていた。だから、ずっとオレのそばにいたんだ。なのに、

——医者でもないお前に、とやかく言われる筋合いは無い。

よぎったのは、遠野に向けた最後の言葉。

あの一言は、自分が思う以上に、遠野を深く傷つけたのだろうと考えると、田所は深く後悔した。

まさか、あれが最後になるとは思ってもなかった。喧嘩をすることは何度かあったが、次の日には遠野はいつもと変わらないように接してくれていた。

きつと、日本に帰るころには、またいつも通りに戻るんだと、のんきにそう考えていた。

謝りたかったが、携帯の壊れたいま、それすらできない。

「すまない、遠野」

田所は唇を噛み、闇の中でつぶやいた。「……本当にすまない」
もう、考えることもなくなった。

茫然と床を見つめる視界の隅で、爆弾のタイマーが淡々と進んでいた。それを、なんの感情もなく、ただ何もすることがないという理由で、静かに眺めていた。そのとき、

「……え？」

聞こえてきたのは、誰かの足音。

アクシードの三人が戻ってくるとは思えない。

もしかして……。

「おい……おい！　ここだ」

田所は声を上げてドアを叩いた。すると、

「先輩、ここですか」

聞こえたのは、遠野の声だった。

「遠野！　お前、遠野だな。確かだな」

「はい」

突如として差した一筋の光明に、田所は頬が緩んだ。

「しかし、どうやってここが分かった」

「忘れたんですか、GPSですよ」

ハッと田所は、胸のあたりに手を当てた。

内ポケットに入っていたGPS。衛星通信により、携帯から所

持者の位置がわかる機械だ。

遠野から持たされていたものだったが、存在を完全に忘れていた。助けがきたのはよかったが、まだすべてが解決したわけではない

「遠野、実はこのドア、施錠されていて開かないんだ。そっちから――」

「ああ！　せ、先輩」

田所の要求は、遠野の切羽詰まった声に遮られた。「あの、あの……部屋の隅で、運転手さんが」

その声で、田所は運転手のことを思い出した。

「そうだ、オレをここに閉じ込めた連中が、運転手を刺したんだ。とりあえず、オレをここから出してくれ」

「は、はいー」

遠野がドアを調べる音がするも「このドア、鍵がかかっています。こちらから開けるのも、無理そうです」

生まれた希望は、すぐさま萎んで消えた。田所は落胆と共に、強く目を閉じたが「とりあえず、運転手の容態を見てくれ」と頼む。

運転手は、まずいとところを指されていた。

太ももの付け根には、大腿動脈と呼ばれる、直径が9ミリほどもある、人体で二番目にお太い動脈があり、それが二股に分けられた大腿深動脈が、太ももから膝にかけて流れている。

完全に血管を切断していたら、最悪の場合、約5分程度で失血死となる。

もしナイフが直撃していれば、運転手の命はすでに……。

田所は目を閉じ、遠野の報告を待っている。

「意識……あります。小声で返答もしています」

その報告を聞いて、田所はほっと息をなでおろした。

いままも意識があるということは、少なくとも動脈を深くは傷つけていない。だが、

「ですが……出血は、大腿深動脈からのようです」

遠野はそう続けた。「ナイフが動脈を一部傷つけているようで、出血はかなり酷いです」

「お前が運べば、間に合いそうか」

遠野から返答はなく、間に合わないことを察した田所は、歯を食いしばった。「……クソ」

「先輩……どうしましょう、このままじゃ」

「どうするって、一つしかないだろう。遠野、そこにオレのアタツシユケースがあるな」

「はい、ありま——」

遠野は声を詰まらせた。「先輩……まさか」

「そのまさかだ。お前がやれ、遠野」

田所がそう言うと、ドア越しからも遠野の緊張が感じられた。

「いや……そんな。ぼ、僕は一度も手術したことなんてないんですよ」

「オレの手術を何度も見てるだろ」

「で、でも——」

「そいつを救いたくはないのか!」

ドアを叩き、田所は叫んだ。「……運転手を救えるのは、お前しかないんだ。こんなことしている間にも、血液は流れ続ける。遠野……やれ、やるんだ」

懇願するように、田所は額をドアに当てていった。

返答はなかった。ドアの向こうは、誰もいないのではないかと思うほどの静粛に包まれている。

額からつた汗が、田所の汚いイボに乗り、横に流れると「先輩、僕……やります」遠野がそういった。

「よし。やるぞ、遠野」

田所は、遠野へと様々な指示をした。

まずアタツシユケースにある、麻酔で運転手を昏睡状態にした。人体は睡眠時には心拍数が下がるので、若干の止血効果がある。

次に、遠野の来ていたTシャツを、太ももの付け根へ輪にして結ぶ。そして結び目に、これもアタツシユケースに入っていた25センチのバイブを差し込み、右に回すと輪が締めまり、太ももが強く絞められる。

これで止血は完了となるが、それほど効果があるものでもない。太ももの動脈周りには骨や筋肉、脂肪などが邪魔をするため、止血が難

しい。

強烈に水の流れるホース。それを手で少し強めに握る。その程度しか効果はないだろう。だが、ないよりましだ。

回したパイプを輪に差し入れ、動かないように固定すると、遠野は開創器を取り出した。

それはハサミ型をした装置で、持ち手の部分はハサミと大きく変わらないが、刃に当たる部分には、手術する際の切り口を開くため、三本の鉤が向かい合うようについてある。

ハサミとは逆に、持ち手の部分を閉じると、鉤のついた先端が開くようになっており、中指を入れる輪の上についているトリガーを引くと、その状態で固定されるようになっていく。

それを使い、中に鉗子を入れられるよう、ナイフの切り口を慎重に開く。

必要最低限。鉗子が一本、入れられる程度に広げた。

「よし、準備完了だ……後は」

田所は唾液を呑む。「ナイフを引抜き、動脈をふさぐだけだ」

遠野は吐息と共に「はい」と返事した。

ナイフはいま、傷つけた動脈の傷口を塞いでいる状態だ。それを引抜けば、当然、大量の出血がある。そこに鉗子を入れ、直径1センチにも満たない血管を探しだし、塞ぐ作業は困難を極める。

田所からは見えないが、出血はかなり酷いという。もし、塞ぐのに手間取ってしまったら、失血死にもなりかねない。

「お前のタイミングでいけ、遠野」

田所のその言葉に、遠野は重い沈黙で返す。

こればかりは、やれといわれて、やれるものではない。

眼前の人間の生き死にを左右する。その行為に心を決め、自分の意思で動けなければ、確実に失敗する。

田所はただ待った。遠野が動きだすそのときを。

10秒……20秒。

胸が締め付けられるような無音の間に、田所がぐつと拳を握ると「……先輩」とか細かい声で、遠野が効いてきた。

「あの……先輩はたくさん手術をしますけど、怖くないんですか。もし……もし、なにかのミスで患者が死んだら……思ったり……」

ハハッと、遠野が笑う声が聞えた。「すみません、そんなわけないですよ。先輩はとつても手術が上手で……きつと、もう慣れっこですよ。」

「いや……ある」

「……え？」

「あるさ。人間は必ずミスをする、俺だって例外じゃない。ほかのことで失敗しても、俺が損をするだけだ。でも、手術を失敗すれば……」目を閉じ、田所は語り続ける。「簡単な手術なんて、そうそうない。確かに、昔よりはプレッシャーを感じるものが少なくなつた。でも、いまでもたまに、手術するのが怖くなつて、メスを投げ捨てて逃げたしたくなる時がある……表情には絶対に出さないがな」

「そういうとき、先輩はどうするんですか」

「どうもしないさ。どうやったつて、恐怖をぬぐいさることはできない……でも、やる。いま、その時にやらなきゃ、患者が死ぬ。俺がやるしかない。そう思ったとき、体が……手が勝手に動いてやがる」

田所は自分の手のひらを見て、頬を緩ませた。すると、ドアの向こうから深呼吸の音が聞こえ「いきます」遠野の意思のこもった声が聞えてきた。

「ああ……いけ」

田所は顔の前で両手を組み、祈つた。

その手に、汗が一つ額から落ちると、

——カラン。

聞こえたのは、傷口から抜きとり、床に投げ捨てられたナイフの音。田所のまぶたの裏に、遠野の見ていられるであろう風景が、鮮明に映る。開いた傷口から、あふれ出る血液。

鉗子を入れ、動脈を探る。

だが、簡単には見つからない。

それもそうだ。色のついた水の中に落ちた、コインを手探りで見つ

けるようなものだ。

聞こえるのは、鉗子で傷口の中を探る音。ピト、ピトと床に落ちる血液。切羽詰まった遠野の息づかい。

「いけ……遠野」

田所はつぶやいた。「大丈夫だ。俺にはわかる……できる、お前ならやれる……やれ——」

爪が食い込むほどに、拳を握った田所は、力いっぱい叫んだ。「——やれ、いけっ！遠野!!」

刹那、この世から音が消え去ったのかと、錯覚するほどの静粛。

次の瞬間、遠野は息を止めていたのか、肺の空気をすべて吐き出すような呼吸音がした。

「先輩……先輩」

遠野は息を切らしながらも、ハッキリとした口調でいった。「やりました……止めました！ 動脈を！」

「よし……よし！」

喜びあまり、田所はドアを叩いた。「よくやったぞ、遠野！ すぐに鉗子を固定するように、上から包帯を巻くんだ」

「はい！」

「30分以上の血液遮断は危険だ、すぐに運び出して……」

興奮状態で説明を続けていた田所に、すつと冷気が背筋を撫でた。

何度か瞬きをして、肩越しに後ろの床に目をやる。

暗闇の中、赤い数字を刻む黒い箱。

唇を噛み、田所はその前にひざまずく。

「先輩！」

遠野の声だ。「運転手さんを運んだら、すぐに助けを呼びますから、それまで——」

「どれぐらいかかる」

「え？」

1呼吸を置いて、再度田所は聞く。

「いったい、どれぐらいかかりそうだ」

「はい。ふもとのすぐそばに、小さな町がありますから、30分後に

は」

——30分。

田所は爆弾に顔を向けると、そこには、

08:10.00

その時間には、あまりにも足りないリミットが目に入った。

爆弾を持つ手に力が入り、自然と頭が下がった。

無理……か。

「先輩？ なにか、あつたんですか」

遠野の問いに、田所はすつと息を吸うと「いや……何もなし」それを悟られないよう、平常心を装う。

「それより、さっさとそいつを運んでやれ。血液を失いすぎた、早急に輸血が必要だろう」

「あ、はい！」

遠野が運転手を背負い、部屋から出ようとしたとき「それと！」と田所がいつてドアの前に立つと、遠野が足を止めた。

「……今日の、車の中のことなんだが……悪かった。つい、あんなことをいってしまつて」

「ああ、あれですか。いや、いいですよ、そんなあらたまつて。先輩の口が悪いのは、いつものことじゃないですか。僕も、ちよつと真に受けすぎました」

「いや、あれは冗談でもいつていいものじゃなかつた。本当にすまない……それとだ。お前は、お前の意思で、お前の手で、その運転手を救つたんだ。お前はもう、立派な医者だよ」

お世辞などではない。心の底から自分の思つた気持ちをも、最後に伝えたかつた言葉を、田所は語つた。

満足だつた。もうなにもいう必要はない。そう思つたとき、遠野が、なにかを感じ取るような、静かな間があつた。

「なにをぼーつとしてる、早く行け」

田所がそう言うと、

「先輩、なにか隠してませんか」

案の定、遠野は気が付いた。

田所は、それが気のせいだと思わせるよう、フンッと鼻を鳴らす。「この状況で、なにを隠すというんだ」

「いや、隠しています」

遠野は確信した口調で、素早く返答する。「先輩、教えてください。いったい、この扉の向こうには、なにがあるんですか」

田所はぐつと口を閉ざしたが、嘘が無駄であることを悟ると、ゆつくりと口を開いた。

「この部屋には……爆弾がある」

遠野が息を詰まらせる音が聞えた。

「なんで……そんな、爆弾が」

「俺をここに閉じ込めた、アクシードの連中がやったんだ。本当は、ニコニコ本社を爆破するために作ったものらしい。この部屋の広さじゃ、確実に即死だ」

「そんなー」

遠野は声を荒げる。「な、なんで先輩にそんなことするんですか！あの無能本社なら、いくつだって爆破してもいいのに、どうして先輩に」

「そんなこと考えても無意味だろ。早く逃げろ、あまり時間もない。爆発まで5分14秒を切った、早く逃げろ」

そう言うも、遠野がその場を離れないのを感じ「なにをしてる！さっさと行くんだ！」と叫ぶも、動く気配はなかった。

「先輩……僕、助けを呼びます」

遠野のその声は、必死に涙をこらえていた。「ヒンディー語はできないけど、日本語の通じる人たちに——」

「無理だっけってのが分からないのか！建物壊すほどの爆発を、直撃して生きてるやつがこの世にいたのか！下らないこと言っ
てないで早く行け！」

「嫌です。先輩、僕は医者です。死にそんな人間を、見捨てることなんてできない」

一瞬、言葉を失った田所は「そうだったな」と吐息交じりに答えた。「わかった、好きにしろ。ただ、爆発にだけは巻き込まれないよう、

さっさとこの場を離れろ、いいな」

「はい」

遠野が出口まで走る音が聞こえると「先輩！ 絶対に助けますから、待っていてください」そういった。

「ああ、分かった。待ってる」

そう答え、遠野の足音が完全に聞こえなくなったのを確認すると、田所は腰を落とした。

待っている。そう答えたものの、なにをしたところで無意味だ。それは、遠野もわかっていることだろう。

先ほどと、たいして結果は変わらない。それでも、運転手は助かった。まあ、救ったのは遠野だが、二人いっぺんに死ぬよりましだ。

不意に手のひらを見つめる。

オレにたつた一つだけあったもの、医術。それで、救えるだけ命を救ってきた。

不意に、脳裏をよぎる患者たち。その顔を思い出すと、田所は一人頷いた。

十分だ……十分、オレはやった。助けた。救った……もう、いま死んでも——

諦めるな！

突如、頭に沸いて出たそれは、過去に自分が何度も、生きる気力をなくし、自ら死にゆこうとする人間たちに向けた言葉。

いままでになんども、生きたくても生きられなかった者たちを見てきた田所は、簡単に命を捨てようとする、そんな連中が嫌いだった。

もう無理だ。

放つといてくれ。

どうせ死ぬ。

そんな悲観的な言葉たちに、田所はすぐにそう返してきた。だというのに——

「……オレが諦めてどうする」

震えた声でそう呟くと、爆弾をにらみつけた。

——00:45. 45

残り40秒程度。諦めてたまるか。生きるぞ、オレは。

部屋の中に目を凝らすと、奥に人間便器マスクと、積み上げられた74冊の単行本。

——00:36:40

爆弾を部屋の角に置き、その上にマスクと単行本を投げ捨てる。

——00:09:31

全てを投げ終え、息を切らしながら、対角線、爆弾から一番離れた隅に走った。

——00:01:14

隅で丸くなると、頭を抱えて田所は叫んだ。

「死んでたまるかっ！」

——00:00:19

体に、強烈な風と熱を感じた瞬間、誰かが右手を握った。

気が付くと、目に入ったのは、木々の間に見える映る夕焼け空だった。

いったい、どうなったのか。うまく動かない首を回し、周りを確認すると、どうやら爆発した勢いで、森に吹き飛ばされたようだった。田所の周りには一緒に吹き飛んだ瓦礫が散乱し、硝煙の臭いが渦巻いている。

体の感覚がなかった。いたるところが骨折し、皮膚が焼け、剥がれていることは、なんとなくわかる。無事だと分かるのは、ギリギリ動く首から上と、ほとんど無傷の右手。

おかしい。すぐにそう感じた。

普通であれば即死の爆発だった。なのに、なぜかまだ意識がある。それを不思議に思っていた、そのとき、

——先生……先生、聞こえる？

頭の中で、聞き覚えのある声が響いた。

もしかして……君は。

——びっくりした？ 僕だよ、みのるだよ。

数年前、田所の腕の中で死んだ、みのるの声だった。

「どう……して……キミが」

——ごめん、先生。これは超能力で残した遺言みたいなものでね、先生の声は僕には聞こえないんだ。

みのるの最期。血まみれの手で、握った右手の感触を、田所は思い出した。

——先生、本当にありがとう、僕のこと信じてくれて。僕、とつても嬉しかったよ。だから、最後の力を振り絞って、これを残したんだ。もし、先生の身に、なにか危険なことがあったとき、一度だけ先生のことを守ってくれる力を。

「そう……だったのか」

死の寸前に、オレのことを思ってた……。

——僕の手じゃ一度が精いっぱいだったよ。ごめんね。この力で、先生が助かったのなら、僕はうれしいな……ねえ、先生。僕は死んじやったけど、後悔してないよ、先生と出会えたから。だから……だから絶対に、先生は死なないで……じゃあね……また、会おうね。

田所の体を包んでいた、ぬくもりのようなものが、萎んでいく。

「み……のる」

右手を上にあげると、ぬくもりは体を抜け、天に昇っていった。

ありがとう。

心の中で感謝をのべると、右手は下がった。

すぐに、田所は助かるために思考を凝らす、体が動かないいま、できることはほとんどなかった。

現状、助かるには、かなりの技術を持った医者が必要だ。この近くに、そんな者がいるとは思えない。医療器具や薬、輸血なども数がい

る。そして、なによりもこの立地だ。車が通れないといていた、救急車での搬送は見込めない。

可能性があるとするればヘリコプターだが、田所を探すのに手間取るだろうし、ヒンディー語を話せない遠野が、それをすぐに要請できるとも思えない。

考えた末、出た結論は、生存することは絶望的だということだった。

それでも、田所は諦めなかった。生き残る方法を考え続けた。しかし、途切れ途切れとなっていく、意識と呼吸。

死、それを直感した。

すまない……みのある君。

謝罪の念とともに、田所は目を閉じた。

ぼやけた意識の中で、田所は自分の体が揺れていることだけを理解した。

全ての感覚があいまいで、焦点が合わず、頭が茫然としている。いつの間にか、なにかに森の中を運ばれていた。

巨大な動物。ゴリラ？

そう思うも、顔に当たる毛の感覚が、ゴリラの物ではなかった。

徐々に分かっていく、その動物の正体。

もしや……お前は……あのときの。

ヴォー。

空気を震わせるような、そんな気味悪い鳴き声を動物が発すると、田所は担架に乗せられ、山小屋らしき場所に入れられた。

中は大量の医療器具にあふれていた。

様々な薬や、輸血パックが運ばれていく。

弱弱しい心音を示す心電図。そこに書かれたロゴに、見覚えがあった。

T a n i o k a。Tが黒い拳銃を模している、医療器具につけるには、センスのないロゴ。

そのとき、誰かが右手首を握り、脈を測った。

前々から思ってたが、悪運が強い野郎だ。どうやら死ぬには早いらしい。

隣に立つ男は、そういつて、へへつと笑う。ある男の不愉快な笑みが、脳裏に浮かんだ。

俺も手伝おう。いまじゃあれだが、一応、元医者だ。

アリガトウゴザイマス。

そう答える、強烈な片言の男。

間違えるはずがない、こいつは――。

その男は、田所の眼前に、包帯に半分覆われた顔を近づけた。アタタハ、コンナトコロデ、シヌベキジャナイ。

男は、ニツとぎこちない笑みを作ると、田所の手術を始めた。薄れゆく意識の中、田所は涙し、思った。

俺は、自分には医術しかないと、勝手にそう思っていた。だが、どうだ。いつの間にか……こんなにも――

下北沢は世界一のホモスポットだ。

住民のホモビ出演経験は80%と、全国平均の40%も高い。

そこで広がる、一つの噂。

下北沢には、とてつもなく腕がいい医者がいるという。

体臭はウンコ臭く、要求される報酬は莫大。だが、どんな病気も、確実に治すと言われる無免許医師。

常に付き添う助手が一人いる、全身つぎはぎまみれの、その男の名前は――

ブラック・ファック 完

番外編

命日の誕生日

一つ、二つ。

薄暗い窓の外で、雪がゆつくりと落ちていくと、田所の顔に小さな痛みが走った。

椅子から立ち上がり窓に顔を近づけると、うつすらと自分の顔が映る。

左目の上から、右に頬にかけてある、ゆるい湾曲をしたツギハギを指でなぞる。

「雨が降る前は、古傷が痛むとはよく聞くが……こういうことか」

「先輩！」

声とともに、ドアが開く音がして振り向くと、サンタの恰好をした遠野が立っていた。「夕ご飯ができましたよ、早く食べましょう。今年は七面鳥を焼きましたよ」

遠野の高揚ぶりに、田所は呆れて目線を窓に戻した。

「いい歳して、クリスマスイブごときに、なにをそんなに興奮してる」「べつにいいじゃないですか。年に一回の行事、楽しみましょうよ」
くだらん。

そう言いたげに、田所は大きな音で、フンと鼻を鳴らす。

田所はクリスマスというものが、好きではなかった。

普段、十字も切ったことも、ミサに行ったことも無い連中が、キリストの誕生日にかぎって、ここぞとばかりに舞い上がる。

商品の頭にクリスマスと名前を付け、特別感をあおった商品が店頭に並び、テレビではすでに114514回は聞いたであろう、女が歌うお決まりのクリスマスソングを、バカの一つ覚えのように流している。

寒いし、日照時間も少ないから、屋上で肌も焼けない。そして、なによりも――

「クリスマスとやらに、いい思い出がないんでな」

脳裏に、あるクリスマスの日の記憶が舞い戻ると、田所は大きなため息をついた。

なにかを察した遠野が「そう、ですか」とつぶやくと、リビングから電話の音が鳴った。

「あ、でてきます」

遠野が駆け足で向かっていくと、きつと手術の依頼だろうと、田所も後から歩いて続いた。

電話のそばまで来ると、一言ほど会話をした後「手術の依頼です」と遠野が受話器を渡してきた。

「もしもし、変わりました」

「浩二か」

聞こえたのは、歳を感じる男の声だった。

「いえ、私の名前は……」

名前があっていた。だが、否定の言葉を出してしまった田所は、違和感を覚えて固まった。

いつも電話をしてくる相手は、田所のことを、ブラック・ファックと呼ぶものがほとんどだ。そのため、条件反射的に否定してしまったのだが、今回は田所の名前を呼んだ。それも苗字ではなく、下の名前だ。

そう思うと、どことなく、声にも聞き覚えがあるような気がした。

曖昧ながらも電話の向こうの相手が見えてくると、田所の表情は不穏なものとなっていく。

「違う、とは……どういうことだ」

疑問に思ったか、相手は問う。

「あ、いや、気にしないでくれ。いつもの癖でね」

田所がそう言うと、相手はフツと小さく笑った。

「そういえば、こっちでは、ブラック・ファックで通っているらしいな」その返答で、田所はその相手に確信を持った。

間違いない……この男は……。

「私のことがわかるか」

そう聞かれると、田所は険しい表情で一呼吸置いた後、口を開く。

「健二だな」

「健二……」

相手はポツリとつぶやくと、またフフッと笑った。「名前で呼ぶか。親子だというのに、堅苦しいな」

相手は田所の実の父、田所健二だった。

「親子？」

田所の声には、ほんの少し、怒りに似た不快感のようなものが滲んでいた。「オレ達はもう関係ない人間だろう。あんたがオレ達を捨てたとき、オレが何歳だったか覚えてるか」

田所が5歳の頃、健二は、母である唯と離婚していた。

それから田所は、母一人の手によって育てられた。

そして、あの日に――。

湧き上がる怒りを、田所は深い呼吸とともに落ち着ける。

「もう20年も前の話だ。今更そんなことを引っ張って、親子だなんてよく言えたな」

「つれないことをいうな。確かに、形式上は親子ではないのかもしれない。だが、お前の中には確かに私の血が流れている」

そう語る健二に、

「だからどうした。血の？がりなど、そこに思いがなければ、たいしたものではない」

と田所は一蹴した。「それよりなんだ、手術の依頼なんだろう」

「ああ、実は私の恋人に手術が必要でな。金なら払う、できればすぐにタイに飛んできてくれないか」

「すぐに……か」

田所は少し離れた場所に立つ、遠野を横目で見る。「オレも暇じゃないからな。それに、今日はクリスマススイブだ。色々と用もある」

「そうか。無理そうならいいんだ、タイにだって名医はいる。ただ、できるなら一番と言われている医者にやってほしくてな。それに……」

不意に、健二が黙る。

「それに、なんだ」

田所が問うと、

「いや、なんでもない」

健二はすぐにそう答えた。「金ならいくらでも払う」健二は連絡先の電話番号を告げ「今年中で予定に空きができたなら、連絡をくれ。じゃあ」そう言っただけで電話を切った。

受話器から話中音がなると、田所はそれを下におろし、じつと見た。母を捨てた人間だ、乗り気にはなれない……。だが――

「先輩……食べますか」

遠野の声に、ハツとして顔を上げると「ああ、食べるか」と田所は受話器を置いて、リビングの机に座った。

机の上には豪華な料理が並び、その中央には、色黒ホモ男優のケツにも見える小麦色をしたローストターキーが居座っている。

ぼんやりと、そのターキーを見つめていると、不意にすつと目を閉じて、

「すまん、遠野。出てくる」

次に目を開いた瞬間、田所は立ち上がりそう言った。

「ええ！ い、今すぐですか」

「そうだ」

そう答えると、田所はすぐに野獣邸を出た。

田所にとって健二との思い出は、消したい過去だ。できれば顔も合わせたくはない。

しかし、いまのままでは、クリスマスの度に胸に湧き上がる、この陰鬱とした感情は消えることはない。

目をそむけ続けても、なかつたことにはならない。

時に、過去と向かい合う必要があるのだろう。なにかを忘れるためには。

タイ、正式にはタイ王国は、日本から約4545 km南西の方角に位置する国だ。

年中暖かく、クリスマスの現在も過ごしやすい気温で、半袖で外に出ている人間がほとんどだ。

国民の90%以上が仏教徒の宗教国家であるタイでも、この日とも

なると、繁華街はクリスマスの文字であふれる。この辺りは日本とは変わらない。

特に健二が住んでいる高級住宅地の近くにあるデパートの前には、夜になったら光り出すのであろうLEDライトが大量にまかれた巨大なツリーが飾られてあり、カップルたちがそれを背にしながら写真を撮っていた。

「一人身には堪える絵だ」

それを見て、ぼそりとつぶやいた田所は、足早に目的地へと向かう。

住宅街を歩くと、ひととき大きな豪邸が見えた。

周りの建物も、決して小さなものには見えない。しかし、目先にあるそれと比べると、途端に安っぽく見えてくる。それほどのものだった。

その豪邸は高い塀に囲まれており、正面にある固く閉ざされた門には、二名のライフルを持った男が、門を守るように立っている。健二の雇った私兵だろう。

あまり知られていないが、タイでは許可証さえ発行すれば、銃の許可が認められている。アメリカに劣らない銃社会なのだ。

その分、拳銃による事件や、金品を狙った強盗も多い。ベント所持者たちのほとんどが銃を所持していると言われているほどだ。

私兵と話すと、すぐに門が開かれて中へ入った。

小綺麗な初老の使用人が家から出てきて、田所を中へ案内する。

濃い赤の絨毯が敷かれた、大理石の廊下を歩いていくと「こちらです」と使用人が扉を指した。

使用人に礼を行った後「失礼する」と中に入ると、そこはどうやら社長室のようで、奥はに、ツヤのある大きな机があり、何故かワインボトルが一つ置かれてある。その手前にはガラスのテーブルとL字になっておかれたソファ。

そして、机の奥、黒いレザー生地椅子に座り、こちらに背もたれを向けながら、健二であろう男が、片手にワインを持っていた。

来るときに見えた巨大なツリーが見える向かいの窓からは、強烈な夕焼けが差し込んでいるため、逆光によってその姿は黒く、影となっ

ている。

入った時の声は聞こえているはずだと、田所はなにもいわず、手前のソファアールに座った。すると、

「このワインはな、お前の生まれた年の物なんだ」

背を向けたまま、健二はそう語った。「急いで取り寄せたんだ、再開を祝してな。どうだ、お前も一杯」

「オレはビール党だ。ワインの味なんてわからん」

田所が突っぱねると「そうか」とグラスに残ったワインを飲みほし、こちらに椅子を回転させ、グラスを机に置いた。

「久しぶりだな、浩二」

約20年ぶりに、田所は父親と対面した。

最後にその顔を見たのは5歳のときだ。記憶もおぼろげであったため、健二の顔になんの懐かしさもない、初老の男の顔だ。

しかし、まったく同じではないが、どこか自分と同じような面影、雰囲気を感じた。

それを思うと、やはりこいつとは血が繋がっているんだなど、少しいやな気持ちになる。

「——お前、その顔は」

健二は、田所の顔を見るや、絶句し目を見開いた。「どうしたんだ。なんだ、その傷は」

「半年ほど前に爆弾を食らってな。この顔なんてかわいいもんだ、服の下もツギハギまみれで、温泉も気楽に行けなくなった。まあ、あなたには関係のない話だが」

「爆発に……」

健二は息をのむ。「障害は残っていないのか」

「左手に少し。ただ、右手は完全に無傷だ。手術の腕に関しては心配いらぬ」

「そうか……。しかし、その顔を見るに、下手な医者に当たってしまったんだな。世界一の名医なんだろう、そんなツギハギは自分で——」
「急を要する手術だったんだ」

常に、健二の前では感情は抑えるように努めていた田所だったが、

この時ばかりは明かな不快感を前面に出して言った。「並みの医者に手を付けられていたら、確実に死んでいたと言い切れる。憶測でものを語るな」

一間の静粛の後、健二がボトルを持ち、ワインをグラスに注ぐ。

「そうか……すまないな、不快にさせたのなら謝ろう。で、どうなんだ、そっちの調子は、ずいぶんと稼いでるそうじゃないか」

「たいしたことじゃない」

「金さえ積みめば、大抵のことはやってくれと聞いた」

「その通りだ、なんでもしよう」

「ん？ いま、なんでもするって言ったよね」

健二はまるで、重要な証拠を握った刑事のように、ねっとりとした口調で田所の言葉に確認を取った。

「確かに言ったが、それはもちろん、医療面でのことだ。変なことを考えるな」

「別に近親相姦のフェチはない。ただ、タイに来てからの癖でな。しつかりと確認をとっておかないと、後から何をいわれるかわからない」

「癖………いったいなんの仕事をしているんだ。ずいぶんと立派な暮らしをしているが」

「不動産業さ。ここでは、日本人であることは大きなステータスだ」

そうやって、健二はグラスを口に運び、傾けた。「みんな簡単に信用してくれる。年中暖かいから、寒さとも無縁だ……。たまに、日本の冬が恋しくなるがな」

「冬、あんなものの、なにがいのやら」

そういって、田所は鼻を鳴らした。

「寒さは死だ、冬はそれを我々に知らしめてくる。確かにつらいが、その分、生の暖かさを感じさせてくれる。特に、冬に食べるラーメンは格別だ。覚えてるか、一度だけ、家族全員でラーメン屋の屋台に行つたことを」

「いや」

思い出そうとする素振りもなく、田所は首を振る。

「二つ頼んだんだ。お前じゃ一人前を食べきれないからな。私と唯のラーメンを少しだけ分けたんだ。あの時は……幸せだった」

「なら、なぜ別れたんだ」

田所がそう聞くと、健二は口にグラスを近づけようとしたところで、手を止める。

これは、田所が一番聞きたかったことだった。母は、決して別れた理由を口にしようとしなかった。

実の息子である自分にというのが難しいほどの、なにか大きな理由があつたのではないか。

その答えの見えない謎を抱えながら、これまでを過ごしていた。

「唯からは聞いていないのか」

健二はグラスには口を付けず、机に置いていった。

「何度か聞いたことがあるが、うやむやにするだけで、ハッキリとは答ええてくれなかった」

「それもそうだろう」

あまりにも適当な、健二の返答に、

「なに？」

と田所は眉を寄せた。「どういうことだ」

「どうこうとも、特に大きな理由なんてものはない。特別一緒に居たいという気持ちが無くなった。別れたくなった。だから別れた。それだけの話だ。ハッキリ言わなければならぬほどのことじゃない」「別れたくなったから？」

あまりにも拍子抜けする理由に、田所は啞然とした。

健二が母と別れた後、田所は女手一つで育てられることになった。

健二からは仕送りとして、養育費が毎月送られてきたが、当然、それだけで生活はできない。

母は慣れない仕事をし、何とか田所を育てたが、暮らしは非常に貧しかった。

広さ6畳のアパートで、毎晩遅くに、疲れを滲ませて帰ってくる母親の姿を、田所は毎日見ている。

せめて、なにか理由があれば、そのことにも少しは納得がいったの

かもしれない。

しかし、健二から出てきたのは、とてつもなく自分勝手に、想像もしていなかったものだった。

「別に嫌いになったわけでも、イヤになったわけでもない。ただ飽きてしまったんだ」

健二は、グラスを回し、ワインを嗅ぎながら、当然のことを説明するように語る。「人の感情なんて、その時々で移り変わるもの。ひつついたり離れたり、恋仲などそんなものだ。そもそも、男女の仲だ。世間一般の常識的な恋愛観からは、かけ離れている。日本では、異性間の結婚も認められていないんだ。別れるべきだったのさ」

「下らん。国が認めないから、常識的ではないから、そんな理由でやめてしまうのは、ただ意思が弱いだけだ。誰にも迷惑をかけていないんだ、男が女を、女が男を愛してなにか悪い。適当な言い訳を語るな」

田所の言葉に、健二は考えるようにグラスを見つめ「確かに、その通りだな」といつて一口飲んだ。「まあ、なんにせよ、たいした理由はない。唯にもちやんとそう言った。彼女も納得していたよ」

「そのせいで、母がどれだけ苦労したか分かっているのか」

責めるようにいった田所の言葉に、健二はわずかに視線を下げた。

「悪いとは思っていた。私も、もっと早くに不動産事業がうまくいっていたら、もう少し楽な生活をさせていた」

「嘘をつくな」

「嘘じゃない」

すぐさまそう返した健二に、

「なら、なぜ母の葬式に来なかった」

田所も即座に問うたが、健二はそのまま黙って固まった。

母である唯は、田所が10歳の時に死亡した。

その時の光景は脳裏に焼き付き、十年以上たつたいまでも、鮮明に思い出すことができる。

そう、あのクリスマスの日。

金に余裕はないため、当然プレゼントは用意できない。

だが、少しでもほかの子供たちのように、クリスマスを楽しんでほ

しいという思いか、毎年、小さなツリーとケーキだけは用意してくれた。

一緒にケーキを買いに行こう。

そう言って近くのケーキ屋に向かった。

ホールサイズを買う余裕はない。田所が選んだ二切れを持ち、店を出て家に帰る途中だった。

田所は家に帰るのが楽しみで、小走りでも母の前に出て行った。そのとき、

——バン。

突然、後ろから大きな音が聞こえ、振り返ると同時、田所は絶句し、その場に立ち尽くした。

停車する車と車の、ほんの小さな間で、母親が倒れていたからだ。

ホモビの撮影だった。

試合を終えて、車で帰路に向かう3人のサッカー部員たちが、疲れからか、不幸にも黒塗りの高級車に衝突してしまい、そのヤクザに事務所に連れていかれ体をもてあそばされるも、拳銃を見つけたことにより一転攻勢。ヤクザの体をいたぶりつくし、銃殺するといった内容の物だった。

その冒頭の衝突する撮影で、偶然にも母は巻き込まれた。

まだ幼かった田所は、すぐに状況が理解できなかった。だが、アスファルトに広がっていく鮮血を見て、本能的に母が危機的状況にあることを察した。

それでもなお、田所は動けなかった。なにをどうすればいいのか、冷静な状況判断ができなかった。

すぐさま周りの大人たちが救急車を呼び手術を行うも、日付はクリスマス。ごった返す車は、救急車の到着を遅らせ、さらに、ケガがあまりにも大きな致命傷だったため、たいした延命にはならず、死の間際、最後に母が田所に言ったのは、

「私は健二さんを恨んでいない、だからあなたも恨まないで」

そんな、自分を捨てた人間への配慮だった。

なぜ、最後にそれを伝えようと思ったのか、理由は分からない。

田所に恨みを持ちながら、生きてほしくなかったからか。それとも、最後まで健二を愛していたからなのか。

なんにせよ、母はその数分後に息絶えた。

特に親族と深く交流もなかった母の葬式は、一等親、つまりは兄弟や、祖父母たちのみで粛々と行われた。

田所は不本意であったが、一応、元とはいえ夫婦の中であった、健二にも手紙で連絡を入れた。

しかし、葬式当日に来ることはなく、代わりに来たのは3日後に振り込まれた、1919万円という大金だった。

手切れ金。

一応、息子だから、親として金を渡しておく。だから、これ以上は私にかかわるな。そんなふうなメッセージに思えた。

実際のところ、そういう意図があったのかは定かではない。だが、たとえそれが田所のことを思って送られた金だとしても、葬式に来なかったことが許せなかった。

それは、この男はもう、母になんの興味もない。その証明に他ならなかったからだ。

最後の最後に、母はこの男を庇ったのか。そう思うと、いたたまれない気持ちになり、はらわたが煮えくり返りそうになった。

田所はその金を受け取らず、全額送り返し、その後、連絡を絶つていた。

「大事な商談があったんだ」

重苦しい沈黙の後、健二はため息をつき、そう答えた。

「商談？ それは、母の葬式以上に大事なものだったのか。行かなければお前が死んでしまうようなものか、それとも、路頭に迷う羽目になるようなことだったのか」

そう問いかけるも、健二は答えない。

「母に対し、ほんの少しでも謝罪の気持ちや、萎えてしまったとはいえ、愛情が残っていたのなら、来ていたのではないか」

眉間にしわを寄せた健二は両ひじを机につき、顔の前で拳を握り、「なにをいっても、言い訳になるな」

と小さな声で語った。「なんにせよ、悪いとは思っている」

「適當ことを言うな」

「いや、本当だ。唯とお前には本当に——」

「上辺だけの謝罪など、必要ない」

有無を言わさぬ田所の言葉に、健二は口を閉ざした。「たとえば、それが真摯なものだったとしても無意味だ。もう20年以上前のこと、恨んじやいない、だから謝罪は必要ない……ただ——」

田所は立ち上がり、冷酷な目で健二と見合った。

「許しもしない。だから、お前が私たちに謝罪する権利も、ない」
時刻は夕刻。

ツリーのイルミネーションが点灯を始めたのだろうか、窓から入ってきた人工的に点滅する光が、何も語らない二人を照らし続けた。

通されたのは隣の部屋だった。

清潔に保たれており、手術用具一式がまとめられている。

その部屋の真ん中、椅子に座る頭にフードをかぶった一人の男。

「見せてやりなさい」

健二がそういい、その男がフードをおろすと、

「ハンセン病だな」

すぐに田所はそういった。

その顔には、赤黒く変色した、ひび割れにも似たしわのようなものが、いたるところにあった。

ハンセン病とは、らい菌の感染に引き起こされる、慢性細菌感染症である。

初期症状は末梢神経障害による、手足のしびれや、紅斑や丘疹きゅうしんといった皮膚症状であり、重篤なものとなった場合は、失明や筋肉や骨の変形などから、手足の切断を余儀なくされることもある。

その昔、まだ治療法が分かっていたころ、顔中が赤黒い丘疹まみれになる見た目の悪さに、人によっては変形により、溶けたアイスクリームのように顔がただれ、ガイコツのようになってしまう者もいた。

さらに、非常に低い確率ではあるが空気感染するため、一時期の日本ではハンセン病患者を隔離し治療していたことから、患者やその親族が強烈な差別を受けることがあった。

現在では投薬による治療が確立されており、ほとんど初期段階での治療が可能となっている。だが、

「ずいぶんと放置していたんだな」

ハンセン病の男を見て、田所はそういった。「早いところで治療していれば、こんなあとも残らなかつただろうに」

「私が仕事で、タイを出ているときになつてな。前にも同じような症状があつた時は、自然に治つたから放置していたらしい。私が帰ってきて、すぐに病院に行かせたが、このぎまだ」

らい病は空気感染する確率が低いが、感染した後、ハンセン病を発病させる確率も、また発病したとしても、それが続く確率も低い。

人間の持つ免疫細胞によってやられてしまうからだ。発病するにしても、幼児や老人といった免疫の低い者である。

一見そんな風には見えないが、この男は虚弱体質のようで、その結果ここまで症状が進んでしまったのだろう。

「この顔を治してほしいということか」

田所は健二に問う。

「そういうことだ。報酬は1919万円はどうだ」

「いいだろう。顔の相当をいじることになるが、形や見た目に希望はあるか」

「ない」

健二は即答する。「好きなようにしろ」

「なら、さっさと始めさせてもらおうか。準備はすでにできているんだろう」

「もう始めるのか。数時間前にタイについたんだろう？ 疲れているんじゃないのか」

「飛行機での移動なら慣れてる。この程度、どうということはない。それに……」

田所は、重たい口調でこう付け加えた。「ここに長居する理由もな

い」

それを聞いた健二は、なにかを考えるような間の後

「それもそうだな」

どこか投げやりに、そう答えた。

すべての準備をおえ、手術帽にマスク、白衣を着用した田所が、手術台に寝る患者のそばに立つと、向かいに同じ恰好をした健二が立った。

「なにをしている」

田所がきいた。「監視のつもりか」

「いや。ただ、天下一の名医、ブラック・ファックの腕を間近で見させてもらいたいだけだ」

田所は面倒くさそうに鼻から息を吐くと、

「その名を、名乗った覚えはない」

メスを額に入れた。

そこからはすさまじい速さだった。

額の皮膚を取り終え、用意されていた皮膚を移植すると、すぐに目の周辺、頬、鼻と摘出、移植、縫合を繰り返していく。

その光景に、思わず健二は息をのむ。

「凄まじい速さだな。こんな技術、いつたいだれに学んだ」

「誰に学んだわけでもない」

田所は手を止めずに答える。「ただ、早ければ早いほど、患者が助かる。だから早くした。それだけだ」

30分後、田所はメスを置き、患者の顔に包帯を巻くと、ほっと息をついた。

「これで終わりだ」

「1時間足らずか……天下一は伊達じゃないな」

「もうすぐ患者も起きるだろう。そのときに、特に異常がなければ帰らせてもらう」

健二の賞賛の声も無視し、田所は部屋の隅にあった椅子に座った。「なぜ医者になろうと」

健二は田所の前に立ち、聞いた。

「別になんだったっていいだろう。なんでそんなことを聞く」

逆に質問すると、

「唯が死んでしまったからではないかと思つてな」

健二が神妙な面持ちでそう答えると、田所は不機嫌そうに目線をそらした。

確かに、医者を目指した理由は、その一つだ。ただ、それを健二に見透かされたことが不快だった。

「答える義理はない」

田所がそう突っぱねると、患者が起きる声がし、田所は立ち上がつてそばに立つ。

「聞こえるか」

「ア……オハヨ、ゴザイマス」

患者は片言の日本語でそう答えた。

「日本語？ 話せるのか」

「スコシ……ケンジサンニ、ナライマシタ」

「そうか、それは都合がいい。どこか痛いところはないか」

いくつか質問をし、特に異常がないことを確認する。「大丈夫そうだ。包帯は3日後に取つてくれ。それまで顔には触らず、安静に」

「ワカリマシタ。アノ……ヒトツ、ヨロシイデスカ」

「まだ何か」

「ジツハ、ケンジサンノ——」

「話はもういいだろう」

患者がなにかを言いかけたとき、不意に健二が割つて入つてきた。「確認は済んだんだ。それとも何だ、お前もこいつのことが気に入つたか」

「下らんことをいうな。そういうならいい、さつさと帰らせてもらおう」

田所が踵を返し、部屋を出ようとドアノブに手をかけたとき、

「報酬は後日、必ず払う」

健二がそう言うのと「ああ」田所は背を向けたまま、そつけなく返事する。

「それと……健康には気を付けろ、特に体には」

意味不明な言葉だった。医者に対し健康に気をつけるなど、釈迦に説法だ。

「そうする」

これで会うのも最後だろう。

そんなことを思いながら、田所は返事をして部屋を出た。

出るとすぐに使用人に案内を受け、外で待つ車で空港まで送ってもらうことになった。

夜のクリスマスは人でごった返し、車も渋滞でなかなか空港につかなかった。

「いつ頃になりそうだ」

田所は運転手に聞いたが、わからないとしか返ってこなかった。

歩いていこうかとも考えたが、窓の外に見える、歩道を埋め尽くす群衆を見ると、それも難しい。

車の海でもがき続けること1時間、空港近くになると、やっと景色が緩やかに流れ出す。

便の時間は間近に迫っていた。

「ありがとう」

ギリギリのところまで間に合い、田所は礼をいって車を降りると、空港内を走った。そのとき、ポケットの中で携帯がバイブレーションを鳴らした。

「こんな時になんだ」

走りながらも携帯を取り出して見ると、そこに表示されたのは健二の番号だった。

不意に足が止まり、田所は携帯の画面を凝視した。

なんの真似だ？ 今になって、電話で謝罪でもしようというのか。だとしたら本当のマヌケだ。それとも、また体に気を付けろなんて、くだらない話でもするつもりなのか。

どちらにせよ、聞いてやる義理はないし、田所は電話にでたくなかった。

だが、健二の番号を見た瞬間から、胸の中で湧きたつぎわめきが、携

帯から目を離させなかった。

クソ……いったい……何なんだ。

歯を食いしばり、ぐっと目を閉じた田所は、

「……はい」

通話ボタンを押して、携帯を耳に当てた。すると、

「モシモシ！ コウジサン、デスクカ」

出たのは健二の恋人だった。

「その声は……なんであなたが」

「ケンジサンガ！ ケンジサンガ、タオレマシタ！」

「何だって！」

驚いて、田所は声を上げた。「いったい、なにがあつたんだ」

「ケンジサン、ビョウキデ。デモ、クルマイツパイデ、ビョウイン、イケナク——」

「なにをしている！」

突然、健二の怒号が飛ぶと、電話を取り上げるような音が聞えた。

「悪いな、電話なんかしてしまつて」

健二は息を切らしており、かなり弱っているようだった。

「どうしたんだ」

「我々は……もう、何の関係もない人間だろう。心配なくていい、たいたいしたことはない。じゃあな」

健二が弱弱しくそう答えると、一方的に電話は切られた。

田所は携帯を一瞥した後、すぐに空港の電光掲示板を見上げる。

走ればギリギリ間に合うが……。

田所は振り返って、出口に目を凝らし、眉間にしわを寄せた。

「……クソ」

「どうして電話なんてした」

健二は自室のソファに横になりながら、隣に立つ恋人に、タイ語でそう聞いた。

「だって、このままじゃ、健二さんが死んでしまうと思つて」

「だからと言つて、あいつに電話なんてするんじゃない……あいつと

は、もう関係のない人間——うぐ」

胸への突き刺さるような痛みにも、健二は手を押さえて悶えた。

「大丈夫ですか」

健二は額に脂汗をにじませたまま、何も答えない。

「やつぱり、浩二さんに来ていただいた方が」

「いや……だめだ」

息も絶え絶えに、健二は首を横に振る。「あいつは……やらない

……私の……手術など」

「やらない？ どうしてですか」

「あいつは……私を恨んでいる。口では……恨んでいないなんていつていたが……目を見ればわかる……だから……きつと……いや、必ず手術はしない……ましてや、私の命を助けるためなど」

健二は一月ほど前から心臓病を患っていた。

本来は、タイ一の名医と呼ばれる、無類のアクエリアス好きの人間に、3日後に手術を行ってもらう予定だった。

しかし、急なこの事態だ。使用人に頼み、こちらへ来るよう依頼してもらっている。

幸い、手術用具一式はあるし、輸血用の血液も常備してある。だが、

「健二様」

息を切らした使用人が、部屋へ入ってきた。「先ほどイクサバータ様がこちらへと出発されました。ですが、この交通状況ですので、来るまでに相当、時間がかかるかと」

「そ、そうか」

間に合うかどうかは分からない。しかし、待つほかない。

健二はつらそうに肩で息を繰り返し、目を閉じる。

痛みと酸欠で、意識がもうろうとし、いまにも失神しそうになる。すると、ぼんやりとした頭の中で、過去の思い出が思い起こされていく。

健二は最悪の家庭環境で育った。

両親は健二に対し、まったくと言っていいほど興味がなかった。夜遅くに帰ってきては、なにもいわず寝て、なにもいわず出て行く。健

二はろくに掃除もされていないアパートの一間で、ずっと一人きりだった。

食事は、定期的に両親のどちらかが買ってきて、机に置かれている大量のコンビニおにぎり。それを、無音の中、腹を満たすためだけに食べた。

愛情、そんな者とは無縁の生活。

その反動か、必死に勉強とアルバイトを積み重ね、一人暮らしをして大学に入学すると、恋愛活動にいそしんだ。

顔も器量もよかった健二は、交際相手に困ることはなかった。

だが、付き合っても2ヶ月やそこらで、どうしても愛情がなくなり、すぐに別れてしまう。

原因は分からなかったが、困ることもなかったので、特に気にもしなかった。

ホモビ会社に就職後も、いろんな男をとつかえひつかえしていたが、ある時、2ヶ月経っても、3ヶ月経っても、一緒に居たいと思えた人物と出会う。

浩二の母である、唯だった。

女である唯。最初は、どうせすぐに別れるんだから、異性でもいいだろうと、軽い気持ちで付き合ったが、どうしてかその関係が続いた。どこまで続くものかと思っていると、1年がたち、唯が浩二を産んだ。

自分の息子の誕生を健二は喜び、あまり裕福でないながらも、それなりに幸せな家庭を築いていった。

しかし、田所が5歳となったあとき、急に健二の中から唯への愛情が消え去った。

唯は自分にとって、特別な存在だと思っていた。しかし、それは絶対的なものではなかったようだった。

それがどんどん、顔や行動に出ていたのだろうか、どうかしたのか、とある日、唯は唐突にそう聞いてきた。

極力、普通に勤めているつもりだった。一家の主である自覚も、浩二を育てなければならぬという義務感もあった。

それでも、興味のない人間と一緒に過ごしても、何の刺激もなく、ストレスでしかない。

それに、周りの目もあった。やはり異性といると、なにかと噂になる。それも心地がいいものではなかった。

正直にそれを話し、別れを切り出すと、唯はすぐに承諾した。

別れてすぐ、健二はタイへと飛び不動産業を始めた。友人のツテがあったのもそうだが、唯のいる日本から、できれば離れたかったのかもしれない。

そして、数年がたったとき、唯が死んだことを知らされた。

50余年。長いようで短い人生の中で、いまの自分が一番、金も地位もある。しかし、唯や浩二と過ごした日々の中で感じた幸福は感じられなかった。

その幸せな記憶も、いまとなつては苦い思い出だ。

私はいつたい……何をしていたんだろうか。

胸の中で自問すると、突然、部屋のドアが開かれた。

使用人が電話をしたといつてきて、まだ30分もたっていない。

誰だ。

そう思い目線を向けると、

「お前……は……浩二」

それは死の間際に見えた幻影か、かすれた視界に田所が見えると、健二は気を失った。

ピ……ピ……。

最初に入ってきたのは、そんな心電図の音だった。

意識を取り戻した健二は、自分が呼吸器を取り付けられているのを確認すると、隣に人の気配を感じ、顔を向ける。

そこには、田所が疲れた表情で椅子に座っていた。

「もしかして、やったのか、手術を」

健二はすぐにそう聞いた。

「まあな」

そつけなく、田所はそう答える。

「そうか……悪かったな、進まないことをさせて。私の手術など、したくはなかっただろう」

田所は何も答えなかった。その沈黙は、肯定を意味しているのだろう。「空港から、急いで来てくれたのか……どうして」

「私は医者だ。危険な状況の人間を、ほっておくことはできない」

「相手が、許しがたい人間でもか」

「そうだ」

田所は目を閉じ、ゆっくりうなづいた。

「フッフ、さすがだ。お前は本当の名医だよ」

ふと、どこからかお湯が沸騰する音が聞こえ、隅にあるコンロの方に目を向けると、小さな取っ手着きの鍋が一つ火にかけられていた。

「あれは、なんだ」

「ああ、ちよつと腹が減つてな。何か食うものを探していたら、あんたの机の引き出しにインスタントラーメンを見つけた。いくつもあつたから、一つぐらいかまわないだろう」

そういつて、田所は立ち上がり、鍋と箸をもつて戻ってくる。

「もちろん、構わないが、気を付けろ」

「なにがだ」

「賞味期限は、数年前に切れている」

麺を口に運ぼうとしたと田所の手が止まるが、

「まあ、大丈夫だろう。消費期限じゃないし、保存食だ」

とそのまま口に運び、麺を啜った。

「うまいか」

健二は聞いた。

「不味いインスタントラーメンなんて、聞いたことがない。しかし、なんで期限切れのラーメンなんか置いていた。何かの記念品か」

「いや、私を買ったんだ……今日、話をしただろう、お前たちと一緒に、ラーメン屋の屋台に行った話を」

田所は一瞬、手を止め「ああ」と返事をして、ラーメンを食べる。

「唯が死んだと聞かされて、数年たった後だったか。ある時だ……突然、あのラーメンの味を、もう一度味わいたくなった」

健二がそこまで言うと、田所は口を動かすのを止め、黙って目の前の虚空を見つめた。

「もちろん、日本の、それも屋台のラーメン屋の味など、ここで味わえるわけがない。だから、それを買った。ほんの少し高めの、インスタントラーメンだ。あの時ほどじゃないかとも、なんとなくの味や、暖かい思い出は、感じられるんじゃないかと……だが、無理だった。喉を通らなかつたんだ……ほんの少しでも、ラーメンの味や触感が、口の中に入り、お前たちとの思い出が顔をのぞかせると、腹の奥底が気持ち悪くなつて、吐きだしてしまうんだ」

感極まつたのか、体を震わせた健二は、両目から涙を流した。

「私にはなかつたんだ。嫁と子供を捨て、その嫁の死に目にもあわず、ましてや葬式にも行かなかつた男に、昔の甘美な思い出を、もう一度味わう権利なんて。それができるのは、ちゃんと道理に生きた人間だけなんだと、思い知つたんだ」

健二は、涙であふれ充血した目を、田所に向けてる。

「お前の言う通りだ、たいした理由じゃなかつた。確かにあの日、葬式に行かなかつたことで、私は富を得て、事業は成長した。だが、大切なものを失つた。私は間違っていた。いまでも、そのことを後悔している。浩二……本当に……本当にすまなかつた。私がバカだつた。許してくれなんて言わない……ただ、謝らせてくれ……すまなかつた」

なんの嘘偽りのない、心からの謝罪だつた。

それを、聞いているのか、それとも聞き流しているのか、田所はじつと黙っている、不意に止まっていた手が動き出し、食事を再開した。その間、健二はなにも語らず、じつと田所の言葉を待った。

数分の間、部屋にラーメンのすすする音が響き、田所がスープもすべて飲み終わると、

「ごちそうさま」

といって席を立ち、鍋をおいて出口へと歩いていく。

なにも言葉を返さない田所に、健二は消沈するも、それも仕方ない、自分が悪いのだと自分に言い聞かせていた、そのとき、

「母は最期……死ぬ前にこういつていた」

田所はドアノブを握り、背中越しに健二にいった。「あんたを恨んじやいない……と」

恨んでいない……私を？

「そうか……そうか。あいつは……私を」

ぎゅっと、胸が締め付けられるような痛みが広がると、健二は声を上げながら涙を流した。

空気を震わすよなその声は、田所が出て行っても止むことはなく、クリスマス夜の夜に響き渡った。

なんであんなことをいったんだ。

深夜、真つ暗な道のりを歩きながら、田所は一人思う。

あんなたわごと、聞いてやる義理はなかった。すぐに部屋を出て行くことも、なにもいわずに去ることだってできた。その権利が、自分にはあった。

だが、オレは母の最期の言葉を教えることを選んだ。

気まぐれなんかじゃない。明確に、自分の意思で、伝えてもよいと判断したから伝えた。

それに、母が生きていたとしたら、きつと——いや、絶対にそうして欲しいと願っただろう。

ふと、視界に現れた巨大なツリーを見つめ、田所は足を止める。

もう0時になろうというのに、イルミネーションはまだ煌々こうこうと光を放っている。

それと、記憶の中にある、子供の頃、母が買ってきた小さなツリーを重ね合わせ、田所は小さく笑い、つぶやく。

「甘いんじゃないか……俺も……母さんも」

ゆつくりと視界を上にあげていくと、頂点には強烈に光る、星型のライトが見えた。

それに目を細めると、田所はあることに気が付いた。

毎年、クリスマスになると必ず胸を覆う、重く陰鬱とした感情。

それが今、綺麗さっぱり、なくなっていることに。

軽くなった胸に、大量の空気を取り込み、微笑とともに吐きだすと、
田所はツリーを背に空港へと歩き出した。

壁

それは第19次世界大戦が終わってからすぐのできごとだった。

戦争に勝利した連合軍は、下北沢からGO、大阪からドラゴン田中、レスリング帝国からビリー・ヘリントンの三首相が、下北沢のガン掘りや宮殿に集い、戦後処理の取り決めを行う会談を開いた。

結果、エンリヨナクヤル♂タ協議を結び、敗戦国の各領地の振り分けが決められた。

敗戦国であった岡山の県北が統治していた国、サムソンは、国土の中央付近である北緯19度線から北をレスリング帝国が、南を大阪が代わりに信託統治する事となった。

別々の国から統治されることとなると、混乱は必然だ。

南を統治するのは資本主義である大阪に対し、北はビリーの『ハイ構わね、反逆者は殺すど♂』の元、住民を完全統治する独裁共産主義体制だった。

しかも、レスリング帝国は北サムソンから、機械や重機など貴重な品を自国に輸送し続け、一気に経済は冷え込んだ。

北から南へと、移住する人間が増えることは当然のことであった。無論、それを許すビリーではなく、そして、それは突然にあらわれた。

ある朝のことである。今まで自由に行き来できていた北緯19度線上に、巨大な壁が出来上がっていたのだ。

と同時に、ビリーヘリントンからドラゴン田中へと、北と南のサムソンを分断し、完全に行き来不可にすることを伝えられた。

到底、聞き入れることができない話であったが、ビリーが強引に話を勧めたことと、ドラゴン田中が拒むことを知らない種壺野郎だったため、それは承諾された。

その後、壁はさらにもう一枚作られ、二枚の長く強固な壁が、今も一つの国を二つに分けていた。

そう、それがかの有名な――。

「こいつが、ケツピンの壁か」

パラパラと雪がふり落ちる中、白い息を吐きながら、田所はコンクリートの壁を見上げてそういった。

南サムソン政府から依頼が来たのは、3か4か日前のことだ。

政府高官であるケツデカ課長が心臓疾患を患ったのだ。

サムソンという国が分断され、30年余りが経過し、北南とも信託統治が解除され独立した国家となった現在、北と南は非常に危険な領域へと突入していた。

数年前に起こった、北サムソンの誤射による、南サムソン兵士死亡事件。

あわや戦争になりかけたこの事件により、両国の軍は高い緊張状態にあった。

明日に戦争が始まってもし思議ではない状態だ。

そんな中、南サムソンは次期総裁選挙がすぐそこまで迫っていた。

ケツデカ課長は国民からの支持が厚く、次期総裁は彼であることは誰が見ても明らかであった。

そんな人間が心臓疾患だと知ったとき、相手がどんな行動をしていくかわからない。

混乱を避けるため誰にも知られることなく、迅速かつ、それでいてミスをしたくない医者に手術を頼む必要があった。そこで、田所に白羽の矢が立ったのだ。

田所はこの依頼をすぐに承諾した。大金が出ることもあったが、ケツピンの壁をこの目で一度、見ておきたかったのだ。

北サムスンでは、その経済難を自国民に知られないため、外部からの情報を完全に遮断し、他国はより貧困であるという情報を信じ込ませている。

それだけでは飽き足らず、大統領であるダデーを神格化し、幼児に対しては洗脳教育まで行っていた。

同性婚の禁止や、罪人の公開処刑など、非人道的な行為も確認されており、国連から非難が集中している。

そのため、北サムスンはほぼ周りの国と鎖国状態に陥っており、なおかつ信託統治していたレスリング帝国も、もはや北サムソンに構っ

ていられないほど経済難で、支援も期待はできなかった。

崩壊はもう目の前まで迫っているというのが研究者たちの所見だ。ケツピンの壁が作られたのは、田所が生まれる前の話だ。

テレビニュースでは、今でも定期的にこの壁が流れている。

壊されるその前に一度、その壁を映像ではなくこの目で見てみたかったのだ。

多くの人々を、傲慢によって分断したツケ。

それを、いったい誰が払うのだろうか。

そして、この壁が壊れたとき、人々は何を思うのか。

想像の絶えぬまま、田所はその場を後にし、南サムソン軍本部へと向かった。

「あまりうろろろされては困る、貴様の存在を敵国に知られてはまずいのだ」

南サムソン軍、中佐のテディは悪態をついた。

でつぶりしたからだど、その薄いひげに似合わず、口調は厳しい。

軍施設内部では書記官らしき軍人たちが、書類などを手にせわしく廊下を歩いていた。

その中を、田所はテディに続き歩いていく。

「私がどこに行こうが、私の勝手だろう。依頼内容にも行動の制限はなかったし、そんなものがあつたなら、依頼を受けていない」

「慎んでくれといっているんだ。キミが原因で問題が起きたとき、責任はとれるのか、ブラック・ファック」

「私はいち医者として依頼をこなしてきただけだ。キミら軍の衛生兵じゃない。そっちの問題は、そっちで勝手にやってくれ。それと、私の名前は田所だ。ブラック・ファックなど一度たりとも名乗ったことはない」

「なるほど」

テディは最奥の部屋まで来ると、そのドアノブを握っている。「なら、神の手を持つというのも、ただの噂か」

「そちらも自称した覚えはない。ただ、患者からはよくいわれる」

テデイは、フンと鼻をならし「そうか」といって、ドアを開くと、その部屋の奥には南サムソン政府高官、ケツデカ課長が座っていた。

大きめの眼鏡に、それにはみ出ている太い眉と、大きな唇。

ぐったりと眠っているかのように、でっぷりした体を椅子に沈めており、その目は、開いているのかしまっているのかよくわからない。

「初めまして、医者の方田所浩二だ」

名を名乗るも、ケツデカからは反応がない。

もしかしたら、本当に眠っているのではないか。そう思っていた時、ケツデカの目がうつすらと開くと、

「おまんこ〜」

突然、甲高い声でそういった。

どうやら、心臓よりも先に頭をどうにかするべきのようだ。

「中佐、これは私に対するサプライズか？ それとも、あまりのプレッシャーに君のところの次期首相候補は狂ったのか」

「口を慎め、田所」

テデイはその言葉の意味を説明する。「今の言葉は、我々サムソンの古来から伝えられる、神聖な挨拶だ。少々卑猥なものにも聞こえるが、それはあくまでも響きが似ているだけで、少しも淫猥な意味を持っていない。ちなみに、これにたいして返す言葉は、おちんぽ〜……だ」

「私を舐めているのか」

「確かに、貴様らの常識からみれば、ふざけているのかと考えたくなることは分かる。しかし、それは偶然にもそういった卑猥な言葉と非常に似通っただけで、これは相手を——田所、キミを最大限に敬った挨拶なんだ。郷に入ればGOに従えだ。黙ってそう返せ」

テデイのその真剣な表情を見て、ふざけているわけではないことを悟りながらも、田所は一つ舌打ちを挟み、

「おちんぽ〜」

サムソン流の挨拶を返した。

「お〜ほっほ！ 気持ちいい気持ちいい」

ケツデカは喜々として笑い、シンバルを持つ猿の人形のように手を

叩いた。

「ケツデカ様はお喜びだ」

その様子をテデイが説明する。「非常に良い挨拶だとおっしゃっている」

「中佐、本当に彼は大丈夫なのか。言語能力も低そうだが」

「黙れ。そういうところも、この方の魅力なのだ」

本当に大丈夫なのか、この国は。

それを口には出さず心に納め、田所は聞く。

「で、彼の手術はいつにする。なんなら、いまずぐでもいい。20分もかけない」

「我々としても、できるなら今すぐ行いたい」

テデイが返す。「だが、そうもいかない。知つてると思うが、彼は次期総裁候補。正直、こうやって顔を合わせる時間も惜しいお方だ。この後も、別の要件が入っている」

「ならいつにする」

「今日の19時。ここの地下室で開始だ」

「だったら、それまでに見せてほしいものがある」

「なんだ」

テデイがいうと、田所は黙って天井を指さした。

田所は、テデイと共に、エレベーターで上にあがっていた。

ドアが開くと、そこは8角形の部屋になっていた。

全ての面にガラスの窓がはめ込まれてあり、望遠鏡片手に兵士が常に北サムソン側を見張っている。

軍本部には監視塔があった。

ケツピンの壁よりも2倍は高く、ここからは、下からでは見えなかつたもう一枚の壁と、北サムソンの民家や、見張りの軍人が見える。

田所は窓のそばまで歩くと、その惨状に息をのんだ。

壁と壁の間は、突如として無理やり分断されたせいなのか、民家が数件と街灯がいくつか立っており、分断されたその瞬間のサムソンを、いまでもその場に保存している。

問題はそのさらに奥だ。もともとは一つの国であったはずだ。なのに、この壁二つによって隔たれた向こうは、同じ国だったとは思えぬほど荒廃していた。

家々はどれもボロボロで、歩く人間たちはこの寒さだというのに服装は薄く、足取りはどれも弱弱しい。

「使うか」

「テデイが望遠鏡を持ってきた。」

それを受け取り、のぞき込むと、その様子はさらに詳しく目に入ってきた。

いまにも崩れ落ちそうな家に、住民たちの顔は色あせ、栄養失調が見てとれた。

眉をひそめながらも、それらを観察していき、最後、おそらく死んでいるのであろう、道のわきに突っ伏している女のそばを、追いかけてこでもしているのか、笑っている裸足の子供が二人、駆けて行くのを見ると、田所は静かに望遠鏡を下した。

「見るに堪えないな」

田所は振り返り、望遠鏡をテデイに返す。「ありがとう……で、あなたはこれをいっただいどうするつもりでいる、中佐」

問いかけると、テデイは田所の隣に立ち、北サムスンを眺めた。

「この壁ができたのは、私が二等兵だったときだ。それから、多くの人間がこの壁の破壊を試み、そして失敗してきた」

「だから、どうするつもりもないというのか」

「違う。これを放置しておくつもりは、毛頭ない。だが——」

テデイは窓枠に手を添え、目を凝らした。「南サムソンの国民は、やつれ、飢え、死んでいく同胞を少しも心配してはいない。いや、もはや一つの敵国として認識している。分断され、長く続いた時間は、壁の向こうの人間が同胞であるという認識すら消してしまった」

「現状の打開は難しいと」

「そうだ。だが、私はやって見せる」

テデイの目が、キツと鋭くとがる。「過去には何度かチャンスはあった。だが、そのたびにレスリング国などの横やりがあつて、失敗

に終わった。私はそんなことは許さない。邪魔をしようものなら、全力で排除し、この壁を破壊して見せる」

「なるほどな……あなたのような人間が軍の上部にいて安心する。しかし、その熱意、本物か」

田所が問いかけると、テディは遠い目で北サムソンを眺め、ふうつと一息ついた。

「私の生まれは、北サムソンだ」

それを聞いて、田所はテディが向ける視線の先を見た。

テディは続ける。

「軍の仕事でこちらに来ていた。2日後には帰る予定だったが……幸運といつていいのだろうか、そんな時に国交断絶だ。帰ることは許されず……向こうにいた両親の顔は、その日から見れていない」

「そいつは残念だったな。ご両親の安否は」

テディは首を横に振る。

「分からない。ただ、もし生きているのだとすれば、双方とも80は超えている」

田所の脳裏に、やつれた北サムソン国民の姿が映る。

おそらく、テディの両親はもう……。

「過ぎたことを悲しんでも仕方がない」

デティはいった。「問題は、いまこの瞬間、目の前にある。それに集中しなくてはならない。たった一人の独裁者の傲慢のために、これ以上、犠牲者を増やしてはならない……迅速に壁を破壊し、そして、もう二度とこのようなことを……起こしてはいけない」

戒めのように、力強くテディはそういった。「そのためには、いまこの重要な時に、相手に弱みを見せるようなことがあってはならない……頼むぞ田所……ケツデカ課長の手術、必ず成功させてくれ」

本部内の小さな一室で、田所は一人、時間になるのを待っていた。窓の外が微かに暗くなると、腕に巻かれた時計をのぞき込む。

時刻は18時45分。もう少しで手術の時間だった。

15分。なにかをしようにも短すぎるし、ただ待っているのは退屈

極まらない、微妙な時間。

田所のスマホは、先ほどからホモビを見すぎたことにより、高熱を発している。少し休ませておく必要がある。

なんとなく、また北サムソンが見たくなった。

手術が終わり次第、即日本に帰るのだ。その前にもう一度見ておこうと思った。

監視塔までの道のりは覚えている。

田所は部屋を出てすぐにエレベーターまで向かった。

乗り込み、塔の上部に行くのを待っていると、

——ウーーーーー。

突然、サイレンが鳴り響いた。

なにが起きたのかと思う暇もなく、エレベーターが開く。

すると、監視塔にいた兵士があわてて乗り込んできて、田所が反射的に出ると、すぐに下へと向かった。

監視塔の中では、数人の兵士が顔を真っ青にしながら、大声で無線になにかを話している。

田所はすぐに窓のそばへとよると、すぐに壁と壁の間で、南サムソン側から出る光によってライトアップされた場所が目に入った。

目を凝らしてもよくわからず、床に落ちていた望遠鏡を拾う。

奥の壁では北サムソンの兵士が、手前の壁では南サムソンの兵士が、壁に沿うように並びお互い銃口を向けている。

まだ発砲はしていない。しかし、一触即発の状況だ。いつ銃声が響き、戦争が起きてもおかしくない。

その状況に、田所の額から汗が一筋伝ったそのとき、兵士たちと兵士たちの間、射線が交錯する中央では、ネクタイのデカイ血まみれの男が倒れているのが目に入った。

そこでは怒号が飛び交っていた。

銃を構え合う兵士たちの間は36メートルほどしか離れていない。たった一発でも誰かが銃弾を放てば、即銃撃戦、殺し合いに発展する。

それを分かつてるため、双方とも簡単には引き金を引かなかった。なんとかして争いを起こすことなくこの場を収めたい。その思いはあるが、混乱している兵士たちは相手の話など聞かず、銃を下げろと叫びあっている。

混乱は不安と恐怖を呼ぶ。いつ、誰が撃つてもおかしくはない状況だった。

兵士たちの声がかすれ始めたそのとき、不意に北サムソン兵士たちの声が止まり、南サムソン兵士たちから目をそらす。

その視線は、左の方に向いていた。

南サムソン兵も黙り、視線を同じ方向に移すと、そこに見えたのは、この寒空の下、下着一枚の姿でアタツシユケースを持った田所だった。

田所はゆつくりと南サムソン兵の隣まで歩くと、北サムソン兵の方を向いた。

「なんだ貴様は！」

北サムソン兵の一人。服装から見て、周りより一つ位の高そうな男が、田所に銃口を向けて叫んだ。

「私は医者だ！」

田所は倒れているネクタイのデカイ男を指さす。「その男を治しにきた。ほっておくと死んでしまう。治療させてもらうぞ」

そういつて一歩前に踏み出そうとしたとき「止まれ！ ブリーフの男！」と北サムソン兵が叫び、田所は足を止めた。

「貴様、本当に医者か！ 偽装した南の兵だろう！」

田所はばつと両手を広げる。

「この通り、私はボクサーパンツ一丁だ！ 武器も持っていないし」アタツシユケースを開け、中を見せた。「中は医療用具しか入っていない」

「その灰色のブリーフの中に、なにかを隠し持っている！」

「この伸縮性のあるボクサー型の、ちよつとスパッツに近い感じパンツは、ぴっちりと皮膚に密着している。中になにも隠せない」

「黙れ！ そのブリーフ、中央が膨らんでいるじゃないか」

「これは私の逸物と玉だ。このブリーフにも見えるボクサーパンツだけは、尊厳を守るものとして脱ぐことはできない」

「ブリーフの人」

不意に、南サムソン兵が話しかけてきた。「いまは下がっていてください。どなたかは知りませんが、治療できるような状況じゃない」「ダメだ。向こうにある医療施設は、程度の低いものしか期待できない。いまずぐ止血だけでもしないと確実に死ぬ」

「しかし——」

「あそこで死にかかっているのは、あんたらと同じ場所で生まれた人間だぞ」

田所は兵の言葉をさえぎっていった。「黙ってみているつもりか」

その一声に、南サムソン兵は黙った。

「治療させてもらうぞ」

そういつて、田所は前へ歩いていくと、北サムソン兵は銃を構える。

「止まれ！ ブリーフ！」

「撃ちたければ撃て！」

田所は足を止めると、兵士の目を見ていった。「ただし……その弾丸、私にはではなく、そこに倒れている貴様らの仲間に打つものと思え」そういつて再度、歩を進めるも、兵士は銃を構えるだけで撃ってはこなかった。しかし、

——バン。

突然、響いた銃声。

それに反応し双方の兵は銃を構え、敵に向かって撃とうとしたが、田所が横に伸ばした腕を見て、寸前のところで止まった。

「やめろ！ ……撃ったのは奴だ」

田所がいった。

撃つたのは、倒れ、血まみれとなったネクタイのデカイ兵士だった。その手には自動小銃が握られ、銃口を田所へと向けていた。

「近づくな……」

ネクタイのデカイ男は、息も絶え絶えにいった。「……外の間人間が……俺に……触るな」

「いいのか。このままでは、貴様は死ぬぞ」

田所は問いかける。

「知るか……どうせ、医者っていうのも……嘘だろう」

「嘘じゃない」

「なんだっていい……外の奴にさわられるぐらいなら……死んだほうが……ました」

「死んだ方がましというが、お前さん、親はいるのか、兄弟はいるのか……自分が死んだときに悲しむ人間はいないのか」

そう聞くと、男の瞳が揺れ「いない……そんなものは」と視線を横にした。

「そうか……なんだっていい、私は医者として、死にゆく人間をただ見ていることはできない」

田所が近づくと「撃つぞ！」と男は銃を向けるも、その手は小さなそれを支えるのも困難なのか、銃口は左右へ揺れていた。

「そんな状態で私に当てられるのか」

「この距離なら十分当たるぞ！ 止まれ！」

「だとしても無理だ。そもそもお前には、私は撃てない」

「なにを根拠に！」

男がそういつたときには、田所は目の前まで近づいてきていた。

この距離なら、子供でも確実に当てられる。

しかし、男は引き金を引かなかった。

「お前が生きたがってるからだ」

田所はしっかりと男を見据え、そういつた。

「なんでそんなことがわかる」

「私が医者だからだ」

冷たい風が二人を撫でると、男は銃口を田所の顔に向けた。

田所の目は依然、迷うことなくまっすぐ向いている。

「チクシヨウ……」

男は睨みつけながら、食いしばった歯から声を漏らすと「チクシヨウ」もう一度そうつぶやいて、腕を下した。

「応急処置をする」

そういつてしやがみ込む田所に「かつてにしやがれ」と男は吐き捨てるようにいった。

田所はすぐに男の全身を診る。

右腕の損傷はかなり激しく、皮膚もかなりの部分が剥がれ落ち、どす黒い血であふれていた。

これは肩から切ることになるだろう。

他に出血の激しい部分は右腹部と左のふくらはぎ。

服をめくり腹をみると、長ぼそい鉄の破片が突き刺さり、貫通していた。

出血は多いが、もしこの破片が腹から抜けていたら、止血は困難を極め、出血多量で確実に死んでいただろう。

左のふくらはぎは深めの切り傷だが、止血は難しくない。

「運が味方しているぞ。やはり、まだ死ぬべきではない人間のような」

そう語りかけるも、男はなにも返さなかった。

ともかく、田所は応急処置を開始した。

その間、銃を両手に握るサムソン兵たちは、先ほど怒号をぶついていたのが嘘かのように、なにも発さずにそれを見守っていた。

「いったい、なにをしていたらこんなふうになるんだ」

田所は手を動かしながら聞くも、なにも返ってはこなかった。

「いいたくないか。まあ、誰も入ることができないはずの場所だ。やましいことをしていたんだろう」

「黙れ……」

男はボソリといった。「治療に集中しろ」

田所はふつと鼻で笑う。

「やはり、生きたいか」

「うるさい、お前が勝手に始めたんだろう、黙って治療だけしてろ」

「この出血だ、しっかり話をして生死を確認しておかないと、不安だな」

「へっ、ヤブが……そうやって事前に言い訳をして……患者が死んでも知らんぷり……てか。あくどいな」

「19人だ」

不意に田所が発したその人数に、男は眉を寄せた。

「19人？ ……なんだ、その人数は」

「私が救えなかった人数だ。19人が死んだ」

その言葉に、男は息をのみ、固まった。

「一人は、単純な医療ミスだ。手術中、突然、強烈な便意に襲われた私は、その場の人間に執刀を任せて手術室を出た。帰ってくるころには患者は死んでいた。他には、誰かがメスを落として、内臓が傷ついたこともあった。あのとき、もつと私が冷静だったら患者は助かっていた……1から19で好きな数字をいってみろ、その人数目で死んだ患者が、どんな私のミスで死んだか教えてやる」

「全部、覚えてるのか」

「まあな」

男は4と5の数字をいうと、田所はケツを拳銃で撃たれたヤクザと、拷問で椅子に括り付けられプールに落とされた男が、治療をするもあと一歩およばず死んだ話を語った。

「それは……お前のせいじゃないだろう」

固唾をのんで話を聞いていた男は、ふとそういった。「他人のミスだったり……そもそも、どれだけ頑張っても無理な患者だっただけじゃねえか」

「でも、患者は死んだ。その事実は変わらない」

田所の一言に、男は口をつぐむ。

「私は、自分がやったことについて言い訳は絶対にしない……それが、医者としての、私のプライドだ」

応急処置も半分が終わろうとしていた。

痛み止めが効いてきたのか、男は楽に呼吸をするようになる。「なあ、ヤブ医者。あんた鍛えてんのか」そういった。

「まあな」

本当はステロイドで作った偽りの筋肉なのだが、そこは伏せておく。く。

「だったらよ、よく筋肉の大きさとか測ってるだろ。オレの胸囲、どん

ぐらいだとおもう。だいたいいい」

「そうだな」

応急処置を行いつつ、横目で胸板を見たところ、大体90〜80と
いったところだったが「……100ピツタリぐらいはあるんじゃない
か」と少しもって答える。

「ああ、落ちた……落ちたねえ」

男は寂しそうにいった。

「昔はもつとあったのか」

「115ぐらいはあったんだ……最近、ろくなもん食ってなくてな。
自慢だったんだ、胸囲は。友達によく見せびらかしてたよ。それが最
近、しぼんだ気がしてよ……怖くて測ろうともしなかったんだ。案の
定このぎまだ」

「食事は、筋肉維持には欠かせないからな。食わなきゃかかってにしば
む。だが安心しろ。一度大きくなった筋肉は、小さくなくても、再度
鍛えればすぐに元の大きさに戻る」

田所がそういうと、男はフフッと笑った。

「そうなのか、そりゃよかった。あんた名前は」

「田所だ」

「俺の名前はネクタイ・デカスギだ。なあ田所、外では飯がたらふく食
えるっていうのは本当か。誰かから聞いたんだ。北サムソン政府が
いってる、外では大飢饉で多くの人間が飢え死んでるって……俺たち
は、ダデー―総書記に守られ、安全に生きられている幸せな民衆だっ
て……あれは嘘なのか……俺たちは、騙されてるのか」

「食い物に困ったことはない……といったところで、ネクタイ、お前は
信じるのか」

ネクタイは考えるように眉を寄せるだけで、言葉を返さなかった。
「結局、私が口からなにかをいったところで、事実かどうかはその目で
見なければわからない。なら、お前さん自身が信じたいものを信じ、
行動するしかない。違うか？」

田所がそう問うと、ネクタイは薄暗い空へと目をやった。真つすぐ
に向かうその瞳の奥には、別のなにかを映しているようだった。

「田所。お前、死んで悲しむ人間はいないのかと。そう聞いたな」

「ああ。いるのか」

「妹が一人」

「なるほどな」

田所は笑みを作る。「お前さんが死んだら、その子は独りぼっちだ」
「医者を目指してるんだよ。でもよ、こんな世の中じゃ、勉強もままならねーし。女つてのも工場で働かされる。下着だってそうだ。オレたちみんなよ、後ろの部分が破けて、ケツが丸出しのこの世の終わりのみたいなパンツはかされてんだ」

ネクタイの目に涙がにじんだ。

「オレは……オレはガキのときからアメフト選手になりたかった。でもよ、徴兵で無理やり軍に入れられた……だからせめて、妹には夢をあきらめてほしくないんだ。医者になってほしいんだ……もしそれがかなうってんなら……オレは……」

そこから先を、ネクタイは語らなかつた。

いつて、北国民の誰かに聞かれてもしたら、国家反逆罪に問われ処刑されるからだ。

北サムソンはそれほど言論に厳しかった。

しみついた習慣。決して口を滑らせないようにしていた日々は、例え田所が相手だったとしても、簡単には本音を口に出さなかつた。

それを察したとき、ふとネクタイが身に着けていた肩掛けカバンに目がいった。

触つてみると布越しに鉄の感触があり、ボタンをはずして中を見ると、小さな地雷がいくつかはいっていた。

「こいつは」

つぶやく田所に、ネクタイはなにも語らず目をそらす。

周囲を見渡してみると、その地雷がいくつか見えた。

そこで、やっとネクタイの目的が分かった。

北からは、今でも定期的に壁を越え、南へと亡命するものがいた。

北サムソンは、それらをよしとせず、亡命者を反逆者とし、射殺した兵士に勲章を渡すほどだった。

それでも、亡命する人間は年々増えていく一方の状態だった。

この地雷はその対策。

夜な夜な逃げ出そうとする亡命者を殺すためのもの。それをネクタイが、一人こっそりとしかけていたのだ。

だが、その一つが不良品だったのか、それともネクタイが扱いを間違えたのか、爆発。いまに至るといふわけだ。

地雷を見られたネクタイは、申し訳なさそうに目線を下にしていた。

国家に対して不満がありながら、やっていたことは亡命者への妨害行為だ。

自分がやっていたことに罪の意識があったのだろう。

「お前が自主的にやったんじゃないだろうか」

田所がそういうと「え？」とネクタイは顔を上げる。

「さしずめ、お偉いさんに命令されて地雷を仕掛けにきた。でなきや一兵卒ごときがやることじゃない。地雷だって、個人で勝手に持ち出していいわけがないからな」

凶星だったのかネクタイは唇を噛むと、

「出世したかったんだ」

そう語る。「階級が上がれば、妹にもうちよつと楽がさせられるって……ハっ、だからってよ、こんなこと……いわれたからってよ、やってる時点で最低だけだよ」

「お前さんの国じゃ、上司の命令は絶対だろ。気に病むことはない、私だってお前の立場ならそうしてる」

ネクタイは驚いたように田所の顔を見て、

「そうだな」

と口角を微かに緩ませ、小さな声でつぶやいた「……ありがとよ」

「よし、これで終わりだ。立てるか」

田所は最後、足の包帯を巻き終わると、立ち上がって手を伸ばしたが、ネクタイはその手をはじいた。

「やめろよ。外の人間の手なんて……借りるかよ」

ネクタイは周りに聞こえるような声でそういった。

北の兵士の手前、これ以上は下手なことを見せるわけにはいかないのだろう。

「ああ……そうだったな。なら一人で立て」

「いわれなくても——うぐっ」

立ち上がろうと、ネクタイが腰を上げた瞬間、腹から血が噴き出す。

ネクタイは苦悶の表情を浮かべるも、田所は手を貸さない。

「へ、へへ」

ネクタイは強がり、笑って見せた。「見ろよこの……生の、血しぶき感覚……ヤブ医者が、しっかり止血しやがれ」

「下らんことをいつてる場合か、さっさと帰れ」

「いわれなくてもよ……帰るぜ」

ネクタイは踵を返し、一呼吸おいた後、二人にしか聞こえない小さな声で「じゃあな……先生」といって、自国の壁へと歩き出した。

先生……か。

「妹さんによろしくな」

田所も小さな声でそう答えた。

それが届いたのかどうか、定かではないが、ネクタイはさつと右手を上げた。

「外で待ってるぞ……ネクタイ」

田所は一人つぶやくと、南の兵とその場を後にした。

「おまんこへへ」

野獣邸のリビングのテレビでは、サムソン国大統領、ケツデカ課長の演説が映されていた。

その後ろでは、テイ中佐の姿もある。

サムソンが統一されて、初めての大統領演説である。これは、自国に向けたものではなく、全国の国々に向けたものでもあった。

ケツピンの壁が崩壊し、2ヶ月。

その間に、2国の統合から北国民の精査と支援、北官僚の処罰は急ピッチでおこなわれた。

特に、北の三大官僚であったダデー、島田部長、コブラの三人は、

下北裁判所の判決により下北沢で公開処刑されることとなった。

様々な非人道的な行為。主に同性愛の禁止が世界の反感をかったのだ。

ダデーは車から伸びる紐に括り付けられ、下北沢中、引き回しの刑に処され「ぷももえんぐえげおんもえちよつちよつちやつさつ！」という断末魔を残して死亡した。

島田部長は海流しの刑に処される前「あー、涙がよう染みる」と一言だけ言い残し、亀甲縛りにされたまま、イカダで海に放流された。

コブラは、人間は異性愛こそが本来の形であり、同性愛を基本だとしてこの世界は狂っている、と意味不明なことを最後の最後までのためい。爆破刑に処され死亡した。

そのさい、ニコニコ本社もついでに爆発させた。

様々な悲劇を生んだツケは、主にその三人の命によつてはらわれた。

「これで終わりか。あつけないもんだ」

そんなことをつぶやきながら、田所は一人、アイステイーを飲む。すると、遠野が郵便物を片手に部屋に入ってきた。

「せんぱーい。一つ先輩に手紙がきてますよ」

田所の前にピンク色の封筒を置いて、隣の部屋へと歩いていった。

「おお、ありがとう」

それを手に取り宛先を見ると、サムソン、と書かれてあった。

田所はアイステイーを素早く一口含むと、すぐにそれを開き、中の便箋を取り出す。

そこには、つたない日本語でこう書かれてあった。

田所先生へ。

初めまして。

私はネクタイ・デカスギの妹、リボン・デカスギと申します。

前々からあなたの話はお伺いしています。

病院で入院する兄から、あそこで素晴らしい医者にあった、先生のおかげで助かったと、なんども聞いていました。

「うん、おいしいー」

遠野は、スープの味見をおえると、後ろを振り返った。

「先輩、ご飯が……でき」

先ほどまでそこにいたはずの田所が、姿を消していた。

「あれ？ どこにいったんだろ」

本当は、すぐにお手紙を出したかったのですが。

いま北サムソンは復興の真つ最中で、色々なことにてんやわんやの状態で、そんな暇ありませんでした。

北サムソンは、2ヶ月前に起きた壁崩壊から、少しずつよくなっていっています。

私の手元には医療について書かれた本があり、学校にも通えるようになりました。

お腹いっぱい料理を食べて、パンツに穴もありません。

「せんぱーい、どこですかー」

田所の部屋や、トイレを調べるも姿はない。

「どこにいるんだろ」

そして、兄についてなのですが。

実は、先生に助けていただいて一命をとりとめた後すぐ、兄は軍法会議にかけられました。

罪状は、外の人間に機密をばらした罪。地雷を勝手に持ち出した罪。命令なく壁に侵入し地雷を設置した罪でした。

「ここかなあ」

遠野は地下室の扉を開けるも、ここにも姿はなかった。

「ここにも……じゃあ」

遠野は天井を見上げた。

「屋上？」

兄はそんなことはないかと反論をしました。

機密をばらしてなんていないし、地雷を設置したのも、上官からの命令だと。

しかし、それは聞き入れられませんでした。

兄の有罪は、最初から確定していたんです。

一週間後、民衆の前で絞首刑に処されました。

その刑の前、兄と最後の面会したとき、私にいました。

生きる。生きて夢を叶えてくれ。立派な、田所先生のような医者になつてくれ、と。

「ハア……ハア」

遠野は息を切らしながら、階段を上る。

「なんでこんな大きい家に住んでるだろう。もうちよつと小さいのに住めばいいのに」

田所先生。

兄を治療していただき、本当にありがとうございました。

私は自分の夢を、兄の願いを叶えるために、絶対に立派な、あなたのような医者になります。

同じ医者として、いつかあなたに会えるのを楽しみにしています。
リボン・デカスギより。

屋上のドアを開くと、手すりにもたれかかり、薄暗い空を見上げる

田所の背中が見えた。

「先輩、こんなところにいたんですか」

声をかけると、田所は振り返った。

「あ……ああ。ちよつと空の様子をみたくてな」

その手には、さつき渡した封筒があり、田所は胸ポケットへと納めた。

「手紙ですか。なんですか、こんな夜空で見ちゃって。恋人からですか」

「そんなんじゃない」

田所はいつて、遠野のほうへと歩いてくる。「ただ……友人からさ。それより、メシができてるんだろう。早く食わせてくれよな」

「ふーん、友達ですか」

「なに勘ぐってるんだよ。そんなんじゃないぞ。ほら、さっさと部屋に戻れ」

「はい」

リビングに入ると、テレビではサムソンのニュースを取り扱っていた。

「あ、ケツピンの壁ですか。いまだにこの話でもちきりですね」

「ああ、そうだな」

田所は茫然と、そのニュースを眺めていた。

そこには、処刑された北サムソンの三大官僚の映像が流れている。

「しかし、公開処刑とは思いつつたことしましたよね、下北裁判所も」

遠野はいいながら、皿に料理をよそう。「まあ、死んで当然といえば当然ですけど」

「確かにな」

椅子に座った田所はぼつりとつぶやいた後、続けていう。「でも……こいつらのせいで死んだ人間たちは、戻っては来ない」

遠野は田所の前に料理を置くと、その言葉で一瞬固まる。

「まあ……そうですね」

依然、田所の顔はテレビに向いている。

「怒りは消えても、悲しみや虚しさは、一生消えることはない。それでも、前に進まなきゃならない……希望っていうのは、歩き続けた先にしかないからな」

「そうですね。でも、きつと大丈夫ですよ。強い意志があれば、きつと悲しみも乗り越えられます」

遠野がそういうと、田所は微かに頬を緩ませた。

「ああ……そうさ。きつと乗り越えられる、彼らなら」

真つすぐテレビへと向かう田所の目。

その瞳の奥には、最後に見た、ネクタイの背中が映っていた。

青空 プロローグ

ことの発端は、ドラゴン田中教授の講演が、終わりにさしかかったときのことだ。

「随分と長い講演となった。ご清聴ありがとうございます。最後に私から君たちに、この問題を問いたいと思う」

南アジアの小さな国、I国に日本医療界の権威、ドラゴン田中が講演を行うということで、若手からベテランまで国内の医者が一堂に会したホールの中は、異様な雰囲気にも包まれていた。

「いったいどんな質問を投げかけてくるのか。」

最後まで一切の集中力を切らすことなく、全員が黙って田中の言葉を待っていると、口から出たのは、どこかで聞いたことがある倫理問題だった。

「君は列車の進路を切り替えるレバーの前にいる。レバーを切り替えなければ、線路の上で乱交をしているホモ5名が死亡する。レバーを切り替えたのなら、その5名は助かるが、別の線路で脱糞しているホモ1人が死亡する。さあ、君たちはどうする」

先ほどまでの緊張が一気に切れてしまうような、拍子抜けした質問だった。

てつきり、高難度な手術の話や難病患者の話、もしくは政治と金がらみと思っていたからだ。

静寂から一転、予想外の質問にざわつくホール内に田中はうつすらと笑みを浮かべたかと思うと「この答えは各自で出すように。では、本公演をここで終わりとする」とあっさりと言ってホールを後にした。

誰かの助けを求める声が聞こえた。

「俺はレバーを引くね」

小さな国とはいえ、I国一番の病院だ。食堂は清掃が行き届いており、汚れが一つたりとない、ドラマのワンシーンにでも出てきそうなきれいな場所だった。

そこで頭を使った後の空腹を満たしながら数人の研修医たちが仲間内で話すのは、やはり最後のあの質問だった。

「レバーを引くしかない。これは事故だ」

「それ、遺族の前で言えるの？」

「こんなものに正解はないだろ」

「そういう答えが一番ダサい」

「え、そんなの関係ないでしょ（正論）」

「パパパッとレバー引いて、終わりっ！」

「医者としてそれはまずいですよ！」

「あのさあ……」

「ケツの穴舐めろ」

「1万円くれたらしゃぶってあげるよ？」

言い争いは脱線して全く関係のない話に方向に向かっていく。

そんな中、をつき、俯瞰するかのようにポイテローはその論争を眺めていた。

全くもつてくだらない。

そんな感情が顔に出ていたのか「おやあ、ポイテローさん」と同期の研修医が語り掛けてくる。「どうしたんですか、一人だけ黙りこくって」

全員の目が一齐にポイテローに向く。

先ほどのやかましさが嘘かのようにみな口をつぐんだ。

ポイテローはほかの研修医とは立場が違った。父親はかの有名なアキシード総合病院の院長。その長兄であるポイテローはブリッチ尻穴大学を首席で卒業した神童だった。

研修医となつて1年と少しであるが、彼が次期院長として疑うものはいない。

しかし、栄光には常に嫉妬が付きまとう。何かと目の敵にされることは少なくない。

それは期待か、それとも試しているのか。様々な感情の入り混じった数名の視線がポイテローに向いた。

「なーに考えてるのか……教えてくださいいよお」

一間の沈黙の後、ポイテローはほくそ笑んだ。

こういう状況には慣れていた。敵意を向けられることも、それをねじ伏せることも。

子供を抱えた母親が医者を探している。

「答えは簡単だよ。『気が付かなかつた』だ」

それを聞いた皆の反応は様々だった。目を丸くするもの、眉をひそめるもの、視線をそらして考えるもの。そんな中でポイテローは続ける。

「いいか、そもそもその現象を認知しなければいけないという認識がナンセンスだ」

留学経験も多いポイテローは、言葉の節々にネイティブかつ鼻につく英語を混ぜて答える。「その現状を理解した瞬間、5人を見殺しにするか、1人を故意に殺すことになる。しかし、それを見えていないのならば？」

人を故意に殺すことになる。しかし、それを見えていないのならば？」

全体を見渡し、問いかけるも誰からも返答はない。

「立場は一変する。たまたま事故の近くにいただけの一般人に変わるんだよ。自分が悪いわけでもない事故の現場にただ居合わせただけだ。誰が責任を問える。この話で田中教授が言いたかったのは、無用なリスクを負うなど言うことだ。医者という職業上で人の生死に必ず関わってしまう以上、下手にかかると告訴の危険性がある。だからこそ、この問題の正解は無視。たとえ見えていたとしても知らなかったフリをするのが最適解だ。そもそも、線路上で乱交や脱糞をする」と自体が……」

周りの視線がこちらではなく、自分の頭上に向いているのに気がついたのはそこまで語ったときだった。

とつさに後ろを向くと、そこには田中教授が立っていた。

「いやいや、話を遮ってしまって悪い」

教授は優しさを含んだ余裕のある笑みを見せた。「興味深い意見だと思っつていい声をかけず、聞き入ってしまったよ」

その柔らかい言葉とは対局に、研修医たちは固まっていた。日本医療会の権威と発展途上国の研修医。言葉を交わすに地位が違いすぎた。

蛇に睨まれた：いや微笑まれたおたまじやくしといったところだろうか。

しかし、凍りついた空気の中、一匹のおたまじやくしだけが無謀にも飛び跳ねた。

「僕の見解に、なにか意見はありますか？」

背もたれに腕を乗せた、まさに絵に書いたような失礼な態度でポイテローは噛みついてみせた。

周りの空気が更に冷たく、固くなっていくのを肌で感じる。

医療会の権威？教授？そんなことは知ったことではない。

そんな肩書、自分だつていずれ手に入れられる自信があつたし、何より上からのものを言われるのが嫌いだった。

教授が何だ。俺は更に上に行く。

敵意をはらんだ視線を、まるで子供をあやす大人のような態度で、ハハツと教授は笑つた。

その余裕綽々といった態度も、ポイテローの癩に障った。

「気に触ってしまったのなら謝ろう。この問題にそもそも正解などない。これは、医者としてどう考えるかというのが、私からの問いかけだ。誰しもそれぞれの正解がある。間違いなどないのだよ。君の考えは非常に理にかなっているが、他の者たちの答えも、決して間違つてはいない」

「ずいぶん適当な問題ですね」

挑発的なポイテローの返答にも、田中は一切乱れなかった。

何の感情もないような、赤子を見つめるような透明な視線を向けて続ける。

「そうだな、皆の思考時間をこんな適当な問題に奪つてしまつて悪かった。生きていけば、答えのない問題に立ち向かわなければならぬ時が来る。そのときに、皆には後悔してほしくないのだよ」

その返答に、ポイテローはぐつと奥歯を噛みしめる。

煮え切らない。

こちらの攻撃的な言葉を、さりりといなししていくる。まるで空気を押ししているように手応えがない。

なんとかこの男を、自分のほうが上だと確信している田中の感情を乱しなかった。

誰かが泣いている。女だろうか。それとも甲高い男の声だろうか。「なるほど。それなら、僕らの時間を奪ったお詫びとして、田中教授の答えをお伺いしたい」

なんとか爪痕だけでも残したい。そんな思いで出た問いだったが、答えようとした田中を、いつのまにか隣りにいた側近らしき隣の男が遮る。

「教授。お時間が」

「ああ、すまない。少し話し込んでしまった。楽しかったよ。では、失礼する」

とその場をあとにしようとするも、ポイテローはとつきに立ち上がり、食い下がる。

バカにされたまま返してたまるか。

「ちよつとー行く前に、ご自身の答えをいったらどうですか」

その言葉に、田中は足を止めるとゆっくりと振り返った。

その視線は変わらず透明だった。まるでこちらを見ていない。ずいぶん先の未来を見ているような、そんな感覚があった。

「君…名前は何？」

「ポ…ポイテローです」

突然の問いかけに、少しつまりながらも答える。

「ポイテローくん、君はきつと立派な医者になるだろう。様々な困難にぶつかりながらも、きつとそれらを乗り越え、大きな存在となる。その時に…きつと分かる…失礼」

そう言っつて田中は側近と共に足早にその場をあとにした。

去っていくその背中を、姿が見えなくなっても、じつとポイテローは睨みつけていた。

クソ…クソクソ！

「Damn it!」

心の声が漏れ出ると同時に、周りの研修医は蜘蛛の子を散らすようにそばから離れていった。

ドカつとぶつきらぼうに座ると、腕を組んで肩を上下させた。

「畜生…バカにしゃがって…覚えてろ」

絶対にいつか見返してやる。そんなことを思った。

…あれが…3年前か。いや4年? まあ、どうでもいい。今思えば若かった。どうしてあんなに怒っていたのだろうか。

…そもそも、どうして今、あの時のことを…。

呆然とする意識の中、人がごった返す狂乱の病院の真ん中でポイテロ口は、なぜか昔のことを思い出していた。

隣で看護師が包帯をもって走っていった。袖には血がついている。

廊下に倒れ込む人。あれはもう助からないだろう。ホモアージをしなくては。

思っている、体が動かない。

頭から血を流して医者が来るのをじっと待っている人。

叫び声。どこからだろう。耳にするのは何度目だろう。

誰かが声をかけてくる。でも、反応しない。反応できない。

脳に酸素が回っていない。いや、ただ何も考えたくないのだろうか。

まるでモヤがかかっているかのように、視界の隅がぼやけて、周りの音がよく聞こえない。

ただ、自分が荒く息をする音と心臓の鼓動だけはしっかりと聞こえる。

そんな中、頭の中では自分のことを俯瞰して、ゲームのキャラクターのように見下ろして見ている。

喧騒のなか、ただぼつんと、何もせず白衣を着てつつたっている。

あいつは…俺は一体、何をしているんだ?

青空 1？

1

「ここか」

林の中、舗装のされていない道なき道を2時間ほど進んだだろうか。

I国の名前も定まっていないうような場所にある小高い丘。

ドラゴン田中教授はここに眠っている。いや、漂っているというのが正しいだろうか。

I国にある丘に散骨してほしい。

それが教授の遺言だった。

なぜI国なのか、どうしてここなのか。理由はよくわからなかった。ただこの場に立って見れた！。

「なるほど、ここはいい」

心地よい風が頬をなで、田所のうんこ臭を乗せて流れていった。

I国は発展途上国である。つまり、まだまだ未開の地が多い。

丘から見える木々の生えた赤土の大地と、その自然の中で慎ましかに暮らす小さな村が点在していた。

I国はその昔、第19次世界大戦が終わった後、敗戦国となりレスリング帝国に植民地支配されていた過去がある。

敗戦に他国からの支配。

ただ平和に暮らしていた人間たちからしたら、突然に降り掛かった理不尽以外の何者でもない。

言葉では表せない、つらい日々があったのだろう。

しかし、世界情勢の変化とともに植民地支配がおわり、その後、なんとか立ち上り、努力を惜しまずに生きた景色がここには広がっている。

ここを最後の地に選んだ理由が少しわかった気がした。

教授は1年ほど前に亡くなった。

ポジが悪化した結果、内臓がやられてしまったようだ。

くだらないと思うと共に、あの人らしいと少し笑ってしまう。

そう何度も会った関係ではなかった。ただ、田所とはとても馬が合った。

目を閉じると、酒を飲みながら医療について、医者についてあれやこれやと話しながら当時は合法だったドラックを鼻で吸い込み、キメていたことを昨日のように思い出す。

「また来ます」

心のなかで追悼を終わらせると共に、そう言っただけで田所をはその場をあとにした。

帰りの道。当然、行きと同じく2時間かかるので、小腹が減ってきた。

まさかここまで時間がかかるとは思ってもなかった。小腹を満たすものは手元にない。

空腹を示すように腹が少し鳴ると同時、道路に隣接するように村が見えてきた。

近づいていくと、それは村と言うより集落に近いものを感じた。住民は100人：いや50人いれば多いほうだろうか。

サビつき今にも崩れ落ちそうなバスの停留看板を通り過ぎ、適当な場所に車を止めると、明らかに浮浪者の歯がない男に少しの金を握らせて車番を頼んだ。

頼りはないが、いないよりはマシだ。

「何だ!?このりんごが114514 ポジ!」

一番近場のボロボロの果物屋で田所は思わず声を荒らげた。

「ああ、そうさ。そちら114514 ポジだよ」

「ふざけるなよ貴様。何も知らない日本人観光客だと思ふな。こんな今にも腐り落ちそうなりんごが、114514 ポジなわけ無いだろ」

「文句があるならよそを当たりな。まあ、この村に果物屋はうちしかないがね」

このヤロウ。明らかに足元を見やがって。

眉間がピクピクと痙攣し、握り込また拳が今にも店主に向かいそう

なその時「それよりあんた」と店主は足元を指さした。

「そこにあつたカバン。大丈夫かい」

「え?」

とつきに下に足元を向けると、簡易的な手術道具一式を入れたアタッシュケースがなくなっていた。

「あ!な、おい!」

慌てふためき、足元や周りを見渡す。「どこに行つた!誰に取られた!あれがないとクソ!」

その様子を、店主は小馬鹿にするように笑つていった。

「やられたねえ。ここでは有名な物取りがいてね。みーんないっぺんは被害に遭つてるよ」

「何を笑っているんだ貴様は。見てたんならさっさと言わないか!」

「いやあ、見てたわけじゃないさ。あつというまでね、気づかなかつたよ。それより、りんご114514ポジだよ」

その言葉に、田所はカツと店主を睨みつけた。

「貴様、いま私がそんな状況では!」

「情報料、込で」

意味深な店主のセリフと目に、田所は言葉を止めると、同じく意味深な視線を返した。

「810ポジだ。それ以上はまけられない」

青空 2?

2

タルトは走っていた。

10歳の少年が持つには少し大きめのアタツシユケースを両手に抱え、一目散に家に向かう。

じつと見ていた。

高そうな車から出てきた、うんこ色した顔がツギハギまみれの日本人。その手に握られた太陽の光を反射させる、ギラギラしたアタツシユケースを。

価値のあるものだ。

義務許育を満足に受けられていないタルトにもわかった。

ボツタクリの店主と口論しているスキにそれをかすめとった。

家と家の間の細い道を抜け、林の少し向こうに家が見えてきた。

タダでさえ簡素な作りの家しかないこの村の中でも、さらに作りが荒い。ほんの少し力が加わっただけで崩れ落ちそうな家に、タルトは駆け込む。

「お母さんー」

叫ぶとすぐに膝を合わせて座っている母と目が合う。「母さん！これそこで拾ったんだ！きつと高いー」

「なるほど。そいつをどのあたりで拾ったんだ」

母の奥、ちやうど暗がりの位置にツギハギの日本人が壁にもたれかかって立っていた。

「えっ！あつ…いや」

言葉がしどろもどろになり、アタツシユケースを下に落とすと、蓋が開き、中にあったメスが床に落ちた。

「こんな小さい村さ。誰がどこに住んでいるかなんて、皆知っている。ちよつと金を払ったら教えてくれたさ。まったく、やってくれたな」

田所はゆつくりとタルトのもとに近づくと、足元のアタツシユケースを拾って、土を払った。「さあ、どう落とし前をつけようか」

「ま、待ってくださいー！」

田所の言葉に、母は膝をついたまますり寄って懇願した。「この子はまだ子供で…あの、償いでしたら私がしますから」

いかにも惨めなその様を、田所は昏睡レイパーのような汚い眼差しで眺めた。

「子供…ねえ。大人の目を欺いて盗むような人間を、俺は子供とは思わない…おい、そこのガキ」

タルトははつとして顔を上げた。

「な、なんだよ」

「名前。それと年は」

「タルト…10歳」

「10歳。十分に分別がつく年だろう。お前が判断しろ、どう落とし前をつける。母親に肩代わりしてもらおうのも、お前が償うのも自由だ」

タルトの視線が、田所と狼狽している母を往復する。

考える。母に迷惑はかけたくない。しかし、自分に支払い能力がないことはわかっている。

今にも涙が溢れそうな心境の中、不意に地面に落ちていたメスに目がいった。

とつさにそれを拾い上げ、見せつけるようにむき出すと田所はフツと鼻で笑ってみせた。

「何だそれは。そんな小さな刃物で反抗でもするつもりか？ それはそんなことのために使う道具じゃない。返せ」

「違う！」

タルトは首を強く横に振る。「僕は医者になるんだ！」

母は驚き、田所は、ほうと顎に手を乗せる。

タルトは続ける。

「僕のお父さんはレスリング国つてところから来た医者だった！ 死んじゃって、もういないけど…。けど！ 本をいっぱい持ってて、毎日それを読んでる！ 英語だってちよつとわかる。医者になって、いっぱい稼いで…それで、お母さんの足も治すんだ！」

「足？」

田所は総口にして母親を見る。「あなた、足が？」
ええ、と言って母は足を隠すように膝を曲げた。

「あんだ、お医者さんなんでしょ」

タルトは聞いた。「この…メスってやつ持ってるってことは医者なんでしょ！」

「だったら何だ」

「教えてよ、お医者さんを」

田所は目を丸くすると、高らかに笑ってみせた。

「医者を教えろだつて？ 笑わせる、危うく大事な商売道具を盗まれそうになった子供に、なんで俺が教えなきゃならんのだ」

「お金はいくらだつて払う！ お医者さんって、いっぱいお金を稼げるんだ、それで——」

「2億だ」

突然の田所の言葉に、タルトは言葉を失った。「おっと、子供相手に2億は流石に言い過ぎたか。そうだな、特別に1000万ポジまけて1億9000万ポジでどうだ？ それで今回の件はなかったことにして、なおかつお前に医術を教えてやろう」

2億。

あまりにも莫大かつ、想像できない金額にタルトはうまく思考ができなかった。だが——

「やるよー」

次の瞬間にはタルトは叫んでいた。「2億だつて、3億だつて払つてやる！ 僕は医者になって母さんみたいな困ってる人をなおしてお金を稼ぐんだ！」

田所はニヤツつと笑う。

「契約成立だ。じゃあ早速、お前のお母さんの足を治そうか」

タルトは母と全く同じタイミングで田所を見上げる。

「な、治してくれるの？」

「1億9000ポジも貰うんだ、サービスしといてやる。それに、医術の勉強にもなるだろ。もちろん、ちゃんと見てくんだよな…2億も稼ぐんだ、ちんたらしてもらったら困る」

目を輝かせたタルトがうん、と言って力強くうなずいたのを見て田所を笑った。

田所には目の前の懸命に医者を目指す少年の姿が、昔の自分になって見えていた。

「ずいぶんひどいな」

田所はタルトの母を仰向けに寝かせ、足を見てつぶやいた。

症状は重度の外反母趾であった。親指の付け根あたりから横にボツコリと、なにか異物が入っているかのように膨らみ、親指の先が人差し指に重なっている。

日本でも聞き馴染みのある病気だ。窮屈な靴を履き過ぎた結果、親指の付け根が曲がり、その無理な状態が固定され炎症を起こし、最悪の場合は脱臼する。

タルトの母はこの脱臼段階にある。

通常、完全に歩けなくなってしまうことはほぼない。

痛みが出たときに原因となる靴を履くのをやめてしまえば、早ければひと月も立たずに治ってしまう。

足に麻酔を効かせている間に、田所は家を見渡す。

立っているのがやっとの家。ボロ小屋といって差し支えないだろう。

加えて立地は村外れの林の中。

旦那と死別してしまい収入源がなくなってしまったこともあるが、何より考えられるのは迫害だろう。

小さな村だ。必然と仲間意識も強くなる。

そんな中、自国に植民地支配を行ったレスリング国の子供を身ごもった地位もない女性。

差別を受けたのは明らかだ。

そうになると、つける仕事は限られてくる。

ふと横に目をやると、この場の誰にも適さない、成人男性用のワイシャツとジーンズパンツが壁にかけられているのが見えた。

この家には似つかわしくない服だ。

そうなる予想は簡単だ。この母親は夜な夜な男に姿を換え、水商売を行っていたのだろう。

こんな村でも：いや、こんな小さな村だからこそ、男の楽しみなど酒ぐらいになつてしまう。

そうになると、女ではもの好きの客ぐらいしか集まらない。

タルトの母は夜な夜な男の格好をして酒の相手をしていた。その際に革靴でも履いていたのだろうか。普段履かない男物の靴を履いて外反母趾になり、痛みが出ても収入のためにそれを続けていたのだろう。

田所はタルトの母子を思い、少しだけ吐息を落とした。

「治せるの？ それ。外反母趾でしょ」

隣で母親の足をまじまじと見つめていたタルトがそう言うと、田所は目を丸くした。

「何だ、病名がわかるのか」

「本に書いてあったから」

なるほど、勉強していると云うのは本当のようだ。

「かなり悪化しているが、一部骨を削って形を直せば治るだろう。まあ、栄養状態にもよるが。完治まで3ヶ月つてとこかな。感覚はいかがですか、麻酔は効いてますか？」

田所は少し強めに足をつかんで問うと母親は「大丈夫です。お願いします」と答える。

よしと田所はいって、マスクを装着した。

「さあ、手術を始める。しっかり見ておけよ」

タルトは何も言わず力強く頷いた。

消毒したメスを足に入れ、肉を割いていく。

流れは順調だ。特に難しい手術ではない。

ちらりと横目でタルトを見ると、熱心に、瞬きも忘れてそれを眺めるタルトが見えた。

手元には小汚い紙があり、鉛筆で何かを書いてある。

この様子なら、2億なんてあつという間に稼ぎのけてしまいそうだ。

「もう1億ぐらいふっかけておくんだつた」

ポツリとそう呟いたが、タルトは目の前に集中しており聞こえてい

ない様子だ。

こいつは俺の立場も危うい。

ニヤリと笑った田所は、そんなことを思いながら手を動かした。

「なんで行っちゃうんだよ！ お医者さん教えてくれるんじゃないのかよ！」

1時間足らずで手術も終わり、さっさと帰ってしまおうと家を出ると、一緒に出てきたタルトが田所の背中に叫んだ。

「俺だって忙しいんだ。ここにはたまたま寄っただけで、用事はすでに済ませた。手術の予約もあるんだ、早く日本に帰らないとな」

「でもー」

「わかってるさ、約束は守る。ここに医術を勉強できる本を送ってやる。それで勉強して、学校にいったって、金を貯めろ。そして…」

そう言っただけで田所は振り返った。「日本にこい。そしたら、みっちり、お医者さんを教えてやる」

怪訝そうな顔をしていたタルトの顔が、開く花のように明るくなった。

「ほんとに！ 約束だよー」

「ああ、もちろんだ。どうだ、俺は今から村に止めてる車に乗って帰る。少々遠くて話相手がほしい」

「いく！ 一緒にいくよ。その代わり、手術の話、教えて！」

「いいだろう。これは俺がまだホモビデオ男優をしていた時の話なんだがー」

二人並んで話しながら歩く姿を、開きっぱなしになったドア越しに、タルトの母親は眺めていた。

それはまるで親子のようで、兄弟のような。

久しぶりに、タルトの全力の笑顔を見た気がした。

「それで…全身に銀粉を塗ったの？ なんで？」

「いや、俺もいくら考えてもわからん。とにかく銀色になって…なんか…マシーンみたいになった俺は何人もの男の手でー」

過去の施術の話をしてながら二人で車まで向かっていると、視線の先で自分の車の前で、見守りを任せた男と別の男が口論をしている。その横を見るとサビが幾重にもこびりついたバスが停まっていた。どうやらバスの停車予定場所に田所の車が停まっていたから、運転手が文句を言っている様子だ。

「失礼、なにか問題が？」

田所は小走りにそこによっていくと、二人がこちらを見た。

「この車、あんたのかい」

運転手らしき男が問いかけてきた。

好戦的。今にも噛みつきそうな形相だ。

「ああ、そうだ。少しの間だけ停めさせてもらっていた。どうやらここがいつもの駐車場所のようだな」

「ああ、そうだ。お前みたいだよそもんが、こんな村に何のようだ。また俺たちの土地でも狙いに来たのか！」

ずいぶんな物言いだった。

その内容から外国人への差別意識がうかがえる。

「いや、たまたま寄っただけだ。すぐに出る。ここは別に誰のものとも示されていないかったのな。車を出すよ」

「早くしてくれ。よそもの同士が何話してんだ、くだらねえ」

吐き捨てるようにそう言うと、運転手はバスに戻っていった。

田所が車を移動させるとそこにバスを止め、何も言わず運転手は去っていった。

「タルト」

窓を開けてタルトを呼ぶ。

「なに？」

「さっきの運転手…何かあったのか」

タルトは首を横にふる。

「わからない…でも、僕を見る目が、すごく怖いんだ。何度か怒鳴られたこともある…他の子にそんな事ないのに、僕だけ。だから…学校も行けなくて」

「そうか」

田所は鼻から大きく息を吐いた。「…もし、あいつが生きるか死ぬかの病気にかかったとして、お前に助けを求めにきたら…タルト、そのときはどうする？」

タルトはほんの一瞬の逡巡すると、強い眼差しを返してきた。

「僕のお父さんも、たくさんみんなにいじめられたりしたけど、あの人みたいなひとをいっぱい治した。なんで意地悪するひとを治してあげるのって聞いたたら、お父さんは言ってたんだ、空を見ろって。空には国境も、なにもないって。みんな同じ空の下の人間だって。だからレスリング人だろうと、下北人だろうと、病気のひとはみんな治すんだって」

タルトの父は偉大な医者だったのだろう。

でなければ、わざわざ差別の強い他国に来てまで、ひとを治そうとは思わない。

「お前さんの父親に、一目会いたかったよ。お前にこいつをやる」

そう言っつて、田所はアタッシュケースからメスを一本取り出して、タルトに手渡した。

「メスだ！ いいの、これ大事なものでしょ？」

「大事だからやるんだ。そいつを見てたら約束も忘れないだろ。熟練工に研がせたメスだ。なくすなよ」

「当たり前だよ！ 絶対なくさない。いつかこれで手術するよ」

車を発進させると村は遠のいていく。

サイドミラーを覗くと車の背に手を振るタルトが見える。その手にはメスが握られていた。

田所は窓の窓の外に腕をだけを出して、それに答えるように手を振った。

ほんの2時間程度の滞在だったが、その何倍にも感じるような濃厚な2時間だった。

飛行機の便は遅れてしまったが、そんな事気にならない程に、田所の胸の中は満足感に溢れていた。

タルトの振るメスが、太陽の光に当てられてきらびやかに光る。まるで、彼の未来を示すように。

4

退屈だ。

そんな感情が溢れ出してきたのか、ポイテローは昼頃だというのに大きなあくびをした。

病院内にある医療関係者専用の小さな休憩室で、ポイテローは患者のカルテ片手に紙コップに入れたコーヒーを飲んでいた。

睡眠時間は何よりも大切だ。毎日7時間はしっかりと眠っている。それでも、こんな退屈な研修の日々だと眠たくもなってしまう。

国が決めた研修期間の制度にそって、ありきたりな病気に、ありきたりな患者。それに対してありきたりな対応を行っていく。

俺が治したいのはこんな身近で、簡単に治ってしまう病気ではなく。難解で自分でしか治せないような病気たちだ。

そのためにも、同じく研修期間を過ごしている連中のようにはしてはいけません。

こんな仕事、手短に、最短距離で、ちゃっちゃと終わらせて、暇な時間はもつと高度な医学の勉強をしなくてはいけない。

そんなことを思いながら仕事をしていると、ただでさえ退屈な仕事だが、更に退屈に感じる。

カフェインなど意にも介さぬ眠気が、また大きなあくびを生み出すと「おやあ、ポイテローさあん」と同じ研修医が給湯室からコーヒーを持って出てくると、隣に座る。

「あくびなんかしちゃって。やっぱり院長のむすことになると、こんな作業なんて退屈なんですかあ？」

「いいや、仕事づめで眠れていないだけさ」

退屈で死にそうだと同調したかったが、ここでそこいらの人間と同じようなことをいう訳にはいかない。

いずれ上の人間に立つ以上、高尚な精神を演じることも大切だ。

「さすが次期院長だあ、僕らとは違うなあ」

「気が早い。まだ僕が院長と決まったわけじゃない」

と言いつつ、内心は自分以外いるわけがないと思っているのだが。「でもねえポイテロさあん。僕はね、立派な医者になるために来たんですよ。たしかに、目の前の患者さんたちを治すことは大事ですが。もつとこう、大きいというか、自分にしかできないようなこととか…いっては悪いですが、命のかかったオペとかしてみたいものですよねえ」

つい先程、自分も思っていたところだ。

この男、同じ研修医の中ではひととき嫌味つたらしいが、考えは結構似通っているのかもしれない。

「まあ、言わんとしないことはわかるが、命がかかるってのはなかなかつらいな。もし死んでしまったらと思うと、手が動かなくなってしまうかもしれない」

ま、俺ならどんな状況だろうと楽勝だろうけど。と胸の中でぼやきながらポイテロは言った。

ある種、そういった本番の舞台を待っている節もある。

「でも、消えかけそうな命を救ったとなると、とつても満足感がありますよお」

「そうかもな…なら、いつそ事故でも起きることを祈るか?」

ポイテロはそう返すと、フフと研修医は冗談めかして笑ってみせた。

その笑いの奥、何を考えているのかポイテロにはわかっていた。どこかで事故が起きる。救急で運ばれるが、医者は自分しかない。い。

緊急手術で完璧にやってのけ、患者やその家族からはこれ以上ない感謝と、周りのものからは尊敬の眼差しで見られる。

研修生活の中でそういうヒロイックな妄想を膨らませたことは、そう少なくない。

人は皆、生まれながら英雄になりたい生き物なのかもしれない。

いや、本当にほしいのは声明と、他より優れているという自尊心か。

「さあ、患者が待ってる。休憩もこのぐらいいにしておこう」

ポイテロはそう言って椅子から立ち上がった瞬間、ぐらりと足元

から力が抜け、その場で左手をついた。

右手に持っていた紙コップが落ちて、中にかすか残っていたコーヒーが小さな水たまりを作った。

「おっと、どうやら疲れてる―」

顔を上げた瞬間、ポイテーターは研修医の真剣な表情に言葉をつまらせた。

自分を見ていない。天井？ どこかを眺めながら椅子をしつかりと握っている。

その小さな異変に気がついたのは、床のコーヒーが小さな波を作っていたのが目に入った時だ。

波：揺れ？ …地震。

刹那、揺れる視界、けたたましい大地の音、誰かの悲鳴。

眠気は一瞬にして消えた。

「こいつを頼む」

田所は都心にある運送屋に来ていた。

台車に大きなダンボール5つを載せている。

少々値ははるが、ここいらあたりで一番、信憑性が高い店だった。

「いいですよ。ところで、こいつら中身はなんですか？」

カウンターの向こうで受付の男が言った。

「3箱は本。残りの2箱は食料だ」

「本ですか、なにか商売でも始めるんですか？」

「いや、とある男に貸しがあつてね」

「貸し？ …借りじゃなくて、貸しですかい？」

「ああ、そうだ。ところで、俺はこれから日本に帰るんだが、日本からも本を送りたいんだ。ここに送れば持つていってくれるか？ かなりの量になる。小さな図書館ができると思つてくれて構わない」

受付は目を丸くした。

「と、図書館？」

「何だ、ダメか？」

「ええ、いいですが金額―」

「金はいくらでも払ってやる。気にするな、どうせ帰ってくる金さ」
「はあ…じゃあここに住所を」

田所はペンを手に取り、タルトの村の住所を入れてみると、そういえばあの村には何も無いことを思い出した。

勉強漬けになるとは言え、流石に娯楽がなにもないのはメリハリがつかない。

国民的大人気漫画のブリーチ全巻もどこかで購入して送ってやろうか？

子供だって性欲もたまるだろう。ホモビデオも送るべきか。
いやまて、タルトはまだ子供だ、ホモビデオは少し早いか。
いやしかし、いずれ年をとってそういったものに興味が―

「―ンナー！ ダンナー！」

受付が切羽詰まった様子で呼びかけていたことに気が付き、ハツと顔を上げる。

「なんだ」

「あの！　なんか揺れ、揺れてます」

「揺れ？」

地震に気がついたのはその時だった。

ドンつと付き上がるような振動を感じると、揺れは更に強くなり、そこまで古くない配送屋の建物が軋む。

「カウンターの下に潜れ！」

田所は叫んで受付の男と一緒に下に潜った。

ものが次々に倒れる音に、頭の抱えた受付のうめき声を上げる。
そんな中、田所の脳裏によぎったのはタルトの笑顔だった。

5

揺れは収まったのか？

すでに地震は収まっていた。しかし、揺れていたときのグラグラとした感覚が、ポイテローの足元には残っていた。

地震がおきてすぐに研修医と共に机の下に潜り込み、3分ほどの揺れを耐えていた。

じつとしているのがやつとな、感じたことのない凄まじい揺れだった。

「おわ…たんですか」

研修医がゆつくりと机から顔を出して立ち上がると、ポイテローも続く。

「多分、終わった」

窓に近づき、外を見た二人は言葉を失った。

倒壊する家々。

割れたコンクリート。

各所から立ち上る黒煙。

目に映るそのさまを信じられなかった。

まるでこの世の終わりのような光景だ。

現実離れたその世界をなんとか飲み込もうとしていたとき

「ちよつとー」と看護婦が後ろから二人を呼んだ。

「何してるの！ 早く来てー！」

ポイテローは研修医と向き合うと、すぐに看護婦について1階のエントランスに向かった。

なんとなく、分かっていた。どうなっているのかは。

しかし、実際にその様子を目の当たりにした時、ポイテローは息をのんだ。

エントランス内を隙間もないほど患者が埋め尽くしていた。

各所で血を流す人、骨の折れている人、意識のない人。それを賢明に医者や看護婦が対応している。

明らかに無理な数。対応しきれない。

そんなことを思っているさなか、患者たちの目が自分に向いているのがわかった。

早く自分を診てくれと言わんばかりに。

そこからはあまり覚えていない。

患者を診て、応急処置して、患者を診て、別の医者を呼んで、患者を診て：

人数は10を超えてから数えられていない。それでも、患者の数は一向に減る気配がない。

「すいません、僕にはどうにも」

肋骨が折れている患者を診ていた。どうやら骨が内蔵に突き刺さっている様子だ。

ほぼ意識はなくぐったりとしている。

その母親だろうか、なんとかしてくれないかとポイテロの白衣をつかんで懇願してくる。

「すぐに治療できる人を連れてきますから！」

そう言っつてその場を離れ、手術できる医者 of 場所を看護婦に聞いても、別の手術でいっばいだそうだ。

クソ：クソクソ！

どうしようもない憤りが胸の中であふれる。

ポイテロに手術ができないわけではなかった。研修医の中でも、希望して回数を行っている方だ。

しかし、研修医ができる手術などそこまでハイレベルなものではなく、熟練の執刀医に毎回そばに付いてもらう。

たった一人で、生死の境をさまよう患者を相手にするには、技術も、自信も足りなかった。

「お前、名前は」

自分に弱さに打ちひしがれていた時、ふと声をかけられ振り向く。

そこに立っていたのは黒い衣服を身にまとった、顔がツギハギだらけの色黒の男。

思わず目を丸くする。

医療会では伝説。医療免許を持たないがその腕は世界一のスペシャリスト。昏睡レイパー兼、無免許医師。

「あ、あなたは。ブラック・ファックー！」

ブラック・ファックは顔をむつとさせた。

「私の名前は田所だ。今は時間がない早く名前を答えろ」

「ポイテローです」

「ポイテロー君、今すぐこの医者と看護婦を会議室に集めろ」

「え、なんで」

「指示を伝える。時間がない、一刻も早く、集めれるだけ集めてくれ。

このままでは、救える命も救えない…言いたくは無いが、ブラックファックが呼んでいるといえ、それなりに集まるだろう」

「は、はい！」

ポイテローは病院中を駆け回り、人を集める。

手が離せないものはそのままに、とりあえず手を開かれる人間を集めた。

大病院だ、かなりの人数が会議室に集まった。

「私の名前はブラックファック。名前は田所だ」

田所は医者たちの前にたった。

皆ポイテローと同じく、伝説の医者を目の当たりにしてどよめくが、田所は無視して続けた。

「今起きていることは未曾有の大災害。緊急事態だ。皆それぞれ患者を相手しているのだろうが、このまま手当たり次第に治療しては救えるものも救えない。そこでだ…この中で研修医はいるな。それと、患者の状態をだいたい分かる経験の多い看護師。手を上げてくれ」

数名が手を挙げる。もちろん、その中にポイテローもいた。

「そのものたちだけは右に外れてくれ」

外れた人たちに、田所は4本のマーカーを渡していく。

マーカーの色はピンク、薄めの赤、濃いめの赤、黒。

それを診た瞬間、ポイテローはすつと頭から血の気が引く感触がし

た。

きつと渡された者は皆おなじ感覚だっただろう。

「研修は受けているはずだ。それでホモアージを頼む」

ホモアージ。

それは日本で起きた大人災、下北新宿大乱交が起きた際、にドラゴン田中教授が生み出したものだ。

あまりにも多い肛門からの多量出血患者に、すべての命は救えないと判断した田中教授は、肛門の色で優先度を判別した。

ピンクの健康的な肛門の者は治療の必要が無い軽症者。

薄めの赤の肛門は出血は目立ち治療の必要はあるが、すぐには必要のない待機患者。

濃いめの赤の肛門はかなりの出血が目立ち、すぐさま治療が必要な患者。

そして黒の肛門。

完全に死亡。もしくは治療に時間がかかりすぎるゆえ、治療困難の色。

確かにホモアージの研修は必修科目だが、被災地や戦地で少数の医者が効率よく治療するための選別がホモアージだ。

病院という施設も人員も充実した場所にいる場合、使うことはないと思っていた。

あまりにも唐突な指令に、頭の奥底から冷たいものが湧いてきた。
俺が：患者の生死を決めるのか？

田所が他の医者に治療の流れや、各患者の治療前、治療後の場所を取り決めに教えている間、ポイテローはただ呆然と4本のマーカーを眺めていた。

「説明は以上だ。ここにいないものには各自、出会ったときに伝えてほしい。正直、厳しい状態だ。すべての人間を救うことは無理だろう。だが、我々は医者だ。一人でも多くの命を救うため尽力してほしい。説明は以上だ。解散！」

小走りで皆が会議室から出ていくとポイテローもそれに続く。

まだ診察も受けていない患者たちをエントランスの一部にひとま

とめにして集め、ポイテロ含む数名でホモアージをしていく。

「あなたはピンク色です。外に軽症者エリアがあるので、そこで待機をお願いします」

えつと頭から血を流している患者が、顔を上げた。

「いや、これ頭ぶつけて血が出てるんです。もしかして何かあったら」
声を荒らげたい気持ちを、ポイテロはぐっとこらえた。

「現状を見てください、今は時間が足りません。待機をお願いします」
患者は渋々と言った様子で戻っていく。

このような態度を示す患者は彼だけではなかった。

待機を伝えるとなぜなんだとポイテロに食って掛かってくる者も一人や二人じゃない。

こんな状態でも人は自分の命が一番大事なのだ、改めて思い知らさせれながら、ポイテロは作業を続けた。

い…痛い。

その感覚を感じてタルトは目を覚ました。

うめきながら、何が起きたのかを必死で思い出そうとする。

家で勉強していたら急に地面が揺れて、家が崩れて、頭に凄まじい衝撃が走った。

動こうとしたときに頭がにズキッと痛みが走った。

腕も、足も痛い、頭が一番痛い。

なんとか立ち上がらろうとした時、隣で石壁の下敷きになっている母親に気がついた。

「お、お母さん！」

痛みを忘れて母に駆け寄る。「今どけるから」

なんとか石壁を上げようとするも、力が入らない。

たとえ力を込められる状態だったとしても、子供が持てる重さではなかった。

「タ…タルト」

母は今にも消え入りそうな声で言った。

「お母さん！ 今助けるよ」

「タルト…逃げなさい」

震える指で母がタルトの後ろを指差し、振り向くと黒煙がすぐそばで上がっているのが見えた。

山火事だ。地震によって燃えた民家の火が燃え移ったのだ。

タルトは黒煙と母の顔を何度も往復してみる。

「でも…でも！ お母さんが！」

「私はいい。あなたも怪我しているのよ…早く街の大きな病院に行きなさい」

「でも！」

「みんなを治す、お医者さんに…なるんでしょ」

その言葉に、タルトは今にも泣き出しそうな目で母を見つめる。

「行って」

数秒の沈黙の後、タルトはうなずくと、無事だった本を一冊と田所からもらったメスを拾った。

「すぐに助けを呼んでくるから！ 絶対だから！」

母にそう伝え、タルトは涙を流しながら走っていく。

近くにいた大人に母のことを伝えると、もうすぐ村の患者を集めて乗せたバスが出るから、早く乗るように伝えられた。

走っていくとすぐにバスが見えた。

「おーい！」

今にの発進しそうだったので声をだす。「待ってください！ 僕も

乗ります！ お母さんもまだ！」

その時である。

ちょうどタルトの目線の先、運転手と目が合った。

その目は、黒く、濁っていて、嫌いな雰囲気をしていた。

父に向けられていた目だ。

それに気がついたとき、バスのドアが閉じられたのが見えた。

ピンク、濃い赤、濃い赤、薄い赤、ピンク、ピンク、新しい患者への説明、濃い赤、どうなっているんだと激高する患者の親族をなだめる、勝手に移動する患者を止める、薄い赤、ピンク…

頭から酸素が足りなくなってきたのを感じる。

早く次の患者にホモアージシなくてはいけないのに、一呼吸置かないと作業に入れない。

足取りが思い。

呼吸がしづらい。

喉が乾く。

叫ぶ女。子供の鳴き声。意識のない老人。

ふと関係の無い昔の話を思い出す。

今この場所が、夢なのか、現実なのか、分からなくなってきた。

ああ…このまま…倒れてしまえば―

「何をしている」

ハツとして前を見ると、いつの間にか田所が立っていた。

「あ…ブラック、じゃなかった、田所先―」

「お前を鼓舞している時間はない」

田所のポイテローの返事を遮る。その口調は強かった。「ただ一つ

だけ聞く。お前は医者か？」

「え、ああの、俺は―」

「何でもいい。医者なら、目の前の患者に全力を尽くせ。そうじゃないなら、今すぐ消えろ。邪魔だ」

吐き捨てるようにそう言うと、

田所は走ってその場をさつていった。

た。

医者なら、全力を尽くせ。

ポイテローは目を閉じて天を仰いだ。

俺は…医者だ。人を治すのが、それが仕事だ。

医療スタッフ用に準備してあった水を飲み、すぐにホモアージに向

かう。

そして、そこから3人目の判別を行おうとした時、それはやってき

た。

倒れている患者の男に、その恋人らしき付添の男。

容態は腕と足の骨折。それは良い、骨折はあとに治療すればいいか

らだ、緊急じゃない。

しかし、腹に刺さった腕ほどの大きさの鉄骨。

貫通し、すでにかかなりの量の出血がある。

内臓、胃を貫いている。

すぐに治療しなくてはまずい。

胸部も骨が折れている。どこかに刺さっているか？

頭部にも打撲痕。

意識も、息もない。

手術しても助かるかは5分といったところ。しかし――

頭の中で思案を巡らせていたその時、不意に田中教授の顔が浮かんだ。

あの時、食堂で見合わせたときの。

トロツコがやってくる。

マーカーを持つ手が震えた。

俺は言った、無視したらいいと。

そうだ無視したらいい。ただの一般人であれば。

黒のマーカーのキャップを取った。

だが：俺は：いや俺たちは医者だ。

「申し訳ありませんが、この方は助かる見込みが薄く、手術には時間がかかり過ぎます」

そうですよね。田中先生。

「治療はできません」

脳裏の奥で、レバーが切り替わる音が聞こえた。

忙しい。

この激動を、その一言で終わらせてよいものだろうか。

患者の対応は文字通り夜通し続いた。

空が暗くなり、待っている患者が眠りだしても、ポイテールたちは1時間程度の仮眠を取っただけで、ひたすらに対応を続けた。

ポイテールたちの仕事が終わる頃には、雲ひとつない透き通るような青が空に広がっていた。

眠たいような、眠くないような。

寝ているような、起きているような。

そんな感覚をさまよいながら、ポイテールは誰もいない踊り休憩室で座っていた。

ちようど昨日の今頃、この机の下で揺れが収まるのを待っていた場所だ。

今、病院の周りでは昨日出勤していなかった医者たちや警察が、遺体の身元確認と整理を行っている。

まだ完璧に終わったわけではない。ただ、とりあえずのポイテールの今日の仕事は終わったということろだ。

幸いにもポイテールの家族は全員無事だった。

さっさと帰りたいという気持ちでいっぱいだが、今はその帰る気力も振り絞れない。

ここでまた仮眠でもしようかと思っていたその時、ドアが開くと研修医が入ってきた。

奇しくもここで同じように、揺れに怯えていた二人が揃った。

「お疲れ様です」

そう言っただけで疲れ切った表情のまま前の席に座る。

「お疲れ様」

ポイテールも同じく疲れ切った表情で返した。

座ってすぐ、研修医はポケットからタバコを一本取り出して火をつけた。

院内はもちろん禁煙だったが、今だけは別にいいだろうと何も言わなかった。それよりも

「君、吸うのか？」

少し驚いたようにポイテロー口は聞いた。

同じ病院に長く努めているが、吸っている様子を見たことはなかった。

「職場では吸いませんよ。こんなご時世です、自慢できるようなことじゃないんでね。だから普段は家だけです」

「といってタバコの煙をはくと、疲れた表情が少しだけ緩んだ気がした。」

「僕にも一本くださいよ」

「あなたも吸うんですか」

研修医は目を丸くして聞いた。

吸ったことはなかった。タバコなんてバカが吸うものだと思っている。

だが、今はバカになりたい気分だった。

「吸わない。ただの好奇心だよ」

「そうですか。残念ながらこのタバコは患者が一本だけ忘れていったものを拾ったんですよ。これだけしかない」

「なら、その吸いかけをくださいよ」

全く、と研修医は苦笑しながら最後にしっかりとタバコを吸う。

先端の火が強く、赤く照ると口から煙を吐いて、啜っていたタバコをポイテロー口に渡した。

すぐにそれを吸ってみると、なるほど、やはりバカが吸うものだと思いながら、ポイテローも煙をはいた。

暫くの間、二人の沈黙の間に煙がゆらゆらと舞っていた。

「やめようと思うんですよ。医者を」

不意に研修医が切り出した。

「そう。どうして？」

興味なさげにポイテローは返して、またタバコを吸う。

「僕はね、沢山の患者を救うのが夢でした…でも、今日だけで何人の人

を殺したんでしよう」

「それは僕もおんなじだ。医者としての仕事を全うしただけ。誰にも責められる裏筋合いはない」

「分かっていますよ…それでも…耐えられない」

絞り出したように口からこぼれたその言葉に、ポイテローは何も言わず空を眺め、またタバコを吸う。

やはりニコチンは毒だ。胸に秘めていた言葉を、煙とともに吐き出してしまふ。

「僕が医者になった理由は、優越感だ。誰かに褒められたかった。天才と敬われたかった…誰かを、みんなを見下したかった。自信も、自負もあった。でも、今日わかったよ。僕一人でできることなんて程度がしれてるって。自分なんて、大したことはないって」

黙ってこちらを見ている研修医の目は虚ろだ。

だが、同じ考えで合ったことは手にとるようにはわかった。

「そう考えたらさ、なんか吹っ切れたんだ。無力な人間なら、無力な人間なりに、人を救うために頑張ろうと俺は思う。それが、今日俺が殺した人たちにできる、唯一の手向けだと思う…正直言って、僕は君が嫌いだった。何かにつけて嫌味を言ってくる君が」

「僕も、院長の息子で、何かにつけて見下してる感じがして、君のこと嫌いでしたよ」

「お互い様だな。そんな君は、この現場から決して逃げずに、患者のためによれるだけのことはやりきった。君は立派な医者だよ。だからさ——」

ポイテローは立ち上がると窓際まで歩いて、空を眺めた。「もうちよつとだけ、あがいてみないか。僕が運営する病院には、君みたいな根気のあるやつが必要なんだ」

「あなた、もう院長気取りですか」

「ああ、なるさ。僕を誰だと思ってるんですか」

ポイテローが笑いながら答えると、研修医も笑ってみせた。

「まったく、院長からのスカウトは断れない」

「それはよかった」

窓を開けると心地の良い風が吹いた。

それを感じると不意に田中教授に会いたくなくなった。

聞いた話では教授は死後、この国の何処かに散骨されたいらしい。

一段落したら今日のことを伝えに行こうと思う。

あの人が漂う、この国の何処かに。

「この患者で最後か？」

看護師長にそう問いかけると、最後ですと返答が帰ってきた。

20時間ほどだろうかぶっ通しで手術し続けていた田所の顔には疲れが見え、そのもとより臭かった体臭はその強度を増し、歩く殺戮臭気とかしていた。

田所の周りの者は鼻に脱脂綿を詰めて、なんとかそれを紛らわしていた。

しかし、そのことに文句をいうものは誰ひとりいない。

その医療技術を見れば、体臭など気になるものはいない。

手術室を出ると威厳ある面構えをした男が、後ろに二人助手を連れて立っていた。

貫禄、風格。そして周りの医者からの畏怖。

人目で院長とわかる雰囲気をしていた。

鼻に脱脂綿を詰めているが。

「この度は本当にありがとうございました。アクシードの医者、看護婦一同を代表して院長のわたくしから、お礼を申し上げます。あなたのおかげで、どれだけの命が救われたか」

「どういたしましてだ。ただ、感謝なら謝礼という形でもらってもかまわないかな？」

「謝礼…とは、いかほどのものかと」

院長の頬を一筋の汗がったう。

その汗は、ブラックファックといえは高額の治療費をふんだくると知ってのものだろう。

「そうだなあ。この俺を20時間も働かせたんだから、相場でいうと1919億円ぐらいが妥当といえは妥当なだけだなあ、俺もなあ」

意地悪な顔をしながら田所は院長の顔をチラチラみると、黒目は揺れ首に力が入り、見るからに狼狽しているのがわかった。

「まあ今回はボランティアみたいなものだ。この国には田中教授の

目もある。364万円ぐらいで勘弁しとこうかな」

「ありがとうございます」

院長は助手と共に深々と頭を下げる。「お疲れでしょう。被害の少ないホテルで宿が取れましたので、そちらでお休みになってください」

「いやいい。今はみな復興で忙しいだろう。客人をもてなしている暇などないはずだ。それに俺はこの国には墓参りに着ただけだ。さつさと帰る」

再度、深々と頭を下げる院長のもとをさり、院内の院内の患者たちを足早に見て回る。

診察のためではない。田所は探していた、タルトの姿を。

もし怪我をしているならここに来ていられるかもしれないからだ。

タルトもその母も、連絡手段を持っていなかったため、今後連絡を取るために車番をさせていた男の番号を聞いていた。

様子を伺わせようと電話をしようとしたその時、不意に見知った顔が見えた。

いまだ患者で溢れているエントランスの椅子に座る男。

あの村で合ったバスの運転手だ。

いい記憶はない。ただ、今はこいつに聞くしかない。

「無事だったのか」

田所がそう話しかけると運転手は目を合わせた瞬間、ばつの悪そうに目をそらす。

「何だてめえ、何のようだよ。怪我した俺たちを笑いに来たのか？」

「俺は医者だ、そんな趣味はない。ただ一つ聞きたいことがある。俺と一緒にいたあのハーフの少年、タルトはどこにいる」

「タルト？」

運転手はわざとらしくそういった。「あのガキか。見てないなあ」
明らかに何かを隠していた。

しかし、いまこの男にいくら問い詰めても、なにもないとしらばっくれるだけだろうと、その場をさろうとしたその時、

「タルト君？」

そばにいた頭に包帯を巻いた少年がそう漏らした。

「君、なにか知ってるのか？」

田所はすぐに膝をついて聞いた。

「僕、タルト君見たよ。怪我してたんだ」

「怪我」

田所の目がカツと見開く。「じゃあ、ここにいるのか？」

少年は首を横にふる。

「乗ろうとしてたんだ、バスに。そしたら…ドアが閉まって、おいてきちやっただ」

ドアが…しまった？ おいてきた？

腹の底から湧いた熱が、脳天まで登ってくるのを感じながら、ゆっくりと運転手の方を向く。

運転手は悪気なさげに、はんと鼻を鳴らした。

「そっぴや乗ろうとしてたな。いや、バスが満員でな、乗れなかったんだよ。だいたいあいつら肌が白くて、豚と見分けがー」

瞬間、田所の拳が頬を打ち、2本の奥歯を飛ばしながら運転手は倒れた。

「お、お前」

運転手は頬を抑えながら田所をにらみつける。「俺は患者ーヒイ！」

倒れた運転手の胸ぐらを田所はつかみ、凄んで顔を近づける。

「なぜそんなことをした！ 人間のクズが、彼は子供だぞ！ どうしてそんなことができる！」

田所の激高に運転手は強がったように笑ってみせた。

「は、ハン！ よそ者のお前に俺の気持ちなんてわかるかよ」

「わからないな。分かってたまるか。何の罪もない子供に八つ当たりする愚か者の気持ちなど」

「ああ、そうやって俺の息子も殺されたんだ。あるとき車乗ったレスリング軍人に、遊び半分でな。虫も殺さない優しい子だった。俺は同じことをしただけだ。いや、なんならあいつが勝手に怪我をしたのをおいてっただけだ。俺は何もしてねえ」

「自分が間違ったことをしていないとでもいいいたいのか！」

「そうさ、俺は何も間違っていない！」

田所の脳裏に、タルトの会話がよぎっていく。

「あの子はな…医者になるのが夢だった。お前みたいなクソ野郎にも治療してやるのかって聞いたたら、あの子は言ってたよ、人種なんて関係ない。怪我や病気をしてるなら、助けるのが医者だって。心優しい子だ。あの子に、貴様は同じことを言えるのか」

運転手は何も言わず、ただ下に目線をそらす。

「お前は自分の親に、友に、愛する誰かに！」

脳裏に、輝くメスを振るタルトがよぎる。

「自分の死んだ息子に、同じことが言えるのか！」

運転手は食いしばった歯の隙間から、嗚咽のような、うめき声のような、そんな音を出しながらその場で突っ伏した。

これ以上この男に割いている時間はない。

「タルト！」

田所は踵を返して走った。

「母親の方はその…どうも聞いた話じゃ、家の下敷きになって。山が火事ですて…それで」

「わかった、それはもういい」

運転しながら携帯を握る田所は、眉間に深いシワを刻んでそう答えた。「その子供は、タルトはどうした」

「それが、ここにはいなくて。バスに乗って病院にいったって聞きませんでしたけど」

「病院にはいなかったんだ！」

田所は思わず声を荒げる。

「いやあ、そう言われましても。あつしも家族ではないので」

「金はいくらでも払ってやる。村中を探し回れ！」

そう吐き捨てて、田所は電話を切ると携帯を助手席に投げた。「チクショウ！」

苛立ちをぶつけても無意味なことは理解している。

しかし、焦る気持ちが冷静さを失わせていた。

車を飛ばして30分ほどが立った時、地平線の先から倒れている人影らしきものが見える。

くつと田所は歯を食いしばる。

頼む、違つてくれ。

その思いは裏切られ。距離が近づくとその姿がタルトのものだと確信する。

「タルトー！」

5メートルほど手前に車を停めて、タルトのそばに走っていく。うつ伏せに倒れていたタルトを仰向けにして、田所は体を抱えた。

「せん…せい?」

虚ろな表情でタルトはつぶやいた。「先生なの?」

「そうだ、助けに来たぞ」

高熱があり、頭部の打撲に腕にも骨折にと思わしき跡がある。

出血もひどくタルトが夜通し歩いてきたであろう道には、血液の跡が点々と残っていた。

息をするのがやつとの状態だ。

それを総合的に診て、すべてを察した田所は目を閉じた。

タルトは…もう…。

「先生…本、ある? 家から持ってきたんだ」

最後の力を振り絞るかのように、タルトはいった。

「本? いやどこにもない」

田所は周りを見渡したが本らしきものはなかった。

おそらく来る際に何処かに落とす、それすら気が付かなかったのだろう。

「じゃあ、メスは」

メスはタルトの左手にしっかりと握られていた。

気を失っても、これだけは決して離さなかった。

「あるぞ。ちゃんと左手の中に」

田所はメスを握ったタルトの手を、自分の左手で包む。

「よかった…」

タルトは安心したかのように微笑んだ。「先生……みて」

田所は振り返り、タルトの視線の先を見た。

「空、青いよ」

「ああ……そうだな」

そこには国境も、壁も、分け隔てるものなど何もない、澄み渡る青空がどこまでも広がっていた。

死への1時間9分19秒

ニューヨークの冬は冷える。

冷たいコンクリートの臭いは独特のようで、人をよく死に誘うらしい。

だからこの時期は非常に繁盛する。

嬉しいんだか、悲しんだか。

そんな感情は、もうとつくの昔におぼろげになってしまった。

死体のように冷たいドアノブを開けて、新庄はカフェに入る。

カフェと言っても、スタータチボックスのようなおしゃれな空間じゃない。

半分バーのような、地元の人間たちが時間つぶしに来るような、古臭いカフェだ。

普段から新庄が使うような場所じゃないが、こういうのも嫌いじゃない。

アタツシケケースを足元に起き、濃い木目の丸テーブルに腰掛け、すぐにコンコンとテーブルをノック。ウエイトレスを呼ぶ。

恰幅の良い、男のウエイトレスだった。

「コーヒーを頂きたい。湯気のたった、マグマみたいに熱いやつを」
新庄はいつものように、ニヤケ面の冗談交じりで答えて見せたが、対するウエイトレスは、OKなのかNOなのかよくわからない返事でカウンターの奥に入っていった。

立ち飲みをしている地元住民たちの、見ているようで見ていないような、チラチラした視線が集まる。

なるほど、どうやら歓迎はされていないようだ。

落ち着くことはできないが、まあ体を温められればそれでいいと思
い、ポケットから携帯を取り出す。

次の取引先だ。

「ハイ、木下です、ハイ、ちょっと道が混んでまして」

職業柄、恨みを買う可能性があるため偽名を使うことが多い。

当然、道など混んではない。

こんな寒い日はコーヒーでも飲まない仕事にならない。

「そうですね、到着はだいたい2時間ぐらい……」

そこまで言ったところで、視界の隅にあるものが写り、言葉が止まる。

合うのはあの日ぶりか。

ツギハギまみれの顔になって、前よりも分かりやすくなった。

まあ、顔がまるつと変わっても、その全身から出る刺激臭で誰だかすぐに分かるだろう。

田所。いやブラック・ファックのほうが有名か。

「ええ、また到着時間がわかりしだい、連絡しますよ」

そう言っつて携帯をきった。「やあ、奇遇かな？」

「そうだな。この寒さで、お前の雑な手術痕が痛む」

田所が嫌味を言うのと、さっきまで湯だっていたかのような、白い煙を渦巻かせたコーヒーが運ばれてきた。

「勘弁してくれ、メスを持たなくなって長いんだ」

新庄はカップを取ると、対面にあるからの椅子をそのカップで指す。「座れよ、腐れ縁」

「結構。長居はしない」

つれないなあ。どうやら俺にはナンパの才はないようだ。

そう思い、クツクツクと肩を揺らして、コーヒーに口をつけたが、熱つとすぐに口から離す。

「ほんとにマグマみたいだな」

新庄は軽やけどをした唇を、指先でなでる。「お前も頼むといい。だいぶ温まるぞ」

「それも結構だ。お前とゆつくりするために来たんじゃない……まだ人殺しを続けているのか？」

人殺し。

そのワードを聞くと、ピクリと新庄の眉が動いた。

ゆつくりとカップを机に置く。

「何度も言わせるなよ。俺が行っているのは安楽死。立派な医療だ」

「人をイカしてこそその医療だ。こちらこそ何度も言わせるな」

「苦しんでいる人間から、その苦しみを取りさっているだけさ」
「話にならないな。まあ、お前とそんな話をしに来たんじゃない」

田所はコーヒーの湯気に視線を落とした後、続けた。「いくらだ」
新庄の一瞬の思案の間を挟む。

いくらと問われても、田所相手に仕事をした覚えがない。

「えつと……何がだ。このコーヒーか？」

「手術代だ！ 貴様が俺を治療したんだ。好きな値段をつける。他人に高額な料金を請求してるんだ。高額でも文句は言わない」

目を丸くした新庄は、またクツクと笑いながら、コーヒーを一口含んだ。

「お前は、本当に根っからの医者だな。そうだなあ」

もったいぶるようにそう言うと、不意にコーヒーの湯気に目がいっ
た。「このコーヒー。奢ってもらおうかな」

「そんなものでいいのか。後からやっぱり、とかそういうのはなしだぞ」

「いわんさ。特にお前相手には。何をされるかわからん。ただそうだな、確かに少額すぎる。ちよつと話に付き合ってくれよ。いい薬が手に入ったんだ。自慢させてくれ」

田所の視線がギロリと鋭くなる。

顔にツギハギが入ったからか、前より威圧がすごい。

柔い老婆の皮膚なら、本当に切ってしまいそうな視線だ。

「まあ聞いてくれよ。今朝がた手に入った新薬だな。名前を『オモミモモモ・フェラドキシン』っていうんだ。その昔、レスリング帝国が証拠を残さずに毒殺するために開発したんだ。何がいつて、その死にざまだ。心臓に優しいお薬でな。1時間9分19秒かけて、ゆっくりとおねんねさせてくれる。終わった後は、安らかに佇む眠れる森の美男子だ」

「くだらん。そんな物を研究する暇があるなら、病気を治す新薬を開発しろ」

「遅れてんなあ。今や安楽死が合法の国も出てきたぜ。これは最新の医療だ。遅れた老害になるなよ、田所」

田所は返事のかわりに、くそつと言わんばかりに歯を食いしばった。

それを眺めながら、飲み終えたカップを新庄は置いた。

「まあ、顔の皮膚も新しくなったんだ。これを気に、頭の中身もアップデートしろよ。じゃあ、俺は新薬をもって新しい患者のアタツシユケースがない!!!」

新庄は足元を見ると、目が飛び出さんばかりに見開いた。

先程まであったアタツシユケースが、さっぱりなくなっている。

「チクシヨウ、スリか！ 田所、お前見てなかったか！」

「い、いや。全く」

新庄は椅子が倒れる勢いで立ち上がり、バーカウンターの奥にいるバーテンに詰め寄る。

「おい！ あんたらスリ見てないか」

バーテンも周りの客も、小首をかしげるばかりだった。

外様の荷物がスられようが、しまったことではないと言わんばかりだ。

「ちくしょう！」

そう吐き捨てると、新庄はカフェから走って出ていった。

「おい待てー！」

体が勝手に新庄を追うために動いていた。

自分には関係ない話だが、入っていた薬が薬だ。ほおってはおけない。

後に続いて外に出ようとした時に「ちよつと待ちな」とウエイトレスに腕を掴まれた。

「先に出たダチの分の料金がまだだ。出たいなら払っていつてくれ」

どうせ払うつもりだったので金を出した後、田所は聞いた。

「あんたスリは見なかったか」

「さあね」

言い方に含みがある。

なにか裏があるのは確かだ。

「良いサービスだった。チップもだそう」とコーヒー10杯分の金を握らせると、すらすらと語りだした。

「ここいらじゃ有名な盗人の坊主がいる。ヒデってんだが、そいつなら近くのアパートに母親と住んでるぞ」

田所はすぐにバーテンの言っていたアパートに向かった。

中に入ると貧困層のアパートらしく、昼間から喧騒の音が各所で響く。

すれ違った年老いた男に、ヒデはどこにいるのか聞くと、すぐに部屋番号を教えてくれた。

その部屋に駆けつけ、扉を開けた瞬間、目の前の光景に田所は叫んだ。

「飲ませてしまったのか!」

すでにヒデらしき少年が、ベッドに横たわる母親に薬を飲ませている様子が目に入った。

何も言わず逃げようとするヒデを「待て!」といって首根っこを掴む。

「貴様、自分が何をしたのかー!」

言葉を聞かず、暴れるヒデに怒り心頭に達した田所は顔をビンタした。

「話を聞け、クソガキが!」

「ヒイ! なんでも言う事聞くから許して」

「ああ、分かった。ならお前は何をした。あの薬を飲ませたのか? なぜだ」

「だ、だってアレは心臓にいい薬だつて」

くつと田所は先程までの新庄との会話を思い出す。

そんなことを言っていたような、なかったような。

「バカ! アレは毒薬だ。貴様の母親はあと1時間9分19秒で死ぬぞ」

「な、なに言ってるんだ。そんな言葉には騙されないよ。ちゃんと心臓にいい薬だつて聞いたんだ」

このガキは。

怒りの臨界点にきた田所は、ちょうど近くにあった竹刀でヒデの太ももを思い切り叩いた。

「であ痛いー！」

「この口の減らないガキが。自分のやったことを思い知らせてやる！」

少年と呼ぶには、あまりにも体が大きく、筋肉質でムダ毛の処理がいき届いていないヒデにムカついたのか、そこから筆舌に尽くしがたい、拷問とも思える所行をヒデは受けた。

手始めに鞭打ちで太ももを赤く染めた後は、その部分に蠟燭攻めで熱々の口ウをかける。

このあたりから、目的を忘れて痛めつけるのが楽しくなってきた。

熱い熱いと言うので、今度は風呂場に持って行って冷水シャワーを顔面にかけてやった。

寒い冬には堪えるのか、錯乱したヒデは「溺れる！ 溺れる！」と叫び続ける。

そのままトイレに顔面を入れ込み、ゴボゴボしているのをみて、さあ次は何をしてやろうかと考えていたとき、ハッと田所は我に返った。

こんなことしている場合ではない！

「じ、自分のしたことがわかったか！」

「分かった分かった、言う事いくよ！」

「よし、分かればいいんだ」

なんとかうまく誤魔化せたようだが、すでに30分ほど時間が立つてしまっていた。

「いいか、もう時間がない。貴様が盗んだこのアタツシケースの持ち主を探すんだ。まだこのあたりでお前を探してウロウロしているはずだ」

ヒデが行ったのを確認して、すぐに母親の容態を確認する。

「クソ、すでにかなり心拍が弱ってきている。強心薬を射つか？ いやだめだ、迂闊なこととはできない」

田所はひたすらに待つしかなかった。

30分ほど経ち、ヒデが帰って来たかと思うと、新庄も後ろからついてきた。

よく見ると、ヒデの顔に青タンができていて、衣服は更にボロボロになっている。

「す、すまん田所。ついカツとなつて、この少年を拷問していたらこんな時間に」

「何をしているんだバカヤロウ！」

「え、でもおじさんもー」

「うるさいー」

何かいいかけたヒデに、もう一発、田所は平手打ちを食らわせた。

「どうすればいいんだ、新庄」

母親のそばに田所が駆け寄ると、新庄もそばに立つ。

「解毒用の薬があるが、経口摂取じゃ間に合わない。心臓の便に直で打てば、効くのが速いみたいだ」

「何分ぐらいで効く」

苦い顔で黙る新庄に、田所は叫ぶ。「新庄！」

「36分程」

ぐらりと視界が歪んだような気がした。

すでに薬を飲んでから1時間が経っている。30分後に効いたとして、助かるのか。

「心臓が止まっても、人工心肺を繋いで、大型ペースメーカーを使えば延命はできるそうだが」

このボロアパートがあるようなスラムに近い場所に、人口心肺のある病院が、果たしていくつあるのか。

よぎる不安。しかし、それを思案している間もない。

「いくぞー」

田所は母親を担ぎ、すぐに外に出た。

タクシーを呼び、近くが一番大きめの病院に急ぐ。

「薬物中毒です。すぐにオペがしたいが、人工心肺はあるかね」

すぐに受け付けの人間に問うたが、急な事で状況が飲み込めないのか、えーつとって、なかなか返事が帰ってこない。

「急用なんだ、アナル・ストークスが起きる危険性もある！」

アナル・ストークスとは、肛門に血液が流れないことで、肛門細胞が壊れ、最悪死にいたる病だ。

「ワシが院長だが、急に言われても困るしー」

騒ぎを嗅ぎつけて、でてきた院長に「私はブラック・ファックだ」と叫ぶと、院長は目を丸くした。

「ムムム、あなたがあの無免許強姦医師」

「なんでもいいが、オペ室を貸してもらおう。人工心肺の準備も頼む！」「後5分だけ。もう諦めたほうがいいんじゃないか」

新庄がそう聞くと、田所は「3分あれば心臓まで開いて見せる」といって、手術衣に着替えだした。

拍動は途切れ途切れで、アナル・ストークスはすでに起きかけていた。

時間もない。

正直、新庄は諦めていた。

自分のせいではない。ヒデとかいうムカつくガキが、勝手にやったことだ。

そんなことを自分に言い聞かせながら、時間の都合で遅れるであろう、次の依頼人になんと言いつつ諷するかを考えていたとき、

ーバカな

オペを開始するときにはすでに、心停止まで時間は2分をきり、1.9分程になっていた。

この状態で心臓の手術をしようなどと、思う外科医はいない。

いたずらに死体を切り刻みたい医者など、どこに居るといえるのか。それでも、この男は。

田所は、やってのける。

確かに患者は肉の少ない、細身の女だ。

それを踏まえた上で、開胸から心臓到達まで神がかりの速さだ。

時間は、おおよそ1分とすこし。

つい、顔が引きつってしまふ。

この力が俺にあつたら、安楽死なんて生業にしていけないのかも知れない。

そう思わずにはいられない。

すでに田所は心臓に解毒薬を注入し始めていた。

「人工心肺、動かすぜ」

嫉妬、尊敬。悲しみ、怒り。

入り混じった感情を押し殺し、人工心肺を動かそうとしたとき、

「おい、こいつ動いてないぞー！」

新庄の叫びに、周りは騒然となる。

技師が再起動を試みるも

「ダメです、故障です、動きません。すいません、ずっと使っていないな

かったもので」

田所の腕は確かに神がかりだ。

だがそれでも、神を味方につけることはできない。

心臓の動きは瀕死の虫のようだった。

もう、終わりだ。

「しゃーないぜ、田所。お前はよくやったー」

「黙れー！」

言葉を遮り、叫ぶ田所の目は、未だ絶望をしておらず、その今にも止まりそうな心臓を、かじりつくように見えている。

田所とは腐れ縁だ。

あつて話した回数は数えられるほどだが、性格はよく知っているし、何を考えているのかだいたい分かる。

こいつ、動きを見ている。

それを見てやろうとしているのは、骨越しの胸部圧迫ではなく、直接の心臓マッサージ。

外科手術ではないことはない。体が虚弱な人間に対しては、胸部マッサージよりも適切な場合がある。

ただ相手は心臓病の患者だ。

下手なことをすれば心臓がおしやかになる。

できたとしても、薬が効き出すのは30分以上経った後。

それが可能なのか？

疑念渦巻く中、まるで産まれてすぐの赤子を取り上げるように、田所は心臓を両手で包む。

まだ、ギリギリ心臓は動いている。

それに合わせるように、補助するように、田所の手が動き出した。大丈夫なのか。

胃の底を引っ張られているような緊張感に、自然と金玉が小豆代の大きさになる。

そしてそれは、田所の手の動きに合わせて、戻っていく意識レベルと同じように、和らいでいく。

「田所……やった、やったぞー！」

「今、話しかけないでくれ」

「う、悪い」

そう、今うまくいったとしても、5分後も同じようにいくとは限らない。

それでも、10分……20分。

奇跡は継続していく。

しかし、神の手を持つ田所でも、限界がある。

皆が固唾をのんで見守り、30分がたった。

「げ、限界だ」

目の虚ろな田所は、ボソリとそう呟いた。

「おい、もうちよつとだ頑張れ」

「無理だ、もう腕がつりそうだ。動かなくなる」

「30分がたってる。もうすぐ助かるかも知れないんだ」

「ああ、分かってる。だから変わってくれ」

「誰にだ。お前以外に、誰かこんなゲイ当できるってんだよ」

「お前だ」

心臓を一本の糸が通り過ぎたような、そんな感覚があった。

「ば、バカ言うな」

思わず、声が震える。「俺はお前じゃない。俺がやったら、心臓が潰れて終わりだ」

「このまま俺がやっても、心臓が動かなくなつて終わりだ」

「そうかもだけどよ、俺じゃないほうがいいんじゃないか。内蔵見たのも、お前の手術いらいだ。執刀医ならこの病院に他ー」

「お前だ」

有無を言わず、田所は言った。「他じゃだめだ。お前がやるのが、一番助かる可能性が高い。だから、お前にやらせる。当たり前だ」

新庄は目を丸くし、息を呑んだ。

俺が？ 安楽死を生業としている、この俺がか？

へへ、つと緊張と喜びが入り混じつたような笑みを、新庄は見せた。

「お前のお眼鏡にかかっちゃまったのならしかたねえや、やるよ」

「当たり前だ。お前は、医者だろう」

「ああ、そうだった」

新庄は田所の手に自分の手を重ね、そのリズムを感じ取る。

適当にはしていない。心臓の弁の位置や、血液の流れを計算して、優しく、愛撫するかのように扱っているのが分かった。

それを、必死で新庄は手に覚え込ませていた。

「手を抜くぞ、新庄」

「いつでもいいぜ」

「3……2……1！」

田所の手が抜かれると同時に、命の熱が、手のひらを通じて、新庄の心臓へと伝わってきた。

今宵は満月だった。

凍えるような寒さだが、体の中はまだ熱い。

その熱を発散するかのように、新庄は病院の屋上で、手すりによりかかりながらタバコを吸っていた。

いまだ心臓を掴んでいるかのように、手のひらに残った熱と、拍動の感覚が消えない。

新庄の心臓マッサージが始まり、10分が経った頃に、心臓が再鼓動を始めた。

目立った後遺症も、心臓に異常もなかった。

ヒデの母親は助かった。

「ひとまず、一件落着か」

新庄の隣に、同じように手すりに手をかけて田所が言った。「どうだい大将。殺すのと助けるの、どっちが気分がいい」

皮肉めいた質問に、新庄は思わず苦笑いした。

「舐めんなよ大将。俺だって医者の方端くれさ。命が助かるに越したことはない」

「ふーん、そうかい。ところで、この手術代は誰が払ってくれるんだろうな。元をたどれば、お前の不注意だよな」

「な！ いや、お前。俺だってお前の手術をー」

「ちゃんと俺はコーヒー代を払ったぜ。お前がそうだったんだ。それで相殺はなしだ」

数秒考えた後、新庄はガクツと肩を落とした。

でも、その顔は笑っている。

「まったく。地獄に落ちるぜ、ブラックファック」

「ああ。そのときは、お前も一緒かもな」